
天魔の刻印

里桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天魔の刻印

【Nコード】

N9029S

【作者名】

里桜

【あらすじ】

このお話には、残酷な表現があります。

また地震についての描写がございます。大丈夫という方のみ、ご覧ください。

齢四十歳にして二児の母、孫も一人いた女性が、ある日異世界で転生し、波乱に満ちた第二の人生を送ってゆく物語です。保護者である人間失格の大魔道士に振り回されたり、出自のために色々としんどい目にあう予定ですが、主人公の明るい性格のおかげで、どうや

らシリアスにはならなそうです。それと、ご都合主義なところもある
ので、そういうところはお見逃しいただきたいです。

登場人物（ネタバレ有）

随時増えていく予定です。

（ ）内は、ウトナ語の発音です。

ヒト 物語の主人公。転生者。魔族（レトウ）と人間の混血。間の子（ユイン）。

セト 獣人（レルト）と人間の混血。半獣（ユフィー
ル）。

イムルード 人間性にちょっと問題のある大魔道士。

ハールマー 傭兵。ヒトたちにご飯を提供。

シャリフ ハールマーの知り合い。プルシャーラでお店を経営。ヒトたちにご飯を提供。

<魔族>

ナン 地の使い（エンイール）。銀色の狼。

ウトウ 金色の魔族。女性。

地の王（エンキ） 地の使い。地の中心（キシエル）を統べる長。女性。

シン 地の使い。御前の使いの一人。

<トルバディア>

ヴェルテ

トルバディア国王。

ギエン

元トルバディア王太子。

サリエ

シャントクレール侯爵家の娘。

クイナ

サリエとレツェンの乳母。

ナサレー

魔道師団に所属。

ラウシュ

王宮近衛兵。

トール

魔道師団長。

ランド

トルバディアの貴族。公爵。

<アウル神殿>

サヴァン

アウル神殿の大神官。

レツェン

神殿聖騎士団の総長。

イエーン

聖騎士。

イサ

アウル神殿の神官。ナサレーの師。

<レヴトリア>

カルナス

レヴトリア国王。

フォルム

第五師団第一騎兵隊中隊長。

<死魔(アジール)>

クロウ

ヒトに付きまどっている黒髪の死魔。

グルシア

赤髪の死魔。

シュエダ

青髪の死魔。女性。

ラシッド

紫色の死魔。

<その他>

クル・エ・カルナ

はじまりの神の名。

世界を総じてそう呼ぶ。

用語解説（ネタバレ有）

カタカナはウトナ語の読みです。
随時増える予定です。

古代 ウトナ

命 ヒト

月 ナン

太陽 ウトウ

王 エン

地の王 エンキ

地の使い エンイール

地の中心 キシエル

天の王 エンアヌ

天の使い アヌイール

天の中心 アンシエル

魔族 レトウ

間の子 ユイン

無貌の悪魔 アトウ

無貌の悪魔の使い アトウイール

死魔 アジール

廻る者 テルガト

半獣 ユフィール

千年王国 トルバディア

よるべなき者

プルシャーラ

天空の楔

エ・ギザラ

深き沈黙の森

ネル・ム・ヌトウス

白大陸

ウアルラート

黒大陸

グルラート

金大陸

ソルラート

銀大陸

セルラート

青大陸

アルラート

天魔の揺籃

アル・ドウ・クナ

冥府の桎梏

二ハ・ル・キルシャ

プロローグ（前書き）

このお話には、東日本大震災を想像させる地震についての記載があります。

また、残酷な表現もございます。
大丈夫な方のみお進みください。

2011.5.5 追加 里桜

プロローグ

恐らく、私は死ぬのだろう。

霞んでいく意識のなか、ぼんやりとそう思った。

地面に横たわったまま見上げる空は、皮肉なほど晴れ渡り、雲一つない青空だ。

視界の片隅に、ねじ切られたような鉄パイプの先端が映る。

もはや、首を動かすだけの力すらないが、パイプの根元を下にたどれば、間違いなく自分の腹部を貫き、大地に縫いとめていられるであろうことは、容易に想像できた。

不思議と、痛みはない。

死の間際に際し、防衛本能でも働いているのだろうか。

いずれにせよ、苦痛に苛まれることもなく、死へとたどり着けるといふのなら、ラッキーなことだ。

ただ、痛みはなくとも、体を貫かれた瞬間の、衝撃だけは余韻となって体の内側にこもっている。

体の中を、パイプが通過する感覚など、ただ気色悪いだけのものだ。

投げ出した手の、指先がジンとしびれ、体が、内側から急速に凍えていくのを感じた。

恐らく大量の出血によるものであろう。

その証拠に、地面に接している背中を、己の血であろうものが、ゆっくりと染み出していくの感じとれる。

ほんの一月前、奇跡的に拾った命だというのに、奇跡は二度続

かないということだ。

私は、自嘲的に笑った。今の自分に、笑えていたかどうかなど、確かめるすべもないが、気分的には、間違いなく笑っていた。

一月前、春先の浮かれた気分冷や水を浴びせるかのように起こった突然の大地震。

津波で家を亡くしはしたが、奇跡的にも家族は全員無事だった。生死の明暗を分けたのは、長女の判断だった。

あの地震の際、私は、確かに地震は大きかったが、海から2km近く離れた我が家まで、津波が届くとは思っていなかった。また、届いたところで、二階に昇れば、命くらいは助かるだろうと楽観していた。

だが、娘の考えは違っていた。

何事も大雑把な私に似ず、几帳面な娘は、呑気に家に残ろうとしていた私を怒鳴りつけ、車を運転して高台に避難させた。

その十数分後、見下ろしていた水平線の彼方に、突如白波が見え始めた。

やがて白波は、急速に押し迫り、堤防をのり越え、地上のありとあらゆるものを飲み込みはじめた。

その無常な様を、私はただ茫然と眺めることしかできなかった。

今にして思えば、娘の機転は、母性本能の賜物であろうと、私は思う。

今年22歳になる娘には、2歳の息子がいる。その我が子を守るための本能である危機察知能力が、恐らく彼女を突き動かしたのではないかと思うのだ。

じき22歳になる娘と、20歳の息子を、女手ひとつで無事成人まで育て上げた40歳の私の本能は、たぶんすでに役割を終えてしまっていたのだ。

いや、もしかしたら、あの時、心のどこかで、死を望んでいた

のかもしれない。

このところ、時折感じていた、焦燥感のような、無力感のよう
な…

とにかく、自分という存在が、役割をなくしてしまったかのよ
うな、空虚な感覚が、ふとした折に、気まぐれに纏わりついては、
私を孤独にしていた。

自ら死を望むような孤独ではない。

むしろ、孫の顔を見られて、満足する気持ちのほうが大きかつ
たはずだ。

ただ、時折、ふとした拍子に、脳裏を孤独がよぎるのだ。

例えば、娘夫婦が孫と3人で、どこか遠出をしている時、自分
は娘家族に寄生しているのではないのかと。

例えば、お盆と、正月しか顔を出さなくなってしまった息子に、
声が聞きたいだけで電話をして、忙しいからと、そそくさと電話を
切られてしまったとき、もう自分の存在は、息子には必要ないので
はないのかと。

長女は新しい家族を作り上げ、長男はすでに家を出て、東京で
就職をしている。

自分が庇護しなければならぬ者はすでにおらず、むしろこれか
ら衰えてゆく体は、庇護されるべき存在へとかわってゆくのだ。

とはいっても、まだ40歳なのだ。体に不便を感じることなど
ないし、仕事だって続けている。孫の育児の片棒を担がされ、毎日
毎日が、忙しく、満ち足りていた。

ただ、ほんの些細な心の隙間に、孤独を感じるような時がある
のだ。

もし、夫が生きていたのなら、この新しい家族のかたちの中で
も、自分の存在位置を、もっと心にゆとりを持って把握できたのか

もしれない。

しかし夫は、長女が3歳の時に、すでに病死していた。

以来、一人で子供たちを育て上げなければならぬという責任感のもの、ずっと張りつめていた緊張の糸。

急にその緊張の糸が途切れて、宙ぶらりんになっていた。

そこまで思い至って、私は増々自嘲的に笑った。

今、目前に迫った死を意識して、こうして思い返す孤独は、なんとちつぽけな孤独だったことだろう。

警沢すぎる悩みだ。

立派に自立した我が子たちに対して、40歳にもなった自分がしてきたことといえば、自分を見て！と、まるで子供のように甘えていただけに過ぎない。

あまりのバカバカしさに、思わず笑いがこみ上げてきた。

すでに笑う力など残ってはいなかったが、気分的には大笑いをしていた。

自分の人生の、どこに孤独を感じる必要があったらう。

自分の人生に、何の後悔が、そして、何の不満があったというのだろうか。

確かに、人様に誇れるような人生ではなかった。

ほんの些末な人生ではあった。

だが、決して不満なものではなかった。

むしろ、満足のいくものだったと、今ならはっきりと言える。

三人姉妹の長女として生まれ、公務員の両親の元に育った。

結婚は早かった。高校を卒業したと同時に、三歳年上だった幼馴染と結婚をした。

夫を若くして亡くし、一人で二人の子供を育て上げた。

孫にも恵まれ、この上ない喜びを、愛しさを、感じる機会に恵まれた。

震災、津波と、予期せぬ災害に見舞われたが、家族全員が無事だった。

人生の最後に、思わぬ事故で、命を落とすこととなりそうだが、それがなんだというのだ。

決して平らとは言えないが、悲しみよりも、喜びが上回る、私のような凡人には、すぎたる人生ではないか。

しかも、人生の最後には、東京に出ていた息子に会うことだってできたのだ。

電話も通じず、連絡の取れなかった家族を心配し、いてもたってもいられず、息子は東京をとびだしてきたのだという。

道路の通じない場所からは、徒歩で移動したようだ。

息子はいくつもの避難所を必死で探しまわり、ようやく私たちと再会できたのは地震から五日目の夕方。

風呂も入らずに探し回っていたらしい息子は、避難所にいた私たちの誰よりもくたびれた姿をしていた。

足元には泥がこびりつき、睡眠がたりていないような充血した赤い眼をして、再会しても、ずっと不機嫌に唇を引き結んでいた。

今ならばわかる。あの時、引き結んでいた唇を開けば、涙が零れ落ちてしまいそうだったに違いない。

早く大人になろうとつっぱっていた息子が、母親である私や、姉である娘の前で、素直に泣くはずがないのだ。

あの時の、愛想のない息子の表情を思い出して、愛しさがこみ上げてきた。

そして、思う。

ここで、こうして死を迎えるのが自分でよかったと。

一歩間違えば、息子がこうなってしまう運命であったかもしれないのだ。

一週間ぶりに避難所に現われた息子が、会うなり、引っ越しをしたので、家族で東京にこいと無愛想に言い放ったのは、ちょうど今朝の出来事だ。

今まで息子は、ワンルームのアパートに住んでいたので、家族四人が押し掛けることは、現実的でなかった。

だが、今度の引っ越し先は、2LDKなので、手狭でも5人ぐらいなんとか住めるといふのだ。

しかも、もう引っ越しはすんだので、今日の今からついてこいと言ふ。

突然の、否やを言わせぬ強制命令に、姉である娘は、あきれつつもやっぱり弟のやることだと、わかったようにうなずき、娘の夫は、津波で仕事もなくしていたので、これをきっかけに東京で仕事探しをすると宣言。

孫は、無愛想このうえない叔父である息子に、なぜか懐いているので、東京行きを、手放しで喜び、そして私はというと、だったら思い出探しをしたいと瓦礫の山に足を向けていた。

思い出探しと銘は打ったが、実のところは夫の遺品を探そうと思っていた。正直に話したら、一家をあげての大捜索が始まりそうだったから、気軽にちよつと行ってくるとだけ告げておいた。

できれば位牌を、それが無理なら、せめて写真が残っていたらと私は願っていた。

長年住み慣れた故郷を離れ、新天地へとのぞむ今、早くに旅立ってしまった夫も連れて行ってあげなければ、かわいそうではないか。

私は、確かに苦労はしたけれども、喜びのほつが多い幸せな人生を送れた。

早くに亡くなってしまう夫は、その全ての出来事を、何一つ経験することもできずに旅立ってしまったのだ。

息子は、何か感じるところがあつたのか、自分が行くから私には残つて引越しの準備をしろと言いはつた。

だが、なぜだか私は気が進まず、こっそり孫をけしかけて、息子を足止めし、一人で瓦礫の搜索へと向かつた。

今思えば、私の感も鈍つてはいなかつたのだ。

こうして息子を守ることができたのだから。

一人でもどかせるような瓦礫をどけていると、そのうち横倒しに埋もれた仏壇を発見した。薄く開く扉の隙間に、どうにか手を突っ込み、中から探し求めていた夫の位牌を引つ張り出せたころには、すでに日は傾き始めていた。

あまり遅くなると、息子たちが心配するなどぼんやり思いながら、私は、横倒しになつたブロック塀に腰掛け、泥まみれになつた位牌を、ハンカチでぬぐつていた。

人心地つき、なにげなく見つめた木から、鳥が羽ばたくのが見えた。

と同時に、ドオンと地鳴りがした。

とつさに余震だと思つた。

震災後、何度も経験する余震。

震源が遠いと、先に地鳴りが聞こえるのを、いやというほど知つていた。

小さな揺れがしばらく続き、だんだんと地面が激しく揺れだした。

地面が波打つのが見える。

恐怖に胃が縮むのを感じながら、ブロック塀につかまっていると、背後から、ギギと不気味な音が聞こえた。

反射的に、音のした方向を、見上げるように振り向くと、となりのアパートの三階の手すりや、揺らされ、ねじ切れ、落ちてくる瞬間だつた。

私は、自分めがけて落ちてくる鉄の棒を、ただ見つめることしかできなかった。

その直後、ものすごい衝撃を腹部に感じ、そして今に至る。

もはや、目を開けるだけの力もなくなりつつあった。
抗いたくとも、強制的に目は閉じてゆく。
物音も、何も聞こえない。

ああ、こうして人は死ぬのだな。

私は、そう思った。

娘と息子、娘婿と孫の顔が脳裏をよる。

悲しまないでほしいと思った。

私は幸せなのだから。

あなたたちも幸せになってほしい。

そう心の底から願った。

願うのは、それだけだった。

プロローグ（後書き）

迷いましたが、今回作中に震災の描写を取り入れてしまいました。中にはご不快に思われる方もいらっしゃるかもしれません。もしそういう方々がいらっしやいましたら誠に申し訳ありません。悪意あつてのことではありませんので、今回の表現をお許しいただけたらと思います。

1 気が付いたら…ここはどこ？

落ち着け、落ち着くんだ、私。

無性にテンパってしまったっている今の自分に、私は必至で言い聞かせた。混乱したままでは、現状把握も難しくなる。

クールダウン、クールダウン。

そうだ。深呼吸しよう。

深呼吸して落ち着いてから、まずは身元の確認。

名前は佐伯^{さへき}ひと^{ひと}。

年齢40歳。性別女性。

独身。結婚歴あり。夫とは死別。

子供は、上が女の子、下が男の子の二名。

孫は、男の子一人。

職業は、スーパールのフロア担当。

よし、記憶は正常だ。

すると次は現状把握。

今の自分の状態はというと、なぜか滅茶苦茶に揺れている。

というか揺らされている。

この揺れは、地震によるものではないことを私は知っていた。

なぜかというところ……。

私は、心底戸惑ったように視線だけをあげ、頭上にある端正な女性の顔を見上げる。

体の揺れの原因は、この女性にあった。

どういうわけか、自分はこの女性に抱きかかえられているのだ。

この女性が、どれだけ巨人なのか？とか、どれだけパワフルなのか？とか、そういうった問題は、この際、脇にどけておこう。

そこに関わると、考えが先に進めないのだ。

とにかく私は、気づいたらこの女性の手によって、かかえあげられており、なおかつ女性は今、必死に走っていた。

聞こえてくる荒い息遣いが、気の毒なほどだ。

ちよつと止まって話をしましょようよと聞いたのだが、なぜだか声がうまく出せない。しかも、手も足も、うまく動かせないのだ。

目が覚める直前の自分の状況を思い出し、おそらく、瀕死の重傷のために体が不自由なのだろうと、勝手に推測してみた。

それにしても、あの状況で命があるなんてびっくりだ。

絶対に死んだものと思っていた。

痛みがないのは、麻酔のおかげだろうか。

ともかく、今の自分にできる精一杯の行動で、女性によって固定され、動かない首をなんとか動かし、可能な限り周囲を見回す。

だが、なぜか視力が落ちていようで、ぼんやりと霞がかつたようにしか見えなかった。

どう考えてもおかしいのだ。

私の目は両目とも裸眼1.5で、娘や息子の視力より良かったはずなのだ。

確かに、最近、ピントを合わせる能力だけは衰え始め、近くを見た後に遠くが見づらいつという現象が起きてはいた。

そのおかげで娘に、いよいよ老眼？などと冷やかされては、怒りとともに完全否定していた。

しかし、視力自体は相変わらずよく、メガネなどまるで必要なかったのだ。

にもかかわらず、今は、少し離れた頭上に見える女性の顔さえもが霞んで見える。

その視力の落ちた私が、なぜ件の人物を女性と認識でき、また彼女の外見がわかったのかというと、意識を取り戻した時に、間近でのぞきこまれていたからだ。

女性は外国人で、たいそう美しかった。

夜なので、目の色まではよくわからなかったが、髪は恐らく、金髪か銀髪。彫の深い白人系の顔立ちをしていた。

肌の色も、暗闇でも分かるほど、透き通った白い肌をしている。目覚めた私と目が合うと、女性は、こちらが照れてしまうほど愛情のこもった眼差しを向けた。

そして、母親がするように、私の頭をするりと一撫ですると、急に立ち上がり、走り始めた。

そつという事情で現在に至る。

ぼんやりとした視界や、耳から拾える音から想像するに、今は夜で、どうやら女性は森の中を走っているようだった。

辺りは暗闇、時折、ホーホーとか、ギアアギアアとか、けたたましい鳴き声が聞こえてくる。

ホーホーは、フクロウのような聞いたことのある鳴き声だが、ギアアギアアは、全く聞いた覚えのない未知の生物のものだ。

都市開発を免れた山には、いろんな生き物がいるのだなあと、ちよつと感心してしまった。

しばらくののち、自分の考えの浅はかさを、身をもって知るのだが、それは、もう少し後の話だ。

周囲には街灯もなく、ただの暗闇が広がっている。どれだけ山の奥深くなのか、見当もつかない。

女性の足元からは、草を踏むような音が聞こえてくる。

舗装されていない山道のようだ。

なんで、こんな山道を、こんなきれいな女性が走っているのか、私には理解できなかった。

もしいや痴漢にでも追われているのだろうか。

こんな美人が相手だったら、痴漢もそりゃあ全力で追いかけることだろう。

そつ思い至り、女性が気の毒に思えた。

同時に、血の気が引くのを感じた。

私みたいな小母さん抱えていたら、逃げられるものも、逃げられなくなるじゃないの。

ちよつと、お嬢さん、私のことはその辺に転がしておいてくれていいわよ。息子も迎えに来るだろうし、貴女みたいな女性を付け狙う痴漢のストライクゾーンからは、見事はずれる自信があるから。そう言いたかったのだが、口から出た言葉は、子猫のように細かい、たよらない鳴き声のようなものだった。

その赤ん坊の泣き声のような自分の声に、声さえも出せないのかと、少なからずショックを受ける。

頭上で、女性が俯いた気配を感じた。

「ごめんね。いい子だから、もう少し辛抱して」

頭上から、荒い息の合間に、やさしげなつぶやきが落とされる。

なんとというか、力が抜けた。

幼い子供に言い聞かせるように、優しい声で告げられたこともそうだが、何を言っているのかさっぱりわからなかったのだ。

彼女の言葉がまるで理解できていない自分に落ち込んだ。

彼女の外見から推測し、あらかじめ予想してはいたが、いざ外国語を話されると、やっぱり戸惑ってしまう。

何しろ言葉の壁があつては、コミュニケーションがとれないではないか。

どうやって今の状況を説明してもらえばよいのかと、私は頭を抱えたくなった。

いったいどうなっているのだろうか？

考えがまるでついていかない。

何かがおかしい。

そう感じてはいたが、めまぐるしく変わってしまった自分の状況に、理解がついてゆかず、頭がパンクしそうだ。

やはり、今はあんまり、深く考えないようにしよう。

成り行きに身を任せるのも一案だ。

どうせ情報がなければ判断もできないし、言葉が通じなければ、この女性と話をすることもできない。

現時点では、体にも問題があるようなので、ボディランゲージでコミュニケーションを図るのも無理だろう。

だったら、今は彼女に身を任せるしかない。

私は、難しく考えることを放棄した。

女性の腕の中で、ぼんやりと、つらつら考えをめぐらし、ふと途中で、なんとなくいきついた可能性は、すぐさま頭を振って自ら否定した。

何しろ認めるにはあまりにも荒唐無稽なもので…自分自身でも信じたくはないものだったからだ。

やがて考えることすらも放棄して、私は再び眠りへと落ちる。

疲れているのか、体が、貪欲に眠りを欲していたのだ。

女性に申し訳なく思いつつも、しっかりと抱きしめられる安心感と、ぬくもりに、私は、再び意識を手放してしまったのだ。

2 刻印を背負うもの

私が再び目覚めたのは、女性の悲鳴に驚いたためだった。

恐怖におののいたようなその悲鳴に、私のチキンなハートは心拍数をあげ、飛び起きる。

女性はいつの間にか走ることをやめていた。

暗闇で立ち止まり、腕に力を入れ、何かからかばうように私をギョツと抱きしめる。

苦しいほどの力ではないが、小刻みに震える腕が気の毒だ。

重かったら降ろしていいよ。

そう言いたかったが、生憎と女性に言葉は通じない。どうしたものかと私は頭を悩ませた。

「ずいぶんと手こずらせてくれたものだ。早くその者を渡せ」

低い男の声を耳で拾い、私は驚きとともに声の主を探そうと目を凝らす。しかし、その努力が報われることはなかった。

にじむ景色の先には、何もとらえることはできない。

「いやです！」

何を話しているのか、さっぱりわからなかったが、悲鳴のような警戒心をあらわにした女性の声に、私はピンときた。

きつとこの男が、彼女を追いかけていた痴漢なのだと。

そう認識できると、どんどんと怒りがこみ上げてきた。

こんなうら若き美しい女性を、ストーカーのようにつけ回し、力でどうこうしようとするなんて、人間の風上にもおけない。

成敗してくれる。

さあ、お嬢さん。今すぐ私を下して。

そこにいる変態に説教をしてやるから。

私は、鼻息も荒く言う。

けれども、またしても私の口から洩れるのは、か細い泣き声だけ

だった。

女性が、私の声にふと我に返り、あやすように体を揺らす。

「ごめんね、貴女だけは何があっても守るから」

心配するつもりが、どうやら心配されてしまったようだ。

女性の声は、どこまでも優しく、いたわるようにささやかれる。

私は、脱力した。

そろそろあきらめて、自分の現状を受け入れるしかなさそうだ。

このように子供に接するような扱いを受けるとなると、なんとなく今の自分の状況が慮ることができよう。

手足が自由にならず、声もうまく出せない。出せても子猫の鳴き声のような声。

見るからに華奢な女性に、抱きかかえられている現状。

女性の接する態度。

これらの状況を鑑みると、それなりの結論が導きだされてくる。

先ほども、一旦は脳裏をよぎり、しかし、完全に否定したその結論。

もしかしたら、自分は、幼い子供になっているのではないかと。

しかも、おそらくは赤ん坊である。

目がよく見えないことを考えると、たぶん新生児だ。

しかし、なぜ自分がそんなことになっているのかと自らに問いかければ、これは夢であると考えるのが、一番妥当だ。

きっと、夢なのであろう。

死ぬ直前にみている幻か…。

それにしても、よくできている。

かなりリアルな夢だ。

「さあ、その者を渡せ」

男の声は、威圧的だった。

聞こえる感じからすると、まだ若そうな声であるが、命令するごとくに慣れているような、ふてぶてしさが感じ取れる。

女性が、後じさった。

「なぜなのです。兄上、なぜこの子を」

「私は知っているのだぞ、子の父親は、ギエン殿下なのだろう」

女性は、大きく息をのんだ。

男の言葉に、あきらかに動揺している様子が感じ取れる。

悔やまれるのは、何の話をしているのか、私にはまったく理解できないことだった。

「…違います」

女性の声は弱々しかった。

「子の父親はギエン殿下だ」

「何を根拠に…そのような痴れ事を…」

「根拠？知りたいのか？」

男が、皮肉気に笑ったようだった。

「根拠は、子供の背にある印だ」

女性が、再び息をのんで、私を見下ろすのを感じた。

「…印…？…違う…違います。そんなものはありません。この子は

…この子の父親は」

女性は、私を抱きしめる腕に力を込める。

「この子の父親は、先のレヴトリア戦で戦死した、一兵卒です。我がシャントクレール侯爵家とは、身分が釣り合わず、反対されることばかりでありましたので、戦が終わったら、ともに逐電する約束をしておりました。ですからこの子の父親は…」

「お前はあの印がいかなるものか知っているのか？」

男が、女性の言葉を遮った。

女性は、息をつめてだまりこむ。

「その印は、トルバディア王家の根幹を脅かす秘事。刻印を負うものは、トルバディア王家の忌子」

おや？と思った。男の言葉の中に、理解できる言葉が一つだけ混じっていたのだ。

『千年王国』トルバディア　これが、唯一私が理解できた言葉だった。

「ちがいます。この子はそんなものではありません」

「お前は、承知の上で、その子供を生かすつもりか。ならば私は、お前も斬らねばならぬ」

不意に金属がこすれる音がした。鞘から、刃物を取り出すような音だ。

「兄上、どうか、このままお見逃してください。私は、この先、決してトルバディアの地を踏まぬことを、お約束いたします。この子にも言つて聞かせます。決して王家に仇なすことはありません。どうか」

「ならぬ」

「この子の父親は、ギエン殿下ではありませんせぬ！」

女性が悲鳴のような声をあげた。

「まだ言うか。王家を謀るならば、妹といえども容赦はせぬ。命を賭して、王家の安寧に殉じよ」

女性の喉がヒュツと鳴るのを聞いた。

女性は、体の向きを変え、私にかぶさるようにして、屈みこむ。

何か白い棒のようなものが、女性の背中に向けて振り下ろされるのが、視界の片隅に僅かに見えた。

間をおかずして、衝撃とともに、女性が低く唸る声が聞こえた。

女性の肩口から腕を伝い、流れ落ちるものがある。

匂いからして、まぎれもない血であることがわかった。

ドクン

心臓が、激しく音を打ち始めた。

ドクン

この男は、いったい彼女に何をしたのだ？

ドクン

「…お…願…い…です…：…ど…う…か…：…こ…の…子…：…だ…け…：…は…：…お…た…：…す…

け……くだ……さい……」

女性が、呻くように言葉を絞り出している。
流れ出る血の量は、増していた。

服が、どんとどんと濡れそぼり、比例して、女性の体からは力が抜けてゆく。

女性が覆いかぶさる重みで、息が苦しくなってきた。

「あ……に……う……え……」

「ならぬ。刻印をもつ者に、情けをかけることはできぬ。せめて、一思いに楽にしてやるう」

不意に、体の上から女性が退かされ、息が吸いやすくなる。

夜気が体を撫で、凍えるような寒さを感じた。

「あ……に……う……え……」

息も絶え絶えの、懇願するような声音だ。

女性は、この男に切り付けられ、怪我を負っているようだ。それも、瀕死の。

先ほど、棒のように見えたのは、おそらく大ぶりの刃物であろう。月明かりが、白々と輝く金属の刀身のようなものを、浮かび上がらせている。

その刃物らしきものが、自分の頭上に構えられた。

次は、自分の番であることは、おぼろげながら理解できた。

夢の中で、またしても死の淵に瀕するとは、いったいどんな皮肉だ。

何故殺されるのか、理由をといただきたいところだが、このように無防備な赤ん坊の姿では、何故を問うことも、抵抗することもできはしない。

ほの白く輝く刃物が、頭の上で冴え冴えと輝き、ゾクリと寒気を覚えた。

再び、死ぬのであろう己の運命と、人を殺めることに、何の躊躇いもない男の行動に、ただ恐ろしさを感じる。

秩序ある平和に慣れきっている自分には、まるで理解できない出

来事ばかりだ。

闇の中で、男が動く気配がした。

と、その時、

ガサリ

何かが、草をかき分ける音がした。

夜気に乗り、犬の匂いによく似た、獣独特の臭いが漂ってくる。

グルグルと、大きな肉食獣が喉を鳴らすような音も聞こえてきた。

「魔物か。血の匂いにおびき寄せられたか」

男が、再び動いた。

私に向けられていたはずの刃は、野生の闖入者に向けられたようだった。

どうやら、一時の命拾いをしたようである。

だが、あくまでも一時だ。

片が付いたら、また命を脅かされることにはなるのだろうか。

それでも、張りつめていた気持ちが解け、体が弛緩する。

いったい、何が起こっているのだろうか？

自問してみるが、答えがみつかることはなかった。

3 魔物の森

辺りに充満するのは、獣の臭いと、咽るような血の匂い。

時折、冷えた夜風が、大地をなめるようにさらい、一時だけ清々しい緑の匂いを運んできた。

血の匂いが漂う方向には、苦しげに呻く女性の声がある。

女性が、まだ生きているのだというその証に、私は心底ほっとしていた。

夢であるなら、早く醒めてほしい。心の底からそう願ったが、夢の終わりがくる気配はない。

むしろ、次々と起こる、生々しい出来事に、ここが現実なのではないかという錯覚すら起こってくる。

もし現実だとしたら…。

私は、いつたいどうするべきだというのだろう。

今の私には、女性を救うすべなど、到底ありはしない。

ただの無力な赤ん坊に過ぎず、委ねるべき大人の手がなければ、生きてゆくことすら不可能な状態だ。

所詮、今の私と女性には、このまま男の手にかかるか、獣に食われるかの、どちらかの選択肢しかないのだ。

私は、諦めたように目を閉じる。

これが、もし現実であるのなら、死ぬはずだった私という命が、ほんの少しだけ長くこの世にとどまることができた。それだけのことだ。

どんな手違いがあって、こんなことになったのか、知り得ようはずもないが、ただそれだけのことなのだ。

視界を閉じれば、雑音のない静かな世界に、今ここに存在する者たちの息づかいだけが聞こえてくる。

それは力強く、確かな命の躍動を感じさせる、いきいきとした音だ。

皮肉なほどに、満ち満ちた、命の鳴動だった。

低く唸る獣の声に続き、何か重いものが、大地を蹴る音がした。同時に、男が、刃物を振るい、夜気を引き裂く風の音がする。

ガキツと、金属と固いものがぶつかる音が聞こえた。

草深い森なのか、男と獣が動くたびに植物を蹴散らすような音がする。

痛めつけられた青臭い草の匂いが、徐々に漂い始めた。

何度も何度も、金属と何かがぶつかり合う音が聞こえてくる。

お互いの力量が、拮抗しているようだ。

しかし、変化は突然起こった。

獣が低く呻く声が聞こえ、再びむせ返るような血の匂いがした。

男の刃が、獣を傷つけたようだった。

すぐに男が再び刃を振るう音がしたが、刹那、威嚇するように獣が吠える。

獣の咆哮は、ライオンに似たものだった。

その鼓膜を揺さぶるような咆哮を、私は、確かに耳で拾っていた。

しかし、どういう現象なのか、突如耳の奥に、別な声が聞こえた。

『ココカラ去レ、人間ヨ』と。

私は驚き、閉じていた両目を開けた。

それは、聴覚とは明らかに別物の、体の中に直接入ってくるような声だった。

しかもその声は、確かに自分が理解できる言葉だった。

いや、言葉と表現していいものかどうか迷った。

言葉というよりは、イメージといったほうがよいかもれない。

頭の中に、突然思い浮かぶような、不思議な言語だ。

獣が再び吠える。

『人間ヨ、去レ』

動物の咆哮が、私には、確かにそう聞こえるのだった。

どう考えても、この言葉は、獣が発しているとしたか考えられない。内心で冷や汗が流れた。

人間の言葉が理解できないのに、何故動物の言葉が理解できるのだろうか。

つきつめたところで、到底答えを得られようはずもない。

「急に騒ぎ出して、命乞いでもしているつもりか？理をはずれし昏きモノよ、ひとおもいに殺してやろう。じきに道連れも増える。寂しくはなからう」

男が不遜に笑う気配がした。

男の言葉を理解することはできないが、客観的に見て、男と獣の話がかみ合っているようには思えない。男には、獣の声が理解できていないようだった。

男は、再び刃を振るう。

風を切る音が数回した。

しかし獣は、今度はその攻撃を受け止めず、躲したようだった。

ただ、刃が空を切る音だけがする。

やがて男が手をとめた。

疲れを覚えたのか、男の口から荒い息が漏れている。

恐らく、獣は、男を殺す気はないのだ。

獣は、ただここから去るように促しているだけ。

この場所が、どんな場所なのかは知らないが、たぶんこの獣にとつては、守るべき大切な場所なのであろう。

だから、侵入者である私たち人間を、追い払おうとしているのだ。

男は、それに気づくことなく、何度も刃を振り回していた。

獣の真意をくみ取らず、刃を振り回す男にしびれを切らしたのか、突然獣が、今までよりも数段大きな咆哮をあげた。

『コレ以上、コノ地ヲ血デ汚スナ』

獣の、ひとときわ大きな咆哮とともに、一瞬だけ、肝が冷えるような、冷たい空気が辺りを満たす。

それは、これまで私が生きてきた四十年の人生の中で、一度も経験したことのない類の空気だった。

恐らく、これが殺気と呼ぶにふさわしい空気なのだろう。体中の産毛が逆立つような気がした。

圧倒されたのか、男が息をのむ心配がする。

『人間ヨ去レ』

獣の咆哮は荒々しいが、頭に響く声はずいぶん冷静で理知的なものだ。

男が、何を理解したのか、さだかではない。

しかし、獣が、男を追い払おうと意図していることには、気づけたようだった。

不意に、男が笑ったような気配がした。

「なるほど、私が手を下すまでもない。刻印を持つ忌子よ。同じ、理をはずれし者同士、糧となるがよい。無意味に死ぬよりは、理に適おう。命のために、その命捧げるがよい」

男が、私に向かって、感情のない声で何かを言った。

続いて、女性に向かって歩き出し、女性を担ぎ上げる。

女性は、痛みにあえいだようだった。

「あにうえ…私は…捨て置き…ください。どうか…その…子をお助け…ください…」

「ならぬ。兄として、お前を魔物に食らわせ、アウル神の下に廻る命の輪から外させるわけにはゆかぬ」

「では…この子も…」

「これは、理よりはずれし者。同じ魔物の血肉となるが道理だ」

「…そんな…どうせ私は…もう…助か…り…ませ…どうか…」

「お前は、シャントクレールの人間だ。ふさわしい死に場所がある」
「…いや…です…」

男は、女性と何か問答をしていたが、言い募る女性を無視して、小走りに走り始めた。

私は、地べたに置き去りのままだ。

男の足音はどんどんと遠ざかるが、獣がその後を追う様子はない。私は、ため息がでてきた。

今の自分は赤ん坊だ。

にもかかわらず、凍えるような寒さの夜の森に捨てられたということは、つまり、死ぬと言われているのだろう。事実、先ほども、殺されそうになっていたことだし…。

それにしても、みるからに肉食獣といった生き物のそばに捨てられるとは、いったい私はどれだけ憎まれているのだ。

赤ん坊である私が、何か悪さができたとも思えない。

どう考えても、大人たちの事情に巻き込まれて、犠牲になっているというのが関の山であろう。

なかなか、ハードな状況だ。

しかし、どんな事情があったにせよ、この所業はいかかなものか。思いつきり児童福祉法に違反しているし、明らかに保護責任者遺棄致死だし、その前に人間としてどうなのだ？

所詮、銃刀法違反したあげくに、殺人を犯すような、非常識そのものの男に、常識を問いただしても、意味のないことかもしれないが…。

獣が、近寄ってくる気配がする。

獣は、警戒しているのか、少し離れたところで足を止めると、そこから私を覗き込んだようだった。

私のポンコツな目では、はっきりと獣の姿を捉えられたわけではないが、その姿は大きな白い狼のように見えた。

少なくとも私は、この白狼には、恐怖を覚えることはなかった。

先ほど聞いた白狼の声が、理性的であったためかもしれない。

刃物を振り回していた男の方が、よっぽども怖かった。

不意に、風もないのに、木々が揺れ始めた。

白狼が辺りを見回し、何かに気づくと再びグルグルと威嚇するよ
うに喉を鳴らしはじめる。

白狼の威嚇が合図となったのか、突然ギャアギャアと、何匹もの
動物が、間近で喚きだした。

その鳴き声は、女性に抱きかかえられている時に、遠くで聞こえ
た動物の声と同じものだった。

間近で聞くと、なんとも薄気味の悪い鳴き声だった。

4 死魔

ギヤアギヤアと喚く動物は、羽を持っているようだった。頭上を、何度も羽音が横切る。

『血ニ呼バレタカ』

白狼は、忌々しそうに舌打ちをする。

『無貌ノ悪魔ノ使イヨ、去レ。ココ八貴様ラ死魔ノ立ち入ルベキ場所デハナイ。去レ！』

白狼が、恫喝する。

それは、ほんの先刻、男に対して発していた、理性的な言葉とは明らかに違い、おぞましいものに対して発するような、疎ましげな声音だった。

『肉、生キテイル肉、ヨコセ』

ギヤアギヤアと、ただ喚いていただけの声に、確かな意思が宿る。この『肉』が意味するのは、自分のことであることは、すぐに理解できたので、私はうすら寒い思いを抱いた。

こんな、わけのわからない鳥もどきに、食べられたくはない。

『ココ八地ノ王ノ森、死魔ヨ去レ！』

白狼が、私を守るように、鳥もどきとの間に割って入った。

『地ノ使イ、邪魔、死ネ、死ネ、死ネ』

鳥もどきたちは、不満げに、けたたましい鳴き声をあげると、一斉に羽音をたて、白狼に襲いかかった。

生き物同士がぶつかり合うような、鈍い音が何度もする。

時折、白狼に叩き落された鳥もどきが、地面にぶつかり、ギヤアギヤアと呻く声が出た。

『死魔ヨ、去レ！』

ここでもやはり白狼は、追い払うだけのようだ。

白狼は、敵意をむきだしの、鳥もどきさえも、殺そうとはしない。先ほど男に対して言っていたように、大地が血で汚れることを、

避けようとしているのかもしれなかった。

男との戦いでも、この白狼は、血が流れることを嫌い、攻撃をかわしていた節がある。

今もそうだ。鳥もどきを、噛みついたり、引っ掻いたりはしていない。

しかし、そんな戦いかたをしていては、多勢に無勢である。疲弊してしまうのではないだろうか。

そして、もしこの白狼が負けたりでもしたら、私は、鳥もどきのお腹の中に納まることになるのだ。

冗談じゃない。

餓死も、凍死も嫌だけど、生きながら食べられるなんて、考えただけでも震えが起きる。

白狼には頑張ってもらわなければ。

私は、心の中で必死に白狼を応援した。

私の思いが天に通じたかどうかはわからないが、やがて状況は、

白狼有利へと変わっていった。

傷を負わせないといいハンデを負いながらも、白狼は、見事鳥もどきの数を減らしていく。

飛ぶことができなくなったらしい鳥もどきたちが、大地でもがく音がしていた。

白狼は、明らかに私を庇うように傍に立ち、鳥もどきに対峙している。

その行動は、血を流させないという意思のためであるのだろうか、結果、見ず知らずの人間である私を助けてくれようとしている白狼には、いくら感謝しても、し足りなかった。

同じ人間のはずの男は、問答無用で私を殺そうとしたのに、種族の違う白狼に助けてもらえるとは、不思議な気持ちだ。

ただ心配なのは、白狼が、明らかに消耗している様子がかげえ

ることだった。

きつと男が負わせた傷が、深かったに違いない。

先ほど私をかばった女性も、無事であればよいのだが、今の私には、事実を確かめる術などなかった。

白狼の息は乱れ始めていた。

お荷物でしかない自分が、なんと情けなくなった。

いまだ頭の片隅には、これは現実ではなく、夢であるのかもしれないという思いがある。

だが、目の前で繰り広げられる命のやり取りは、あまりにも生々しく、とても作り物とは思えない。

夢ならば、このまま鳥もどきに食べられてしまふというバッドエンドも、後味が悪い夢ということに済むかもしれないが、夢であるという確証などどこにもなく、もし現実だとしたら、生きたまま食べられるなど、想像したくもない死に方だ。

仮に私が、鳥もどきに食べられさえすれば、白狼が、体を張って鳥もどきを追う払う必要もなくなるのだが、今の私には、そこまでの自己犠牲の境地には、たどり着けそうもなかった。

白狼には申し訳ないが、私としても、どうしてもこの場から助かりたい気持ちは強い。

白狼の善意に、ずうずうしくも乗っかっているだけの現状だが、降りることなど考えられようはずもなかった。

『頑張つて』

無責任な話だが、今の私には、応援することくらいしかできない。祈るように、私はそう言葉にしてみたが、やはり口から洩れた音は、フギヤアという力ない赤ん坊の泣き声だった。

赤ん坊の泣き声を拾って、白狼が、私を見た気がした。

『ヤハリ間ノ子カ』

間ノ子？

きいたことのない言葉だが、何故か意味する言葉がわかってしまった。

先ほどのやりとりでもあった『無貌の悪魔ノ使い』『死魔』『地の王』『地の使い』などの言葉も、音としては知らない言葉だが、意味は解るといふ不思議な言葉だ。

『間の子』というからには、混血のことだろう。

『いったい私は、どんな混血だというのだ。』

鏡がないので、自分自身がどんな姿をしているのか、さっぱりわからない。

『というか、そもそも見落としていた問題なのだが、先ほどの白狼の態度を思い返してみると、もしかして……』という思いがよぎる。

『一縷の望をかけて、言葉にしてみた。』

『もしかして、言葉が通じるのですか？』

『……アア』

白狼が、間をおいて、やや戸惑い気味に肯定する。

『おそらくだが、赤ん坊が口をきいていることに、驚いているのだと思われる。私だって、もし赤ん坊がそんな口をきいたら、驚くはずだもの。』

鳥もどきは、再びギアアギアアと喚きだした。

『肉、間ノ子！ 美味イ！ 魔力、ゴチソウ！』

『恐ろしいことを叫びながら、鳥もどきは俄然やる気を出した様子だった。』

『ちよ、ちよつと、何言ってるのよ。私は美味しくなんてないわよ！』

『私は、青くなる。』

『美味イ！ 肉！』

ギアアギアアと喚き散らし、気色悪い発言を垂れ流す鳥もどきに、私はだんだんと腹が立ってきた。

『ちよつと、この鳥もどき！ なんてこと言うのよ！ 大体ねえ、こんなちよつちやな赤ちゃんをつかまえて、食べちゃおうなんて、どれだけ鬼畜な所業をするつもり？ 少なくとも、こうして意思疎通ができるのよ？ 少しは話し合ってみようとか思わないわけ？ 白』

狼さんに見てみただけで、いきなりの二連戦で疲れちゃてるんだから、少しは武士道とか、騎士道とか、そういう高尚な精神を發揮して、後日改めて決闘とか、そういう配慮はできないの？ 一人をよってたかって！ というのもいただけないわ！ それにね、『肉』だなんて、あまりにも失礼な話じゃない？ 私には『佐伯一』さえきひとというちゃんとした名前があるんだから。物みたいには扱わないでくれる？』

フミヤフミヤと鳴き声をあげながら、私は抗議した。

白狼は、少し呆れたようなため息をつく。

『騒々しい赤子だ。死魔二道理ヲ説クナド無駄ナコト。下級ノ死魔二八、高度ナ言葉ヤ意識ヲ理解スルコトハデキヌ。……ソレニシテモ、天ノ使アヌイハ、温和イールデ寡言ナモノガ多イハズダガ……』

そう言っつて、最後の方は言葉を濁した。

それはつまり、私の気性が荒くて、お喋りだとしても言いたいのだろうか。

失礼な。

ところで少し引つかかることがあるのだが、白狼の言葉の流れ的に考えるに、私は『天の使』というものなのだろうか？

人間らしくない響きに、私は少し戸惑う。

先ほど白狼は、男に対して、確かに『人間』という言葉を使っていた。

ということは、『人間』という概念は、きちんとあるのだ。なのに、『天の使』という言葉を使うということは、私は『人間』以外の生きものということなのだろうか？

謎と、混乱の度合いは、深まってゆくばかりだ。

『間ノ子ヨ、……イヤ、『サエキヒト』ト言ウノカ？ トモカク、アマリ死魔ヲ刺激シテケレルナ。死魔ハ死魔ヲ呼ブ。我モ無益ナ争イハ好マヌ』

疲れたような白狼の声に、私は縮こまった。

『ごめんなさい。おとなしくしています』

その後、白狼が勝利という決着がつくまで、私はおとなしく口を

閉じて待ったのだった。

4 死魔（後書き）

平仮名が混じるとルビがうまくいかなかったので、苦肉の策として漢字の部分にだけルビをふってなんとなくバランスを取ってみました。

こんなに手間がかかると、作成中の分を直してゆくのが………しかたありませんよね。自業自得ですし、頑張ってみます。一応、ルビは、下記のようにふってあります。

無貌の悪魔の使い アトウイール

地の王 エンキ

地の使い エンイール

間の子 ユイン

天の使い アヌイール

千年王国 トルバディア

死魔 アジール

鳥もどきがいなくなると、森は再び静かになった。

白狼は疲労したのか、私のそばに近寄ってくると、大地に腰を下ろす。

白狼の疲れが回復するまでは、おとなしくしていたほうがよさそうだと判断し、私もじっと我慢した。

夜気が体を撫でる。

私は、寒さに身震いした。

白狼がそれに気づき、私に寄り添い、抱き込むように体を伏せる。今まで、野ざらしで冷え切っていた体が、温かい毛皮にくるまれた。

『ありがとう』

白狼は、小さく笑ったようだった。

『サエキヒトヨ、ソナタハ赤子ノヨウニ見エルガ、思考力ハ赤子ノモノトハ思エヌ。何者力？』

白狼が、首を傾げた。

『ええと、それは説明すると長くなるのだけど、とりあえず私のことは、『一』と呼んでもらえる？』佐伯』は姓なの。ところで、あなたの名前は？』

『命トハ変ワツタ名ダナ。我ガ名ハ月』

そう言われて、よく見ると、ナンの毛足は銀色で、実に名前に合っていた。

『月ね。素敵な名前だね。私の『ヒト』は、数字の一という意味よ。長女だったから『一』なの』

ふむ、そうかと呟くナンに、私は、ここ最近の自分の身の上で起こった出来事を、順序立てて話した。

時々、ナンには理解できない言葉や習慣があったようで、質問されることも多くあった。

おかげで、ずいぶんと時間を手間取ってしまったが、ようやく話し終え、ナンが出した結論はというと、ここは、私のいた地球とは異なった、別の世界であるということだった。

そして私は、いわゆる『転生』という現象によって、赤ちゃんとして生まれ変わっているのだらうということだった。

ちなみに、こちらでは、『転生』という言葉は使わずに、『廻る者』^{ガト}というのだそつだ。

ああ、やっぱり、私は死んでしまったのだなと、妙に納得してしまった。

しかも、ナンの見立てたところ、どうやら私は、天の使い^{アヌイール}という魔族と、人間との混血、もしくはその先祖がえりであるらしかった。

魔族と人間の混血を、魔族たちは間の子^{ユイン}と呼ぶのだそつだが、人間は鬼子とか化物などと呼び、大半の人間の集団からは、迫害の対象になる存在らしい。

だから私は、赤ん坊なのに殺されそうになったのだなと、この件でも納得するのだった。

ナンは、地の使い^{エンイール}という魔族で、普段は地の王^{エンキ}が治める地の中心^{キシエル}という場所に住んでいるそつだ。しかし、今日は、たまたま人界にある飛び地のようなものを巡回していて、こんな目に合ってしまったらしい。

ナンには気の毒な話だが、私にはとてもラッキーなことだった。

大半の人間は、死魔と魔族の区別がつかないらしく、先ほどの男のように、一緒のものとしてあつかうようだ。

だが、ナンに言わせると『根本を異にするもの』^ナなのだそつだ。ナンが忌々しそうにそう洩らすのを私は聞いてしまった。

さて、ひとまず、ナンのおかげで、現状の把握はできたのだが、ここで、また新たな問題も浮上した。

それは今後の私の処遇だった。

私は間の子なので、地の中心というところに連れてゆくことは、ナンの判断だけではできないそうだ。

だからと言って、人間の村に連れて行ったところで、なぶり殺しにされてしまうのがおちだるうということ、ナンは困ってしまっただようだ。

いい人（魔族）だ。

『一ヲ引キ取ツテクレソウナ人間ニ、心当たりガ、ナイワケデハナイノダガ…』

ナンはそう言うと、困ったように黙り込んだ。

どうやら、心当たりの人物が、あまりおすすめではないらしい。

『子供を引き取るなんて、簡単に言うけど、中々できることじゃないわよ？この際、どんな人でも文句はないわよ。どんとこいよ』

こちらら赤ん坊なのだ。

飢え死にコース、凍死コース、捕食コースを避けられるなら、もはや文句はない。

『スマナイ、魔族ト付キ合オウナドトイウ人間ハ、ソモソモ酔狂ナ者バカリデ…我ノ知ツテイル者モ、魔道士トシテハ傑出シタ腕ノ持手主ナノダガ…人格ノホウニチト問題ガ…』

ナンにここまで言わせるとは、ちよつと不安は残る人物ではあるが、選択肢がないのだから仕方ない。

この際、生き残れる可能性があるなら、文句は言わないわ。

ナンは、少しだけ時間をかければ、正規の手続きを得て、私を地の中心に連れて行けると言っていたが、私が赤ん坊なので、その間の預け先に苦慮していたようだ。

しかし、これ以上ナンに迷惑をかけるわけにはいかない。

私は、渋るナンを説得して、なんとかその魔道士の元に連れていってもらったことにした。

しかし、この選択を、後々になってもものすごく後悔することになる。

今現在の己の立場を考慮すれば、想像の範疇を超える出来事とい

うのは、確かに存在するわけであって……。

おのれの常識というものが、いかにあてにならない判断基準であったかということ、今後身を持って知ることになるのだ。

私の、苦難に満ちた二度目の人生は、まだまだ幕を開けたばかりだった。

5 月（後書き）

引き続きルビについて記載します。

命 ヒト

月 ナン

廻る者 テルガト

地の中心 キシエル

今回でひとまず第一章の終了です。
続いて第二章です。

1 大魔道士という名の欠陥人間（前書き）

やっとここまで来ました。前置き長かったなあ……。
放り投げずに、お付き合いくださいました方々、ありがとうございます。
ます。

しかし…（汗）

実は、タイトルにある魔道士様、まだ登場しません（汗）。
先に謝っておきます。申し訳ありません。

1 大魔道士という名の欠陥人間

この世界には、五つの大陸が存在し、それぞれの名を、アルラート青大陸、セルラート銀大陸、ソルラート金大陸、グルラート黒大陸、ウアルラート白大陸と呼ぶ。

総じて、世界の名前は、クル・エ・カルナと呼ばれ、創生神話に刻まれる、始まりの神の名を冠していた。

わたしが、このクル・エ・カルナに来て、今年で、とうとう五年の月日が経つ。

季節は、折しも秋。

一年のうちで、最も過酷な冬を、間近に控えた五年目の秋だ。

ここは、クル・エ・カルナの北西に位置する大陸　　白大陸

の、さらに北端にある僻地で、いわゆる国としての機能はなく、俗に『白大陸の掃き溜め』とよばれる無政府状態の暗黒地帯だ。

地図に記載されることのないこの暗黒地域は、通称プルシャーラと呼ばれている。

プルシャーラとは、ウットナ古代語で『よるべなき者』を意味する言葉だ。しかし、その事実を知る人間は少ない。もはや古代語は、人界にて失われて久しく、使いこなせる人間は、ほんの一握りしかないのだ。

一応私は、この古代語を使いこなすことができる。

というよりも、古代語が標準語と言っても過言ではない。

古代語とは、文字通り古代の言語で、ナンと意思疎通のできる言葉　　つまり魔族レトルの使う言葉だ。

なぜ、そんなマイナーな言語を、私が扱うことができるのかという、その理由は定かではない。

ただ、漠然と私が思うに、恐らく遺伝子レベルで記憶している言語なのではないかと思うのだ。あくまでもたぶん、なのだけど。

日本語とは明らかに発音が違うのに、この古代語を、私は赤ん坊

の時から勝手に理解できている。

かつてどこかで学んだ覚えなど、全くないのだから、きっと、私の遺伝子が記憶している言葉なのだろう。おそらくは、そういうことだ。

深く考えたところで結局は解けない謎だ。

実際にそういう現象が起きているのだからしかたがない。理由など、後付けでしかないのだ。

とにかく、今の私は、現代では、ほぼ通用しない、役に立たない言語しか習得できていなかった。

本来なら、この世界の現代の公用語であるトルバディア語を学びたいのだが、実現することができずにいる。

おかげで私は、じき五歳になるというのに、いまだトルバディア語を、ごく限られた偏った語彙を、片言でしゃべれるのみだった。

ぶつちやけ、覚える機会がないのだ。

それも、これも、あれも、全ては、人間失格と同義語と言って差し支えない保護者のせいであった。

保護者の名をイムルードという。

彼の二つ名は、白の大魔道士とか、白き賢者とか、白の貴公子とか、それはそれは御大層な名前を、いくつも持っていらっしやる。

しかし、だ。

その名前が、見事、実を伴っていないことを、私は身を持って知っていた。

ヤツは人間失格だ。

とんでもない欠陥人間だ。

人間として必要な、いろんなものが欠けている、筆舌に尽くしがたい、人間もどきだ。

世間一般の人々の、ヤツを褒め讃える美辞麗句を耳にするたびに、私は苛立ちがつのつていく。

イムルードという人物は、噂ばかりが勝手に独り歩きしている、典型的な例そのものなのだ。

確かに、私の現在の保護者とはいえ、イムルードであるはずだ。住む家や、服などの住環境は、ヤツの持ち物なのだから。

しかし私は、ナンや、ナンの眷属、同居人であるセトがいなければ、この世で一週間の生を生きられたかどうか、それすらもあやしいほどの過酷な環境に身を置いていた。

一か月と区切れば、確実に死んでいたと、断言できる。

保護者とはいつても、イムルードはその程度の存在でしかないのだ。

私は、ナンという友に恵まれ、セトという、守らなければならぬ我が子のような存在を得、さらに廻る者^{テル}として、生きるための知識や記憶を持ち、間の子^イとしての身体的な能力や丈夫さが備わっていないければ、絶対にこの世界で生き残ることはできなかつたことだろう。

あの、生活能力のなさは、もはや罪だ。

ナンが、私を預けることを渋っていた理由が、よおおくわかつた。怒涛のようにめまぐるしく過ぎ去つた、この五年を振り返り、私は、自分を褒めてやりたい気持ちでいっぱいになる。

今年の冬も、厳しい冬となるだろう。

しかし、五回目ともなれば、それなりの自衛手段も、自ずとつかめてくるものだ。

私は、野菜を天日に干すべく、細く切つて筵に並べ始めた。

今年の冬は、少しはましな食事にありつけるようにしなければと、決意を込めて作業に臨む。

特に、セトは成長期なのだ。きちんとした食事を用意してやらなければ、あまりにも可哀想だ。

雪に閉ざされてしまうこの地では、保存食を準備しておかなければ、あつという間に飢え死にコースを辿ることとなる。

飢え死にコース、凍死コース、捕食コース。

かつての私が、全力でもって回避しようとしていた三大コースのうち、第一コースに、はからずも自ら乗っかってしまったことを気づいたころには、すでに手遅れだった。

最初の、魔の一年を乗り切れた自分は、冗談抜きにノーベル賞をもらうよりも、すごい快挙を成し遂げたはずだと思う。

むしろ奇跡とよべる偉業だ。

二度と経験したくはないが。というか、思い出しただけでも、寒気と涙が怒涛のように押し寄せてくる。

何も知らずに、ただ犠牲になっていたセトが、可哀想でならない。私のそばで、同じように筵に野菜を並べる少年を見て、私は再び決意を新たにした。

この子のためにも、絶対にがんばらなければと。

『ヒト、これでいい？』

セトが、フサフサとした狼のような尻尾を揺らしながら、私を振り返る。

『そうよ、上手ね』

背伸びをして、えらいえらいと、頭を撫でてあげると、とがった耳をピクピクと動かし、照れたように笑う。

セトは、人間と、獣人レルトとの間の子供で、『半獣コファイナル』と呼ばれる存在だった。

1 大魔道士という名の欠陥人間（後書き）

今回ルビのために、色々言葉をかまいました。
後々になって忘れて、間違いが出てこないことを祈ります。

2 半獣の子供

獣人^{レルト}とは、本来、白大陸^{ワラルラート}には存在しない、金大陸^{ソルラート}固有の種である。文字通り、獣と人間が合わさったような容貌をしており、あるものは頭部のみが獣で、体が人間のようであったり、ある者は上半身が人間の容貌で下半身が獣であったりと、多様な種が存在する。

しかし、総じて魔力を持たず、かわりにとでもいうべきか、並外れた身体能力を備えた、強靱な肉体を持つ種族であった。

セトは、その獣人と、人間との混血だ。

外見的には、ほぼ人間の容姿をしているが、人間のそれよりも高い位置に、毛の生えた尖った耳が付き、臀部にはフサフサとした尻尾を持っていた。

獣人たちの住む金大陸は、大陸と呼ばれているものの、他の四大陸と比べてずいぶん小さく、白大陸と比較すると、五分の程度の大きさしかない。距離的にも、他の大陸とはだいぶ離れており、発見されるまでは、独自の文化を築いていた。

とはいっても、魔族^{レトルト}は獣人の存在を知っていたし、獣人の方でも外海の存在は知っていた。

獣人は、性格的には解放的で、おおらかな種なので、金大陸を訪れるものを、こばむようなことはなかったのだ。

ただ彼らは、自分たちから外海に乗り出すことはしなかった。

どうやら、獣人は、水に対して、苦手意識がある種が多いらしく、結果、造船や航海技術が発達しなかったようなのである。

やがて人間の航海術が発達し、彼らが海^{シーラ}を渡るようになると、クル・エ・カルナの南部に位置する金大陸の存在は、人間たちの知るところとなった。そこから獣人たちの暗黒時代がはじまることとなる。

ナンの話によると、獣人たちが、人間に奴隷として狩られ、白大陸に強制的に連れてこられるようになったのは、ほんの200年ほど前のことであるそうだ。

200年もの昔を、『ほんの』と表現するナンは、現在およそ450歳だそうだ。魔族は寿命が長いので、十年ごとに区切って年を数えるらしい。

通算45歳になる自分と比べても、太刀打ちできなかったことが、ちよつと悔しかった。

それにしても、人間というのは、どこの世界でも同じことをするのだなど、嫌な思いがした。

話しはそれだが、セトの母親はこの獣人で、奴隷としてレント国の、さる貴族の家に仕えていたようだ。

しかし、主の子を妊娠したために、プルシャーラに捨てられたらしい。まったくもってひどい話だ。

セトの母親は、ここプルシャーラで、一人でセトを産み育て、彼が4歳になるまでは、なんとか順調に育てることができていたそうだ。

しかしある時、母親が病に罹ってしまい、もはや自分の命がいくばくもないことを悟ると、よせばいいのにイムルードを頼って、ここを訪れたというのだ。

私がある場にいたら、絶対に考え直させる選択だったのだが……。

とにかく、あの欠陥人間は、その悲痛なまでのお願いを、軽々しくホイホイと引き受けてしまい、すると女性は安心したのか、すぐに事切れてしまったらしい。

それは、私がナンと一緒にイムルードの元を頼る、ほんの3日前の出来事だった。

そのたった3日間で、恐ろしいほど衰弱していたセトを、ナンは見るに見かねて、なんとか食料を確保して与えた。

その間のイムルードはというと、新種の病に罹っていたセトの母親の症状を、部屋にこもって研究していたというのだ。

引き受けたのなら、きちんと面倒を見るのが筋だろう。

自分が、睡眠も食事も一月獲らなくても、なんともないからといって、その規格外の体質が、他の人間にも通用すると思ったら、大間違いだ。

世間一般の人間は、もつと繊細にできているのだ。

少し考えれば、わかることだろう。大魔道士様が聞いてあきれるところに、かくこれが、イムルードという大魔道士の正体であった。

ナンは、魔族の中でも色々立場のある身分らしく、あまり人界にとどまるわけにはいかなかった。

後から知った話なのだが、男につけられた傷が、退魔の術が施されている特殊な武器によるものだったために、地の中心キにもどつてからも、治療にかなり時間がかかったようだ。

にもかかわらず、ナンは、自分の治療よりも、私とセトを地の中心に連れてゆくための手続きのほうを優先してくれていたらしい。ほんとうにありがたいことだ。

あのバカも、ナンの爪の垢を煎じて飲ませてもらえばいいのだ。ナンは、自分が地の中心に戻るにあたり、イムルードに、育児のノウハウを懇切丁寧に伝授し、赤ん坊や子供が、いかに脆弱な存在か、口を酸っぱくして教えていた。

傍でそれを聞いていた私は、大の大人が、そこまで無知なはずはあるまいと、ナンの過保護なまでの心配ぶりを、ほほえましいものでも見るような目でみていたのだが、認識が甘かったのは、私の方だった。

あれだけナンが、噛み砕いて分かりやすく説明していたにもかかわらず、あのバカは、すぐにそんなことは忘れてしまった。

イムルードは、母親が命と引き換えにしてまで愛しんで育ててきた四歳児を、素で三日間も放置してしまうような人間であるのだ。それを忘れてはならなかったのだ。

ナンは、人界に残した私たちのことをいつも気にしてくれていたように、あれだけ色々叩き込んだのだから、まさか…とは思いつつも、自分が再び人界に行くことができるようになる一月後を待たず、一週間後に太陽ウツクという人型の女性の眷属に、様子を見てくるように頼んでくれた。

イムルードの家に住むようになって7日目の正午。

ナンに頼まれて、イムルードの家を訪れたウトウは、私とセトの惨状を目にして、本気で涙を流していた。

その時、保護者であるはずのイムルードはというと、外出したまま六日ほど戻ってきてはおらず 予定では一か月ほど出かけるつもりだったとかで、彼が一か月分と予想した半端ではない量の生鮮食品が、厨房に山積み押し込まれており、食事を作り出すはずのその場所は、腐敗し、悪臭をはなつ物質に、汚染された魔窟へと変わっていた。

ちなみに、赤ん坊である私のために用意されていたドラム缶一本分くらいの山羊の乳は、ものすごい腐敗臭をはなつドロドロの物質へと変わっていたそうだ。

オムツも取り替えてもらえず、びしょびしょになっていた私の皮膚は、褥瘡の一步手前。

おまけに、私も、セトも、見るからにガリガリで、肌艶も悪く、明らかに脱水症状と栄養失調を呈していた。

ウトウは、掟を破つてでも、私たちを地の中心に連れて帰ろうとしてくれたが、間の子ユインと半獣ユライルの受け入れは、そうとう難航していたようで、それもかなわなかった。

余談だが、後に、間の子である私だけは地の中心に渡る許可が下りたが、半獣であるセトには許可が下りることはなかった。自分だけ助かるなんて後味の悪いこともできないので、私もイムルードの元に残ることに決めたのは、それからひと月後のことだ。

ともかく、三日ほど、ウトウの献身的なお世話の恩恵に与かり、私とセトは、ようやく尊厳の感じられる人間らしい生活を送ることができた。

まさに至福の時であった。

しかし、禍福はあざなえる縄のごとしとはよく言ったもので…。

ウトウが地の中心に戻らねばならなくなった四日目の朝、ひよっこりとイムルードが戻ってきた。

ヤツが家をでて、ちょうど十日目のことである。

ウトウは、イムルードを見るなり、烈火のごとく怒り、炎の魔術を駆使して、イムルードの殲滅にのりだした。

ウトウは、金色の髪と目を持つ、ものすごい美人だ。私の貧相なボキヤブラリーなどでは表現しきれないほどの絶世の美女だ。

その美女が怒ると、こんなにも凄絶な表情になるのかと、私は寿命が縮む思いがした。

しかし、イムルードも腐っても鯛とでも言うべきか、大魔道士の二つ名は冗談ではなかったらしい。

私が青くなって泣き叫んで仲裁するまで、二人は、森が焦土に変わるほどのバトルを繰り広げた。

セトなどは、見ているのも可哀想なほどの怯えようだった。

私と違って、廻る者^{デルガト}でない分、セトの苦勞は相当なものだったと思う。

人生の大半のこと経験してきたはずの私でさえ、ここでは驚きの連続だったのだ。ただの四歳児には、あまりにも荷が重かるう。

それに私は、幸いにも古代語^{ウツナ}を話せた。厳密には、赤ん坊の私と、獣のナンの会話は、心話というかたちで成り立っていたらしく、同じ手段でウトウとのコミュニケーションもとれていたので、色々と助けられた。

イムルードも古代語を理解し、心話を心得ていたので、一応会話

することはできた。

が、いかにせん残念なヤツなので、意思疎通を図ることは、並大抵の努力ではできなかったが。

極端な話だが、私が寒いといったら、私の体に火でもつけてしま
いそうな男なのである。

セトはというと、子供らしい片言のトルバディア語しか話せな
かったので、イムルードとしか会話ができず、結果は言わずもがなで
あろう。

幼い子供には、話しかけてあげることが重要なのだ。肌に触れて
あげ、耳からも、目からも、皮膚からも、積極的に刺激を与えてあ
げることが、健やかな発達を促すのだが、あの男に、そんな高度な
芸当を要求するのは、しよせん無理な話である。

おかげで、私がキチンと言葉を発音できるようになり、なんとか
セトに古代語を教えてあげられるようになるまで、セトはまとも
にかまってもらえず、おかげで表情と口数の乏しい子供になってしま
ったのだ。それが残念でならない。

いや、そういえば、一生懸命話しかけて育てても、年ごろになる
と反抗期が来て、仏頂面になることもあったなあ。

ふと、前世の我が子を思い出し、悲しくなってしまうた。

みんな元気にいるだろうか？

幸せに暮らしてくれていればいいと、私はそう願った。

3 沈黙の深き森 前編

私とセトは、町へと向かっていた。

今年も間近にせまった、厳しい冬に備えるためだ。

二人で手をつなぎながら、道なき道を進む。子供の足で、町にたどり着くには、片道で五日ほどを要した。

前に住んでいた世界では、『お買いもの』とは、ある意味ストレス発散にもなりうる楽しい行いであった。

なのに、その楽しいはずの響きが、この世界では『苦行』という言葉と、等しい重みを持っている。

この楽しいはずの『お買いもの』。

ここでは、いつも命がけなのだ。

イムルードの住まいがある森を、ムレウト魔族たちはネル・ム・ヌトウスと呼ぶ。古代語で『深き沈黙の森』という意味だ。

どうやら、ナンたち魔族に所縁がある土地らしいが、詳しいことは知らない。というか、覚えてない。

生きていくための知識の方を優先させていたので、このあたりに関するナンやウトウの説明を、私は話半分に聞いていたのだ。ごめんなさい。

ともかくこの森は、アジール死魔たちがわんさか生息する場所で、人間たちは「魔の森」と呼び、絶対に近づかない場所だった。

だから、この森に道など存在しない。はじめのころは、方向感覚もなくして、たまたま迷子になったりもした。

今はもう、そんなこともないが。

この森を通るたびに思う。母親の愛情とは偉大なものであると。

ここは、腕に覚えのある、大の男ですら近づかぬ森。

その森を、セトの母親は、子連れで通ったのだ。どれだけの勇氣が必要だったことだろう。同じ母親として、尊敬の念を抱いてしま

う。

それと同時に、彼女の無念さを思うと、胸が痛むのだ。

自らがお腹を痛めて産んだ愛しい我が子を、やむを得ず誰かに託さねばならぬという状況は、身を切られるよりつらい現実だったことだろう。

自分という母親の存在が必要な、幼子ならばなおさらである。

そんな大変な思いで縋ろうとしていたものが、あの残念な男だったことだけが悔やまれる。

母親が、それを知らずに逝けたのは、むしろ幸せだったのかも知れない。

イムルードの正体を知っていたら、私だったら死ぬに死ねなかつたはずだから。

代わりにというのはおこがましいが、私は、自分のできること全てをもって、セトを立派な大人に育てあげようと決めている。同じ母親の、命がけの願いなのだ。かなえてあげたいではないか。

もちろん、そんな約束事などなくとも、私はきつとセトを大切に

したはずだが。

セトは、他人のことを思いやることのできる、優しい心根の持ち主であるし、子供というものは、ただ存在するだけで、愛らしい生き物なのだ。

対して母親というものは、自分よりも、子供を優先してしまう生き物。

セトが笑えば、私も笑顔になる。

セトが喜べば、私も嬉しい。

セトが悲しめば、私も悲しくなる。

母親というのは、自分の感情より、子供の感情に左右されてしまう生き物なのだ。

私は、この子にいつも救われている。

私の産んだ、大切な我が子たちは、もはや会うことのできない遠い世界にいる。

私は、セトを育てることを通して、その向こう側に、我が子を見ているのかもしれない。

この子の笑顔を見ているだけで私は満たされる。

ふと思った。

私はセトを育てているつもりだけれども、今の私という人間は、セトによって生かされているのかもしれない。

『セト、町に行ったら、何がほしい？』

セトは考えるそぶりをした。

『甘いお菓子』

遠慮がちに、正直な気持ちを答えてくれる。

『じゃあ、町に行ったらお菓子屋さんに寄ろうね』

『うん』

セトの笑顔につられて、私も笑顔になった。

セトは、人見知りが激しくて、ごく僅かな者に対してしか心を開けない。

そして、心を開いた人間にしか、子供らしい姿を見せられない。

ならば、素になれる私の前では、いっぱい甘やかしてあげようと思おうのだ。

3 沈黙の深き森 後編

それにしても、セトは随分と大きくなった。

私も、この五年で、体はだいぶ成長したが、やはり人間の五歳児程度の容姿だ。

対して、半獣であるセトは、九歳にして人間の十二、三歳の体格をしていた。

獣人は、平均身長が2ガズド（1ガズド＝1？）くらいあり、その獣人の血を引くセトの成長は、目を見張るものがあるのだ。

今では、私くらいの子供なら、セトは片手で軽々と持ち上げられるほど。半獣であるセトとの体格差は、年々広がるばかりだった。

間の子である私も、人間と比べると成長の速度が速いと言われている。

ちなみに私は、一か月でハイハイができるようになった。

最初の出会いから、一か月ぶりに会ったナンに、得意げにハイハイして見せると、絶句し、

『ナントモ…規格外ナ子供ダ…』

と小さく呟いたのを、聞き漏らさなかった。

悪いけど、私は自分の悪口だけはよく聞こえるし、覚えているの。けれどもなぜか、都合の悪いことは、聞こえないし、耳にも残らないから不思議よね。

とにかく、このハイハイができるようになったおかげで、行動範囲も広がったし、できることも増えた。

ちょっと残念だったのは、相変わらず、発音だけがうまくできなかったこと。

きちんと話せるようになり、セトに言葉を教えられるようになったのは、二歳になった頃だった。

それでも、私たちには劇的な変化をもたらした。

「うー」とか「あー」とかいう擬音と、身振り手振りで、セトと意

思疎通がはかれるようになったからだ。

お互いに協力し合えるということは、生活環境を向上させることに、大いに役立つのだ。

ナンは、規格外だといったけれども、私だつてたくさん努力をした。その結果、ひと月でハイハイできるようになったのだ。

私がここにきた、最初の魔の一年。

保護者が、ある意味育児放棄をしていたので あれでも、

イムルード的には、一生懸命私たちの世話をしているつもりらしいが 代わりに、身動きの取れるセトが、赤ん坊である私の世話を焼いてくれた。

山羊の乳をスプーンですくい、一生懸命私の口元に運んで飲ませてくれたセトの姿は、今でも目の奥に焼き付いている。

その時の私と言えば、なんだか情けなくなってしまう、四歳児にこんな真似をさせてはいけないと、一念発起。

ド根性で歩いてやろうという決意のもと、赤ん坊ながらも手足をじたばた動かして、筋力トレーニングを開始した。

おかげで、ひと月でハイハイができるようになったのだ。
人間為せば成るということだ。

努力と言えば、魔術についてもかなりの努力をした。

イムルードの家には、山のような量の本がそろっている。

幸いにも、本のほとんどが、古代語ウテナで書かれていたため、私にも読むことができた。

本当は、この世界で生きてゆくための知恵とか術を学びたくて、本を読むようになったのだが、生憎とイムルードの持っていた本はいわゆる学術本の類ばかりで、ほとんどが魔術についてのものだった。ちなみに、お約束のエッチな本はなかった。甲斐性のないやつだ。

さて、この魔術、はじめのうちは、私にとって、まったくいらぬ知識であると思っていた。

しかし、森の中では、大いに役立つことがわかり、後になって必死に覚えた。

家の周りは、イムルードの張った結界のおかげで、死魔^{アジール}など出沒しなかったのだが、いざ結界の外にでたら、死魔の量が半端ではないのだ。

さすが大魔道士、いい仕事をする。

ともかく、そういうわけで、私は魔術の習得にいそしんだ。

幸いにも、私は魔術との相性がよく、力加減に四苦八苦するほどだった。

逆に、セトは魔力を持たない獣人の血を、色濃く受け継いでおり、おかげで、魔術の方は、ほとんどさっぱりだった。

魔術を学ぶようになって、ようやく気づけたのだが、イムルードの魔術の腕は、やはり凄いものだった。

そこは素直に認めよう。

それに、人柄も悪くはないのだ。ちょっと一般人には理解できない言動も多いが…。

イムルードは、一つのこと熱中すると、周りが見えなくなってしまうタイプで、また、天才ゆえに、思考回路が、凡人とは異なっているのだ。

悪意のある人間ではない。それは確かだった。

あと困ったところといったら、放浪癖と酒好きなどところだろうか。どちらも治りそうにないほどの重傷だが。

イムルードは、自分の家があるにもかかわらず、ほとんど家にはいない。

私たちが住みはじめる前は、10年から20年の単位で家を留守にしていたらしい。

それを考えると、セトの母親が、イムルードに会えたことは、奇

跡としかいいようがない。

たぶん、なるべくしてなった結果なのだろう。

では、私がこの世にいるのも、同じ結果故なのだろうか。
考えたところで、分かるはずもなかった。

く小話く ダグダの棍棒

イムルードの家の辺り一帯は、彼の作った結界で外敵から守られている。

外敵とは、獣であったり、死魔^{アジール}であったりする。

当たり前だが、その結界の外に出れば、たちまちそれらの外敵から襲われることになる。

セトの成長は、身長ばかりではなく、腕力も相当な腕前になってきていたので、小物の死魔ならば一人で倒せてしまうほどになっていた。

イムルードは、そんな彼に、ある時、護身用にと棍棒を渡した。

その時の、イムルードと私のやり取りをそのまま再生してみると、以下のようになる。

『これダグダの棍棒。いいものだから死魔をやる時は、これを使うといいよ。使い勝手もいいように、小さくしたからさ』

『ダグダの棍棒？ なにそれ』

私は、イムルードに訊ねる。

『ダグダが使っていた棍棒だよ』

イムルードは、そう言いながらセトに棍棒を手渡した。

『さてさて、勝手に話を進めるな。こんな子供に武器を与えるなんておかしいでしょ。だいたい『やる』の部分、意味がよくわからないけど、まさか『殺る』じゃないわよね？ てゆうか、相手は子供よ？ どうせあげるなら玩具をあたえなさいよ』

『え？ 玩具がほしいの？ だったら今度持ってくるよ？』

私はイラツとした。

『そうじゃなくて、物騒なものを与えるなど言ってるの』

『なんで？ 強い死魔に会って、怪我をするよりもいいじゃないか』

『そんな危ない目には、合わせません』

『え〜だって、これ便利なんだよ。こっちで叩くと必ずやれるし、間違つてやつちやつた場合、こっちでやり直すと生き返るんだよ?』
『すこいでしょ?』とイムルードが得意げな顔をする。

『だから『やる』ってなに?』というか、なんなのよその恐ろしい武器は!』

『ダグダの棍棒だよ?』

(イラ)

『だから、ダグダの棍棒とは、なんだと聞いているの』

『?』ダグダが持ってた棍棒だよ?』

(イライラ)

『ダグダって誰!?!』

『お粥好きの奴だよ』

(イライライラ)

私は、イムルードと不毛な会話を延々と続けたが、そのうち疲れ果てて折れた。

代わりに、セトがそんなものを振り回さないで済むように、私が守ってあげようと決意する。

ちなみにこの時、イムルードは、私へのプレゼントとしてミョルニルというハンマーをくれた。

投げれば必ず標的に命中して、勝手に戻ってくるし、使わない時はポケットにも入る優れものだそうだ。

その『優れもの』、今後も使う場面がないことを、心から祈っていた。

く小話く ダグダの棍棒（後書き）

参考資料

伝説の「武器・防具」がよくわかる本

PHP文庫 様

4 クロウという名の死魔

この森のやつかいなところは、知能の高い死魔アシールも出没することだった。

最初に会った、鳥もどきのような死魔なら、私も問答無用に処分することができるのだが…。

私は、チラリと横を盗み見て、そっとため息を漏らした。

結界を出て、はじめて死魔と出くわした時、私は怖くて何もできなかった。

私には、ただ逃げることしかできなかった。

だが、死魔がセトを襲おうとしたとき、私は頭がカツとなって、気が付いたら魔術を使っていた。セトを守るためなら、私は、鬼にもなれた。

生き物を自分の手で殺すことは、むろん初めてのことと、やってしまった後に、ずいぶんと落ち込んだ。

今まで、生きてゆくために食事をとり、色々な生き物の命を奪ってきたというのに、自分の手を汚すことが、こんなにもつらいことだとは思ってもいなかった。

つくづく、自分という人間は、ぬるま湯の中で生きていたのだと今さらながら思い知らされた。

しかも、死魔は食べるために殺すわけではない。自分たちが生き残るために殺すのだ。どこか虚しさを覚えていた。

私の場合、死魔と戦う時は、大抵炎の魔術を使う。それはナンが、森で血を流すことを許さないためであった。

余談だが、最初に私がいた森は、白大陸ワールラートの大国、トルバディアにあるそうだ。

だからあの二人の会話に『千年王国』トルバディアの名前が出てきたのだと、

後から納得したものだ。

あの時の女性の、その後が気になるところだが、今の私にそれがわかるはずもない。おそらく彼女は、私の母親で、きっとこの世には、もういないのだろうと思う。

私の髪は、真っ直ぐなプラチナブロンドである。そして目は青い。髪の色は、おそらく母親譲りなのだ。暗闇の中で垣間見た、あの女性の髪に酷似しているから。

そして私の青い目は、俗に「天上の青」と呼ばれる貴重な色であるらしかった。

確かに、くすんだ水色とかではなく、本物の青空にそっくりな、透明度の高い青色をしていた。

母親であるあの人の顔は、もうおぼろげながらにしか覚えていない。

だが、優しく抱かれていた、あの温かい腕の心地よさと、頭を撫でられた時の手のぬくもり、優しい声、愛しげに向けられていた眼差し、それら全てを、私は覚えている。

話をしてみたかったと思う。

だが、きっとそれはかなわない。

さみしい話だが、おそらくそれは、取り消すことのできない、紛れもない事実であるのだった。

話しがしんみりしてしまっただが、とにかく私が死魔と戦うときは、そういった訳で、炎の魔法を使って対応していた。

だが、困ったことに、死魔の中には人型もいた。

魔族にも、ウトウのような人型がいるのだから、死魔にいてもおかしくはないのだが、盲点だった。

人間のように見えると、どうしても処分するのに躊躇いがでてる。

しかも人型の死魔は、知能が高く、会話が可能なのだ。

はじめて、一人でこっさりイムルードの結界の外に出た時に、私はある人型の死魔と遭遇をしていた。

名前をクロウという。

長い漆黒の髪と、銀色の瞳をもつ、美貌の死魔だ。

それにしても、この世界の者は、いやになるほど、造作が整っているものばかりである。

もしかしたら、私の美的感覚の方に問題があるのだろうか、心配になってしまっただ。

このクロウ、私としては、二度とお会いしたくないタイプの奴なのだが、結界から出るたびに、つきまとわれて迷惑している。

今日もまた、ボウフラのように、どこからともなく湧いて出てきて、ストーカー行為を働いていた。

一見すると、見た目もよく、人当たりもよいので、女性にはモテそうなタイプだが、いかんせん、私のセンサーは常に危険信号を発していた。

イムルードの場合、空気が読めない男なのだが、この男は、あえて空気を読まない節があった。とんだ食わせ物なのだ。

『ヒトは今日も可愛いね』

私は、セトの手を引きながら、グイグイと歩みを速めた。

こっという手合いは、無視をするのが一番である。

セトも、凍りつくような視線を、件の死魔に浴びせながら、固く口を引き結んでいた。

クロウが、近寄ってきてそんな気配がしたので、私はギツと睨み付ける。

『そっという顔もそそるね』

クロウが、うっとりとはやく。

己の、シミひとつない白磁のような頬にそっと手を当て、首をわずかに傾げる。おそらく、己の美貌を意識しながらやっているに違いないその所作に、自然と私の額の血管は浮き出てきた。

だめだ、我慢だ。

ここで口を開いたら負けだ。

ここは絶対に我慢するのだ。

私は、ギリギリと唇をかみしめながら、歩みを早める。

『早く大きくならないかなあ。食べごろになるのが待ち遠しい』

フウツと艶めかしい吐息を洩らした。

『食べごろ』とは、eatですか、それともまさか卑猥な方のやつですか？

思わずつつこみたくなるが我慢だ。ここにはセトもいるのだ。そんな話できるわけがない。

どうせ分かったところで、どっちもお断りだけど。

クロウのセリフに、セトが急にたちどまった。

私は驚いて振り返るが、セトは無表情なままだ。

私は怪訝な表情でセトを見上げた。

『セト、どうかしたの？』

セトは、なんでもないよと優しげに微笑んで、首を横に振る。

首を振りながらそっと右手をあげると、自分の背後に背負っていた棍棒に手を伸ばした。

私は、瞬時にセトの行動の真意をくみ取り、驚愕に目を見開いた。ちよつと！ それは、まさかの『お粥好きなダグダさんの棍棒』。

『セト！ ダメダメ！ しまいなさい』

セトが両手で構えた棍棒を前に、私は両手を大きくふる。

『大丈夫だよ。僕、絶対に間違えないし、一発で終わるよ？』

物騒な発言を、きれいな笑顔のままと言って、可愛く首を傾げる。くうう。そんな可愛い顔しても、ダメなものはダメだから！

『あんな猥褻物叩いたら、棍棒が汚れるでしょ。危ないからしまいなさい』

渋るセトをなんとかなだめ、棍棒を仕舞わせることには成功した。

しかし、だ。

経緯を見守っていたクロウは、

『身を挺して男を守るだなんて……愛だよな』
感激したようにため息をつきながら、勿体つけるように続ける。

『あ・い』

などと、ほざきやつがった。

瞬時にして、私の身の毛がよだった。

私は、無意識のうちに、炎の魔法を駆使し、クロウに向けて放っていた。

ただ残念だったのは、奴が、それよりも早く消え失せて、その場所から逃げおおせてしまっていたことだった。

となりでセトが舌打ちしたことは、聞かなかったことにしよう。
うん。

後に残ったのは、焦土と化した森の残骸。

ちよつとだけ、火加減に失敗してしまった。

ちよつとだけ、気まずい思いがした。

もとはと言えば、イムルードの愛蔵書に、初歩的な魔術が載っていないのが悪いのだ。

ほとんどが、ラスボスでも倒すかのような魔法や、気色の悪い魔法ばかりなのである。こうなったところで、仕方のないことだろう。
悪いのはイムルード。

そういうことに、落ち着いて、私は後ろめたい気持ちを抱いたまま、逃げるようにその場を去ったのだった。

5 ハムの人

時折、存在自体が公所良俗に反する、いかがわしい死魔アジールの横やりを受けながらも、私とセトは、なんとか無事明るうちに町にたどり着くことができた。

道のりが、忍耐力との戦いだっただのは、もはやいうまでもない。私の神経は、明らかに摩耗しきっていた。

この町の名を、パルミナという。

プルシャーラの中でも、五本の指に入る大都市だ。

そもそもプルシャーラとは、魔物の住みつく、他の国々から見放された地域。

そんな土地に住もうという人間は、やはり皆脛に疵を持つ、一筋縄ではいかない者等ばかりであった。

住んでいるのは、犯罪者、脱獄囚、傭兵崩れ、逃亡兵といったよ
うな、表舞台を堂々と歩けない人間がほとんどで、残りが私やセト
と同じ境遇にあるような差別の対象者、そしてさらに残りのごく少
数が、イムルードのような変わり者なのであった。イムルー
ドは、好き好んで、こんな犯罪者と死魔の巣窟に住んでいるのだか
ら、まさしく変人だろう。

このパルミナには、イムルード以外にも、そういった変わり者が
幾人かいる。

帰るべき祖国があるというのに、こんな場所に腰を据えようとい
う意図が、私には理解できないが、けれども、そういった人たちがこ
そが、私たち二人に、手を差し伸べてくれるのもまた、まぎれもな
い事実であるのだった。

とにかくプルシャーラは、前述のような経緯で、国として他国に
認められてはおらず、そして、土地全体を統括するような機能もな

い無政府状態の暗黒地帯なのだ。

だが、このパルミナは、比較的秩序が保たれていた。おそらくは、魔の森の、そば近くにある町である為だろう。

町の周囲を、高い城壁のような壁がぐるりと囲み、夜になると煌々とかがり火をたいて自警団が交代で見回っている。

町ぐるみで協力して、なんとか死魔の侵入を抑える努力をしていた。

それでも、死魔は易々と侵入し、人間を喰らうのだが。だからこそ、外から来た者が、町に入るのは難儀する。

死魔には人型もいることだし、チェックが滅茶苦茶に厳しいのだ。けれども私たちには、伝手があった。

敵つい、見るからに極悪人というような顔つきの門番に、「ハールマー」と告げる。

門番は、通つていいと、首だけで促した。私とセトは、アーチの門をくぐり抜けた。

ハールマーとは、ある人物の名前である。

彼は、ひよんなことで知り合いになった、レヴトリア国の傭兵なのだ。パルミナの名士でもあるようである。犯罪者の逃げ込み

先で、名士も何もないだろうが。その知り合いの私たちは、顔パスなのだ。

ハールマーは、いつもお肉をくれるので、私は心の中で「ハムの人」と呼んでいる。

とくに別 哲 に似ているわけではないけど、お中元や、お歳暮のギフトに入つていそうな、とつつつても美味しいお肉を、ただでくれるのだ。しかも長期保存が可能なやつを。

だから、私もセトも大好きな人なのだ。

セトは、ものすごい人見知りで、私以外にはほとんど笑顔を見せないし、口も利かない。でもこのハールマーは別で、セトもよく懐

いている。

たまに会うと、セトは剣術の指導をもらっていた。

私としては、危ないことはさせたくないのだけど、セトはこの件だけはゆずらず、強くなるのだと言っただけでよかった。

男の子は、どんどんと手が離れて行ってしまった。

母親としては寂しかった。

ハールマーは、職業柄、町を留守にしていることのほうが多い。
ワラルラート
何せ白大陸は、今、そこかしこで小競り合いが続いているのだ。
仕事は増える一方だろう。

それに彼は、かなり腕のよい傭兵らしい。体つきもマッチョで、わりと私の好みだ。

ちなみに私は、イムルードやクロウのような、細身のイケメン男は嫌いだ。無精ひげとか生えた、男くさい男のほうが、魅力を感じるのだ。

しかもハールマーは、粗暴そうな見た目にそぐわず、気配りのできる人。イムルードには、逆立ちしたってできない芸当なのだ。

ハールマーの気配りのおかげで、彼がいない時でも、ある場所を訪ねると、私たちには必ずお肉が用意されている。

私たちは薄汚れた路地を移動し、ある店の前にたどり着いた。

看板になんと書いてあるのか、字は読めないが、たぶん飲み屋なのだと思う。

私は、その店の古びた扉を開けて中に入る。

店内はガランとしていた。お酒を扱う店なので、夜がメインなのだ。

店の主が、奥から顔をだした。

私たちの姿をみとめると、おいでと手招きをする。

主は恰幅の良い五十代くらいの男で、頭はつるつるに禿げ上がり、額に真横に伸びた古傷がある強面だ。しかし、私たちを見る目は、

とても優しくかった。

いつものように、二人そろってカウンター席に座ると、すぐに食事を用意してくれる。

今日のメニューは、お肉のいっぱい入った、ボルシチに似た温かいスープと、フランスパンのような硬めのパンだ。

ここ数日間、途中で採った果物や木の実、持っていた僅かばかりの燻製と水のみで過ごしていた私たちには、ものすごい御馳走だ。

私たち二人は、久々の温かい食事に歓声をあげる。

店主に向かって手を合わせて、拝むようなポーズをとると、私たちは声を合わせていった。

「お腹がすきました！ありがとうございます」と。

後々になって、トルバディア語を理解できた時に「だから皆、あんな、なんともいえない表情をしていたんだなあ」と納得したけれども、この時は片言しか話せないのだから、仕方がない。

主の可哀想な子供を見るような目に晒されながら、私たちは必至でスープを掻き込みはじめた。

食べ終わって、お代わりをねだる時も、私たちは空っぽのお皿を差し出して、

「お腹がすきました！」と言うのだ。

お代わりを催促しても、全然嫌がられるそぶりもなく、いつも並々とよそられた食べ物が出てくる。私たちにとっては、まさに至福の時だ。

すごく大きなお肉が入っていたので、私はそれを掬ってセトのお皿にあげた。

セトは『いいの？』と首を傾げる。

私はウンウンと頷いて、セトの頭を撫でてあげると、セトは嬉しそうに尻尾を揺らす。

店主が、それを見て目頭を熱くしていることなど、私たちはまったく知る由もなかったのだった。

帰り際店主は「ハールマー様からの預かり物だよ」と言って、私たちに麻布に入ったたくさんの燻製のお肉を渡してくれた。

セトがそれを背負う。

すると店主が「これも持っていきなさい」と言って、お菓子の入った袋をくれた。

私もセトも大はしゃぎをして喜ぶ。

店主は満足そうにその姿を眺め「またいつでも来なさい」と言った。

く小話く ハールマーとの出会い 前編

私が4歳、セトが8歳の時のことだった。

私は、こんな痩せた土地で、自給自足を目指すことに、大いに焦りを覚えていた。

このままでは、またしても飢え死にの危機に瀕してしまおう。

やっぱりお店から物を手に入れるという手段も、視野にいれなければならないと、本気で考えはじめていた。

イムルードの蔵書にある地図を見ると、東側の方向に、町があるように書かれている。

しかし、今までどれだけ東の方向に歩いて行っても、町にたどり着くことはできず、毎回徒労に終わっていた。

だが、どうせここにいても死ぬのかもしれないのだから、いつちよ町を探し出してやるうじやないかと決心した。

とはいっても、今回も実りがあるかどうかわからないし、セトは置いて行こうと思っていた。しかし、セトはついて行くといいはったので、仕方なく2人で家をでた。

さすらうこと10日、とうとう我々は町を発見した！

私は歓喜に打ち震えた。

きつとコロンブスもこんな気持ちだったに違いないと思った。

希望を胸に秘め、一路新大陸へと向かう。

しかし、そんな冒険家のような気分も、一瞬のうちにぶち壊された。

新大陸発見という偉業は、ただのぬか喜びだったのだ。

だって、入りたくても、町の中に入れてもらえないのだ。

私は、どうしても諦めきれず、通じない言葉で、門番に必死にお願いをした。

でも、頭の固い門番は決してウンと言わない。

セトは、おろおろしたようにその様子を見ていた。

いつそ、門ごとぶつ壊しちゃおうかな。と、ちよっただけ物騒なことを考えた時に、騒ぎを聞きつけて、町の中から1人の男が出てきた。

それがハールマーだった。

「おい、何をやっている?」

「ハールマー様、申し訳ございません。実は、この半獣のガキたちが、町に入ろうとして…」

「なんだ、そんなことか。だったら俺が後見になる。それでいいだろう?」

「だめです! こいつら魔物と同じ言葉をしゃべってるんです。小さい方のガキは、魔物の子供かもしれません」

ハールマーは、私たちをチラリと一瞥した。

「だったらどうだったってんだ? こんな痩せ細ったガキどもに、いったい何ができるってんだ。もし魔物なら、俺が責任もって、斬つてやるよ。それとも何か? こんなガキに、俺が後れを取るとでもいうのか?」

門番は黙り込んだ。

ハールマーはそれを見届けると、私たちを手招きする。

私とセトは、2人で顔を見合わせてから、ゆっくりと門番の前を通り過ぎた。

ハールマーのそばに歩み寄り、彼を見上げる。

「ほれ、好きなところに行きな」

ハールマーが顎をしゃくる。

「どうやら、町の中を歩いていいぞ、という意味らしい。」

「ヒト、どうする？」

「お腹すいた。疲れて足が痛い」

「え！？ 大丈夫？」

セトが慌てて私を覗き込んだ。

「うん、大丈夫だよ、ちよつと言ってみただけ。それよりも、今日も野宿だったら、また寒い思いしなけりゃならないし、せつかく町についたんだから、なんとかしようね」

私は笑って見せたが、セトはすぐにハールマーを見上げる。

「お腹がすきました。痛いです。寒いです」

「あ？」

ハールマーは、両腕を組んで首を傾げた。

「お腹がすきました。痛いです」

セトは、四歳児のころの記憶をひっぱりだして、ハールマーに訴えかける。

私は、セトの言っている意味が分からなかったから、二人のやり取りを見守っていた。

セトが私の腕を引いてハールマーの前に移動させる。

「お腹がすきました」

ハールマーが、私を見下ろして、両の眉を下げた。

「お前ら…」

ハールマーは、しばし絶句してから「ちくしょう」と呟く。

厳しい表情をして、私とセトの腕をとると、ついてこいとばかりに手を引いた。

く小話く ハールマーとの出会い 後編

ハールマーに手を引かれるまま連れて行かれた場所は、薄汚れた路地裏の片隅にある古ぼけた店だった。

中に入ると、机と椅子が並べられており、かろうじて飲食関係の店であることがうかがえる。

それにしても、店内は味もそっけもない。無愛想な店主そっくりの店だ。

件の店主の容貌はといえば、体格はいいし、禿げているし、額に傷跡はあるし、見た目はまさにその筋の人といった感じの人だ。

私は、ハールマーにひょいと持ち上げられ、椅子に腰かけさせられる。強面の店主の真ん前に、物のように置かれ、私は、内心でちよつとビビッていた。

セトは促され、私の隣に座った。

「シャリフ、こいつらに飯を出してくれ」

ハールマーは、そう言いながら、私の反対隣りにドカリと腰掛け、グラスとボトルを引き寄せた。

「ここは食堂じゃありません。営業も夜です」

「頼むよ。うまい飯を食わしてやりてえんだ」

店主は、仕方ないとばかりに、大仰にため息をつく。

厨房に向かうと、何かを作り始めた。

ハールマーは、グラスにボトルの中身をあける。

酒の匂いがした。バーボンに似た匂いだ。

そういえば、しばらくお酒なんて飲んでないな。

ぼんやり考えながら、ハールマーのグラスを見ていると、ハールマーは苦笑して立ち上がった。

店内の戸棚を勝手に開けて、デカンターのような瓶をとりだし、中身をグラスに注いで私とセトの目の前に置く。

飲めよ、と目が言っていた。

セトは不思議そうに中身の匂いを嗅いでいたが、私はためらうことなくグラスに口をつけた。

ブドウジュースのような味がした。

久しぶりの味だ。とにかく美味しい。

それを見て、恐る恐る飲んだセトの尻尾も、すぐにピンと伸びて、目をキラキラさせて私を見た。

『美味しいね』

私が言うと、ウンと大きく首を振って、セトはそのまま一気に飲み干した。

私は、自分のグラスをセトに差し出す。

『いいよ、僕は飲んだから、ヒトが飲みなよ』

セトが首を振る。

私たちの問答を見ていたハールマーは、

「おい、ガキが遠慮なんかするんじゃねえ」

そう言って、私たちのグラスにジュースを並々と注いだ。

「おら、飲め」

「ずいぶんと面倒見がいいんですね」

厳つい店主の言葉に、

「うるせえ」とハールマーは、ぶっきらぼうに返したが、表情は少し照れたような顔をしていた。

私たちの目の前に、スープとパンが並べられた。

私もセトも、美味しそうな御馳走に目が釘付けた。

「なんだ？ 遠慮しないで食べるよ」

ハールマーが、スプーンを私とセトに持たせる。

『食べていいのかな？』

私とセトは顔を見合わせた。

セトがおずおずと大人2人の顔を見ながら、

「お腹が…すきました？」

と言うと、ハールマーはグシャグシャとセトの頭を撫でまわす。

「いいから、とつとと食べ」

『食べてもいいみたいだよ』

私は思わず生唾をのみこんでしまった。

私たちは手を拝むように合わせて、いつものいただきますのポーズをとる。

『いただきます』がどんな言葉なのか分からなかったので、そのままお辞儀をして一口パクリと食べた。

ものすごく美味しかった。

私もセトも、すぐに夢中になって食べ、あっという間にスープはなくなってしまう。

あまりの美味しさに、私は空っぽのお皿を持ち上げて、

「オナカガスキマシタ！」

と、セトの言葉を真似てしまった。

強面の店主が、苦笑を浮かべて皿を受け取る。

もう一度並々とスープが盛られ、皿は再び私の目の前に置かれた。

ここから私たちの魔法の合言葉

「お腹がすきました」

が始まるのだ。

食事が終わったその後。

「おい、お前ら親はどうしてるんだ？」

ハールマーの問いかけに、セトはこう答えた。

自分を指さして「死んだ」と言い、

私を指さして「お父さん、お母さん殺した」と言った。

実のところ「男の人」という単語と「お父さん」という単語が間違っていた。

セトは「男の人が、お母さんを斬った」と言おうとしていたのだ。

その事実も充分ショッキングなものだったが、間違えが、昼ドラ
にありがちな内容に、話を変えてしまっていた。
大人二人は絶句し、二度とその話題には触れてこなかった。

6 運命の悪戯

いっぱいのお肉を手に入れた私たちは、ウキウキした気分のまま、表通りを歩いてきた。久しぶりにお腹もいっぱいだし、大満足だ。

蔵つい店主シャリフさんのくれたお菓子も美味しい。

いつか二人には恩返しをしようと、私は心に誓う。

いつか、という制約がつく理由は、前に一度、お土産を持っていった時に、受け取ってもらえなかったことがあるからだ。

ハールマーは「ガキが余計なこと心配すんな」と言っていた。

意味はわからなかったけど、なんとなく言いたいことは分かったので、それ以来、子供らしく、ただ甘えさせてもらっている。

ちなみに、その時のお土産は、イムルードが大切にしまっていたお酒だ。

イムルードはお酒が大好きで、ご飯は食べなくても、必ずお酒だけは飲んでいいる。

しかも葡萄酒好きだ。ワイン党だなんて、きざったらしいやつだ。

私は、バーボンとかウィスキー派なので、ハールマーと好みがある。

バーボンは樽の風味と、飲んだ時に喉とかが熱くなるところがい。お腹が熱くなると、お酒を飲んだ気分になれるのだ。

ハールマーがよく飲む酒は、ここでは火酒とよばれている。

その火酒、いつか飲んでみたいと思っているが、いまだ実現できずにいた。

まだ未成年だしね。

楽しみは、もうちょっと大人になるまでとっておこうと思う。

セトが欲しがっていたお菓子を買おうと思っていたが、シャリフさんに貰ったので、いらなくなってしまうた。

後は、調味料をそろえて、乾物を買って、洋服を作るために布を買って…そんなものかと、私は指折り数えていた。

すると、不意に雑踏の向こう側が、騒がしくなった。

この町では、日常的に揉め事が起こっている。

今回も、どうせ酔っぱらいの喧嘩だろうと思って、素通りしようとしたが、セトが私の服の袖を引いた。

『なんか、決闘みたいだよ』

見るからにワクワクした表情をして、尻尾も揺れていた。見に行きたいと体中が物語っている。

私はちよつとため息をついてから頷く。

セトが『やったあ！』と言って飛び跳ねた。

『ただし、見るのは遠くからだからね』

ウンウンとセトは頷く。

本当は、血が流れるような、残酷な喧嘩など見せたくはない。

けれども、この世界の日常には、死がつきものだ。

喧嘩の末、どちらかが死に、道端に転がって朽ちてゆくのが当たり前。

だんだんと感覚が麻痺してゆく自分が、なんだか怖かった。

セトは、自分が剣術を習いはじめたせいか、最近この手の揉め事を見たがる傾向がある。

私には、セトのそんな意思を止めることができずにいた。

私は、ハールマーから食料を買っている。

ハールマーは傭兵だ。

つまり、戦争で人を殺すことで、生きる糧を得ている。

つまり、私が直接人を殺していなくとも、生きていく上で、誰かの屍の上に築かれた安穩に乗っているのは、紛れもない事実で…。

同罪なのだ。

人を殺すことが罪だと、誰かを非難できる立場などでは、決して

なかった。

私たち2人は、近くの建物の2階に移動した。
外付けの階段から、下を見下ろす。

人垣の真ん中では、2人の男が対峙していた。

1人は暗めの金髪に青い目の男。

無精ひげを生やした20代後半ぐらいの男で、引き締まった体躯を持つ、切れ上がった涼しげな目元が印象的な美丈夫だ。

対するのは、無精ひげの男よりいくつか下ぐらいの男。

プラチナブロンドの髪と、緑色の目をした、冷たい印象を与える無表情な男だった。

「こんなところにいらっしやっただのですね。ギエン殿」

若い無表情な男の方が言った。

私は、この男の声を、どこかで聞いたことがあるような気がした。
思い出そうと記憶の糸を手繰り寄せる。

「ずいぶんと偉くなったものだな、レツェン、聖騎士様がこんな吹き溜まりになんの用だ」

無精ひげの男が返す。

「知れたこと、あなたの不始末の尻拭いですよ。ギエン殿」

無表情な男が、そう言いながら鞘から剣を引き抜いた。

無精ひげの男も、剣を構える。

「探しましたよ、この5年。まさかプルシャーラにおられるとは思いませんでした。落ちぶれたものですね、あなたも」

無表情な男が言う言葉に、無精ひげの男が、皮肉気に笑った。

不意に、無精ひげの男が、剣を振るった。

無表情な男がそれを受け止める。2人は剣を合わせたまま、しばし睨み合った。

「そうでもないぞ、下野も悪くはない。お前もどうだ」

「お断りいたします」

そう言つて、無表情な男が剣を押し返した。

2人ともが後ろに跳び、距離をとる。

今度は、無表情な男が剣を振るつた。

無精ひげの男が、それを受け止める。

何度も何度も2本の剣がぶつかり合った。鈍い金属の音が、響き渡る。

お互いの腕は拮抗していた。

セトは、手に汗握る様子で、食い入るように見つめている。

『ねえセト、あの2人、さっきどんな話をしていたの？』

『？ どうしたの？ ヒト、なんでそんなこと聞くの？』

『ちよつと、気になつて…』

ふうん、とセトは言う。

『よくは、分からないけど、知り合いみたい。緑色の目の男の方が、ひげの人をさがしていたみたいだよ』

『そう…なんだ…』

どこで聞いた声だったか、どうしても思い出せない。

何故だか、無性に心がかき乱された。

私は、どうしても2人の男から、目を離すことができなかった。

どれだけ時間が経つたことだろう、2人の勝負は、一向に決着がつかない。

しかし、2人の戦いは、思わぬ形で水をさされることとなった。

『おい！ 魔物だ！ 魔物が出たぞ！』

突如、あがつた何者かの声に、周囲にいたやじ馬たちが、騒然と騒ぎ出した。

『逃げろ！』

『魔物がくるぞ！』

突如、奔流となつて流れ出した人の波に、2人の男たちは飲み込まれる。

人の波が去つた後は、2人の男の姿も消えていた。

セトが、腕を引くまで、私は茫然とその場に立ち尽くしていた。

しばらく後になって、私は思い出した。

あの緑色の目の男の聲が、私の母親を殺したであろう男の聲に、よく似ていたことを。

6 運命の悪戯（後書き）

今度は、傍点がうまく打てませんでした。
困りました。

強調したいところ、皆さんはどっやっっているのでしょうかね。

ちなみに今回の話の中で、傍点がつくはずの場所は、
「ギエン殿」の「殿」の部分でした。

前は「殿下」だったのです。

く小話く お土産の行方

ハールマーに持ってきたお礼の品。

結局、受け取ってはもらえず、無駄になってしまった。

まあ、ハールマーの言いたいことは、なんとなくわかったので仕方ないのだけど。

つまりは、子供が生意気なことをするなと言いたいのだろう。でも、これどうしようかな。

私、ワインは好きじゃないんだよな。

ビールも日本酒も焼酎も飲めるけど、ワインだけはダメなんだ。よりにもよって、私の一番嫌いなものを、イムルードが一番好きだなんて、なんだか宿命みたいなものを感じるわよね。

私は、手の中にある葡萄酒のボトルを眺めて、つらつらと考え事をしていた。

目の前では、ハールマーが困ったように頭を掻いていた。

「あゝ、クソツ」

言いながら、ハールマーが、急に私を抱き上げる。

私は、ギョツとした。

視界が一気に、いつもの倍の高さになる。

「気持ちだけは、貰っとくさ！ けどな、もう金輪際、二度とこんな真似すんじゃねえぞ」

驚く私を尻目に、ハールマーは、セトを見てついてこいと合図した。

ハールマーは、私を抱くように抱いたまま、ずんずんと通りを進んでいく。

やがて大通りを逸れ、脇道に入ると、突き当りにある店の扉を、勢いよく開けた。

「おや、お珍しい。何か御用ですか？ ハールマー様」

雑然とした店内の奥から、年老いた店主らしき人物が顔をのぞか

せた。

ハールマーは、無言のまま、私を店主の目の前に降ろす。私の手の中にあつたボトルを取って、店主に差し出した。

「換金してくれ」

店主は、一度だけ私の顔とハールマーの顔を交互に見たが、何も言葉にはせず、作業机の上に乗っていた眼鏡を手にとり装着した。

しげしげとボトルを眺める。

「これは、珍しいものですね。そうですね…30万ジナルではいかがでしょう？」

「30万!？」

店主は、おや? という顔をした。

「不服でございましたか? では33万ジナルではいかがです」

ハールマーは、口をパクパクさせていたが、きよとんと成り行きを見ていた私を一瞥すると、何かを諦めるような、疲れたため息を一つついた。

片手で頭を押さえるようなしぐさをしながら「それでいい」とだけ店主に言っ、お金を貰った。

店の外に出ると、ハールマーは、店主から渡されたお金を私によこした。

「おい、あの酒、どうやって手に入れた？」

私は、トルバディア語はさっぱりだったので、ハールマーはセトを見てそう言う。

セトは、私を指さして答えた。

「お父さん、黙って貰った」

「おまえたち、ヒトの父親と暮らしているのか？」

ハールマーの顔が、ものすごく怖い顔に変わった。

ハールマーはこの時、子供の目の前で、妻を殺した男だと思っているのだ。仕方がないだろう。

まあ、この時の私たちには、そんなことは分からないのだが。セトは、首を傾げながら答えた。

「あんまり一緒しない。たまに来る」

「ほう、お前たちを置き去りにしてるのか、飯も食わせないでセトは頷いた。そこは事実だし。」

ハールマーが、目を細め、冷たい笑顔を浮かべた。

「で、こんな高い酒を、自分だけ飲んでると」

セトはまた頷いた。そこも事実だし。

ハールマーの顔は、相変わらず笑顔だったが、ものすごく怒りを孕んだ、怖い笑顔に変わっていた。

「よう、今度俺をお前らの家に連れてつてくれねえか？」

笑顔のくせに、額には立派な青筋が浮かんでいた。

「いいよ」

とセトは答えた。

ハールマーは、私の頭をクシャリと撫でながら「ぶったぎってやる」と小さく呟いた。

その言葉は、セトの耳には届いていなかった。

ちなみに、この時の33万ジナルは、大層な高額で、前世からのケチが染みついていて私には、なかなか使い終わることのない大金なのだった。

1 夢かうつつか

気が付いたら、私は暗闇の中にいた。
無音の闇だ。

そこには、一筋の明かりさえもない。

真の暗闇の中では、右も左もなく、それどころか、上なのか下なのか、それすらも分からなかった。

自分が、きちんと地に足をつけているのかどうかさえも、何もわからぬまま、私は一歩足を踏み出す。

そこはまさしく、虚無の闇。

闇は、歩けど歩けど終わりはない。

自分が、なぜ歩いているのか、どこに向かっているのか、自分自身でもわかっていなかった。

ただ、衝動にまかせて、歩き続ける。

まるで何かに導かれるかのように。

どれだけ歩いたことだろう。不意に、羽音を聞いた気がした。
大きな鳥が羽ばたくような音だ。

刹那、突然人の話し声が聞こえ始めた。

「では、認めるのだな、サヴァン大神官」

「王よ、真実を詳らかにすることが、果たして民のためになりました
ようか。事実には隠されていたからこそ、千年の長きに渡り、今の安
寧があるのですよ」

「詭弁だな。民のためなどと申して、その実、神殿のための安寧で
はないのか」

「あなた方王家のための安寧でもあるのですよ」

「その安寧とやらのために、私は我が子を一人殺された」

「トルバディアの為です」

「なるほど、お前たち神殿は、そうやって真実を隠し続けてきたのだな」

「国のためです」

「ギエンは正しかった。間違っていたのは私の方だった」

「いいえ、あなたの判断は、間違っただけでおられなかった」

「あれも、子を殺された。妻にと望んだ女もだ」

「国のためです」

「いいかげんにしろ！ 詭弁を弄するな！ 国のためなどではなからう！ お前たちの保身のためだ！」

「王よ、あなたは少し感情的になっておられる。もっと冷静におなりなさい。今さら真実を知らしめて、何になるのです。あなた方王家の人間が、忌むべき魔物の血を受け継いでいるなどと、民が知れば、国は成り立ちますまい」

「アウル神が魔物であると、そう知らしめることこそを恐れているのではないのか？」

「アウル神は、魔物などではありませんせぬ」

「そうか、それがお前たちの答えか」

「答えなどではありませんせぬ。真実です」

「ならば、これが私の答えだ」

「……王よ、愚かなことはお止めなさい。私を殺したところで、何になるというのです」

「お前を斬って、過ちを正すのだ」

「過ち？ 私を殺すことこそが過ちです。目を覚ましなさい」

「目を覚ますのは、お前のほうだ」

「王よ、ここは閑寂なる封印の地。ここで血を流さば、この世界は終わりますよ」

「欺瞞を是とする世界ならば、終わったところで、惜しくもあるまい」

「あなたは何もわかってはおられぬ。ここに眠るのは」

またしても、突然に、声は途切れた。

バサリと、再び、何かが羽ばたく音がした。

それは、私の目の前を横切る。

横切るその瞬間、漆黒の闇に浮かび上がった、大空のような一対の青色の目と合った気がした。

2 友の訪れ

『ヒト、起きなさい』

体を揺すられて、私は、目を覚ました。

すでに、カーテンを開け放たれた部屋は、朝日が差し込み眩しい。夢か。それにしても奇妙な夢だった。

私は、ぼんやりと宙を見据える。

『まだ、寝ぼけているの？ いい加減目を覚ましなさい。珍しく寝坊なんてするから、セトが心配しているわよ』

声と同時に、美しい女性に覗き込まれる。

『ウトウ、あれ？ なんて？』

久しぶりに会う、金色の美しい魔族レトウの存在に、私はようやく気づき、目を数度瞬かせた。

『実はね、ナンも来ているのよ』

ウトウはフフと笑い、どう？ 驚いた？ と悪戯そうな表情を浮かべる。

『ナンも！？』

私は、文字通り飛び起きた。

慌ててベッドから飛び降り、ドアの外へと向かう。

ウトウは私のそんな姿を眺めながら、笑みを深くしていた。

廊下をダツシユで走り抜け、居間の扉を開け放つと、そこには、床でくつろぐ銀色の狼の姿があった。

『ナン！』

私は叫びながら、ナンの体にダイブする。

硬めの毛がチクチクと刺さるが、そんなことは気にしない。

ナンの首元に、グリグリと顔を押し付け、力いっぱい抱きしめた。ヤレ、大キクナツタノハ、体バカリカ？ 久シイナーヨヒト』

『久しぶりナン！ 会いたかった』

体中で喜びを表現する私に、ナンは苦笑した。

私は、この世界に来て、とうとう15年目を迎えることとなった。今では、体もすっかり成長し、大人とそうたいして変わらない。

『元気ソウデナニヨリダ』

言って嬉しそうに目元を細める。

『ナンは元気だった？』

『アア』

ナンは言いながら、私に椅子に座るよう促した。

ウトウも後から部屋に入り、セトも交えて着席する。

『イムルード二用ガアツタノダガ、マタ屋敷ニハオラヌノカ？』

『相変わらずだよ。一度出てったら、中々帰ってこないし。いつ帰ってくるのかも、神のみぞ知るってやつだよ』

ナンの言葉をウトウに翻訳してもらうと、セトはそう言っただけで肩を竦めた。

魔力のないセトは、相変わらずナンの言葉を聞くことができない。代わりにウトウが橋渡し役をしていた。

セトも今年で19歳だ。立派な青年に成長していた。

『ナン、だから反対したのよ。あんな男をアテにするなんて』

『ソウハ言ウガ、アノ男ノ腕ハ確力ダ』

『何？ どうしたの？ 2人とも。イムルードに何か用だったの？』

私が訊ねると、ウトウとナンの2人は、お互い顔を見合わせる。

すぐに何かを示し合わせたかのように視線を外すと、『まあ、色々…』と言って、言葉を濁した。

微妙な2人の様子に、セトがため息をついた。

『そんな曖昧な返事で、ヒトが納得すると思う？ 俺の為を思うなら、このまま素直に白状してくれないかな？ 今後のヒトの行動を想像すると、俺、それだけで胃が痛くなってくるんだけど…』

『ちよつとセト、どういう意味よ』

私は頬を膨らませる。

『言葉通りの意味だけど?』

爽やかな笑顔を浮かべて、セトはそう言った。
くろう、可愛くない。

最近のセトは、妙に年上ぶって、全然可愛くない。

昔は、あんなに可愛かったのに。

自分のことを『僕』と呼んでいたころのセトが懐かしい。

いつの間にか『俺』に変わっちゃうし、背も滅茶苦茶デカくなっ
ちやうし。

なんでこんな風になっちゃったの?

男の子がこんなものだということは、分かってはいたけど、だからといって納得できるものではない。

ワンコのように可愛かった頃のセトを返してくれ。

『確カニ』

ナンが、ククと笑った。そして続ける。

『一八揉メ事二首ヲ突ツ込ムノガ、仕事ノヨウナモノダカラナ』

『ナンまで…酷い』

『そうよ、2人ともひどいわ。ヒトはお節介なだけよ』

『ウトウ、それは一応庇ってくれてるんだよね? 味方なんだよね』

グサリと抉られるようなウトウのセリフに、私は胸を押さえた。

『で、どうしたのかな?』

セトは、打ちひしがれている私を無視した。

だんだんと良い性格に育ってきてるよね。喧嘩なら買っわよ。

『ナンとウトウが揃って一緒に来るなんて、今までなかっただろ?』

何かあったの?』

セトの言葉に、ウトウがナンを一瞥した。

ナンが小さく頷く。

ウトウは諦めたように小さくため息をつき、私とセトを見た。

『最近、死魔アシールがあちこちに出没するようになってね』

『あちこちって? 今までだってそうだったんじゃないの?』

私の言葉に、ウトウが首を横に振る。

『プルシャーラの外にまで、出没するようになったの』

『それだって、今までにもあったことだよ』

私が確認するようにセトを見ると、セトも頷く。

稀ではあったが、プルシャーラの外でも死魔は出没していた。

『それが度を越していてね。かつてないほど死魔の動きが活発になっているの。最近では、レヴトリアのコトルや、トルバディアのオリス・ラ・トーバでも、頻繁に出没するようになってきているそうよ』

私とセトは、驚きとともに顔を見合わせた。

コトルもオリス・ラ・トーバも、ともに王都である。

死魔は、プルシャーラの外では、よく森のような辺鄙な場所に出没する。王都のような市街地に出没することは、まずないと言ってよい。

ウトウは『頻繁に』という言葉を使っているの、今までの経験則からして、それはありえない出来事だった。

『私たち魔族が、市街地に行くとなると、問題も多いから、同じ人間にお願いしようかと思って』

『それは、つまりその原因を探るってこと？』

『いいえ、ただの現状把握よ。本当に市街地に死魔が出没しているのか。また、被害がどんなものかなど、そういったことを見てきてほしいの。それによって、こちらの対応も変わってくるから…』

…』

ウトウは、そこまで言うと、黙り込んだ。辛そうにナンを見る。

ナンが穏やかに笑う気配がした。

2人の間には、何か含むものがあるらしい。

『トモカク、イムールドガイナイトナルト、我々トシテモ困ルノダ。ドウダ、手伝ツテクレルカ？』

ウトウの話を受け取って、ナンがそう続ける。

何だか、お茶を濁されたような気がしなくもない。

釈然としないものもあるが、私は頷いた。

『もちろんよ、まかせて！』

セトは、それを見て『仕方ないなあ』と笑っていた。

3 外の世界

私が、プルシャーラの外に出るのは、はじめてと言っても過言ではない。

生まれたての赤ん坊の頃、トルバディアにいたこともあったが、ほんのわずかな間のことだったし、もはやどんな場所であったのか記憶にも残っていない。

私にとって、これが初めての越境と呼んでも間違いではないはずだった。

ここは、プルシャーラの南西に位置する国レヴトリア。そのレヴトリア王都コトルへと続く、街道沿いの小さな町だ。

私が、はじめて国境を越え、外の世界に出て、思い知らされたことは、獣人に対する、容赦のない差別と偏見だった。

私は『間の子』だ。

しかし、一見して、人間と変わらない。

ゆえに、外見によって差別されることはない。

だが、『半獣』であるセトは、傍から見ても明らかかな特徴を持つために、あからさまな差別を受けることとなっていた。

宿に泊まるうとしても断られ、食事をとろうとしても、同席することを許されない。一人だと、市場で買い物をする事さえもままならなかった。

こんな世の中、間違っていると思った。

私は、悔しくて悔しくて涙が出そうだった。

確かに、プルシャーラでも、獣人であるセトに対する差別はあった。けれども、味方になってくれる人間もいた。それに大半の人間は無関心だった。

こんな風に意味のない優越感を持って、セトを蔑にする人間の数は、プルシャーラの方が絶対に少なかつたのだ。

私は、自分の手をセトの手に絡め、握りしめる。

セトは穏やかな顔で私を見下ろし、手をギョツと握り返した。

『あの木の下にしようか』

セトが、大きな木を指さす。

『そうだね』と私は返した。

先ほど、私たちは今晚の宿を探して、ある宿屋に入っていた。頭が半分くらい薄くなっている胸糞の悪い店主の宿だ。

そいつは、私とセトを、値踏みするように上から下まで眺めると、意地の悪そうな笑みを浮かべて言った。

『馬小屋なら空いている』と。

私は瞬時にして殺意を抱いたが、言われた当のセトに宥められては仕方がない。

今では、トルバディア語も達者になった私は、

『このハゲ！ 地獄に落ちろ！』

と、捨て台詞を吐いてやった。それでも私の気はおさまらなかつたが。

セトは、肩を揺らして笑っていた。

結局、私たちは宿には泊まれなかつたために、野宿をすることにしたので。

今夜は、この緑の生い茂った大木の下で、夜を明かすことを決める。

寒いので、セトの外套の中に潜り込み、私は暖を取った。

ふと見上げた夜空は、満点の星空だった。

『やっぱり夜空は、綺麗だね』。害虫を見た後だから、よけいに美しく感じるわ』

セトが、またしても苦笑した。

『セト、笑ってる場合じゃないのよ。あんな奴、一発ぶん殴ってやればよかったのよ』

『ヒトが代わりに怒ってくれたからね』

『あたりまえよ！ あれが怒らないでいられるかっつての。あの脂ぎつたテカテカジジイの顔を思い出すだけで、またムカムカしてくる』
プリプリと怒る私を、セトは穏やかに見る。

『そう、カリカリしないで、もう休みなよ。それに、俺に遠慮しないで、宿に泊まったっていいんだよ？ ヒトは女の子なんだし、俺に付き合っつて野宿なんてする必要はなかつたんだよ』

『ブツわよ』

私は、こぶしを作つてセトに見せる。

『言つと思つた』

セトは嬉しげに眼を細める。

『わかつてるなら、そんなこと言わないの！』

セトは笑いながら、自らに寄りかからせるように私の肩を引き寄せた。

『睡眠不足は、お肌の大敵なんだろ？ もう寝なよ』

『そうよ。お肌のためには、睡眠が重要な。あとは、日焼けも大敵よ。シミなんかできたら、とれなくなつちゃうんだから』

言いながら、私は、セトに寄りかかる。

温もりが気持ちいい。

ほんとうに大きくなつたものだ。

下手をしたら、私はセトの半分くらいの体格しかないかもしれない。

こんなに立派に成長してしまったセトを意識すると、またしても自分という存在が、セトにとつては必要のない存在になってしまうのではないかと、少しだけ怖くなった。

私は、寂しさを脳裏から追い払うように、殊更明るく振舞い、女性のお肌がいかに重要なのかを、セトに熱心に説き続けた。

セトは面倒がる風もなくそれを聞いて頷いていた。

その後も、つまらない話を、いくつかわわしたが、夜にめっぼう
弱い私は、やがて知らぬ間に眠りに落ちてしまった。

真夜中に、私の長い髪を一房持ち上げて、セトが口づけていたこ
となど、私には知る由もないのだった。

4 黒い獣（前書き）

残酷な描写が入っています。
大丈夫な方のみどうぞ。

4 黒い獣

明け方のことだった。

薄明りのともった、白んだ空が見え始めた矢先のことだ。

突然、馬の足音がいくつも聞こえ、朝特有の、清々しい町の静寂を破った。

馬上からは、怒号が聞こえてくる。

私は、セトと顔を見合わせた後に、地に体を伏せ、様子をつかがった。

馬は5騎。何れも屈強な男たちが騎乗している。

男たちは皆、抜身の剣や槍を持ち、町を西に移動していた。

『何で、抜身なの？ 周りに敵がいるようには見えないけど』

『でも、何かから必死で逃げてる感じだよ。あの人たち』

話をしていると、騎馬の周囲の空間が歪んだように見えた。

その歪みから、突如黒い獣が飛び出す。

『^{アッ}死魔だ』

セトが言う。

私たちは、瞬時に立ち上がり、走り出した。

黒い獣は、あっという間に、騎馬のうちの1人を襲い、地面に突き落とす。

落ちた人間に覆いかぶさると、躊躇なく首筋にかぶりついた。断末魔の悲鳴が響き渡る。

セトは、腰に佩いていた剣を引き抜き、黒い獣の頭上に振り下ろした。

黒い獣は、その攻撃を躲し、後ろに跳び退る。

セトと獣が対峙している間に、私は、落馬した男のところへ駆け寄った。

男は、白目をむいてすでに絶命していた。

喉元は、骨が見えるほど、肉をえぐり取られている。目を背けた

くなるような惨状だ。

仲間の4騎が、馬を止めた。

槍を構えた1騎が馬首をめぐらし、黒い獣に向かってゆく。物凄い速さで数度槍を突き出すが、黒い獣にはかすり傷程度しかつけることはできない。

獣は、傷に怯むどころか、むしろ殺気をにじませて、大きく跳躍した。

槍を構える騎士の頭上を軽々と飛び越し、騎士の背後に着地する。大地に足をつけるなり再び跳躍し、槍を構えた騎士に襲いかかった。騎士は、馬の腹を蹴って馬首をめぐらすが、一拍遅れる。

私は、手を突出し、頭の中で魔法円を思い浮かべた。炎を呼ぶための円だ。

手のひらに熱がとものを意識すると、円は突如具現化し、中央から灼熱の炎が放たれる。

炎は、黒い獣を捉えた。

獣が、苦しい咆哮をあげる。

『戻っておいで』

落ち着いた女性の、そんな声を聞いた気がした。

再び、空間が歪み、燃え盛る炎を纏ったまま、黒い獣はその歪みに飛び込み、姿を消し去ったのだった。

「レヴトリア第五師団所属第一騎兵隊中隊長のフォルムと申します。剣士殿、魔道士殿、御助勢いただきありがとうございます」

槍を操っていた屈強な猛者は、馬を下りると、そう言った。

鍛え抜かれた戦士のような体つきをしているが、言葉遣いや身のこなしは洗練されており、貴族然とした男だ。

街中の一般人が、セトを差別していたのに、この男は立場ある人間にも関わらず、差別どころか偉ぶる様子すらない。

私は、好感を持った。

「いいえ、どういたしまして。お仲間には力及ばず、申し訳ありません」

フォルムは、痛ましげな顔をしたが、首を横に振った。

「お名前をお伺いしてもよろしいか」

「俺はセトです。こっちがヒト」

セトがそう言うと、フォルムは居住まいを正した。

「このご恩は決して忘れません」

仲間の騎士が、2人がかりで、遺体を蔵に乗せ終えりと、手の空いている1人の騎士が近づいてきた。

「フォルム隊長、準備が整いました」

フォルムが頷いた。

「申し訳ございませんが、我々は先を急いでおります。ご無礼、どうかご容赦を」

そう言うと、再び馬上の人となった。

「コトルにお越しの際は、ぜひ城にお立ち寄りください」

そう言い残し、フォルムは馬の腹を蹴った。

私とセトは、それを見送った。

「それにしても、やっぱり出たわね」

私はセトを見た。セトは頷く。

「そうだね、やっぱりウトウの言う通りだった。死魔の確認できたけど、どうする？ 帰る？」

私は、顎に手を当てて、少し考え込んだ。

「ねえ、さっきの声、聞こえた？」

「戻ってこいとか言ってたやつ？」

「そっか、やっぱり空耳じゃなかったか。手ごたえはあったんだけどさ、たぶんまだ終わりじゃないよね」

「もう少し、様子を見てみる？」

「そうだね、フォルムさんたちも気になることだし」

ここからコトルまでは、馬でおよそ3日の距離だ。

徒歩では倍以上かかることだろう。

どこかで馬を調達することを、私たちは確認し合い、再び西に向かって歩き始めた。

5 クロウ再び

馬を求めて、街中を移動していた時のことである。

私はあるものを見つけてしまった。

このところ、ぱったりとお目にかかっていたいなかったアイツだ。

その存在の出現に、私は我が目を疑った。

「見間違いかと目を擦るが、やっぱり間違いではない。

クロウである。」

人ごみに違和感なく紛れつつ、優雅に往来を横切ると、クロウは私の目の前に現れた。

さっきまで機嫌がよかったはずのセトの表情が、恐ろしいほど冷たいモノに変わっていた。

ほんとに仲が悪いな、この2人。

そりゃね、私もこいつは苦手だけれどもさ。

「ヒト、久しぶり。どう、僕に会えなくて、寂しかった？」

相変わらずの、キモさぶっちぎりなそのセリフに、私の肌はサブいぼが立った。

「イイエマツタク」

つい平坦な答えになってしまう。

それにしても、この男、抜かりがない。ここが往来であるためか、トルバディア語で話しかけてきていた。

「照れなくてもいいんだよ」

クロウは言いながらニヤリと笑う。クロウの目は、私とセトの反応を楽しそうに見ていた。

絶対に、ワザとだ。

こいつは、ワザとやっている。

私たちが、嫌がる姿が見たいがためにやっているに違いない。確信犯だ。

「失せるよ」

セトが、安い挑発にのってしまった。

「おやおや、半獣の坊やじゃないか。随分とおおきくなったね」
わざとらしく、大仰に言ってみせるクロウに、セトは、腰に佩いていた剣に手をかけた。

実のところ、物騒な武器だった『お粥好きなダグダさんの棍棒』
は、とうの昔にイムルードに返却してある。今の彼の得物は、大ぶりの剣にかわっていた。むろんハールマーの影響だ。

「こんなところで刃傷沙汰はやめてよね」

言いながら、私は慌てて2人の間に割って入る。

「ヒトは増々綺麗になったね」

「あんたは全く変わらないわね。その性格も」

笑ったつもりだったが、思わず笑顔が引きつってしまった。

「まったく、昼日中の往来を、よくも堂々と歩けるわよね。その度胸には脱帽するわ」

「そんなに褒められると、照れるな」

私の額の血管が、ビシリと浮き上がった。

セトが私の肩をつかんで後ろに引く。

「死魔アジールがこんなところウロチョロするな。消えろよ」

私を背後に守るように前に立ち、セトが言う。

「無粋だな。恋人たちの逢瀬を、邪魔するものではないよ」

不思議だね。

セトの周りの温度が下がった気がした。

背後からなので、セトの表情は見えないが、クロウの喜色満面な顔を見ると、なんとなく様子がかがえる。

クロウの変態ぶりに、私は冷や汗が流れた。

セトが、無言のまま剣を引き抜きはじめる。

ああ、やっぱり。

「セト、ダメだよ」

「止めないでくれる？」

セトが顔だけ振り向いて、綺麗な笑顔を見せるが、まったく笑っ

ているようにみえなかった。目が怖いよ。

「ダメダメ！　こんな往来で物騒なまねはだめだよ。パルミナとは違うんだから、捕まっちゃうよ」

私は、必死でセトの腕にしがみつく。

「ここで斬った方が、みんなの為でもあると思うけど？」

セトが、恐ろしい微笑みを浮かべたままそう続ける。

本気で怒っている様子のセトに、私はビビった。

でも、ここで怯んではダメだ。

「ちよつとクロウ！　あんた早くどっか行きなさいよ」

元凶を取り除くべく、私はあつちへ行けとばかりに、シッシツと手を振った。

クロウは、何が嬉しいのか、クツクツと笑う。

「残念だなあ。せつかくこうして会えたのに」

そう言い置いてから、クロウは瞬時にして私の背後に移動する。

白く美しい手もちあげると、私の頬をスルリと撫でた。

セクハラです！

変態がいます！！

お巡りさん！！！！

私が、気色悪さに両肩を振るわせるのとほぼ同時に、セトが抜身の剣を一閃させた。

クロウはこともなげにそれを躲し、刃は宙を斬った。

セトが、ギリリと唇を噛む。

クロウは、満足そうにその様子を見ると、私に言った。

「またね」

もう二度と会いたくないと、私が思ったのは、言うまでもない。

6 間の子

爆弾を落とすだけ落として、クロウが去った後、セトはずっと押し黙ったままだった。

思いつききまずい。

男の子としては、あんなヤツに、軽くあしらわれたのがショックなんだろうな。

私は、チラリとセトを見上げる。

セトは相変わらず怖い顔をしていた。

それにしても、クロウが街中に現われるとは驚きだ。あいつは、プルシャーラでも森の中をウロチョロしていたのに。

これも、ナンが言っていた話の裏付けになるのだろうか？

いや、あの死魔^{アジール}は、別だろう。

今日だって、きつと気が向いたから顔を出したに違いない。

それが、たまたま日中の往来であった。そういうことだ。

あの気まま男の行動を、理論づけて筋書きを描くことほど、無駄なことはない。

私は、クロウを脳裏から追いやった。

穏やかな風が吹いていた。清々しい晩春の風だ。

この町は、清潔な街並みが続いている。プルシャーラとは違って、饅えた臭いなどどこにもしなかった。

しかし、すれ違う人間たちは、皆侮蔑を込めた目でセトを見る。

街並みが美しい分、そのギャップを酷く感じた。

フォルムのような人間の存在は、特別であるということだ。

けれども私は、フォルムのおかげで、少しは冷静になって周囲を見ることができた。

ここに居る人間は、ほんの一部の人間なのだ。中にはきつと、フ

オルムのように、半獣を理解してくれる者も居るはずだ。少なくとも、そう思えるようになった。

『半獣』^{コライール}であるセトに対して、私は『間の子』^{ユイン}だ。

本来なら、私もセトと同じ扱いを受けて然るべきだろう。

しかし、魔族^{マツレ}の特徴が外に現われていないため、差別の対象から外されている。

『間の子』^{マツレ}というのは、人間にとって、複雑な存在であるようだった。

そもそも人間は、魔族と死魔^{アジール}を「魔物」と呼び、一括りに扱っている。

人間側としては、「魔物」は人間を食べると認識しており、異形の者も、人型の者も在ることを知っていた。

そして人間が、人型の「魔物」を区別する方法は、古代語^{ウトナ}を使うかどうかという、そんな杜撰な判断基準でしかなかった。

だから魔族の中には、正体を隠し、人間に紛れて生活をしている者もいるそうだ。

ゆえに間の子が生まれる。

そうして生まれた子供たちは、大抵普通の人間と変わらぬ容姿で生まれるそうだが、稀に魔族の特質を色濃く受け継ぎ、生まれてくることがあった。

ナンたち『地の使い』^{エンイール}は、地に足をつく動物たちの容を本質として持ち、『天の使い』^{アヌイール}は、空を飛ぶ鳥たちの容を本質として持っていた。

そのため、生まれた子供たちに、その特徴が出てしまうことがあるようなのだ。

しかも、『半獣』のように人間に近しい姿で生まれるのではなく、動物そのものの姿となって生れ落ちる。

そのため、生れ落ちた赤ん坊は、恐ろしさのあまり「化物」「鬼

子」と呼ばれ、忌避される存在として殺されてしまうのだ。

私は、普通の人間と変わらぬ容姿で生まれた。それは、とても幸運なことだったのだ。

しかし、ここで一つ疑問が浮かんでくる。

普通と変わらぬ姿で生まれた私が、何故、殺されそうになったのだろうか？

疑問は謎のままだ。

「ヒト」

セトに呼ばれて、私は我に返った。

市場についたのだ。

これから馬商と掛け合って、馬を手に入れなければならなかった。

7 歪み 前編（前書き）

残酷な描写があります。
大丈夫な方のみどうぞ。

7 歪み 前編

そこはレヴトリア王都コトルまで、馬でおよそ半日という場所。昼なお暗い森の中での出来事だった。

馬を乗りつぶさないように休憩を挟みながら、私たちは、昼夜をかけて馬を飛ばした。

しかし、それでもフォームさんたちには、なかなか追いつくことができなかった。

私は、馬に乗ったことがほとんどなく、セトと一緒に相乗りをしていた。その分、馬への負担も大きかったせいだろう。

馬の首には玉のような汗が浮かび上がり、再度の休憩を余儀なくされていた。

私たちは馬を下り、水音を辿って、道を逸れる。

小さな小川を見つけると、近くの木に手綱を結び、馬に水を与えた。

セトは、地面に腰を下ろす。

『コトルまでの最短は、この道だって聞いていたから、間違いないと思うけど、追いつけないね』

『そうだね。ま、フォームさんたちが、無事ならそれでいいんだけど』

セトに対して、礼をとった彼に対して、私は好感を持っている。できるなら、手助けをしたいと思っていた。

2日前に遭遇した黒い獣アジールの死魔はともかく、あの獣を呼び寄せた女性の声の主は、恐らく上級の死魔である。

上級の死魔は執念深く、狙いを定めた獲物を、そう易々と逃がすはずがない。きっと、虎視眈々と、時を狙っているに違いなかった。そう思っただけのもの、中々フォームさんたちを見つけないことできない。

私は、腰をさすりながら、ため息を一つついた。

それにしても、この世界に暮らすようになって、大分丈夫に育つたつもりだったが、馬の背中には難儀させられる。

『痛いのか？』

セトの言葉に私は頷く。

『ごめん、少し飛ばしすぎたかも』

『別に、セトが謝ることじゃないよ』

私は苦笑した。

しばしの休憩ののち、再び馬を駆ろうとしたその時のことだった。

小川の水面を蹴散らしながら、一頭の馬が走ってきた。

鞍がついているが、乗り手の姿はない。

私たちは、一度視線を合わせてから頷き合い、馬の来た方向に向かって走り出した。

小川をさかのぼると、すぐに怒号が聞こえ始めた。

声を頼りに私たちは足を進める。

ようやく視界に、人の姿を捉えることができたのと同時に、その周囲を蠢く、異形の群れを見つけた。

セトは剣を引き抜き、一足先に異形の群れに躍り掛かる。

異形の群れの真ん中で往生していたのは、フォルムたちだった。

1人は地面に膝を折り、苦悶のうめき声をあげている。腹部を負傷し、血があふれ出していた。

残る3人も馬を下り、得物を正面に構えている。近くに馬の姿はなかった。

セトの剣が、四足の獣の額を割った。豹のような細身の体の獣だ。

尻尾の部分は蛇になっており、チロチロと赤い舌を出していた。

セトは、続けて数体を斬り伏せ、中央に切り込む。

「剣士殿！」

フォルムの声に、セトは頷いた。

刹那、腹部を負傷した男に跳びかかろうと、一頭の獣が地を蹴っ

た。

セトが一步踏み出し、剣を横に風ぐ。獣の頭が、胴体から離れ、放物線を描きながら、地に転がり落ちた。

そのセトの背後を、別な獣が狙った。

フォルムが槍を突出し、獣の喉元をえぐる。

「どうも」

セトの礼に、フォルムが目を細めた。

「なんの、礼を言うのはこちらの方だ」

私は、外側から風魔法を使う。

目の前に具現化した魔法円から、風が竜巻となって現れる。死魔の群れは吹き飛ばされ、地面や木に叩きつけられた。

死魔の数は減ったかに見えた。

しかし、突如、周囲の空間が歪む。

つい先だつて目にした、あの空間の歪みと同じものだ。

その歪みから、大量の死魔があふれ出し、私たちの周囲を囲った。

「またか」

フォルムが吐き捨てるように言った。

これではきりが無い。

「セト、ちよつと時間稼ぎお願い」

言いながら、私はセトの背後に回る。

指で三角を作つて、周囲を見渡した。遠見の魔法だ。

「居た」

大木の枝の上に、女性体の死魔を見つける。

セトに場所を合図した。

「フォルムさん、俺たちちよつと抜けるけど、踏ん張ってもらえる？」

「承知した」

セトの頼みに、フォルムは力強く頷いた。

7 歪み 後編(前書き)

残酷な描写が入っています。
大丈夫な方のみどうぞ。

7 歪み 後編

セトは木の枝に手をかけると、器用に片腕で木に登った。女性体の死魔アジールは、美しい額にしわを寄せてセトを睨み付ける。

『またお前か、獣人風情がこしやくなまねを』

死魔は、人間臭いしぐさで舌打ちをすると、手を翳した。再び歪みが生じる。

歪みから、2日前遭遇した黒い獣が飛び出してきた。体のあちこちに火傷の跡が見えるが、力強い跳躍を見せると、セトの喉元をめかけて飛ぶ。

セトは躲すことなく、剣を突出し黒い獣の喉元を狙う。黒い獣の方が体を捻り、攻撃を躲して地に落ちた。

私は魔法円を具現化し、炎を呼び寄せる。

黒い獣に向かって炎を放つが、獣は、怯えるように炎を避けた。ちよつとは学習しているらしい。そこそこの知的レベルのある死魔のようだ。

セトは、人型の死魔めがけて飛んだ。頭上めがけて剣を振り下ろす。死魔は木を飛びおりて躲した。フワリと地面に下りる。

セトは、空中で態勢を整えるように体を捻ると、地面に着地した。死魔は両手を前に翳し、魔法円を具現化させる。風魔法の円だ。私も魔法円を呼び出し応戦する。

一際大きな魔法円を具現化し、無効化の盾を作って風魔法を防いだ。

『生意気な。古代ウトナの魔法を使うのか』

正直、どんな魔法なのかなんて知らない。

私にとっては、イムルードの持っていた本に載っていた魔法というだけだ。

セトが再び、死魔アジールに向かって切り込んだ。

黒い獣が邪魔をしようと間に飛び込む。

セトは、ためらうことなく、獣の腹部に剣を突き立てた。黒い獣が、悲鳴のような咆哮をあげる。

セトが腹部から剣を引き抜くと、黒い獣は頽れるように大地に倒れ、動かなくなった。

人型の死魔がギリりと唇をかみしめた。

『よくも妾の可愛い愛玩物を』

美しい顔が、般若のように変わる。

死魔が手を翳すと、足元が黒く変色し始めた。

『セト!』

私の声にセトは頷き、後ろへと飛び退った。

セトが私の傍らに立つ。

私の表情は、みるみる青ざめはじめた。

『こ、これ、もしかしなくても、たぶんあたしの大っ嫌いな類の魔法だわ…』

思わずセトの背中に手を伸ばす。

『えっと、亡者系?』

セトが確認してくるが、私は返事ができなかった。

目の前の、平らだったはずの地面は、デコボコしはじめ、によきによきとある物がではじめる。

ぎゃあああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

あまりの恐ろしさで、声にはできなかつたが、私は心の中では大絶叫していた。

黒く変色した地面からは、腐敗した人間　　つまりゾンビが、

山のように湧き出ていたのだ。

私は、立ったまま気を失いそうになった。

セトが、パチパチと私の頬を叩く。

『ヒト、しっかりして。炎だろ炎、亡者系には炎が効くんだよ』

セトの声に、私は必至で現実に戻ってきた。

ブンブンと首を縦に振って、私は炎を呼ぶ。特大のヤツだ。

巨大な魔法円を具現化し、根こそぎ燃やし尽くすつもりで炎を呼

び寄せた。

業火が火柱となり、唸るように放たれる。

炎は、地上をなめるように浚い、森ごとすべてを焼き尽くした。

炎に飲み込まれながらも、死魔がその場を逃げ出していたことに気づいたのは、しばしの後になってからのことだった。

8 空間を操る死魔 前編

フォルムたちは、私が燃やし尽くした森の残骸を見て、驚いた顔をしていた。

最近火加減に失敗することは少なくなっていたのに、つい我を忘れてしまった。

だって、先ほど死魔^{アジール}が使っていた、あのての魔法が、私は大っ嫌いなのだ。

昔っからホラーの類が大の苦手なのに、目の前で、死んで腐敗しているはずのものが、摂理に反して元気よく動いて、しかもいっぱい現われたりしたら、誰だって気が動転するだろう。

随分前に、イムルードの持っていた、蔵書の中にあつた魔法を試して、やはり、いつぱいのゾンビを呼び出してしまったことがあるが、あれはいまだにトラウマとなっている。

「魔道士殿、お若いのに、たいした腕をお持ちだ。感服いたしました」

フォルムの部下がそう言った。まだ若そうな騎士だ。おそらくは、セトと同じくらいではないかと思われる。

「はははは」

私は、乾いた笑いしかでてこなかった。いまだにショックから立ち直りきれしていない。

「重ね重ね、なんとお礼を申したらよいのか」

そう言つて、フォルムは深々と頭を下げた。

腹部を怪我している騎士は、焼け残った木に寄りかかり、苦しげに顔をしかめている。命に別状はないようだ。

残りの1人が、逃げ出していた馬を2頭ほど見つけて、ちょうど戻ってきたところだった。

「隊長」

馬を連れた部下が、1頭の手綱をフォルムに差し出した。フォルム

ムがそれに頷く。

「私が、先に行く。すぐに人を寄越すので、お前たちは無理をするな」

言って、再びフォルムは馬に跨った。

フォルムは、私たちを見る。

「まことに申し訳ありませんが、大任があり、先を急がねばなりません」

「大丈夫ですよ、気にしないでください。急いでいるんでしょう。どうぞお早く」

セトがそう言って、フォルムを見送る。

フォルムは、すまなそうに頭を下げて、再び馬の腹を蹴った。

「これで大丈夫だとは思うんですけど」

とりあえず、止血を試してみた。

回復魔法というものも存在するが、私はあまり得意ではない。

しかたがないので、清潔な布をあてて、血を押さえるにとどめた。

「剣士殿、魔道士殿、我々はこのまま迎えを待ちます。御二方はいかがなさいますか」

そう訊ねてきたのは、先ほど私の魔法を褒めた若い騎士だった。

「どうしよっか。俺たちも、そう急いでるわけじゃないんだけど」

セトが私を見る。

私は、しばし悩んだ。

「そうだなあ、どうせここまで来たんだし、せっかくだからハールマーの顔見てから帰りたい」

「それはもしや、隼の団のハールマー殿のことか」

若い騎士の言葉に、セトが頷く。

「なるほど、どうりで。剣士殿の腕前、ハールマー殿と比べても遜色ひかじじらん」

馬を連れた、年かさの騎士がそう言った。

「そんなことないですよ。やっぱりハールマーさんには、まだまだ敵わない」

セトは苦笑した。

「ハールマーは、コトルの王城にいますか？」

私の質問に、若い騎士と年かさの騎士が視線を合わせた。

「今ならば、恐らくは…」

そう言っつて、年かさの騎士が言葉を濁した。

つまりは、今後どこかに出かける予定があるということだろうか。私は、そこを問いただそうとした。

まさにその時のことだった。

不意に、周囲が暗く陰り始めた。

セトが立ち上がり抜刀する。

それを見て、騎士の2人が慌てて剣を引き抜いた。

「さっきの死魔かな？」

「だとしたら、しつこい」

セトの質問に、私が答える間に、どんどんと闇が増していった。あつという間に周囲は暗く閉ざされてしまった。

8 空間を操る死魔 後編

太陽は、まだ中天を西に傾き始めたばかりの時間のはずである。にもかかわらず、私たちは夜のよう闇の中に閉ざされていた。

私は、明かりを灯すために、光魔法を使う。頭上に光が灯った。

見える範囲のことしか分からないが、辺りは、ゴツゴツとした岩肌肌に覆われた荒地のようだ。

不意に、空間が歪み始めた。

「まただ。独創性がないわよね」

言つて、私はため息をつく。

歪んだ空間から、再び山のような数の死魔アジールが現れた。

セトや、騎士たちが奮闘している間に、私は遠見の魔法で女性体の死魔を探すが、どこにも見つからない。この空間には、存在していないのかもしれない。

「独創性はないけど、ちょっとこれはきついな」

セトがめずらしく弱音らしきものを吐いた。

それも仕方ないだろう。フォルムがないのおかげで、3人の騎士のお守りを、1人で引き受けなければならぬのだから。

1人は負傷しているから仕方ないとしても、後の2人までもとなると、大変なようだ。

2人の騎士も、本来ならばそこそこの腕なのかもしれない。しかし、相手が悪かった。

どうみても、敵は下級の死魔ではなく、中級程度のレベルだ。それが、群れて襲ってくるとなれば仕方がなかった。

不意に、低いうめき声が聞こえた。

見れば、年かさの騎士が、腕を負傷していた。獣の容をした死魔に、腕を噛まれたのだ。

私は、遠見を諦め、炎の魔法円を具現化する。辺りに、障害物もないことだし、思う存分炎を放つ。周囲を炎が走り、死魔を駆逐し

た。

しかし、それも一瞬のこと。すぐに空間が歪み、新たな死魔が現れるのだった。

「消耗戦だね」

セトの言葉に私は頷く。

「ほんと、ヤな性格だよ」

それにしても、どうしたらよいのか、手詰まりだった。

私は、回復魔法に次いで、空間魔法も苦手なのだ。

ちなみにイムルードが最も得意とする魔法は、空間魔法である。

あの、呑気な男の顔が、一瞬だけ脳裏をよぎった。

「どこで、何してるのやら…」

「？ 何か言った？」

私の独り言をセトが拾ったようだ。どうせ考えたところで、詮無い話だ。

「何でもない」

私は、首を横に振った。

どれほど時が経ったことだろう。

とうとう、私も疲弊し始めてきていた。

セトは、なんとか持ちこたえているが、騎士2人は、とうの昔にへばっている。

執念深い死魔の攻撃に、私自身も心が折れそうになってきていた。あまり得意でない空間魔法を駆使して、元の場所に帰ろうとするが、亀裂を入れた時点で、すぐに塞がれてしまう。せめて、歪みを塞げないかと、試みたが、やはり徒勞に終わっていた。

集中力が途切れ、魔法円を具現化することにすら、窮しつつある。もうだめかもしれない。

私が諦めそうになった、しかし、その時のことだった。突如視界を、真っ白な眩い光が覆った。

あまりの眩さに、私は反射的に両目を瞑る。

目を瞑ったのは、ほんの一瞬の間だったに違いない。

眩しさでチカチカする目を、恐る恐る開けると、そこには見慣れたあの人が立っていた。

ありがたいような気もしたが、迷惑な気もした。

「久しぶり〜。2人と、どう？ 元気にしてた？」

呑気極まりない発言に、私は思わず脱力しそうになった。

よく見ればセトも、先ほどまでの悲壮感はどこかへと消え去り、ひきつったような乾いた笑いを浮かべている。

「助けてもらっておいてなんだけど…相変わらず、緊張感がない人だよな」

「言うな、私もアイツは見ていてだけで疲労が蓄積されていくんだから」

目の前で、ブンブンと手を振っている男イムルードに、私は生ぬるい視線を向けた。

見ていると、無性に殴りたくなるような、あんな男だが、しかし、ヤツはやはり、腐っても鯛なのだ。

眩い光の後には、今まで災厄をまき散らしていたはずの死魔の姿は、跡形もなく消え失せ、私たち自身も、元いた森へと返されていた。

「ムカつくほどデタラメなヤツよね」

助かって、安堵する気持ちも確かにあったが、私の苦勞を返してくれ！ と叫びたい気持ちの方が強かった。

9 空気の読めない男

その日の夕刻、迎えに来たレヴトリアの騎士たちと合流し、私たちは城へと招かれた。フォルムが気を利かして、途中の屯所から人を寄こしてくれたのだ。

おかげで私たちは、日をまたぐことなく、夕刻には城へ到着することができていた。

しかし、ハールマーの姿は、既に城にはなく、私たちはすぐに帰ろうかと思っただが、フォルムに乞われ、城の中の一室に通された。

思いもかけず、調度の整った立派な部屋に通されてしまい、私は少し居心地の悪さを感じていた。

侍女が、かいがいしく茶の用意をしてくれたが、世話を焼かれることになれていない私は、恐縮していた。

茶よりも酒が良いなどほざいたバカがいたので、思わず絞め殺してやりたくなったが、セトに止められた。

そのバカは、目の前で、葡萄酒とチーズを味わっている。「で、なんであんたがレヴトリアに居るの？」

イムルードは、長い睫毛に縁どられた赤い瞳を数回瞬き、世の女性に喧嘩を売っているとしか思えない美しい顔を、不思議そうに傾げた。

なんで、そんなことを聞くのだとでも言いたげな様子だ。

首を傾げた際に、絹糸のような長い白髪が、するりと肩から滑り落ちる。憎たらしいほど絵になっていた。

イムルードは、赤い眼に白髪で、俗にいうアルビノと同じ容姿をしている。

見た目は20代前半と言ったところだろうか。

しかしこの男、どういう生命体であるのか不明だが、はじめて会った時から、まるで年をとっていなかった。

「危ない時に駆けつけてくるなんて、偶然にしては出来すぎでしょ」
重ねた私の言葉に、

「ああ、そういうこと。家に帰ったら、誰もいないからさ、心配して探しちゃったんだ」

でも見つかったからよかったと、呑気に言いながら、目の前で再び酒を飲みはじめる。

私の額には、早くも青筋が浮かび上がり始めていた。

一体全体、さっきの質問の、どこに引っ掛かりを覚えたのか、是非説明してもらいたいものだ。

それを言ったら、ドツボにはまるのは自分の方なので、グツと堪えたが。

「あらあら、着いた早々お酒だなんて、ずいぶんと良い御身分ね。ホホホホ」

私は、引きつった笑顔を浮かべながら、嫌味を言う。

イムルードは、きよとんとした表情をした。

「良い御身分なのかな？ そうだね、そうかもしれないね」

何やら納得した風に頷きながら、邪気のない笑顔を浮かべる。

嫌味が通じない。

「ホホホホ」

私は、やけくそになり、一緒になって笑った。

「？ 今の話の、どこが面白かったの？ ヒトって変わってるよね」

「お前に言われたくない！」

私は、ドンと机を叩いた。

「まあまあ、ちょっとは落ち着こうよ」

セトが、額を押さえながら割って入る。

「それにしても、久しぶりだねイムルード、今までどこで何してたの？」

「ふむ、質問が抽象的すぎるな。具体的に、どれだけ前の期間のことを指しているのか、それをはっきりさせてくれないことには、こちらとしても答えかねるぞ」

「わかった、うん。もういいよ。俺が悪かった」

「キッッ！ あんたのそういう面倒なところが嫌なのよ！ ちょっとは察しなさいよ！ この唐変木！」

「ヒトはよく怒るな。また、かるしうむとやらが不足しているのではないか？」

もう一度怒りにまかせて叫ぼうとした私の口を、慌ててセトが手で覆った。

「頼むから、少し落ち着こうよ」

セトは、疲れたようなため息をもらしていた。

今にも噛みつきそうになっている、私の凶悪な視線を、平然と受け止めながら、イムルードは酒を味わっていた。

私は、つまみとして用意されているチーズに手を伸ばし、口に放り込む。

一口でモリモリと食べた。

トロリと口どけがよく、とても美味しい高そうなチーズだ。

私は、チーズを咀嚼しながら、断固絶対口なんてきいてやるもんかという意思を表して、イムルードから視線を逸らし、そっぽを向いた。

セトが、私を宥めつつ、レヴトリアに来た経緯を、イムルードに説明しはじめた。

不意にイムルードが真面目くさった表情に変わり、傾けていたグラスをおく。

「そうか…」

と言ったきり、イムルードは表情を消した。

あまりにも、らしくない表情に、私は思わず口を開いてしまった。「どうしたの？ 大丈夫？ 熱でもあるんじゃないの？」

イムルードが私を見てふと笑う。

「熱はない」

あまりにも嬉しそうに笑うので、私は毒気を抜かれてしまった。
「ナンには、感謝をしているんだ。セトの母親にも…。お前たち2人に会わせてくれて」

イムルードが、再びグラスを持ち上げ、口をつける。

「家に帰った時に、誰かが待っているというのは、嬉しいものだ」
しみじみと言ったイムルードの姿に、私は気づいてしまった。

「バカね。私たちが家に居なかったから、それで慌てて探しに来たの？」

イムルードがコクリと頷いた。

大きな子供のように見えるイムルードに、私は思わず手を伸ばす。落ちていた髪を掬って耳にかけてやり、よしよしと頭を撫でてやった。

「まったく…ちゃんと手紙を書いておいたじゃない。よく見てから行動しなさいよ。ま、今回は助かったけどさ」

私の言葉に、イムルードは微笑みを深くした。

「あの死魔^{アジュール}には、私からお仕置きをしておくね」

「あの死魔」とは、むろん女性体の空間を操る死魔のことだ。そう言って笑ったイムルードの笑顔は、何だか、すこしだけ物騒な笑顔に見えた。

「どんなお仕置きをするのか気になるところだが、放っておくとしてよう。」

こいつと話をしていると、疲れがたまってしまうようがない。これ以上血圧が上昇するのも、体にはよくないことだし。

私は、目の前に用意された紅茶に手をのばし、カップに口をつける。

温かいハーブティーは、とても美味しかった。

10 空気の読めない女

「お待たせいたしました」

フォルムは、部屋に入るなりそう詫びた。

「夕餉の支度ができましたので、どうぞこちらへ」

「夕餉」という言葉に、私の耳は、思いつきり反応した。

「ご飯と言われたら、私が断れるはずもない。」

目の前で酒を飲む、人間として残念な保護者のおかげで、私の食に対する執着は、相当なものになっているのだ。

久しぶりの御馳走の予感に、私の心はうきうきしはじめた。

「ヒトってほんとわかりやすいよね」

そう呟いたセトの言葉は、耳を素通りした。

別室に通され、まず目に飛び込んだのは、テーブルクロスの上一杯に並べられた、御馳走の山だった。私のテンションは一気に急上昇した。

想像していた以上のおもてなしが、そこには用意されていたのだ。部屋には先客があり、フォルムは、その先客に2、3挨拶をして、私たちを紹介していたようだったが、素直に紹介されていたのは、セトだけだった。

私の目は、食べ物にくぎづけだったし、イムルードなどは、すでにテーブルの上の酒を物色しはじめている。

「ヒト！ イムルード！」

セトが、非難するような声をあげるが、私たちには聞こえない。というか、聞いてやらない。

先客が、苦笑して、

「まずは召されよ」

と言った。

フォルムも苦笑いをして、椅子をすすめるのだった。

「俺は恥ずかしい。穴があつたら入りたいくらいだ」

セトがむつつりと、そう呟いた。

なんとでも言う方がいい。入りたかつたら、勝手に入れればいいのだ。止めないし。

私はもうクタクタなのだ。

眠くもなってきたことだし、その前に、是が非でも、この御馳走で、お腹をいっぱいにしておかなければならないという使命が、私にはあるのだ。

でないと、私は絶対後悔する自信がある。

こんな御馳走、今後、二度とお目にかかれないうに違いないのだから。

「人助けはしておくもんだよね。こんな美味しいご飯が待ってるんだから」

「助けた人を目の前に、まるでご飯が目的だったような話、やめてくれる？」

セトが、小声で私に言った。

セトは小姑のようだ。頼むから、美味しくご飯を食べさせてくれ。「ヒトは、さつきイムルドのこと注意してたけど、人のこと言えないじゃないか」

私は、ツンとそっぽを向いて、ぶつぶつ言うセトの言葉を、聞かえないふりをした。

「あ、クソ、俺って趣味悪いよな」

セトが、頭を掻きむしった。

趣味？　なんだそれ。

この場で関係があることだろうか？

「何それ？　そんなの、今関係ある話？」

私は、首を傾げてセトを見た。

セトは、私を一瞥してから、思いつきため息をついた。

なんだその態度は、失礼だな。

「…なんでもない。俺の趣味が悪いんだけど、仕方がないってなし」

「何が？ 意味わかんないよ」

セトは、諦めたような、長いため息をついてから、苦笑を浮かべた。

「わかんなくていいよ。お腹すいてるんだろ？ ほら、食べなよ」

セトは、私の頭をグシャリと撫でて、魚ののった皿を差し出してきた。

私の目は、すぐに美味しそうなお皿にくぎ付けになる。

私は満面の笑みでお皿を受け取った。

「セトもちゃんと食べなよ。残したらもったいないよ」

「はいはい」

先客が、ククと笑った。

四十代前半ぐらいの、大柄な野性味あふれる男だ。

何と言っても印象的なのは鋭い目だ。睨まれてもしたら、相当怖そうだ。

「気にいったのなら重畳」

男はそう言ってグラスを持ち上げた。琥珀の液体が入っているのが見える。

この男は、酒の好みも悪くなさそうだ。誰かさんとは違って。

「白き賢者よ、貴殿は如何か」

イムルードは、今、ようやく存在に気付いたとでもいうような様子で男を見た。

「獅子王、久しぶりだな」

ふーん、知り合いなのか、と聞き流しそうになったが「王」の部分に引つ掛かりを覚えた。

セトの袖を引く。

「あの人王様なの？」

セトが、冷たい目をした。

「人の話は、ちゃんと聞こうね」

笑顔になるが、なぜか怖い。

「さつきフォルムさんが言ってただろ。レヴトリア国王カルナス様だよ。あの人は」

うん。これから人の話はちゃんと聞くことにするよ。

自らの肝に銘じた日だった。

イムルードとカルナス王は、何やら話があるようで、私とセトは早々に席を辞した。

フォルムさんに、部屋を案内される。

彼は、レヴトリアでも有数の貴族らしい。

しかし、自ら騎士を志願し、一般と同じく、下級兵士からスタートした変わり者らしかった。

貴族なのに、偉ぶらないところが、私には好感が持てる。

フォルムさんに、ハールマーの所在を聞いたところ、彼は目下ラクレムを目指しているとのことだった。

ラクレムとは、レヴトリアの南東に位置する要塞都市だ。町の東をレント国と接し、南をトルバディア国と接する要衝の地である。

何故ハールマーがラクレムを目指すのか、この時点で、私たちは知る由もなかったのだが、フォルムたちが、早馬を飛ばしてコトルに戻ったことと関係していた。

実のところ、フォルムたちが、カルナスにもたらした知らせは、トルバディアのレントへの宣戦布告の報であった。

大陸一の大国トルバディアは、今後、大陸を戦火の渦へと突き落とすのだ。

だが、この時、仔細を知らぬ私たちは、ハールマーの不在に肩を落とすだけだった。

そして、残ったイムルードと獅子王カルナスの会話も、知ることはなかった。

「月満ちたる夜、刻印背負いしもの生まれ落つ。平和の治、風狂散じ、契印綻びぬ。天下、俄かに乱れ、壊乱す。世上、惑いて、姿なき悪魔顕れん　　白き賢者よ、如何思われる。我としては、まさしくウトナの予言の示現に他ならぬと思うが」

「意外だな。おぬしの様な剛の者であっても、そのような迷信に惑うか」

「白き賢者は、迷信と申されるか？」

「ふむ、そうよな。法螺（ひら）と言つてもよからう」

「…予言が…法螺であると？」

「では訊くが、おぬしは、生者が進むべき道が、定められた一本道しかないなどと、本気で思っておるのか？」

「……………」

「予言などという戯言、とらわれるほうが、愚かよ」

「そうか」と言つて、カルナスはグラスに口をつけた。

「白き賢者のお言葉なれば、誠であろう」

その晩、コトルの夜は、静かに更けるのだった。

10 空気の読めない女（後書き）

今回で3章終わりです。

4章はものすごく難産で、何度も書いては気に入らず、消してしまっていました。

今までは、わりとひらめきで書けたんですけど。

ここまで、ヒトの一人称だけで、なんとか説明してきましたが、それでは説明しきれないことがでてきました。

ですので、次回から、別の人の視点も入ってきます。

あまりに急なので、驚かれる方が多いと思います、ここに一言書かせていただきました。

苦肉の策です。

初心者の素人ですので、どうぞお許しください。

1 ある男の傍白 その1 (前書き)

前回の末尾にあったように、視点変わっています。
ご了承ください。

1 ある男の傍白 その1

窓際に立つと、朝特有の、清々しい風が感じられた。眼下に広がる初夏の若葉は、目にまぶしい。

場所は、コトル王城の執務室。王となってからの自分が、1日の大半を過ごすようになっていた場所だ。

いつもなら、雑然と書類が投げ出されているはずの机も、今日ばかりは整然と片付いている。

明日からの出征に備えて、たまるばかりだった書類の決済をなんとか済ませ、どうにか体裁を整えたのだ。

おかげで、肩が重い。

自分は、やはり戦場で剣を振るっていることこそ相応しいのだと改めて再認識させられた。

レント国と対トルバディアの攻守同盟を結んだのは、ほんの3日前の出来事だ。

トルバディアのレントへの宣戦布告を知ったのは、2か月前。ずいぶんと手間取ったと言わざるをえない。

レヴトリアという日の浅い新興国に対し、レントは不信感を持っているのだ。

レヴトリアは、もともとトルバディアの一所領地にすぎなかった。蜂起し、独立を勝ち取ったのは、ほんの18年前の出来事である。

民間はともかくとして、レントとは、いまだに公として国交などない間柄であったのだ。

同盟を結ぶにあたり、フォームにはずいぶんと骨を折らせた。

政治の場には不向きな好漢であるが、その実直さが、使者として大きな役割を果たせたことは否めない。

不意に、苦い笑いがこみ上げてきた。

自分とて、机の上で行う政治など、不向きであるのだ。命じられるまま、ひたすら剣を振るうことこそが、本分であろう。人のこと

など言えた義理ではない。

苦い思いを抱いたまま、遠い記憶を思い起こした。

ヴェルテ王は、愚王ではなかった。

しかし、トルバディア王家の、呪詛にも似た因習に捕らわれすぎ
ていた。

トルバディア王家は、アウル神の血を引く、世界の番人。

国境を越え、世界の尊崇を集める、アウル神殿の大神官と、比肩
する存在。

自分が、ウトナの予言の存在を知ったのは、王の近侍としてとり
あげられた19歳の時のことだった。

時同じくして、はじめての王命で、わけもわからぬまま、生まれ
たての赤ん坊を殺す任務を与えられた。しかも、その子供は、王の
実子だった。

無抵抗な小さな命を、王命とはいえ、奪わざるを得なかったあの
日の出来事は、今も苦い思い出として、澱のように蟠っている。

思えば、あの出来事こそが、自分が祖国と決別する切っ掛けとな
ったのだ。

不意に部屋の扉を叩く音が聞こえ、感傷から引き戻された。

「入れ」

目を向ければ、扉の向こうから現れたのは、かつての主であった
男だ。

トルバディア国王ヴェルテが第一子ギエン元王太子である。故あ
つて、今は客人として城に迎えていた。

独立した後も、トルバディアとは、何度も戦を交えているが、こ
の男と最後に刃を交えたのは16年前の話だ。

あの時は、太陽の日差しのように屈託のない真率な男だったが、
月日が、この男に退廃的な影を落としていた。

「明日の出征に、同行させてもらいたい」

「お父上に向ける刃をお持ちか」

「もはや父子ではない」

15年前、この男は国を出奔し、廃嫡の憂き目にあっている。

王家は、血統を重んじる。本来なら、然るべき血縁関係の女が、あてがわれるはずだが、許されざる女に惚れたようだ。

その女は賢く、自ら身を引いたようだった。

授かった子を、人知れず産み落としたが、頼った乳母の口から、実の兄に、子の存在が知れたらしい。

聞けば、女の兄はアウル神殿に所属する、聖騎士であるそうだ。

おそらくは、そこから神殿に、延いては、王家の知るところとなつたに違いなかった。

いずれにせよ、この男は、女と我が子を殺され、変わったのだ。

そして、捨て置かれることなく、殺された赤ん坊というのは、おそらく刻印を持っていたに違いなかった。

若き日に、一度だけ見た、背中あの印が脳裏をよぎる。

自らの手で殺した赤ん坊の、小さな背中にあったのは、翼の様なかたちをした痣だった。

「カルナス王、俺には、この手でトルバディア王家を終わりにする責任がある」

青い目の男は、自らの手の拳を見下ろしていた。

恨みからの言葉か、それとも、使命としての発言か、真意は定かではなかった。

「最近魔物が王都にも出現している。ウトナの予言の、示現であるとは思われぬか？」

「おかしなことを…。戦火を収めるために、貴方は戦場に立つお覚悟を決められたのではないのか。そもそも、仮に予言の通りであるとしたら、どうだというのだ？ このまま姿なき悪魔が顕れるのを、指をくわえて待つおつもりか？」

青い目に灯った、怒りとは違ったまっすぐな光に、かつてのこの男の面影を見た気がした。

年下に窘められるとは、年をとった証であろうか。

「詮無いことを申した。……ラクレム駐屯の第5師団所属第7中隊

を旗下に預けよう。話は通しておく。傭兵部隊だが、腕は確かなものが揃っている」

「かたじけない」

何を迷う必要があるのだろうか。

白き賢者も言っていた、定められた道筋などないのだと。

いや、迷いではない。罪悪感なのだ。

因習に従い、自分も、この手で赤ん坊を殺している。

予言が嘘なのだ、声高に叫べる立場では、すでにないのだ。

その事実が、自らを苛むのだ。

自分は、ただ許されたいのかもしれない。なかった。

道を踏み外した、過去のあやまちを。

2 ナンの訪れ

『いいかげん、白状してよ』

そう言いながら、私は、ナンの目の前に正座し、話してくれるまで、絶対対に動かないという固い意思を、全身で表していた。

初夏の出来事である。

ほぼ2ヶ月ぶりに、ナンが家を訪れていた。

レヴトリアでの仔細は、イムルードが伝えてくれることになっており、その後、私が直接、ナンとウトウと話をする機会にはめぐまれていなかった。おかげで、なんだか蚊帳の外に追いやられたような気がして、あまり面白くなかった。

イムルードは、レヴトリアで別れたきり、家には帰ってこないし、腑に落ちないことを問いただしたくても、訊ける相手がいなかった。そんなモヤモヤした気持ちを抱えていた矢先のことだ。

ナンがひよっこりと家に戻ってきたのである。

飛んで火に入る夏の虫とは、まさにこのことである。

私は、ナンをとっ捕まえて、問い質したくてたまらなかったあれこれを、一気にまくし立てた。

『白状ト言ワレテモ、白状スルモノナド何モナイノダガ』

『嘘おつしやい。他人様は騙せても、この一さんひとだけは、絶対に騙されないんだからね。キリキリ白状しちやいなさい。何か隠してるでしょ』

『隠シテナド……』

言いながら、視線が彷徨うナンの様子は、明らかにおかしかった。だいたいにして、いつもならナンとは、一年に一度会えるかどうかというペースで、こんなにも早く再会できることなど、赤ん坊だった最初の頃を除いては、今までになかったのである。

しかも、家を訪れたところで、ナンは決して泊まることなどなく、そのまま日帰りコースだった。

そのナンが、今回は一週間ほど滞在できるといふのだ。どう考えたらおかしいだろう。

『じゃあ何で、今回は一週間も泊まれるの？』

『ソレハ、タマタマ……』

ナンは挙動不審になっている。

『ふーん、じゃあ聞くけど、ウトウが言った、死魔アジールが増えた場合の対応策ってなあに？』

私が訊ねたとたんに、口を引き結んで、視線を逸らそうとするナンの顔を、ガシリと掴んで、私は引き戻した。

『あれ？ ナンてばどうしたのかな？ 急にそっぽ向いちゃったりして。変だな。オカシイな。』

『へ、変ナ…コトナド…。我二八、何モヤマシイ事ナド無イゾ』

ナンの両耳が伏せられ、地面に平行になっていた。くそう、可愛いじゃないか。

思わず、ぐりぐり撫でまわして抱きしめたい衝動に駆られたが、今はそれどころじゃないのだ。

心を鬼にして、ナンを問い詰める。

『お耳が可愛いことになってるわよ、ナン』

につこり微笑んでやると、ナンは、蛇に睨まれたカエルのようになった。

『ヒト…悪役、ずいぶんと様になってるよね』

セトが、見るに見かねたのか、横やりを入れてきた。

セトには、ナンの言葉は聞こえないが、私の言葉とナンの態度から、事態を察しているようだ。

だまらっしゃい！ とばかりにセトを睨み付けると、セトは肩を竦めた。

『ナン、ヒトサンはしつこいよ。素直に白状した方が身のためだと思っよ』

『ダカラ、白状スルモノナド、何モ無イノダ!』

ナンは、助けてくれとばかりの表情を、セトに向けた。

セトは、ナンの態度を見て、彼の意図を察したらしい。

『そうかな、俺の目から見ても、明らかにおかしいけど?』

セトの、優しくない飛び切りの笑顔に、ナンの尻尾も力なく地に落ちた。

『……我ハ、タダ…才前タチト、ユツクリト時間ヲ過ゴシテ見タカツタダケナノダ…』

急に力なく床を見つめる、寂しそうなナンの姿に、私の胸は思わず締め付けられた。抱きしめて背中を撫でてやりたくなる。

私だって、ナンを苛めたいわけじゃないのだ。

たまにしか会えないナンと、しばらく一緒に居られるなんて、本当はとても嬉しいのだ。

でも、私の第六感が、ジャカジャカ警報を鳴らしている。

これは、絶対に見逃してはいけないサインなのだ。

『ほんとはね、私もナンと一緒に居られるの、すごく嬉しいの。でも、変な隠し事されたまま一緒にいても、それが気になって、素直に喜べないの。ね、お願い、教えて?』

ナンは、私の言葉に、思わずと言った様子で息をのんだ。

その時の事だった。

『教えてやればいいのだ。事実を』

突然第三者の声が割り込んできた。

『イムルード!』

3人の声が、同時に重なる。

イムルードは、ドアを開けて部屋に入ると、疲れたように髪をかきあげ、椅子を引いた。

ドカリと腰掛け、腹の上で手を組む。

私の方を見ると、イムルードは口を開いた。

『ナンは、封印の礎となる定めを負わされているのだ』

『イムルード!』

ナンが、飛びあがるように立ち上がり、吠えるように叫んだ。

『何よ、封印の礎って』

『一！^{トク} 聞イテハナラヌ！ イムルード、ヨセ！』

ナンが言葉を遮ろうとするが、イムルードは動じなかった。

『封印の礎とは、わかりやすく言えば人柱のようなものだ。ナンは、封印が綻んだ時に、その身を持って封印を補強せねばならないのだ。生まれながらにして、封印のために、その身を犠牲にすることを強いられてきた存在。しかも、いつ起こるかも不明なその時に備えて、一生涯魔力を使うことを禁じられている』

涼しい顔で言いきったイムルードを、ナンは睨み付けた。

『イムルード…才前…』

一瞬、イムルードが何を言っているのか、私には理解できなかった。

人柱？

犠牲？

その意味を理解できた時に、私の怒りは沸点を越えた。

『ぬあんですってええええええ！！！！』

私は、イムルードの襟元を引つ掴んだ。

『誰が決めたのよ！？ そんなバカなこと！！』

『^キ地の中心に住まう、^{エン}地の王が読んだ星の定めだ』

『ほほう、王様がねえ。じゃあ、いっちょそのバカな考えを改めさせに、直談判しにいこうじゃないの』

私は、イムルードにニツコリと笑いかけた。セトがお得意の冷たい笑いである。

『一、ヤメルノダ。我ハ、定メニ従ウ事ニ、異ハ無イ』

『ナンになくても、私には大有りよ！』

『気が合うな、私もだ』

めずらしく、私とイムルードの意見が一致した。

この世界に来て、はじめての出来事かもしれない。

『二人の意見が一致するなんて、珍しいこともあるね。天変地異の』

前触れじゃないといいけど。でも、俺も同じ意見だね。ナンが犠牲になることなんてないんじゃない？』

傍観していたセトも加わる。

ナンは、困ったように押し黙った。

やがて、ポツリと漏らす。

『我ハ… 才前タチヲ守ルコトガ出来ルノナラ… ムシロ幸セナコトダト思ツテイル。コノ身ガ、才前タチノ役ニ立ツノナラ… 本望ダ…』
いつもより、一回り小さく見えるナンの前に、私は跪いた。
手を伸ばして、ナンの頬に触れる。

『あのね、ナンのそういう気持ちは、とてもありがたい。でもね、せつかくこの世に生まれたナンの人生、そんなことのために使っほしくない。私はナンを犠牲にして、ただ守ってもらうよりも、苦しくても一緒に頑張る方が、ずっと嬉しいの。ナンと、もっとずっと長く一緒に過ごしたい。ナンと生きていきたいの』

『…』

『変だと思った。この前家に来た時から、なんかおかしいと思ってたんだ。……まさかとは思っただけど、一週間も泊ってこうとしたの、勝手にお別れを僣んでたとか言わないわよね』

ナンが、困ったように視線を下げる。

その態度で、答えがわかってしまった。

『ナン、黙ってそういうことするなんて、酷いわよ』

『スマヌ…』

『私、絶対にナンを封印の礎とかいうのにしないから。全力で阻止するからね』

私は、グッと拳を握りしめ、固く決意したのだった。

3 地の中心

『本当ニ、地ノ王^{エジ}ニ、才会イシニユクツモリナノカ』

『当たり前じゃない。だってナンが、礎とかいうのになることって、王様が決めたことなんでしょ？』

『違う。天ノ下シタ定メダ。地ノ王八、ソレヲ読ミ取ツタニスギヌ』
『でも、一番偉い人なんだから、決定権とかはあるんじゃないの？』

ナンは首を横に振る。

『一、我ハヨイノダ。オ前タチノソノ心ダケデ十分ダ。例エバ、我が礎トナル定メヲ逃レタトスル。然ラバ、同胞ノ別ノ誰力ガ、ソノ責ヲ新タニ負ウコトトナロウ。ヨイノダ、コレデ』

『そんな：必ず誰かが、犠牲にならなきゃならないなんて、おかしいじゃない』

ナンは、穏やかに笑った。

『正直ナ気持チヲ言ツテシマエバ、昔ハ、己ノ定メニ疑問ヲ感じテイタコトモアル。人間ハ、我等魔族ヲ、死魔^{アジール}ト同等ニ扱ウ。ソノヨウナ者等ヲ、何故我が守ラネバナラヌノカ、疑問ダツタ。人間ノ為ナドデハナク、同胞ヲ守ルタメニ礎トナロウト、自ラニ言イ聞カセテイタ。先代タチガ、命ヲ賭シテ守ツテ来タ封印ニ、何度モ足ヲ運ンデハ、自ラニソウ言イ聞カセテイタノダ、本心デハ…』

ナンは、何処か遠くを見るような表情をしていた。

『ダガ、イムルードト出会イ、気持チモ変ワリハジメタ。コノヨウニ可笑シナ男ダガ、イムルードハ、獣ノ姿デアル我ヲ恐レナカツタ。ソレドコロカ、魔族デアル我ヲ、友ト呼ンダ。ソシテ、オ前タチト出会イ、心モ定マツタ。我ハ、オ前タチノタメナラバ、喜ンデコノ身ヲ捧ゲヨウ。心ノ何処カデ疑問ヲ持ツテイタ、アノ頃トハ、モハヤ違ウノダ。我ハ、本当ニ嬉シイ。我ノ命ノ、意味ヲ知ルコトガデキテ、嬉シイノダ』

『嫌よ！ そんなの！ ナンが良くつたって、私は全然よくない！』

何か方法があるかもしれないじゃない。誰も犠牲になんかならなくてすむ方法もあるかもしれないんだから、そんな簡単に納得しないで！ 諦めないでよ！』

『…』

『私、絶対に嫌だから。何が何でも、別な方法探すから。だからナンも諦めないで、一緒に方法探そう』

『俺も手伝うよ、もちろんイムルードもだよ』

セトに話を振られて、イムルードは頷いた。

『もとより、そのつもりだ』

『でもさ、地の中心キ シエルは、何処にあつて、どうやって行くの？ ナンたちの話だと、入るのに色々大変だつて、前に聞いたことがあるけどセトがナンを見た。

ナンは、諦めたような、困つたようなため息を、一つついた。

『黒大陸グールニアル。詳シイ場所ハ、教エラレヌ。地ノ中心ノ周リニハ、結界ガ存在スル。界ヲ渡ルニハ、最終的ニ、7人イル御前みまえノ使イノ許可ガ無ケレバカナワヌ。ソノ最終許可ヲ貰ウ前ニ、一度諮問機関ニ諮ラナケレバナラナイ。懸案ガ立テ込ンデイルト、諮問機関デ大分時間ヲトラレル。無断デ界ヲ渡レバ、罰セラレル』

『なんだそのお役所仕事』

私は、思わずポロリと漏らしてしまった。それを、ナンは聞き漏らさなかつた。

『オヤクシヨシゴト…トハ？』

『いや、こつちの話。じゃあ例えば、今から地の中心に行くとなつたら、手続き終わるのにどれくらいかかるの？』

『確トハ言エヌガ、1月ハカカロウ。長ケレバ3月』

『ちよつと、そんなに悠長にしてられないわよ』

『ソレダケデハナイ、以前諮ツタ時ニ、セトノ許可ハ下リナカッタ。獣人レルトハ魔力ガナイノデ、界ヲ渡ル時ニ、結界ニ綻ビガ生ジヤスイノ

ダ

『なんか前途多難ね。もっとう簡単な方法とかないの？』

『簡単な方法トハ？』

『例えば、偉い人に顔が利いて、特別に許してもらうとか』

『無理ダ。個ノ勝手が、許サレルコトハナイ』

『そうか…困ったな…どうしよう…』

セトにも、経緯を説明して、知恵をしぼってもらうが、結果は得られなかった。

こんな時に、ドラ モンがいたらよかったのに。

『どこでも アがあつたら便利だったのになあ。あ、でも許可なく勝手に入ったらいけないだったっけ。それじゃ、まずいか…』

思わず、呟いていた。

『どこで どあ？ それは、どんなものだ』

おかしなところに食いついてきたのは、イムルードだった。

さつきまで、くたびれた顔して椅子に座っていたくせに、急に生き生きとしはじめた。

興味がある時と、ない時のギャップが、如実にあらわれる男だな。しかも、きちんと理解できるまでしつこく聞いてくるし。

よけいなこと言ったな、私。

なんで、こんなにキラキラした目をしてるんだ、こいつ。

子供向けの漫画の話なのに。

『ええとね、別に大したことじゃないんだけど…。ドア…じゃなくて、つまり扉を使って、自分の行きたい場所に行く道具というか…。扉を開けたら、すぐに目的地についていますみたいな感じかな』

うまく説明できない。

あまり食いついてほしくないんだけど。これ以上の説明は面倒だし。

そんな思いが通じたのか、イムルードは、すぐに楽しげな顔をした。

『ほう、面白い遊び心だな。わざわざ、扉をくぐって行くのか。ど

れ、やってみるか』

そう言って、イムルードはいそいそと、ドアに向かって歩いて行った。

『ヒト、セト、ナン。こつちだ』

イムルードが、手招きをする。

私は、なんだか不安になった。

押しではいけないボタンを押してしまった気がする。

『ねえ、私、物凄く嫌な予感がしてきたんだけど』

セトとナンを見る。

ナンも不安そうな顔をしていた。

セトは、ニツコリと笑った。

『責任とって、一番最初にどうぞ』

セトが手のひらで促す。

ひどい。

『早く、こつち』

イムルードが催促する。

私は、仕方なくイムルードのそばに歩み寄った。

私たちは、ドアの前に立たされる。

『開けてみて』

イムルードが、満面の笑みで促す。

『ちなみに一応聞くけど、この扉、どこに繋がってるのかな？』

私は、ひきつった笑顔でたずねるが、イムルードは人差し指を立てて、口元に持っていった。

『着いてからの、お楽しみ』

心底楽しそうな顔だ。

早く早くと言うので、私は、嫌々ドアを開けてみる。

すると、見慣れない部屋に通じていた。普通の部屋だ。ちょっと拍子抜けした。

ナンを振り返ってみるが、ナンも知らない場所のようで、首を傾げている。

急かされて、仕方なく一步踏み出した。

ナンとセトも続いて、見知らぬ部屋に足を踏み入れる。

最後にイムルードが入り、ドアを閉めると、入り口は跡形もなく消え去った。

『どこよ、コト...』

私は上の方をキョロキョロと眺めながら、思わずつぶやく。

すると、突然、女性の忍び笑いとともに、優雅な声が聞こえてきた。

『おかしなことを申すのう。知っていて、侵入してきたのではないのかえ』

声のした背後を振り返ると、少し離れた窓際に、美しい女性が椅子に座って、寛いでいるところだった。

『大胆よのう』

女性が楽しげに笑う。

ナンを見ると、不思議なことに、口と目を大きく開けたまま固まっていた。

『ナンと魔道士は、存じておるが、そなたたちは何者じゃ？』

女性の声に、私はセトの顔を一瞥してから答える。

『私はヒトです。こっちはセト』

『命ノコトとな。良い名前じゃ』

違っただけど、まあいいか。ここでは、そういう意味なんだし。

『ええと、それで貴女はどちら様ですか？』

『おや、知らぬのかえ？ それはすまなかつたのう。妾は地の王。』

地の中心を束ねる長じゃ』

それを聞いて、私の目と口も、ナンと同様、マックスまで開いた。

まさかの不法入国だった。

4 地の王 前編

どれくらい放心していたことだろう。

心の準備もなく、突然王様の前につれてこられて、私は、なかなか現実に戻ってくる事ができずにいた。

良くわからないまま、王様に促されて椅子に腰かけ、目の前に用意されたお茶を、ただ睨んでいた。

見れば、セトも、ナンも、ダメージが大きいようだ。微動だにできず、放心している。

ふと、イムルードが視界に入ったのだが、気が付くと、あの男はここでも酒を飲んでいた。

私は、瞬間的に現実に戻ってきた。

『イムルード！ あんたはまた！ 少しはTPOをわきまえなさいよ！ 何で、こんな場所まで、酒なんて飲んでんのよ！』

『ていーピーおー？ それはなんだ？』

イムルードは、首を傾げて、瞬きをひとつする。

『空気を読めつつつてんの！ 少しは大人の配慮とか学びなさいよ！ だいたい、これはどういうこと！？』

『どういうこととは？』

『なんで、私たち、いきなりここにいるの！？』

『ヒトが、行きたいと言ったのではないか』

『途中経過、すつとばしすぎなのよ！ 誰が、ダンジョンもなしにいきなりラスボスの前に連れていけなんて言ったのよ！？ しかも、手続き無視の、不法入国じゃない！ 捕まったら、どうしてくれるのよ！』

『だんじょん？ らすぼす？ それはどんなものだ？』

イムルードは、興味津々で身をのりだす。

『もう絶対説明してあげない！ これ以上何かされたら、こっちの身がもたないわ！』

私は、イムルードから顔を逸らした。

『俺さ、ヒトとイムルードといると、だんだん心臓に毛が生えていきそうなきがする』

セトが、ポツリと漏らした。

『セト！？ 私のせいじゃないでしょ！？ どう考えたってイムルードのせいでしょ！？』

『ヒトが、どこでも あなんてももの、イムルードに教えるからこうなるんだよ』

『ちよつと、これは事故よ！ しかも、もらい事故！ 被害者よ！ 私！』

クツクツと優雅に笑う声が出た。

『面白い者たちよのう』
『ナンも苦笑する。』

『王ヨ、不作法ファイタシマシタ。オ叱リ八如何様ニモ』

『よい、うるさい者らもおろつが、ここは妾の私室ゆえ、なんとも言うておこつ』

女性のお部屋に、いきなり無断で侵入したのか、私たちは。

しかも相手は王様。冷や汗が伝った。

『して、何用あつてのことじゃ』
『そういえば、そうだった。』

元はと言えば、王様に聞きたいことがあつてきたのだ。

この際だ、開き直つて聞いてしまおう。

『あの、お聞きしたいことがあつてきたんです』

『聞きたいことな』

『はい、実は』

私は口を開きかけたが、しかし、ドンドンとドアを叩く大きな音に、言葉は遮られた。

地の王が、僅かに眉根を寄せる。

『もう来たのかえ、存外早かつたのう。ほんに困つた奴らじゃ』
『失礼仕る』

そう言つて、ドアが開いた。

すぐに、どこかかと、体格の良い男たち数人がなだれこむ。男たちは槍を構えて、私たちを取り囲んだ。

なんとなく、こんな予感はしていた。

なにせ不法入国だし。ビザの申請してないし。

『シン、無礼じゃぞ。妾の客人じゃ、控えよ』

正面切つて、一番に部屋に入ってきた、背の高い美丈夫に向かつて、地の王が言った。

『地の王よ、本日の謁見予定に、この者等の名はありませんぞ』

シンと呼ばれた男が、そう答える。

『個人的な訪いよ、さがりおれ』

『ですが王よ、この者は、地の中心に立ち入ることを、禁止されているはずですが』

シンは、そう言つて、イムルードに向けて槍を構えた。

おい、何したんだよ、お前。

と、私はつつこみたくなった。

シンが、イムルードを見る目は、怒りに染め上げられている。

イムルードなら、悪気はなくとも、いっぱい地雷を踏んで歩きそつなので、私の胃袋はシクシクと痛み出した。

確かに、シンは生真面目そうな男で、到底、イムルードとは気が合いそうもないタイプだ。

イムルードを見れば、明らかにシンのことを覚えていなさそうな様子で、誰だつたつけ？ と、顔に書いてある。

これはまずい。

あんた誰？ とか言われた日には、シンがブちぎれるのは、目に見えている。

私は、セトに目配せをした。イムルードの口を塞いでくれと。

セトは、瞬時に状況を悟り、イムルードの側に立つ。

『魔道士よ、次にその顔を私の前に見せたなら、命はないと言つておいたはずよな。わざわざ、自ら進んで、その首差し出しにきたか、

よい心がけた』

シンはそう言って、槍をわずかに引く動作をした。本気が、見て取れた。

どうやら、口を開かなくても、穩便に済ますことはできなさそうだ。

私の胃は、再び縮み上がった。

『シン、黙りや、下がらおれ』

『しかし』

『ここは、妾の私室じゃ。妾が私的なおとな訪い、お前たちの指図を受けようはない』

地の王の、毅然とした言葉に、男たちは怯んだ。

シンが、悔しそうに唇を噛む。

『……御意』

絞り出すように、シンはそう言つと、男たちに退出するように促した。

シンはドアを閉めるその前に、イムルードを一睨みすると、忌々しそうにドアを閉めた。

『さっきの、男、どこかで見た気がするんだけど……？』

どこでだったっけ…と、そう言いながら、イムルードが、目をパチパチさせた。

あぶないところだった。ギリ間に合ったよ。

私は、セトと一緒に、思わず安堵のため息を漏らした。

イムルードといると、ろくな目に合わない。

命がいくつあっても足りたもんじゃない。

いったい、どうやったら、この男に、一般的な振る舞いを身に着けさせることができるようになるのだろうか、私は、真剣に悩み始めたのだった。

4 地の王 後編

地の王チノキの私室は、再び静寂を取り戻した。

私のガラス製の心臓は、まだ早鐘を打っている。

にもかかわらず、事の元凶ともいえる、当のイムルードは、平然と再びグラスを傾けはじめていた。

この男の行動は、どうしてこう私の神経を、ことごとく逆なでしてくれるのだろう。

『イムルード、あんたさっきのシンとかいう人に、何やったのよ』

『？ 何もやってはいないが？』

『何もやってなくて、なんであんなに怒るのよ。やったに決まっているでしょ。胸に手を当てて、よーっく、思い出してみなさいよ』

イムルードが、ふむと考えるそぶりをした。

ナンが、困ったようにため息をついた。

『イムルード、ソナタノ記憶ハ、ドノヨウナ構造ニナツテイルノダ？』

『アノヨウナ大罪ヲ犯シテオイテ、ソレヲ忘レルナドト…』

『…大…罪…？』

ものすごく嫌な響きに、私の胃袋は、またしてもキリキリと悲鳴をあげだした。

『ほんに、相変わらずよのう』

『あの…あんまり聞きたくないのですが、何やったんでしよう…？』

この男』

『地の中心チノキの結界を解きおったのよ、この男は。あの時の妾の苦勞、こやつにも味あわせてやりたいくらいじゃ』

何してくれてんだよこいつは！

『しかも、まるで懲りてないし、出禁にもなるはずだよ。』

『一、怒ラナイデヤツテクレ、モトハトイエバ、我ノ為ニシタコト』

ナノダ…』

ナンがそう言った。

ナンのため？

ナンを見ると、困った様子でうなずく。

つまり、今日の私たちがされたように、ナンのために暴走した結果の暴拳ということか。

地の王が、疲れたようなため息をついた。

『あの折、法官であるシンは、この男の急追に躍起になっておつてのう。しかし、どうして、こやつがまんまと逃げおおせてしまうものだから、大変だったぞ。まさか御前の使いの1人ともあるうものが、人間1人捕まえることができぬなどと知れば、シンの名にも傷がつこう。それに、魔道士の所業にも故あつてのことゆえ、表向きは放逐したことになるのよ』

『ああ、あの時の』と、ようやく思い出した様子でイムルードが呟いたが、私は黙殺した。

そんなやつが、目の前にこのこ現れたのか。そりゃ怒るよな。シンが少しだけ気の毒に思えた。

それにしても、ナンのためにやったことが。

本当に不器用な男だ。

『して、訊きたいこととはなんじゃ、ナンと魔道士がともにおることとを鑑みれば、前回の境界破りの時と同じ要件か』

地の王は、口につけていたカップを置き、姿勢を正してそう言った。

『前回の要件…ですか？』

『そうじゃ、ナンの定めについてではないのか？ あの時は、大きな口を叩いたものじゃが、やはり口だけであつたのか、魔道士よ』

地の王が、射るようにイムルードを見た。

『口だけって…いったい何を…？』

『あの折、こやつは妾に言うたのじゃ、決められた道筋などない。己がナンの定めを変えてみせると』

『イムルードが？』

私は、イムルードを見た。

イムルードは、傾けていたグラスを置く。

『叩いた口は大層なものじゃったが、しかしどうじゃ、現に封印は綻びを生じておる、もはや猶予はないぞ』

『わかつてる、何とかする』

イムルードが言った。

『そのような、確たる証もない戯れ言、誰が信じられよう』

地の王は、ギリと唇を噛んだ。

『妾は、口惜しいぞ。妾とてナンを定めから解放してやりたいのじゃ。魔道士よ、そなたの言を、妾とて望んでおるのじゃ。妾の星読みが誤りじゃったと、早う言わせてみせよ』

『つまりそれは、王様でも、ナンを助ける方法が分からないということですか？』

『方法は解っておる。封印を安定させればよいのじゃ』

『封印を、安定…？』

『そうじゃ、今は封印が綻んでおるから、死魔^{アジール}たちが騒ぎ出しておるのじゃ。安定すれば死魔の騒ぎもおさまろう。然らば、ナンの役目も必要がなくなる。空間魔法は、お前の得意分野であろうが。早うおさめぬか』

憤りをあらわにした地の王の言葉に、イムルードは、珍しくため息をついた。

『それが、やってるんだけどね…困ったことに、誰かが邪魔するんだよ。心当たりないかな？ それを聞きに来ただけ…。あちこち回って、封印補強してるのに、誰かがそれを故意に解いて回って、辟易してるところなんだ。そこにきて、一番肝心な場所が、血の穢れを受けちゃってね…実のところ、ちょっと困ってる』

『困ってるでは済まされぬぞ』

『わかつてる。だから今、犯人を捜しているところなんだ』

『しかしな、心当たりと言われても…仕方がないのう、妾の方でもあたってみよう』

『ええと、じゃあつまり、その犯人を見つけて捕まえて、封印を補

強すれば、ナンは礎とかいうものにならなくて済むんですか？』

『そうじゃ』

ようやく明るい兆しが見えてきた。

私は、俄然やる気がでてくる。

それにしても、イムルードの水臭さにも腹が立ってきた。

『イムルード』

『？』

なんだ？ とばかりに、イムルードは不思議そうに首を傾げた。

『何考えてんのよ。大魔道士様だか何だか知らないけど、1人で、

全部背負おうとするなんて、バカよ。何のために私たちがいるの？

少しは頼りなさいよ』

イムルードは、目を大きく瞬いた。

一瞬の間をおいて、ふと笑う。

『すまない』

『ほんとよ、だいたい知ってたんなら、最初から言いなさいよね』

『すまない』

『まったく…バカなんだから…。今日も随分と疲れてるみたいだけ

ど、1人で奔走した結果がそれ？ 呆れてものも言えないわよ』

私は、イムルードのそばに移動する。

不思議そうに見上げてくるイムルードに、にっこり微笑みかけて

やってから、私は、彼が飲んでいたグラスを持ち上げて、中身をグ

ツと飲み干してやった。

イムルードは、ああと情けない声を出したが、私は無視する。

『酒なんて飲んでる場合じゃないんだからね、一度家に帰って寝る

わよ。そんな貧相な顔して、無理なんてするんじゃないわよ。とに

かく禁酒だからね。酒は絶対禁止。わかった？』

ええ！？ それだけは許してほしいと、必死で訴えるイムルード

を、私は一蹴した。

食事と睡眠をきちんととらなければ、人間は、建設的な考えを持

つことはできないのだ。

イムルードの場合、そこから教育しなおさなければならなかった。

それにしても、先ほどのシンの顔を思い出してしまい、私はこのまま穏便に帰れるのか、少々不安を感じてしまった。

しかし、それも地の王のおかげで杞憂に終わる。

私とセトとナンは、安堵に胸を撫で下ろし、家路へとついたのであった。

5 睡眠は大事です

クワツと欠伸を一つしてから、私は体を思いつきり伸ばした。地の中心キセルから帰って、一晩経った、翌日の明け方のことだ。

窓の外は、いまだほの暗い。

起きるにはまだ早い時間だが、目が覚めてしまった。

ベッドの中では、まだナンがすやすやと寝息をたてている。昨晩は、一緒に寝ることを、全力で抵抗していたくせに、いざ眠ってしまえばこんなもんだ。

寝息で、ナンの口元が揺れる様は、ほんとうに可愛い。

私はナンを起こさないように、そっとベッドを抜け出ると、階下へと向かった。

居間に向かう途中、書斎の扉が薄く開いているのを見つけ、中を覗き込む。

すると中では、イムルードが椅子に腰かけ、本を読みふけていた。

側の机には、うず高く本が積み上げられ、今にも倒れそうな様子だ。

まったく、ちゃんと寝なさいと言ったのに。これではきつと徹夜明けだろう。

私は、ため息を一つついて、部屋の中に入った。

『イムルード』

声をかけるが、聞こえていないようだ。

仕方なく背後からまわって、ポンと肩を叩く。イムルードはようやく気づいて、肩こしに後ろを振り返った。

『ヒトか、おはよう』

『おはよう、何読んでるの?』

『ああ、これ?』

言ってイムルードが背表紙を見せる。

『げ！ それは、あの気持ち悪い魔法の本じゃないの？
気持ち悪い？』

『そうよ、ゾンビがいっぱいでくる魔法の本よ』

『ゾンビって？』

『亡者よ』

ああ、と言つて、イムルードは本を閉じた。

『それ、召喚魔法だよ』

『なんで、あんな可愛くないもの、わざわざよばなきゃならないのよ。信じられない』

私の言葉に、イムルードは、理解が及ばなかったのか、ちよつとだけ考えるそぶりをした。

『…まあ、可愛くはないよね。でも、痛覚とかないし、丈夫にできてるし、便利だよ』

『あたしは絶対にイヤ！ あんなもの二度と見たくない』

私は、両手で自分の体を抱きしめる。

イムルードは、クスリと笑った。

『でもこの本、空間魔法のことが、分かりやすく載ってるんだよ。召喚魔法と空間魔法は、似ているところがあるからね。ヒトは、空間魔法苦手だろ。なんかいい本なかつたかなと思って、探してたんだ。どう、読んでみれば？』

イムルードが、本を差し出してくる。

空間魔法と言われたら、読まないわけにはいかない。私は、渋々受け取った。

この世界の魔術は、つくづく想像力が不可欠だ。

炎や風、雷などは、自分にも知識として持っている現象なので、意外と使いこなしやすい。けれども空間魔法は、いまいち原理が理解できないので、どうもうまく作用してくれないのだ。

しかも、ゾンビのおかげで、苦手意識も根付いていることだし…。

私は本をまじまじと見ながら、大きなため息を一つついた。

不意にイムルードが、手を伸ばして、私の頭に触れる。

『ヒトは素直だな』

『何よ突然』

『いいや、これと言って意味はないのだが…』

『そう言いながら、頭を撫でる。』

『私の周りに居た者等は、皆嘘が上手でな。正直、あのような者等を相手にすることに、疲れていたのだ。お前たちの素直さは、心地よい』

イムルードは目を細めて、私の頭を撫でる。

『イムルードさ、昨日、ナンに怒ってたでしょ』

イムルードが手を止めた。

赤い眼をゆつくりと瞬く。

『ほんと分かりやすいんだから』

『…私は、分かりやすいだろうか？』

『わかりやすいわよ。特に面白いものを見つけた時なんかは、ものすごくね』

『そうか、わかりやすいのか』

『あと、昨日みたいに怒ってる時も』

イムルードは、再び目を瞬く。

『無自覚なの？ あんた、顔つきまるつきりかわってるわよ。怖い顔しちゃってさ。あんな不景気な面、見たくないっての』

『…そうか…すまない…』

『あんたみたいなのやつは、呑気な顔して、馬鹿なことやってる方がお似合いよ』

私は頭を小突いてやった。

『ひどいな』

笑いながら、嬉しそうにそう言う。

しかし、不意にイムルードは、考えるように黙り込んだ。どれくらい、そうしていただろう。

『そう言ってくれる人間は、ヒトくらいだ』

突然、力なく言葉を漏らした。

どこか疲れたような、諦めにも似た気配を纏っている。

この男には不似合いな、皮肉気な笑いが、一瞬だけ見えた。

「私は、他者から、望まれるばかりだった。私は、ただの人の身に過ぎぬというのに、人は私に奇跡ばかりを求める」

イムルードは、そう語りながら表情を消していった。

「私もできうる限りのことはしてきたつもりだ。しかし、人とは貪欲な生き物だ。奇跡を起こさば、次はさらにその上を望む。際限がないのだ。継りつき、まわりついてくる幾つもの手に絡め取られ、私は、息苦しかった。そして、恐ろしかった」

言って、イムルードは眼を閉じた。

「人間は、愚かだ。過ちと知りながら、罪を犯すのだから」

そう呟いたイムルードの顔は、苦痛にゆがんでいた。

「いったい、何を指してそう言っているのか、私には見当もつかなかった。」

ただわかるのは、イムルードが苦しんでいるというその事実だけだった。

私は思わず手を伸ばし、深く刻まれていた眉間のしわを、引っ張って伸ばしていた。

イムルードが、驚いたように目を開ける。

「何、らしくない顔してんのよ。ちゃんと寝ないから、そういうことになるの。寝不足のせいよ絶対」

「寝不足？」

「寝てないから、そういう後ろ向きな考えがでてくるの」

「…後ろ向き…」

「こっち来なさい」

言って、私はイムルードの手を引いた。

イムルードは、手を引かれるまま、黙って後をついてくる。

イムルードの寝室のドアを開けると、布団をめくってやった。いつ帰ってくるか分からない男だが、いつでも眠ることができるように、布団はちゃんと干してある。

『はやく寝て』

言つて、背中を押してやる。

イムルードは、途方に暮れたような顔をしながら、ぎこちなく布団によこになつた。

肩まで布団をかけてやると、私は椅子を引き寄せて、ベッドのそばで腰かける。

『早く、寝なさい。ちゃんと寝るまでここで見張ってるからね』

言つて私は、件の本を開いた。

本の文字を追いはじめると、ゾンビのトラウマが蘇ってくる。反射的にブルリと両肩が振るえた。

イムルードがそれを見て笑う。

『ヒトにはかなわないな』

『何？ 私に勝つつもりだったの？ 私に勝とうなんて、百年早いわよ、生意気な』

『そうか、百年か。随分と先の話だな』

イムルードが嬉しそうに笑う。

私は、早く寝るとばかりに、イムルードの頭を撫でてやった。

イムルードは気持ちよさそうに目を閉じる。

『求められるばかりだった私に、こうして与えられる喜びを教えてくださいましたのもヒトだ』

安堵にも近い溜め息と一緒にそう呟いた。

あまりにもしみじみと呟くので、少し可哀想になつた。

『まあ、確かに難儀なことよね。あんたみたいな残念な男が、勝手に賢者様とか言つて祀り上げられちゃうんだからさ。これに懲りたら、今後八方美人はやめることね』

『八方美人？』

『そうよ、なんでもホイホイ引き受けちゃうから、そういう目に合うの。嫌な時は、嫌だとはっきり言つたらいいのよ。そうしたら、世間の評価は、賢者様から悪魔に変わるかもね。世間なんてそんなもんよ』

『悪魔：か』

『そうよ、だいたいね、人間は賢く、貪欲にできてんの。あんたが、放っておけば、それに見合った手段を自分たちで見つけるものよ』

『…そうか』

『人助けをして、自分まで潰されてたら、世話無いわよ』

『…そうだな…』

『わかったら、寝なさい』

私は、額にかかっている髪をどけてやる。

イムルードは、薄く微笑みながら、すぐに眠りに落ちた。

イムルードの寝顔を見ながら、賢者様には、賢者様なりの苦労があるのだなあと、私は思った。

疲労で顔色が悪くなっているこの男の顔は、まったく似合っていない。

私は、再び本に視線を戻した。

真面目に読むことを決意する。

これ以上、イムルードに、おんぶに抱っこをするわけにもいかない。少しでも、苦手分野を克服してやるうじやないかと意気込んだ。

イムルードの、こんな顔を見るくらいなら、いつものように振り回されていた方がましだと私は思ったのだった。

6 死魔の王

その後、イムルードが起きてきたのは、昼を過ぎたころだった。起きるなり、めずらしくお腹がすいたと言っているので、軽い食事を作つてやる。

行儀は悪いが、食事を摂りながらの話となった。

『基本的な話なんだけど、封印で、結局何なの？ そもそも、いったい何を封印してあるの？』

私の質問に答えたのは、ナンだった。

『無貌ノ悪魔^{アトウ}ダ』

『無貌の悪魔？ そういえば、死魔^{アジール}のことを無貌^{アトウ}の悪魔^イの使^ルいつて呼ぶわよね』

『ソウダ。言イカエレバ、死魔^{アジール}タチノ王^{エン}ガ封ジラレテイル』

『つまり、悪の親玉ってわけね』

私は腕を組んだ。

『じゃあさ、封印はどこにあるの？ イムルードの口ぶりだと、いっぱいありそうだけど』

『全部で7ヶ所ある。封印を安定させるために、地上に描いた巨大な三角を、二重に重ねてある』

そう言つてイムルードは三角形を手で作り、上向きと下向きと組み合わせて見せた。

図にすると、いわゆる籠目紋^{カゴメ}というやつだ。

『頂点の6点と、中央部がそうだ。その中央が一番肝心な場所なんだ』

イムルードは、そう言つと立ち上がり、地図を引つ張り出してきて、机に広げた。

そこに籠目紋を掻き込む。その真ん中、空白の中央部分に、黒い点を打った。

『ここが一番大事な場所だ。ここが今、血の穢れを受けて、やつか

いなことになっている』

イムルードが点を打った場所は、トルバディアの領内、中央よりやや東寄りの部分に位置していた。

『神殿の管理下にある場所だから、行くのにもちよつと厄介なんだ』
イムルードは難しそうな顔をした。

『ちよつと質問だけど、血の穢れって、やっぱりまずいの？』

『まずいよ。魔族は血を嫌うからね。魔族は、人間と違って、殺生で栄養を摂るわけじゃないから』

『そうなの？ じゃあ、どうやってご飯を食べるのよ』

私は、ナンを見る。

『魔力が満ちてさえイレバ、人間で言う飢餓感トハ無縁ダ。魔力が減ルト空腹ニ近い状態ニナルラシイ…』

ナンがわずかに首を傾げた。

『我ハ無縁ノコトユエ分カラヌガ、トモカク、ソウナツタ場合、口カラ生き物ヲ補ツテ、ソレヲ満タス訳デハナイ。我等ハ、自然ソノモノカラ力ヲ得テ、魔力ニ変エルノダ』

『なんか仙人みたいね』

『センニン…トハ？』

『ごめん、こつちの話。で、話は戻るけど、魔族が血が嫌いだと、なんで封印もだめなの？』

『封印は、魔族が礎となっている。礎となった魔族は、死ぬわけではないのだ。一般的に眠りにつくとか、沈黙するなど表現している。身体という器を失くしても、意識はとどまり、ただ沈黙する。ゆえに、魔族は封印の地を深き沈黙の森と呼ぶ』

『…それって…もしかなくても、ここのことじゃない？』
今まで、黙っていたセトが口を開いた。

イムルードがそれに頷く。

『そうだ、この地も封印の一端を担っている』

『だからナンは、流血沙汰はダメだって言ってたわけね』

『俺は、言いつけ守るのに苦労したよ。なにせ魔力ないからね』

セトが苦笑した。

『じゃあ、私たちは、その7ヶ所まわって、封印を補強すればいいのね。で、なんかそれを邪魔している奴がいるって話だけど、それはどうなってるの？』

イムルードが、ため息を吐いた。

『それが、そつの無いやつでね。なかなか尻尾が掴めない。けど、そつちは私が何とかする』

私はその言葉を聞いて、反射的にイムルードの頭を小突いていた。
『いた』

『それを、やめろって言ってるんでしょ。1人で抱え込まないの』
イムルードは、小突かれた頭をさすりながら私を見る。

『だが…』

『だってもへちまもないの！ とにかく、1人でなんとかしようなんてバカなことは考えないの！ みんなでなんとかするんだからね。わかってることがあったら、今、ここで全部白状なさい』

『へちま？ それはなんだ？』

『いいから、話の腰を折るな。その邪魔している奴の情報はないの？』

『それが、何も無いのだ』

『ないの？ しょうがないわね』

『ヒトにかかると、大魔道士様も形なしだね』

セトが笑う。

『面目ない』

情けないイムルードの声に、皆が笑った。

『じゃあ、手分けしよっか』

『我ノ為ニ、皆ニ苦勞ヲカケル。スマナイ』

『それこそ、水臭いわよ。言ったでしょ、私たちは、皆で苦勞する方が嬉しいの』

皆が、ナンを温かい目で見遣る。

ナンも嬉しそうに微笑んだ。

1 兆し

トルバディアとレントの開戦、そして、レヴトリアとレントの攻守同盟の話聞いたのは、久しぶりに立ち寄った、パルミナでの出来事だった。

シャリフさんのお店で、お昼を御馳走になっていた時の話。イムルードと離れて、今はセトとナンと一緒に行動している。ナンには、町の外で待ってもらっていて、ここにいるのは、私とセトだけだ。

寝耳に水とは、まさにこのことだった。

つい2月ほど前、私とセトはレヴトリアにいた。その時には、耳に入らなかつた話だ。

「それって、本当なんですか？」

私は、シャリフさんに念を押して、聞き返す。

「そうだ、知らなかつたのか？ ハールマー様は今レントにいらつしやる。対トルバディアのレント軍本体に合流し、シエルマを目指しておられるはずだ」

シエルマとは、トルバディア領土の北東に位置し、レントと接する大都市だ。トルバディアの対東方の拠点でもある。

レント・レプトリア同盟は、手始めにシエルマを落とすことに決まったようだ。そこから南西に下り、一路オリス・ラ・トーバを目指すのだという。

思わず、食事をする手が止まってしまった。

シャリフさんの手料理は、相変わらず絶品で、物凄く美味しい。けれども、私にはめずらしいことだが、食べ物がのどを通らなかつた。

トルバディアが戦争をはじめた。

血の穢れを嫌う重要な封印がある場所が、戦場となる危機にさらされているのだと知って、私は怖くなった。

もし、その場所が、再び血によって汚されたらどうなるのだろうか？
もしかしたら、ナンが礎というものに、ならなければならなくなる
のではないだろうか。

恐ろしかった。

身体に震えが走る。

「ヒト、大丈夫だよ」

セトが、安心させるように背中に手を置く。

「まだ、オリス・ラ・トーバは戦地になってないよ。それに、カル
ナス王はイムルドと知り合いだ。きつと心得ているはずだよ。心
配なら、早いとこ仕事を片付けて、ハールマーさんのところに行こ
う」

私は、セトを見た。

セトが、大丈夫だと力強く笑う。

私は、その笑顔のおかげで、少し安心した。

「そうだね」

頷く私の頭を、セトが優しく何度も撫でた。

私たちは、プルシャールを出て、はるかに南下し、ウィルナ国を
めざした。

7つの封印のうちの1つがある場所だ。

イムルドの選んだ本は、確かに役立った。

空間魔法と、召喚魔法について、詳細に書かれていたのだ。おか
げで、なんとかそれなりに使えるようになってきた。

移動の空間魔法については、要は、横方向のエレベーターのよう
なものだと思えばいいのだ。

動くのは、私ではなく空間の方なのだが、目的地をきちんと認識
できさえすれば、あとはそれを繋げればいい。

頭に詳細な地図が入っていないので、イムルドみたいにピタリ
と目的地に着くことはできないが、そんなに見当はずれでもない場

所に、たどり着くことができるようになった。

封印の補強についても、封印の術式さえ読み取れば、その上に同じものをのせてやればいいだけだ。それほど難しいことはない。

一応、家のそばにある封印で、予行練習を試みた。

この封印は、解かれていなかったの、難しいことは何もなかった。

いじられて欠損があると、その修復に手間がとられるとイムルードは言っていた。

ナンは、イムルードにひけを取らない魔道士になれるとほめてくれたが、比べられる人間がイムルードだと思つと、素直に喜べなかった。

イムルードがやってみせた「どこでも ア」方式で、私はウィルナに移動する。

迷惑な話だが、帰りも適当なドアを見繕わないと、帰ることができなくなってしまった。先入観とは恐ろしいものだ。ドアがないと行き来できなくなってしまったのだから。

私たちは、ウィルナにある人里離れた森の中にいる。

この封印は、最初に封印がほどこされた時と同じように、森の中にあるが、中には年月を経て、開発が進み、森ではなくなってしまう場所もあるらしい。

しかし、そういう場所は、神殿が管理する土地に変わっており、一応、むやみに立ち入ることはできないようになっていているそうだ。

そういう面倒な場所は、イムルードに担当してもらっている。

私たちは、辺鄙な山奥の担当だ。

暗くなった山深い森は、薄気味悪かった。

時折、死魔アジールに遭遇することもあったが、セトが追い払ってくれた。光魔法を使つて周囲を照らすが、人けのない怪しい場所は、不気味さばかりが際立っている。

『あつた。あそこだ』

私の目には、薄ぼんやりと輝いて術式が見えた。

家のそばで、この封印を見かけたときは、イムルードの結界なのかと思っていた。

まさか魔族たちの命を糧として作られた封印であるとは、思いもよらなかつたものだ。

近づくと、確かに封印の術式に乱れがあつた。

『いい度胸してるじゃない。こんな悪戯する奴には、お仕置きが必要よね』

私は、ポキポキと指を鳴らす。

『なんか、不穏な笑顔になつてるよ』

セトの言葉に、私の笑みは、増々深くなるのだった。

私は、地面に手をつけて、古い術式を呼び出し、具現化する。と、その時のことだった。

不意に周囲が騒がしくなりはじめた。

『死魔ダ』

ナンが、威嚇する。

セトが、反射的に剣に手を伸ばすが、躊躇ってから、ナンを見た。

『流血沙汰はダメなんだよね』

『ソウダ』

ナンが言つて、セトに頷いてみせる。

セトが、大きくため息をついた。

『素手でやるしかないか』

剣の柄から手を離す。

『悪いけど、2人で頑張つてね。私も今手が離せないからさ』

『了解』

セトの返事と同時に、ナンは大地を蹴っていた。

2 似たもの父子

2人が頑張ってくれている間に、私は封印の欠損している部分の術式を復元させる。

細かい作業で、確かに骨が折れた。

『ヒト！』

不意に、セトに呼ばれる。

気が付くと、目前に死魔アジールが迫っていた。

獣のかたちをした死魔が大地を蹴って、ちょうど私に跳びかかるうとしているところだった。

私は、やむなく補強を中断して、炎の魔法円を目の前に具現化する。円から炎が飛び出し、死魔を焼いた。

『まったく、どこからわいてくんよ、次から次へと』

『確力二、少シ尋常デハナイナ』

『もしかしたら、この前の死魔みたいのが、そばにいるんじゃないかな。俺、ちよっと周りを見てくるよ』

言いおいて、セトが離れて行った。

私は、魔法円を使って、周囲の死魔を焼き払う。

『我モ、見テコヨウ。スグ戻ル。一ハココデ待ッテイロ』

ナンもセトの後を追って行った。

私は、一人きりになる。

暗い森の中は、不気味だった。

外に出る時は、いつも必ずセトが一緒なので、少し心細く感じってしまう。

光魔法を強くして、周囲を明るくしてみた。

すると、視界の片隅で、誰かが動いたように見えた。目を凝らしてみると、すぐにその影は消える。

垣間見たその人影は、見覚えのある人によく似ていた。

地キセルの中心で一度だけ見た、シンという魔族にそっくりだったのだ。

『まさかね…こんなところに居るわけないか…』

時折、死魔を退治しながら、その場で待っていると、じきセトとナンが戻ってきた。

『ヒト、やっぱり歪みがあるよ。この前の死魔が作った歪みとは、ちよつと違う感じがするけど、そこからどどん死魔が出てきてるんだ』

言ってるそばから、死魔が襲ってきた。

セトが死魔の攻撃を躲して、蹴りをはなつ。

私は魔法円を呼び出し、炎で焼いた。

『じゃあ、そこもおさないといけないかな？』

私の言葉に、ナンが首を横に振った。

『アレハ、封印ノ綻ビニヨツテ、デキテイル界ノ亀裂ダ。一ツ塞イダトコロデ、スグニマタデキル』

『じゃあ、この封印を補強したら消えるの？』

『アルイハ…』

確とは確証がないようだ。

セトには、ナンの声が聞こえないので説明してやる。

『じゃあ、このまま俺とナンで、なんとか凌いで、ヒトに補強してもらうしかないか』

私たちは顔を見合わせてから、頷き合った。

封印一つ補強し終わった頃には、3人とも疲労困憊となっていた。

ここから、町まで歩いてドアを探しに行く気には、到底なれないほどだ。

『このまま野宿でも、いいんじゃない？』

セトの言葉に、私もナンも頷いた。

私たちは、大地に腰をおろす。

先ほどにくらべ、死魔の数はだいぶ少なくなった。

封印の補強をしている時に、わかったのだが、たぶんイムルード

のおかげなのだ。

術式を読み取っている時に、明らかに封印の力が強まった。そのおかげで、補強もしやすくなった。薄れていた術式が、かってに強まっていったのだ。

『イムルードは、今まで一人でこれをやっていたのよね』

私の声に、ナンが頷いた。

『やっぱりイムルードは、すごい人だったってことだね』

『…しゃくにさわるけど、そうね』

私は、疲れて大地に寝転がった。

深い森の中では、空も星も見えない。

『それにしても、困ったやつね。こういう苦勞を、おくびにもださないなんて…。私たち、家族じゃないのかしら』

セトが、返事に困ったような気配がした。

『違う、ソウデハナイ。イムルードハ、才前タチヲテモ大事ニ思ッテイル』

私は、ナンの言葉に起き上がった。

『大事に思ってくれているなら何で？ 少しは相談してくれたっていいじゃない』

ナンが、困ったように髭をピクピクと動かした。

『父親：モシクハ男トシテノ矜持デハナイノカ？ 才前タチニ愚痴ナドコボセナカツタノダロウ』

『父親？ あれで？ とは言っちゃいけないわよね』

私は、苦笑した。

セトも一緒に笑う。

『俺も、イムルードが親代わりを、あの人なりに頑張っていたのは知ってるからね。かなり空回りしてたけど』

『方向性を間違ってたわよね。それを教えてくれる人間が、周りにいなかったんじゃない？ 今思えば、だけど』

ハーと大きなため息をついて、私は再び大地に大の字になった。

『全部一人で背負い込んでさ…どうしようもないお人よしの

バカなんだから』

セトは、私の言葉を聞いて笑った。

『じゃあヒトは、お父さん似なんだね。どうしようもないお人よしの、お節介なんだからさ』

『なんですって!』

私は瞬時に飛び起きて、拳骨を突き出す。

セトが、ゴメンゴメンと謝るが許してやらない。わき腹に一発拳骨を入れてやった。

ナンが可笑しそうに、その様子を見る。

そうやって森の中で過ごす夜は、とても幸せなものだった。

3 クロウの闇

ウィルナのとある町で、私は1人で適当なドアを探していた。夜になつたら、こっそり忍び込んで、帰るのに使えそうなドアだ。

この国も、獣人に対しての差別があることだし、ドアを探すくらい一人でもできるからと言って、2人には町の外で、待ってもらっている。

私は、人気の少ない裏通りを歩き、空き家を探していた。

キヨロキヨロとドアを物色しながら歩いていると、知らぬ間にずいぶん物騒な土地に迷い込んでいた。

景色が、プルシャーラに近いものになっている。

あちこちにゴミは落ちていているし、無気力そうな人間が道端に蹲っているし、1人でうろついたことが、セトにばれでもしたら、超怒られそうな場所だ。

「こりやまずいよな…戻るか」

私は踵を返す。

しかし、後ろを振り返ると、モロ悪役といった顔立ちの男たちが5人ほど、ニヤニヤと笑いながら立っていた。

「どうしたんだ？ お嬢ちゃん。迷子か？ お兄さんたちが助けてあげるよ？」

男たちは、みな下品な笑いを顔に張り付けている。

こういふ手合いに絡まれるなんて、いったい何十年ぶりのことだろう。昔のことすぎて、もう思い出せない。

「オトウサンには、知らない人についてっちゃ駄目だと言われてます。なので、サヨウナラ」

私は、そう答えて横をすり抜けようとした。

しかし、男の1人が腕を伸ばし、私の目の前を遮る。

「怖がらなくても大丈夫だよ。ちゃんと俺たちが送り届けてあげる

し。ただ、ちよつとだけ寄り道していこうぜ」

ヒヒヒと、物凄く嫌な笑い方をする。

男たちの笑い方に、私は鳥肌が立った。

「オトウサンには、寄り道もしちゃ駄目だといわれています。なので、サヨウナラ」

私は、男の腕をかわすと、思いつき走り出した。

「待てよ！ 逃がすか！ そっち回り込め！」

待てと言われて、素直に待つわけないだろうが。この変態め。

私は内心で毒づきながら猛ダツシュした。

自分では、もと来た道を走っていたつもりだった。

なのに、なんでこんな袋小路に逃げ込んでしまったのだろう。

自分でもアホかと突っ込みたくなるほど、馬鹿なことをしたと思う。

行き止まりの壁を見てから、恐る恐る後ろを見た。

歯が真っ黄色な大男が、気色悪い笑顔で私のことを見ていた。

来るんじゃない。口が臭いやつは、滅んでしまえ。

私は、呪いをこめたまなざしで威嚇するが、まったく相手には通じなかった。

男が私に向かって腕を伸ばしてくる。

これはもう仕方がない。人間相手だからとか言って、手加減してやるような場面じゃなかった。

私は、魔法円を呼び出しはじめる。

背に腹は代えられないのだ。

円を具現化しようとしたその時のことだった。

突然男が断末魔の悲鳴をあげて、地面にくずおれた。

「あれ？ まだ何もやってないけど…？」

なぜに？ と私が首を傾げていると、急に背後から白い腕が2本伸びてきた。

1本は、他にもいる男たちに、手のひらを向けてのばされ、もう1本の腕は私の腹部に絡みつくと、後ろに向かって体を引き寄せられた。

「ぎよえ！？ 何！？ 誰！？」

私は、背後を振り仰ぐと、そこにはクロウの美しい顔があった。

「ちよつとクロウ！ 何すんのよ！ 離してよ、気持ち悪いな！」

私がそう言うと、クロウは、ぞっとするよううすら寒い笑いを浮かべた。

「人間ごとき相手に、何やってるの？」

ヒヤリと、私の背中をつたうものがあつた。

男たちへと向けられていた、クロウの手ひらの前に、巨大な魔法円が具現化した。

風の魔法円だ。

円の中央から風が放たれ、瞬時に男たちは切り刻まれた。断末魔の悲鳴すらあげる間もない、一瞬の出来事だった。

私のアンテナが、ガンガンに警鐘を鳴らしはじめる。

やっぱりこいつはダメだ。

ムリムリ。

私は、魔法円を呼び出し、具現化した。

クロウに向かって、炎を放つ。

クロウは、なんなくそれをかわした。

「酷いな、せつかく助けてあげたのに」

クロウが、悪魔の様な笑顔を浮かべている。

「助けてなんて言ってないし」

辺りには、血の匂いが満ちはじめた。

「ここまでやる必要なんて、どこにもないでしょ」

足元をじわじわと染め上げていく鮮血から、私は眼を逸らした。

クロウが私の顎をつかんで、上向かせる。

「必要はあるよ。ヒトに触れようとしたんだから」

クロウの目には、底知れぬ狂気の様な光が宿っていた。

私は、恐ろしさで体が震えだした。

「僕が怖いのか？」

クロウの目が、嬉しそうに弧を描く。

クツクツと喉を鳴らした。

満足そうに私を見てから「またね」と言っつて、不意に目の前から消えた。

クロウが目の前から消えると、私は、思わず地面に座り込んだ。

いつも思うが、いったいあいつは何をしたいのだ？

何で私につきまとうのだ？

本心など、まるで見えないクロウの顔を思い出すと、私の体は自然と震えだすのだった。

その後、セトとナンと合流すると、2人は、私の様子がおかしいことに気が付いた。

最初とはぼけていたのだが、どうしても許してもらえず、2人に問い詰められ、仕方なくことの顛末を話すと、もうしません、許してくださいと涙を流したくなるほど叱られたのだった。

今日は厄日だと思った。

4 出会い

ウィルナの次に私たちが目指した封印は、トルバディア領内西部にあった。

トルバディアは、白大陸^{ワタルラート}一広大な領土を持つ大国である。西方に位置するこの辺りでは、戦争の気配など微塵も感じられない。

のどかな町の日常が、ただ繰り返し返されているばかりであった。

初夏の暑さのなか、頭から外套をかぶって、セトは町中を歩いている。

私たちは今、封印の補強作業を行う前に、ご飯の調達に向かって
いるのだ。

ナンには、ここでもやはり町の外で待ってもらっている。

最近^{アジール}は、死魔の出現が町でも頻繁にあるため、ナンのような姿の
ものが、街中を歩くと、面倒事が多いのだ。

買い物ぐらい、私一人でも大丈夫だと言ったのだが、やはりゆる
してはもらえなかった。

もちろん前回のことが、大いに影響している。

セトが、私を一人で野放しにしてはおけないと言い出し、以来、
まったく一人にしてはくれなくなったのだ。

野放しって、言い方がおかしくない？ という私の抗議は黙殺さ
れた。

ただでさえ、最近^{アジール}はセトが色々と言っているさかっただのに、ここまで
されたら、私も息が詰まる。

どうにかして監視を逃れようと、私は考えをめぐらしていた。

「セト、暑いでしょ」

「暑いね」

トルバディアでは、獣人^{レルト}の管理が徹底されており、獣人はみな登
録証を持っている。

登録証を持たない獣人は、ただちに警邏によって連行され、身元の確認をされることとなる。

そこで、身元が明らかにならない場合は、投獄されてしまつらしい。

セトが、登録証を持っているはずもなく、この状況は、非常にま

ずかった。

外套を頭からかぶつたくらいで、大丈夫なのだろうか？

よけいに不信感を際立たせている感じがするのだが。

一応、外套の下の頭には、ターバンみたいなものを巻きつけてあるが、尻尾だけは隠しようがなかった。

「私なら、一人でも大丈夫だよ」

何度繰り返したか分からない問答を、再び口にしてみた。

セトはピタリと足を止め、私を見る。

「へえ、どこが？」

さわやかな笑顔を張り付けて、セトがそう言った。

「俺が、どれだけ口をすっぱくして言ったところで」

セトは、変なところで言葉を区切ると、手を伸ばして私の頭をつかんだ。

「ヒトのここは、すぐに忘れちゃうんだよね」

困ったよね、と言いながら、笑顔を深くする。

むっっちゃ怖い笑顔なんだけど。

頭を鷲づかみにされたまま、私もヘラツと乾いた笑顔を浮かべた。

セトは怒ると怖いよな。

でも笑顔で怒られている時は、まだましなんだと、昨日はじめて分かった。

笑顔じゃなく怒られると、さすがの私でもへこむ。昨日のあれは、本気で怖かった。

「もう二度と忘れたりいたしません」

「そんなの、あたりまえだよな。これで忘れられたら、俺、どうしようかなあ」

セトの張り付いたような笑顔が怖い。
これは、あれだ。サクサク買い物を終了して、町を出るに限る。
以後私は、黙って市場へと足を向けたのだった。

トルバディア西部にあるこの町の名は、ウルザという。
川が何本も流れる街中では、運河が物資の運搬の重要な役割を担
っている。

私たちは、いくつもの橋を越え、町の中央部にあるという市場を
目指していた。

アーチ状に組まれた橋を越え、大通りにでる。
すると通りでは、何やら人だかりができていた。どうやら揉め事
のようだ。

人ごみの中央では、年配の女性が地面に座り込み、破落戸のよう
な男が、何かを怒鳴り散らしている。

耳を澄ませば、肩が痛いだの、金を寄せだの、頭が悪いやつが
よくする脅し文句を並べたてていた。

それを聞いた瞬間、私は頭にカツと血がのぼった。
考えるよりも先に行動していた。

私は人ごみをかき分けて、地面に座り込んでいた女性のもとに走
り寄る。

「おばあさん、大丈夫？ 怪我はない？」

年配の女性は、ほっとしたような吐息をついて、「ええ、ありが
とう。大丈夫よ……」と答えたが、私の顔を見た途端に息をつめた。

「サリエ様……？」

小さく呟かれたその声を、私は聞き漏らさなかった。

驚愕に見開かれた女性を見返すと、私は答える。

「サリエ？ 違いますよ、私は一ひとです」

「ああ……そうよね……そんなはずは……」

女性は、私の顔を食い入るように見つめたまま放心する。

「ヒト、おばあさん連れて離れてくれない？」

セトの声に、私は女性の手を取った。

「あぶないから、こっちに来てください」

女性は、私の顔を見たまま頷いて立ち上がった。そのまま二人で道の端による。

セトを見れば、数人の破落戸に囲まれていたが、剣を抜く必要もなく、相手を地面に沈めていた。

刃物を使って問題を大きくして、警邏の人間がきても困ることだし、そのあたりのことは考えているようだった。

女性は、その間も、ずっと私の顔を見ていた。

「…よく…似ていらっしやる…」

どうやら、女性の知り合いに、私は似ているようだ。

懐かしむような優しい眼差しを向けられ、少し居心地が悪くなった。

時折、女性の表情が暗く陰ることが気にはなったが、自分から声をかけることはしなかった。

女性の口ぶりから、私に似ている人が、たぶんもうこの世にいないのであろうことが察せられたからだ。思い出すのは、よい思い出だけで十分だろう。今この場に、悲しい思い出など必要ないのだから。

「おい！ こいつ、獣人だぞ！」

叫び声が聞こえた。

セトを振り返ると、翻った外套の下に、尻尾がのぞいている。

うわ、バレたか。

私は女性の手を取る。

セトは、私を一瞥してから小さく頷いて見せ、別方向に走り出した。

どうやら、ひきつけてくれる役を買って出てくれたらしい。

セトに限って、あの程度の破落戸たちに何かされるはずもないから、私は女性の手を引いて、セトとは真逆の方向に歩き出したのだ。

つ
た。

5 サリエ

年配の女性の手を引き、私は物陰に隠れた。

女性には、ここで待っているように言い置き、表通りを見て回る。先ほどの男たちの姿はどこにもない。セトが全員引き付けてくれたようだった。

私は女性のもとへと戻る。

「お怪我はありませんか？」

「おかげさまで、ありがとうございます」

女性は言って頭を下げた。

女性は、自らの名前をクイナと名乗った。

「お連れの方はご無事ででしょうか？」

クイナが、そう言って、心配げに表情を曇らせた。若かりし頃は、大層美しかったに違いない。今でも、その面影が残っている。

上品な面差しが憂いを帯びる様は、見ている側も胸が痛んだ。

「大丈夫ですよ。あの子はとっても頼りになるんです。なにせ私が育てた息子ですから」

「まあ、貴女の息子さんなの？」

クイナは、冗談だと思ったのか、クスクスと笑った。

本当なただけだ。セトは、私にとっては息子も同然だ。

まあ、その辺を説明するのは難しいから、冗談と思われるでもいいや。

クイナは、ひとしきり笑うと、やがて笑いをおさめて、私をしげしげと見た。

「それにしても…良く似ていらっしやる…」

クイナの眼差しが、懐かしげに細められた。

「申し訳ないのだけど…触れてもよろしいかしら？」

クイナの言葉に私は頷く。

クイナは、おずおずと私に向かって手を伸ばした。そつと頬に置かれた手は、ひんやりと冷たかった。

何度が優しくさすられ、クイナは優しげに目元を細める。

やがてクイナは、ああ、と呟いてから、両手で自らの顔を覆った。

「申し訳ありません…。私が…。私があの時、あのお方にお伝えさえないければ、あんなことには…」

クイナが嗚咽を漏らした。

「どうか、お許しを…。この私めのせいなのでございます」

クイナは、そう言って泣き崩れた。

私はどうしたらいいのか分からなかった。

クイナは、私を誰かに重ね合わせているのだ。

漏れ聞こえる懺悔の声は、ただ痛ましい。

細い肩が震える様子が、ただ可哀想だった。

悲しみというものは、いくつ年月を重ねたところで、中々色あせることはない。そこに、後悔の念が付きまとうのならば、なおさらのことだ。

クイナは、いったいどれだけ自分をこうして責め続けてきたのだろう？

彼女が、いったいどんな罪を犯したのかなんて、私は知らない。

けれども、赦されてもいいはずだと思った。

誰にも赦されることのない罪は、こうして自らが永遠に責め続けるのだから。

この人は、今ここに生きているのだ。

生きている者は、過去ばかりを見てはいけけない。囚われてもいけない。

後悔の蘇る過去ならば、振り返るのは一瞬でもいいはずだ。

生きている者は、前を見なければいけないのだから。

前を見て、進まなければ、生きているとは言えないのだ。

たとえどんなに遅い歩みだったとしても、生者は歩き続けるべき

だと私は思う。

私は、クイナに手を伸ばした。
両手でクイナを抱きしめる。

「もういいの、これ以上自分を責めないで」
クイナの肩がびくりと震えた。

クイナが顔をあげた気配がする。

私は、彼女をしっかりと抱きしめた。

「私は…」

「もういいの、大丈夫だから」

「でも…」

「これ以上、自分を責めないで。もう十分だから」

「…ああ…サリエ様…」

クイナは、私にしがみついた。

「どうか…どうか…お赦しを…」

クイナの慟哭にも似た懺悔に、私は赦すと答えていた。

私が、赦すと言ったところで、この人の罪悪感をどれだけ軽くすることができるのかなんて、まったくわからなかった。

でも、言わずにはおれなかったのだ。

そして、祈らずにもいられなかった。

どうか、この人を赦してあげてくださいと。

6 拉致？

クイナを家まで送り届けて、私はセトを探した。

クイナがお礼を言いたいというので、セトを探して、戻ってくる約束をしてから、私はクイナと離れた。

クイナには大丈夫だと言ったが、少し心配になっていた。とりあえず、セトと離れた場所に戻る。

辺りを見回してみても、セトの姿が見つからなかった。物影で遠見の魔法を使ってみた。

やはり見つからない。

セトに限って、まさかとは思うのだが、ここはプルシャーラではなくトルバディアなのだ。お上に捕まったりでもしたら厄介だ。

私は、セトを探して、町中を歩き始めた。

街並みは、独特な景観を呈している。

縦横無尽に横切る運河を挟んで、所狭しと家々が立ち並び、しかも面白いことに、運河に面してドアがついていた。

それほどまでに運河は、この町の生活に根付いており、きつても切り離せぬ存在ということだ。

町を歩く人の数よりも、運河を船で移動する人間のほうが多い気がする。大人どころか子供までもが、小型の船を、竿を使って器用に漕いでいた。

私は、キョロキョロと首を動かしながら、町中を移動する。

アーチ状の橋のところにさしかかった時の事である。

私は、またしてもシンに良く似た人間を見つけってしまった。

「二度目が…偶然にしては出来すぎよね…」

シンもどきは私には気づかず道を折れ、視界から消える。

私は、シンに似た人物の後をつけてみることにした。

くねくねと迷路のような街並みが続く。やがて水路から遠ざかり、

シンもどきは細い路地へと入っていった。

路地の街並みは、プルシャーラのように不穏な街並みに変わってきている。

早くもセトとの約束を反故してしまいそうな予感に、恐れを抱き始めた。

これはまずい。絶対にセトにはれないようにしなきゃ。

そもそも、あいつが悪いのだ。あいつがこんなところに来たのだから。

私はシンもどきに呪いの光線を向ける。

またセトにばれて、怒られたら、絶対に呪ってやるからな。覚悟しろよ。

シンもどきは、私の視線に気づく様子もない。一定のリズムで歩調を刻み、どんどんと路地の奥へと進んでいく。

路地の壁は、いつしか煉瓦から土壁に変わっていた。

むき出しの荒い土壁は、ところどころ破損し、剥がれ落ちている。もはや、辺りには人の気配もない。

こんなところに、いったい何の用があるのだ？

そうやって、私が周囲に視線をさまよわせたのは、ほんの僅かな時間のことだった。

しかし。

その間を縫って、シンもどきの姿が、忽然と消えた。

「やば…！」

私は慌てて走り出す。

最後にシンもどきの背中を見た場所に駆け寄り、周囲を見渡してみよう。

男の姿はどこにもない。完全に見失ってしまったようだ。

「くそっ」

私は地団太を踏むが、すでに後の祭りだ。

と、その時のことだった。

私の足元に、突如として魔法円が浮かび上がる。見たことのない

種類の魔法円だ。

「何これ!？」

私は、すぐに無効化の魔法円を呼び出すが、一歩及ばない。

「うわ…!」

視界が、眩しい光によって覆い尽くされる。

そのまま私の姿は、そこからかき消されたのだった。

6 拉致？（後書き）

いつも以上に短いので、本日更新してしまいました。

7 ある男の傍白 その2 前編

トルバディア王都オリス・ラ・トーバの東部地区に位置する、アウル神殿の敷地中央部には、聖塔工・ギザラがそびえ立っている。

その聖塔西側の、少し離れた場所にある、神殿所有のとある建物地下の一室は、今、血の匂いに満たされていた。

約2月以上もの間、治療を拒み続け、こもり続ける者がいるのだ。すでに部屋には、腐臭すら漂いはじめている。

目の前にある寝台の天蓋は幕を降ろされ、中を見ることはできない。

幕を上げて、中を確かめたい衝動に駆られたが、己がそれを許される立場でないことは、よく承知していた。

祭司長に、なんとか治療を受けていただけよう説得してくれと泣きつかれては、何度も足を運んでいるが、未だかなわずにいる。

かけるべき言葉を考えあぐね、ただじつと部屋の片隅にひかえるばかりであった。

ギシリと、寝台の中で、動く気配がした。

「レッエン、そこにおるか」

「は、御前に」

主であるサヴァンは、確かに生きていた。

「外界は、今、どうなっておるか」

主は、口を開けば、こればかりを訊ねてくる。

「トルバディアが、レントと開戦しております。戦況はトルバディア優勢となっております」

既に、報告してあることだが、いつもと変わらぬ報告をするにとどまる。

「戦火は飛び火しておらぬか」

「はい」

本当は、レントがレヴトリアと攻守同盟を結び、シエルマで戦いの火ぶたが切って落とされている。トルバディアの旗色が悪く、シエルマが陥落させられるのも、時間の問題であると思われる。だが、その事実を報告することを、私はためらっていた。

「なれば、二ハ・ル・キルシャの封印はどうじゃ、変わりないか」「はい」

「封印は、守らねばならぬ。血の穢れの、一切を遠ざけよ。かの地に、何人たりとも近づけてはならぬ」

「御意」

主の声色は、疲労に満ちている。日に日に衰えてゆくようだ。

「サヴァン様、医師をおよびいたしましょう」

「大事ない。休めば治る」

「しかし」

「よいと申しておる」

苛立ちを含んだ声に、押し黙るしかなかった。

2ヶ月前のヴェルテ王の凶行は、表には伏せられている。

主の判断によるものだ。

ヴェルテ王は、先触れもなしに2ヶ月前の真夜中、突如神殿を訪れ、主とともに二ハ・ル・キルシャへと立ち入った。

二ハ・ル・キルシャは、エ・ギザラの地下にある至聖所だ。

自分の様な血塗られた者は、立ち入ることを許されぬ聖なる場所。しかし、道理を曲げてでもついてゆくべきであったと、後になつ

て悔いた。

あの日、外に控えていた自分は、エ・ギザラより、転がるように飛び出てくる主の姿を目撃することとなる。主の腹部には、刺し傷があった。

追いかけてきたヴェルテ王の血塗られた剣を目にして、何が起ったのか、すぐに悟った。

怒りにまかせて抜刀したが、主に止められた。かの地にて、血を流すことは罷りならぬと。

すぐに、血の穢れを払うようにと、主は神官たちに指示を残し、自らは、神殿の外に向かうと言い出した。

そして主は、今のこの部屋に入ると、人払いをする。以来、誰の前にも、姿を現すことはなかった。

言いようのない不自然さを感じてはいたが、事実を確かめられずにいた。

漂う腐臭が、押さえてつけている恐れを呼び起こす。

目を凝らし、幕の内側をみようとするが、明かりの灯らぬ薄暗い室内では、それもかなわなかった。

私は、いったい何をしているのだ？

己に問いただしてみたところで、答えなど見つかりはしない。

例えようのない不安ばかりが、津波のように押し寄せてくる。

実をいえば、2ヶ月前のあの日、ほんの一瞬だけ視界の隅に映った、主の奇怪な姿に、自分は引つ掛かりを覚えているのだ。

むろん、見間違いに違いないのだが、何度否定したところで、脳裏から離れてくれない。

あの日、天蓋に転がり込むように倒れこんだ主は、すぐに幕をおろし、人払いをした。その時、落とされた幕が揺れ、隙間から、僅かに中が垣間見えた。

ほんの瞬きほどの僅かな時間のことだ。

しかしその瞬間、幕の中にあつた主の姿が、自分の目には、人の姿には見えなかったのだ。

鳥のように見えた。

そう、確かに鳥のように見えたのだ。

ありえるはずもないことである。

しかし、あの姿が、払っても払っても、脳裏から消えてくれないのだ。

もしかしたら私は、過ちを犯しているのかもしれない。

だが、何を持って真とすればよいのか、もはや今の自分にはわからないのだった。

7 ある男の傍白 その2 後編

「レツエンよ、一つたずねるが、お前は15年前のあの日、確かに妹と、その子供を殺したのだな」

「…はい」

妹であるサリエを斬ったことは、未だに忘れることができない苦い記憶だ。

王家のため、そして神殿のためと思えばしたことだが、今はただ、忘れたいだけの記憶であった。

何も知らなかった、かつての自分は、当時、長兄から、妹が家を出奔したと聞かされたときには、どこか他人事のように聞いていた。妹とは年が近く、もしかしたら自分を頼るかもしれないから、何かあれば必ず報告するようにと、長兄には釘をさされていた。

そんなおり、乳母のクイナから連絡があった。

妹に頼られ、保護しているのだが、彼女が身ごもっていると。そして、妹は子の父親の名を、決して告げない。どうしたらよいのかと。

正直、自分でも、もてあましていた。

妹の愚かさに、ただ腹が立った。

名を明かせぬような男の子供を、宿した馬鹿な妹は、捨て置こうと、自らの心は定めていた。

しかし、それはかなわなかった。

故意に、父親捜しをしたわけではなかったのだ。

だが。

城に上がった折、偶然会ったギエンの態度から、私は事実を察してしまった。

当時、侯爵家の娘の、突然の出奔の話題はもちきりで、多くの貴

族の知るところとなっていた。

おかげで、その日、何人ものうわさ好きな貴族に捕まっては、興味本位な下世話な探りを入れられ、辟易していた。

だが、ギエンは違った。ギエンだけは、サリエの居場所を聞いてきたのである。

試しにカマをかけてみたら、まんまとかかった。

子の父親は、ギエンだったのだ。

そうになると、話は変わってくる。

仮に、妹が宿す子供に、刻印があるとしたら…。

王家の忌子は、人知れず葬らねばならないのだ。

それは、ウトナの予言に語られる、最悪の結末を回避するためには必要なことであるのだ。

クイナには、赤ん坊が生まれた時に、背中 of 印の有無を報告するように言い置いた。

まさか、とは思いつつも、時を待っていた。

本来ならば、王家の血筋を、神殿の管理できぬ野に放つわけにはいかない。有無を言わず殺すことこそが正しかったのだろう。

だが、もし刻印がないのなら、私は見逃してやるつもりでいた。

それが自分のできる、妹へのせめてもの手向けであったのだ。

しかし、事実は。。。

今思えば、あれが己の定めというものであったのだろう。

そして妹の、延いては赤ん坊の定めでもあったのだ。

美しく、優しい妹だった。

王家の血筋を宿すことさえなくば、あのように死ぬこともなかったはず。

そして私も、血を分けた妹を手にかけることもなかったはずなの

だ。

だが、妹は王家の血を宿してしまった。

それが、全ての過ちのはじまりだった。

妹の子である赤ん坊も、自らの手で殺したわけではないが、殺したも同然のことだろう。

例えば、あの獣が殺さなかったとしても、赤ん坊が森の中を生き延びるすべなど、ありはしない。

知っていながら、私は子供を捨てたのだ。

あの赤ん坊は、面差しが妹に良く似ていた。

そして、父親譲りの青い目は、どこまでも澄んでいた。

血塗られた自分に、剣を振り下ろすことを、躊躇わせるほどには。残るはギエンだな。居場所は、まだ掴めぬのか」

「はい」

「あやつの始末を、早うつけよ」

「御意」

思えば、自分の歩んだ道は、上からくだされるままに進んだ道だった。

侯爵家の三男として生まれ、身をたてるべく騎士を目指し、御前試合でサヴァン様の目にとまり、乞われるまま神殿の聖騎士となった。

生まれてからずっと、神殿の教えのもと、王家に仕え、サヴァン様に仕えて、命じられるままにただ動いてきたのだ。

神の教えこそ正義と育てられてきた。

そこに否やを挟む余地など、ありはしなかった。

しかし今、己の足元の不確かさに、恐れを抱いていた。

己の拳を強く握りしめる。

例えば、己の進んだ道が間違いであったとして、今更、どうすればいいというのだ。

サリエも、その子供も、もう戻ってきはしない。

自らの罪を認めるには、あまりにも過ちが重すぎた。

自分には、もはや前に進む以外に、道はないのだ。
例えその道が、血塗られた道であろうとも。

ただその前に…と思う。

主の、あの奇怪な姿の真偽だけは、確かめるべきであった。

鳥に見えた、あの時の主の姿を思い出すと、自らの背筋を這いのぼるものがある。

アウル神の代理人たる大神官が、魔物であるやも知れぬなどと…。

もしそれが事実であつたら、私はどうするべきなのか？

その問いに答えてくれるものは、誰もなかった。

1 ついた場所は…

いったいここは、どこだろう？

周囲を見渡し、私は首を傾げた。自分がいるには、あまりにも不似合いな場所だ。

ものすごく天井の高い、だだっぴろい広間に、私はいた。

豪華なアーチ状の天井を、太い何本もの柱が支え、壁には金銀で、美しい細工が施されている。

天井には、巨大な宗教画のような絵がいくつも描かれ、よく見れば、物語のように続いていた。どうやら、二枚の翼を持つ男が主人公のようだ。

私が、何故こんなところにいるのかは不明だった。

私は、ついさっきまでウルザにいたはずなのだ。なのに、シンに似た男の後を見つけ、急に現れた魔法円に捕まると、気が付いたらここにいた。

とりあえず、体には傷一つない。

あの魔法円は、見慣れないものだったが、結果から見れば、移転の魔法円だったのかもしれない。

「どこよ、ここ？」

私は立ち上がり、周囲を見回してみる。

辺りには、人の気配はまったくない。

閑散とした静けさだけが、支配していた。空気までもがひんやりと冷たい。

どこか、纏わりつくような重たい空気が、その場を満たしている。私は、一歩足を踏み出す。

そこにはふかふかの、踵が沈み込むような、豪華な絨毯が敷き詰められていた。

私は上を向いたまま歩き続け、天井に描かれた絵画を目で追う。すると、突然遠くに足音が響き始めた。絨毯のない廊下を、いく

つもの靴が駆け抜けるような音だ。

私は急いで周囲を見回し、柱の陰に隠れようとするが、間に合わなかった。

部屋の正面についていた、一際大きな両開きの扉が開け放たれ、兵士たちが一斉になだれこんできた。

「いたぞ！ 捕える！」

背の高い、若い逞しい男が、私の姿を見つけると恐ろしい形相に変わり、怒りにそまつた不穏な声でそう叫んだ。

なんだ？ なんだ？ 私は何にもしてないぞ？

いや、無断でこの部屋に入ったかもしれないけど、不可抗力だし、悪いことしてないし、出たほうが良ければ、今すぐ出ていくし。

広間になだれ込んできた兵士によって、私はすぐに取り囲まれた。

「女か！？ 貴様、何者だ！？ 何故あのような場所にいた！？」

背の高い男が、剣を突き付けて私に問うた。

「え？ あのような場所って？」

「黙れ！ 質問にだけ答えろ！」

鋭い剣を、鼻先に突き付けてくる。

「ちよつと、落ち着いてはなしましよ。危ないなあ。ええと、名前ね。名前を答えたらいいのね。一ひとです」

「何故、王室礼拝堂にいた」

「は？ どこそれ？」

「とぼけるな！」

剣を肩におかれ、ピタリと首筋につけられる。ヒンヤリとした鉄の感触が、男の本気を物語っていた。

「ほんとに知らないし…ここがどこなのかも分からないんですけど

…」

「なんだと？」

男が探るように私を見る。

烈火のごとく燃え上がっていた、男の目の熱が、わずかにおさまる。

おそらく、真実を見極めるためであろう。

私は、その強い眼差しを、ただじつと見返した。

後ろ暗いことなんて何もなし、本当にここがどこなのかわからないのだ。自分の潔白を証明するには、それしかない。

やがて男が、首筋から剣をどけた。

相変わらず警戒するように剣を構えてはいるが、私の言葉に嘘がないことがわかったのだろう。首筋からは剣をどけたのだった。

「では、問うが、なぜお前のような者が、宮殿大広間にいる？」

つまりここは、どこかの宮殿で、その大広間ということか。

どうしよう。正直に答えたら、また剣を突き付けられそうだ。

「どうした、答えられぬのか」

男の目が眦められる。

「ち、違う、違います。だってわからないんだもの」

私は慌てて答える。

「わからないだと？」

男の声が低くなる。

思いつきり疑われてるし。

困った。困ったぞ。

私は大きいため息を吐いた。

この状況で嘘なんてついたって、仕方ないか。ここは腹をくくろ
う。

なるようになれ、とばかりに私は男を見た。

「本当に分からないんです。さっきまでウルザにいたんですけど、

気が付いたら急にここにいて…あ、ウルザってトルバディアの西側

の方にある町なんですけど」

「…知っている」

「本当なんです…信じてくれてないみたいだけど…」

男の眼差しが、胡乱な者を見る者のような目になっている。

「ウルザからここまで、馬で何日かかると思う？」

「…さあ？」

私が首を傾げると、男の眼差しが細くなった。

「だって、さつきから言ってるじゃない。ここがどこかわかんないのに、距離聞かれたって知るわけないわよ！」

男は、私の態度に嘘がないことを見て取ったのか、私に向けていた剣を、自分の肩に担ぎ上げると、呆れたような顔をして、私を見下ろした。

「では教えてやろう。ここはオリス・ラ・トーバの王宮だ。ウルザから馬でどんなにとばしたところで、半月はかかる距離にある。さつきまでウルザにいたやつが、一瞬でここまでくることは、到底無理だということだ」

「え！？　ここオリス・ラ・トーバなの！？」

「ふん、嘘をついているわけではなさそうだが、お前はここがちとイカれているようだな」

男はそう言っつて自分の頭のかめかみを、指で軽く叩いた。

「はあああ！？」

私は思いつきり眉根を寄せた。

「私、頭なんておかしくないし。あんたの方こそ、頭が固いんじゃないの？　見るからに筋肉が詰まっつてそうだもんね！　世の中にはね、魔術つてもんが存在するの。私はその移転魔法でここに強制的に連れてこられたの！」

私は腕を組んで、男を睨み返した。

ほう、と言っつて、男は眼を細める。

こめかみがピクリと動いた。

「聞こえなかつたか？　ここは、王宮だ。ここでは魔術が一切使えない。封魔の術が施されているからな」

「え！？　嘘でしょ！？」

私は慌てて魔法円を呼び出してみるが、確かに現れなかつた。

「うそ……」

私は茫然と立ち尽くした。

「そういうわけだ」

男が、勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

私は男を見上げて、ヘラツと笑って見せた。

男は、張り付けたような笑顔を浮かべながら、部下にこう言った。

「捕まえて、牢屋にぶち込んでおけ」

やっぱり、そうなるよな。

私は槍で追い立てられ、牢屋にぶち込まれることになったのだった。

2 囚人の主張

「お前も、大概ずぶとい女だな」

私を捕まえた背の高い男ラウシユは、辟易したように私を見下ろしていた。

私はと言えば、牢屋の冷たい鉄格子を掴んだまま、ラウシユを睨みかえしている。

「私は、断固改善を要求する！ このご飯はまずい！ 最悪だ！ 量も少ないし、あれっぽっちゃ、腹の足しにもならない！ とにかく増量だ！ 私は増量を要求する！」

ラウシユは、はぁーと長い溜め息をつき、額を押さえた。

「それが囚人のとるべき態度なのか？ 囚人なら、囚人らしく、少しはおとなしくしてろ」

「おおっと、その発言は、私の人権問題にかかわるぞ！ しかも私、無実の罪だし！ 冤罪なんだからね！ 後で、吠え面かくなよ！」

私は、ビシリとラウシユを指さしてやった。

「…本当に口の減らない女だな」

「一個しかない口どうやって減らすのよ？ 言ってみなさいよ。さあ、さあ」

ラウシユが笑顔になり、額に青筋を浮かべた。

「ああいえばこう言う。…お前、うるさい口の黙らせ方って知ってるか？」

「まさか!？」

私がラウシユを見ると、ラウシユがニヤリと笑った。

私は両手で自分の体を抱きしめる。

「きゃー、変態がいる！ 変態が私を手籠めにしようとしている！ 誰か助けて〜！」

私は、牢屋内で思いつきり叫んだ。

「おい！ 誤解を招くようなこと騒ぐな！ 違うぞ、拷問だ！ 拷問だぞ！ 痛い目を見ると言われれば、お前だって黙るだろう！」

ラウシユが焦ったように言った。

獄吏が何事かと顔をのぞかせると、ラウシユは言い訳をはじめ。
「違うからな、こいつは頭がおかしいんだ。俺は、こんな下品な顔だけの女、好みじゃない。しかも、まだガキだ」

あゝ楽しい。

ラウシユをいじっていると、暇も潰せる。

ラウシユは、ハールマーに似ているところがある。お人よしなところなんて特に。

「本当にお前は……」

ラウシユは、苦虫を潰したような顔になった。

「正直に白状したら、放免になるように手をまわしてやると言っているのに、何故本当のことを言わない」

「言ってるのに信じないのは、あんたのほうでしょ」

「信じられないから聞いているのだ」

ラウシユが、まっすぐに私を見据えた。

何度この話を繰り返したことだろう。

私がこの牢屋に捕まってすでに2日が経つ。

セトのことも心配だが、皆にかけている心配の方が、たぶん上だろうから、私も胸が痛んだ。

でも、仕方がない。他に真実などないのだ。

嘘をついたって、きつとラウシユにはばれるはずだ。

私は、信じてもらえるまで、言い続けるしかない。

「私、嘘は言っていないもの」

「強情な……」

ラウシユは頭を掻きむしる。

ため息を吐くとドカリと座り込み、壁に背中を持たせかけた。

「今日は、本当のことを聞くまで、ここを動かんからな」

「のぞむところよ」

私も座り込み、鉄格子に背中をあずける。

「何をしに王宮に忍び込んだのだ？」

「不可抗力」

「どうやって忍び込んだ？」

「移転魔法」

「……どこから来たのだ？」

「ウルザ」

「……」

「……」

「……もう一度聞くぞ、何が目的で王宮に忍び込んだのだ？」

「だから、不可抗力だってば。私の意思とは関係なしに、無理やり連れてこられたの」

私は振り返り、ラウシュを見つめた。

「ねえ、信じてよ」

私は、言葉を重ねる。

ラウシュが、本日何度目かになるため息を、再びついた。

「知り合いの魔道士を連れて、大広間を調べてみた。だが、術の痕跡は見つからなかった。お前が、嘘を言っているとも思えないが、事実を見れば、お前に分がない」

「調べてくれたの？」

「ああ」

やっぱりラウシュはいいやつだ。

「でも、術の痕跡なしか……あの魔法円、見たことない術式だったしな……」

逆五芒星の紋なんてはじめて見たし……。

魔法を使う時に具現化する魔法円の中央部には、様々な紋が描かれている。その中央部の紋が、逆さの五芒星になっている魔法円を見たのは、はじめてのことだった。

あれだけ豊富に揃っている、イムルードの蔵書の中にも、載ってはいなかったのだ。

「お前は、本当に魔道士なのか？」

「一応、そのくくりになるわね」

「だが、この封魔の術のもとで、魔術の発動はできないのだろうか？」

「そうなのよ、困ったことに。おかげで帰れないの」

牢屋に入れられてからも、簡単な炎の魔法円を何度も呼び出そうと試みたが、一つも発動してはくれなかった。

「では、なぜ移転魔法など使えたのだ」

「そんなの知らないわよ。あたしが作った魔法円じゃなかったんだもの。わけわかんないうちに急に発動して、気がついていたらあそこに移転させられてたの」

「そんなことは、よくあることなのか？」

「はじめてよ」

私は視線を落とした。

このままでは埒があかない。

セトとナンに会いたかった。

2人を思い出すと、涙が出そうになる。セトとこんなに長い間離れているのは、はじめてこのことだ。

早く無事な姿が見たかった。

急に、武骨な手が頭の上へのせられた。

見れば、鉄格子の隙間から、ラウシユが手を差し入れている。

「…里心がついたのか。…俺も、お前みたいな子供を、こんなところに入れておきたくはないのだ。だが、今のままでは、ここから出してやることもできない。お前の身の潔白を証明できる何かがないればな」

「…だって、証明できるものなんて、私、何も持ってない」

私は俯き、両膝を抱え込んだ。

武骨な手のひらが温かい。

「他に何か思い出せることはないのか？」

「思い出せること？」

私は、記憶を引っ張り出し、何かないかと考えをめぐらす。

「じゃあ、質問を変えてみよう。何故こんなことになったのだ。なんで、移転魔法のある場所になんて行ったのだ」

「それは、シンを追いかけて…」

「シン？」

私は、いったん口を閉じた。

まさか、魔族であるとはいえない。そこだけは隠さねばならないだろう。

「友人の知り合いで、一度だけ会ったことがあるの。よく似た人を見かけたから、好奇心でおいかけてみたの」

「それで気がついたら王宮にいたというのか？」

ラウシュの言葉に、私は頷く。

ラウシュが、フウと長く息を吐いた。

「ということだ、どう思う？ ナサレー」

ラウシュが、ドアのほうを見て声をかける。

するとドアが開き、男が顕れた。

細身の、整った顔立ちをした若い男だ。

男は、感情のともらない青い目を、私に向けてじっと見つめる。

私と同じ、青空のような色の目だ。

全てを、見透かそうとするかのような視線に晒され、私ができることといえば、ただその目を見返すばかりであった。

3 仮面

「確かに、嘘を言っているようにもみえぬが、信用に足るとも思えぬ」

ナサレーと呼ばれた青い目の男は、私を見下ろすとそう言った。

「嘘言っていないのに、何で信用できないのよ」

私は、ナサレーを睨み返す。

「聞けば、プルシャーラの出だそうだな」

冷たい眼差しの内に、侮蔑の色が灯った。

カチンときた。

「そうよ、悪い？」

「下賤なものは、口のきき方も知らぬと見える」

「ほーう、下賤な者ねえ。そりゃあ悪かったわね、お坊ちゃま」

それまで無表情だったナサレーのこめかみが、かすかにピクリと動いた。

冷たく凍りつくような眼差しをよこしてくるナサレーを、私は、睨み返してやる。

みるからに、可愛げのない若造だ。

ナサレーの方でもそう感じているのだろう。眼差しが、やけに鋭い。

「なるほど、身分の高い、坊ちゃまにしてみたら、プルシャーラの出である下賤な輩は、信用がならないと、そう言いたいわけね」

ナサレーは、相変わらず無表情なまま私を見下ろしている。

私はそこまで言っつて、ニッコリと極上の微笑みを作っつてやった。

「人をはかるための物差しが、身分だけだなんて、あまりの見識の広さに、思わず笑いが止まらないわ」

ホホホホと笑っつてやると、ナサレーの纏う空気が、不穏なものに変わった。

ラウシュが、天を仰ぎ、ため息とともに自分の目を片手で覆う。

「とんだ箱入りのお坊ちゃまね。可哀想に」

「小娘、口のきき方には気をつける」

ナサレーが、低い声で言った。

「あんたも、口のきき方には気をつけるのね、私の名前は小娘じゃないわ、一よひと」

私はナサレーとにらみ合う。

ナサレーが、口の端を片方だけ持ち上げ、凶悪な笑顔を向けてきた。

「小娘、お前は己の身の程を知ることできぬほど、愚かなようだな。貴様は、ただの虜囚だ。お前の命は、私の手のひらの上にあるのだ」

私は、大仰にため息をついてみせた。

「ほんとうに可哀想なお坊ちゃまね。下手に身分とか持っている、そういう風に錯覚しちゃうのよね。本来あんたみたいな若造が持っている力なんて、たかが知れてるのに。権力の一部に組み込まれ、その権力を行使していると、己の身の程が分からなくなっていくの」

「…なんだと？」

ナサレーの眼差しが、明らかな怒りの色に染まる。

「あんた自身の本来の力なんて、私の持っている力と、なんら変わらないってこと。権力を使って、権力に使われているから、自分が尊いなんて馬鹿な錯覚おこしているだけ。あんたと私は、対等な人間よ。私の命は私の物。あんたなんかの物じゃないわ」

ナサレーはギリと唇を噛んだ。

「ラウシュ、この小娘を牢から出せ！」

ナサレーが声を荒げた。

「何をやる気だ」

ラウシュが、口を開く。

「斬って捨てる」

「おいおい、いくらなんでも、そりゃないだろう」

「あら、私はわかるわよ。人は、凶星を指されると怒るものなの」

ラウシュが、ヒクリとひきつった笑いを浮かべた。
ラウシュの向こう側にいるナサレーの周囲からは、恐ろしいほどの冷気が漂っている。

「お前、本当に怖いもの知らずだな。俺でも庇いきれんぞ」

「ふん、上等だし！ 勝負なら受けてやるし！ 早く牢屋からだせ！」

私は、鉄格子を掴んで揺すった。

「いいから黙っている。…いや、頼むから黙っていてくれ」

せつかくとりなしてやろうとしているのに、お前がその苦労を無駄にしてどうすると言つて、ラウシュが、ほとほと困り果てたような声を上げた。

「そう言うなら、頼まれてやらないこともないけど」

前半部分の命令形だけだったら、絶対に言うことなんて聞いてやらないけど、お願いされるなら話は別だ。

ラウシュが、はぁーとため息を吐いた。

「こんな頭の悪い小娘が、大それたことなど、できるはずもなからう。放免にしてやってはもらえぬか。こんな環境、子供にはよくない」

この場合、子供とは私の事だろう。ちよつと屈辱だ。

「ラウシュお前は甘い。だいたいこんな育ちの悪い女には、教育と反省も必要だ」

ナサレーの苦々しげに寄せられる視線に、私の導火線は再び着火した。

「偏った教育なんて、私には必要ないし。それに、反省するのも、勉強しなおすのも、必要なのはあなたの方なんじゃないの？」

ナサレーの纏う空気が、再び色を変えた。

「お嬢ちゃん。頼むから、これ以上、挑発するのはやめてくれ」

ラウシュが、私の前に立って、ナサレーの視界から私を隠す。

「ナサレー、お前も少し頭を冷やせ。こんな小娘の言葉、聞き流してやれよ」

ナサレーが、ギロリとラウシュを睨んだ。

ラウシュが、それを見て、可笑しそうに笑う。

「お前が、そうやって平静を失うところ、久しぶりに見たぞ。それこそガキの頃以来だな」

ナサレーが、息をのんだ。

すぐに表情を消す。冷たい能面のような顔を、再び張り付けた。

ナサレーは踵を返す。

「その小娘、しばらく放っておけ」

そう言い置くと、ナサレーは再びドアの向こうに姿を消したのだ。
った。

ラウシュは、ナサレーの背中を見送りながら、困ったように首の後ろを掻いていた。

「まったく、とんだはねつかえりだな」

そう言いながら、ラウシュは私を振り返ったが、表情はとても嬉しそうに笑っていた。

私は、そんなラウシュを、不思議そうに見上げる。

ラウシュは、何かを思い出すように目を細めた。

「ナサレーが、ああやって仮面を外して、本心を吐きだしたのを聞いたのは久しぶりだ」

ラウシュは、再び鉄格子の隙間から手を差し入れ、私の頭をクシヤリとなでた。

「お前のおかげだな。あいつも、まだ心を失ってはいなかった」

そう言ったラウシュの表情は、少しだけ陰っていた。

「そんなの当り前よ。人間が心を失うわけないじゃない」

ラウシュは、私の言葉に驚いた表情をした。

「もし、心を失っているように見えたなら、それはあんたが見落としてるだけよ。ちゃんと見てあげなさいよ」

ラウシュは、私の言葉に、再び驚いた顔になった。

やがて、優しい笑顔を浮かべる。

「…そうか…俺が見落としていたのか…」

「そういうこと」

お嬢ちゃんには、かなわないと言って、ラウシユは、声を上げて笑った。

笑いをおさめると、つきものが落ちたような、晴々とした顔になる。

そのまま踵を返し、ドアへと向かった。

ドアの取っ手に手をかけて、私を振り返ると言った。

「食事の件は、改善するように言っておく。それから、もう少し辛抱してくれ、悪いようにはしない」

その後届いた夕食は、私の胃袋を満足させるだけの、質と量を伴ったものに変わっていた。私は超大満足だった。

4 王都の惨劇 その1 (前書き)

注意報発令中

微妙に（ほんとに大したことはないのですが）、大人な感じが入っております。

その手の表現が苦手な方、見たくないという方、回避願います。
大丈夫という方のみお進みください。

4 王都の惨劇 その1

真夜中の事だった。

牢屋の外が、突然騒がしくなった。

夜には滅茶苦茶弱い私だが、あまりの騒ぎの大きさに、さすがに目が覚めてしまった。

外からは、悲鳴や、怒号と言った、物騒な物音が、たくさん聞こえてくる。

眠い目をごしごしと擦りながら、私は起き上がる。

ここは隔離されている独房なので、周囲に人間は一人もいない。

けれども、ドアの外側では、私と同じ囚人が発しているのであるう叫び声が、漏れ聞こえてきた。

「おい！ 出せ！」

「誰か、助けてくれ！」

「出しゃがれ！」

「俺たちを、見殺しにする気か！」

何人もの必死な声が、鉄格子を叩く音とともに聞こえてくる。

言葉の内容が、切羽詰っていた。

外では、何が起こっているというのだろうか？

ドアで隔てられた内側であるこの場所では、向こう側の出来事の何一つを知ることはいできない。

「ぎゃあああ！」

突然、男の断末魔と思われる叫び声が聞こえてきた。

私は思わず後ずさった。

ドアから一番遠い壁に、背中を張り付ける。

よくない予感がした。

「助けてくれええええ！」

「誰かあああ！」

必死の叫び声の後に、悲鳴が続き、ゴリゴリとかボキボキとか、固いものを折ったり潰したりするような音が聞こえてくる。

すぐに、ドアの下部の隙間から、鮮血が一筋、二筋と流れ始めた。むっとするような生臭い、独特の血の臭いが、辺りを満たしはじめた。

次いで、ドアをガリガリと引つ掻くような音がした。

時折、何かがぶつかってくるような音も聞こえ、ドアの蝶番が、たわみはじめた。

ぶつかる音は、どんどん強くなり、たわんだ蝶番が、突然あつけなく壊れた。

ドアが内側に倒れてくる。

私は、隔たりのなくなつた、入口の向こう側にいた生き物を見つめた。

赤い色をした四足の獣だ。

獣は悠然と扉の上を歩き、私に近づいてくる。

『美味ソウナ間ノ子ダナ』

獣が舌なめずりをした。

『…なんで死魔アジールがこんなところにいるのよ…』

『ホウ…古代語ヲ解スルノ力』

獣がそう言つと、獣の体は突如光り輝き、目の開けていられないほどの眩い光を放つ。

獣の輪郭がぼやけ、容を変え始めた。

獣の姿が、人型に変わっていく。

光がおさまると、獣の姿は、真っ赤な髪を持つ、美しい男の姿に変わっていた。

『間の子が、何故こんな場所に捕らわれている？』

赤髪の男が、残忍な笑いをうかべながら歩み寄つた。

私は後ずさるうとするが、背中が壁で、それ以上さがることはいかない。

赤髪の男は、鉄格子の前で一度足を止め、手を翳すと、魔法円を

呼び出した。

円の中央から炎が放たれ、鉄格子を溶かす。

私は驚愕に目を見開いた。

なんでこいつは、ここで魔術が使えるのだ？

赤髪の男は、私の目の前に立つと、片膝をつき、私の顔を覗き込んだ。

残虐そうな微笑みを浮かべると、手を伸ばして、私の頬に触れる。頬が、チリと痛んだ。どうやら、鋭い爪で切り傷をつけられたようだ。

頬をつたい落ちる、血の感触がする。

赤髪の男が残忍な表情を浮かべたまま、壁に両手をつく。

ゆっくりと顔を寄せ、私の頬をつたう血を、ねっとり舐めとった。

『美味しいな……』

耳元でささやかかれ、私の体は、ガタガタと震えだした。

耳の奥で、うるさいほどの警鐘が鳴り響いている。

魔術を使えない私に、死魔に対抗するすべはない。

ここで、この死魔に食べられてしまうのだろうか？

ぼんやりとそう考えた。

みんなの顔が、脳裏に思い浮かぶ。

会えないまま、こんな場所で死ぬのだろうか？

それは嫌だと思った。

私には、まだやらなければならないことがあるのだ。

ナンを助けなければ。

そうだ、ナンを助けなければならないのだ。

そう思ったら、体の震えが止まった。

こんなところで、こいつにおとなしく食べられてやる義理などない。

私の首筋に顔を埋め、噛みつき口を開いた赤髪の男の肩を、思いつき押しやってやった。

しかし、びくともしなかった。

逆に、赤髪の男の腕が腰に絡みつく。

『おとなしくしている』

赤髪の男が咳きながら、私の後頭部の髪を鷲づかんで、無理やり上向かせる。

私は、痛みに顔をゆがめた。

赤髪の男は、間近な位置で、色を含んだ声でささやく。

『実を言えば、腹は大分満たされているのだ。別な飢渴を満たしてもらったのも一興かもしれない』

うつとりするような笑顔を浮かべ、顔を近づけてきた。

私の体は、再び震えはじめた。

恐ろしさと一緒にせり上がってくるのは、嫌悪感だった。

徐々に近づいてくる赤髪の男の、色のもった眼差しが、様々な恐怖感呼び起こす。

逃げ出したい衝動に駆られた。しかし、私の体は、思うように動いてはくれない。

赤髪の男が間近に迫り、唇に触れそうになったその瞬間の事だった。

赤髪の男は、急に動きを止め、顔だけで背後を振り返ると、片手を伸ばし、手のひらを入口のほうに向けた。

入り口は、赤髪の男が影になって、よく見えない。だが、誰かが入ってきたようだった。

魔法円が、赤髪の男の手のひらの前に呼び出される。

魔法円の中央から炎が繰り出された。しかし、無効化の魔法円が入口の方で呼び出され、炎を相殺しようとする。

だが、炎の方が強かった。無効化の魔法円の術式が乱れ始める。

「ラウシュ！」

突然叫ばれた誰かの声と同時に、入り口の方から、ラウシュの姿が顕れた。

無効化の円をくぐって、ラウシュが突進してくる。

大ぶりの剣を、赤髪の男をめがけて振り下ろした。

赤髪の男は、自らの前腕でその攻撃を受け防いだ。

ラウシュの剣が腕に食い込み、血が流れ落ちるが、赤髪の男は、顔色一つかえない。

赤髪の男は私の体を離し、もう一方の手のひらをラウシュに向けた。

「やめて！」

私は、とっさにその腕をつかんで叫んでいた。

おかげで、一瞬だけ僅かな隙が生じる。

ラウシュは剣を引き抜き、横に薙いだ。

赤髪の男が横に跳んで躲す。

ナサレーが、ラウシュと赤髪の男の間に飛び込んできた。

両手を突き出し、魔法円を具現化する。

風の魔法円だ。

ナサレーの呼び出した円の中央から、風魔法が放たれる。

赤髪の男は、それをかわした。

ラウシュが私の手を引くと、私の体を肩に担ぎ上げる。

「先に行ってるぞ」

ラウシュの言葉に、ナサレーがこちらを一瞥し、小さく頷いた。

ラウシュが、私を担いだまま、入り口を飛び出した。

私は、落とされないように、ラウシュの首に、ギュッとしがみついたのだった。

5 王都の惨劇 その2

ラウシュに担がれ、ドアの外に出ると、通路のあちこちには、獄吏のものと思われる、無残な遺体が散らばっていた。

通路に面した牢屋の中にも、引き裂かれた遺体が、今まさに血を流し続けている。

そのほとんどが、原型をとどめていない。

鼻をつく生臭い臭いと、目に飛び込んでくるむごたらしい光景に、私の体は再びガタガタと震えだした。

「大丈夫だったか？ 来るのが遅くなつてすまなかつた」

ラウシュが、気遣うように私を見る。

私は、言葉を出すこともできなくて、ラウシュの首にギュツとしがみついた。

ラウシュが、安心させるようにポンポンと私の頭を叩く。

私は、安堵のために、思わずちよつとだけ涙が出てしまったのだ。

建物の外に出ると、ラウシュは私を地面に降ろした。

「ナサレーは大丈夫なの？」

私の言葉に、ラウシュは笑った。

「トルバディア国一の魔術の使い手だ。あいつに斃せない魔物なら、他の誰でもかなわんさ。それに、魔術を使うのに、俺たちが側にいたら、かえつて邪魔なだけだ」

ラウシュの言葉と同時に、爆音が聞こえた。

見上げると、建物の一部が内側から破壊されているところだった。

「おー、派手にやつてるな」

「ナサレーが？」

私問いかけに、ラウシュが頷いた。

「なんでナサレーたちは魔術が使えるのよ？ 封魔の術はどうなっ

ているの？」

ラウシュが、僅かに首を傾げる。

「俺も詳しくは知らんが、何でも魔術の種類が違うそうさ。今使っているあれは、特殊なもので、ウトナの魔法と呼ぶらしい」

「古代の…？」

そういえば、以前空間を操る死魔に言われたことがあった。古代の魔法が使えるのかと。

つまり、あの時の魔術は、古代の魔法ということか。

再び爆音が聞こえ、何かが上から降ってきた。

崩れた壁がいくつも降り注ぎ、土煙が舞い上がる。

コホコホと咽ながら、土煙に目を向けると、そこには赤髪の男が立っていた。

ラウシュが、私の肩を引き、自分の背後に庇う。

ラウシュが、剣を目の前に構えた。

『おい、それは俺の獲物だ。返してもらおう』

言って、赤髪の男が、無造作に手のひらをこちらに向けてきた。

魔法円が浮かび上がる。

私はダメもとで魔法円を呼び出した。空間を操る死魔と戦ったときに使った、無効化の盾だ。

すると、巨大な魔法円が、私の目の前に具現化した。

ラウシュと、赤髪の男の目が、驚愕に見開かれる。

「よかった、正解だったわけね」

赤髪の男の呼び出した魔法円から飛び出してきた炎の魔法は、私の盾によって完全に防がれる。

久しぶりに使った魔術の感触に、私は、猛烈に感動していた。ほんとによかった。

これで、どうやらラウシュたちのお荷物にはならなくても済みそうさ。

私は、チラリと後ろを見る。

背後には、後から合流したナサレーの姿があった。

「お前、何者だ…？」

背後から現れたナサレーが、私にそう問いかけてきた。

私は、ナサレーをまっすぐ見返す。

「一よ。それ以外に、答えようがないわ」と。

赤髪の男が、ギリリと唇を噛んだ。

『間の子よ。思い上がるな』

赤髪の男が、両手を突き出す。

巨大な魔法円を呼び出しはじめた。

「まずいぞ、さがれ」

ナサレーが、ラウシュにそう言いながら、無効化の魔法円を呼び出す。

私は両手を突出し、赤髪の男を真似て、同じ魔法円をよびだした。「力比べよ。女の子の唇を、無理やり奪おうなんてする下種は、絶対に許してやらないんだから」

私の目の前に、赤髪の男と同じ紋の巨大な魔法円が浮かび上がる。さっきまでの仕返しだとばかりに、私は、思い切り特大のやつを呼び出した。

互いの円の中央から、巨大な炎の渦が飛び出てくる。

炎と炎が衝突し、物凄い風圧が生じた。

ラウシュとナサレーが、腕を上げて風圧から顔を庇う。

私は、術式が乱れないように固定する。その上で、もう一つ風の魔法円も、重ねて呼び出した。

赤髪の男の目が、驚愕に見開かれる。

『ばかな…』

赤髪の男の、魔法円の術式が乱れ始める。

「消飛べ！」

炎の魔法に、風魔法が加わり、爆発が怒る。

赤髪の男の魔法円が、もろくも崩れ去った。

赤髪の男は、憎々しげな表情をして、舌打ちをする。そして、魔法円が消え去る前に、姿を消し去った。

まんまと逃げられてしまい、私は悔しさで、地団太を踏んだ。

「あとちょっとだったのに！ もうちょっとで、あの変態を退治できたのに！」

私は、両手を握りしめ叫んだのだった。

「超、悔しい！」と。

6 王都の惨劇 その3

赤髪の男が消え去った後、ナサレーが厳しい眼差しを私に向けてきた。

「ヒトとか言ったな」

ナサレーが、腕を組んで私を見下ろす。

「お前には、聞かねばならぬことが、色々あるようだ」

ラウシユの表情も心なしか強張っている。

「どうやら、古代の魔法ウトナとやらを使ったおかげで、不審者に逆戻りしてしまっただろうだ。

さて、どうしたものか。

「お前は、魔道士だそうだが、ただの魔道士が、ウトナの魔法を使えるはずもない。お前は何者だ。何の目的があつて王宮に侵入した」

ナサレーの眼差しは冷たい。

「目的なんて、何も無いわよ」

「そのような戯れ言、信じられると思うのか」

ナサレーの眼差しが、剣呑なものに変わる。

私は、フウと息をついた。

「じゃあ、どう答えたら、信じてもらえるのよ。私は、嘘なんて言つてないの。目的があつてここに来たわけじゃないの。気がついたら、ここに来ていたのよ」

「では、何故ウトナの魔法を使えることを黙っていた。何故、牢におとなしく捕まったふりなどしていた？」

「ふりなんかしてないわよ。悪いけど、いまだにどの魔法が古代の魔法なのか、私にはよくわかってないの」

「そんな馬鹿な話があるか」

「本当よ。とりあえず、さっき私が使えた魔法と、あんたが使つていた魔法、それから死魔アジールが使つていた魔法が該当するってことはわかつたけど、他には

「

「アジュール？」

私の言葉を遮り、ラウシユが、怪訝な顔で訊き返してきた。

「ああ、違った。魔物よ、魔物の事」

そう答えると、ラウシユの表情が、より厳しいものになった。

「つまり、お前は、あの魔物と知り合いということか？」

ラウシユが、眉根を寄せて訊ねてくる。

「違うわよ！ 知り合いなんかじゃないわよ」

話の雲行きが、どんどんと怪しい方向に向かっていった。

弁解すればするほど、深みにはまっていく。

「では、何故名前を知っている？」

ラウシユの声が、硬質なものになっていった。

「あれは名前じゃないの。魔物のことを古代語では死魔と呼ぶのよ」

「ウトナ語だと？ 俺は聞いたことがないぞ」

ラウシユの目が眇められる。

なんだか、悲しくなった。

ラウシユみたいな人柄の人間に、不審者扱いされると辛いものがある。

「ナサレー様！」

そこに、突然、第三者があらわれた。

見れば兵士が走り寄ってくるところだった。

兵士はナサレーに近づき、何かを耳打ちした。

ナサレーは、一度考えるように顎に手を当ててから、ラウシユを

「セルヴィ監獄の次は、エ・ギザラがきな臭いようだ」

ナサレーの言葉に、ラウシユが目細めた。

「天空の楔？」

私は聞き返したが、ラウシユもナサレーも、厳しい表情で私を見

「神殿聖騎士団が、やすやすと魔物の侵入をゆるすとも思えぬが」

「どうする、王宮の警備は、引き続き警戒を強めねばならん。何し

る1匹とり逃したばかりだしな。あつちに人員を割いてやる義理もゆとりもない。まあ、そもそも協力を求めてくることなどないだろうがな」

ラウシュが、そう言つてナサレーを見た。

ナサレーが、兵士に向かつて視線を向ける。

「師団長に上申しておけ、セルヴィ監獄に侵入した魔物3匹のうち、2匹はしとめてある。残りは1匹だ。引き続き、王宮の警戒を怠らぬようにとな。私たちはエ・ギザラの様子を見てくる」

「おい、俺は、そろそろ持ち場に戻らねばならんぞ。無理を言つて抜けてきた身だからな」

「今さら何を言つ。私はお前のせいで、すでに服務違反をしているのだぞ」

「誰が頼んだよ？ お前が勝手についてきたんだろつが」

「お前が、こんな性悪女に肩入れしすぎるから、心配してついて来てやったのだろつが」

「ちよつと、性悪つてどういふことよ。私は、超善良なんだからね！」

「どこがだ。胡散臭いことこの上ないではないか」

ナサレーが、苦々しげに吐き捨てる。

ラウシュは、私の抗議の声を受けて、じつと見下ろしてきた。

少し間を置き、やがて苦笑する。

「自分で言つるか？ 普通」

態度が、少しだけ軟化したような気がした。

ナサレーが、呆れたようにラウシュを見る。

「全くお前は…人が良すぎるのも大概にしておけよ。この小娘に、利用されるだけされて、いつ寝首をかかれるとも限らんぞ」

ナサレーが、私を冷たい目で見た。

全くもつてムカつく男だ。

「そんな器用な女には見えん。それに」と言つて、ラウシュがナサレーを見る。

「今のお前は、まるで昔にかえったようだ。最近張り付けていた、面白味のないあの顔とは全く違う。少なくとも、この嬢ちゃん相手だと、お前は化けの皮がはがれて、素に戻るのではないのか？」
言われて、ナサレーが息をのんだ。

「まあ、理由は聞かんさ。けれども、ここ4、5年のお前は、いつもどこか不自然だった。今の方が、ずっとお前らしい」

「気のせいだ」

ナサレーは、そう言ってラウシュから視線を背けた。

「そうか？」

「そうだ」

ナサレーは、そっぽを向いたまま答える。

ラウシュがそれを見て苦笑した。

「仕方ないな、どうせ懲罰ものだ。最後まで、つきあってやるつもりがないか」

ラウシュは、片方だけ唇をつりあげ、ナサレーを見たのだった。

7 王都の惨劇 その4

私が閉じ込められていた、セルヴィ監獄と呼ばれる要塞のような建物から、およそ5ガズール（1ガズール＝1?）ほど東に移動した場所に、その建物はあった。

天を衝くようにしてそびえ立つ、巨大な塔だ。

離れた位置からもその姿を捉えることはできていたが、近くで見ると圧巻だ。

それにしても、もしこの塔が、天空の楔エ・ギザラと呼ばれているのなら、まさしく相応しいような気がした。天に向かって突き出す塔の姿は、まるで天空に向けて打ち込まれた楔のようだ。

「ねえ、もしかして、この塔が天空の楔というの?」

「そうだ」

答えたのは、一緒に馬に同乗しているラウシュだった。

この巨大な塔は、守り囲むように、城壁がぐるりとめぐらされている。

その城壁が囲む中庭の部分に、その塔はそびえ立っていた。

「小娘、黙っていると云ったはずだ」

ナサレーが、私を睨み付けてくる。

いちいちムカつく男だ。

不審者の私は、本来ならもう一度牢獄に入れられるはずなのだが、古代の魔法ウツナを使える私を投獄できる場所は限られており、どうやらすぐに入れることは難しいらしい。

その他にも、彼らなりに色々と思うところがあるらしく、処遇を一時保留して、2人の指示に従うことを固く約束させられ、私は彼らに同行することとなっていた。

苦手な馬に乗せられ、私の疲労はピークに達している。

こんな時に、ナサレーの高慢な態度を見逃してやるのには、かなりの忍耐力が必要だった。

「とにかく大人しくしている。口を開くな。いいな」

高圧的なナサレーの態度に、私は始終イライラさせられていた。私は、もちろん不服だったが、一応静かにする。

なにしろ、私の身の潔白は、まだ証明されたわけではないのだ。これ以上心証を悪くするのも得策ではないだろう。

しかたなく私は、背中を向けたナサレーに、舌を出して溜飲を下げるにとどまった。

やがて、私たち3人は、城壁の大門にたどり着いた。

ナサレーは、門衛を呼びつけ、中に通すように言ったが、頑なに拒まれた。

「お前では埒があかぬ。別な者を呼んで来い」

「なんとおっしゃられても、お通しするわけにはまいりません。どうかお引き取りを」

不毛な会話が、何度も繰り返される。

周囲を見渡してみるが、特に死魔に襲われている様子もない。

無理を言わないで、おとなしく帰ればいいのにと、私が思った矢先のことだった。

遠くから馬蹄の音が響き渡り、騎士の集団が近づいてきた。

騎士たちは、皆白い騎士服に身を包み、白いマントをはためかせている。馬鎧までが白く統一され、おかげで、夜目にも目立っていた。

近づくにつれ、騎士たちが戦いの後であることを物語る、血の跡が、衣服の所々に見て取れた。大きな怪我をしている者も見えないので、おそらくは返り血だろう。

良く見ると、騎士たちのマントの左肩には紋章が描かれていた。

翼を大きく広げた双頭の鷲が盾に描かれ、その盾の後ろ側を、槍と剣が交差している絵だ。

騎士たちは、大門の前で馬を止めると、ナサレーとラウシュを見た。

「王宮近衛兵と魔道師団の人間が、ここに何用だ？」

隊長らしき白い騎士が、馬上から問うてきた。

個人的に、顔を知っているわけではなさそうなので、たぶん、軍服で区別をしているのだろうと思う。

ナサレーは、濃紺の立襟の長衣を纏い、ラウシユは黒い立襟の軍服を身に着けている。

お互い、友好的とは言い難い態度で臨んでいた。

「イサ様にお会いしに来た。この頭の固い門衛をどうにかしてもらえぬか」

ナサレーが、馬上の白い騎士を見上げてそう言った。

イサ様？ 誰だ？ それは。

「このような夜更けにか？」

「いかにも。火急の用事があつて参つた」

白い騎士が、あざけるように鼻から息を抜き、片方だけ口角をあげた。

「イサ様は、すでにお休みだ。出直してくるがよかろう」

そのまま馬首をめぐらし、門衛に開門するように言う。門が開けられると、馬の腹を蹴った。

「待たれよ、火急の用があつてのことと申している。取次もないとは、礼を欠くのではないか」

白い騎士が馬上で振り返る。

「無礼である？ それはどちらのことだ？ 先触れもなしに押し入ってくるのが王宮のやりかたか？ イサ様に取り次いでほしくば、然るべき手順を踏んでから来るのだな」

白い騎士に従い、他の騎士たちも門をくぐるが、皆一様にナサレーに鋭い視線を向けていた。殺気と呼べる気配すら混じっているほどだ。

「では、一つお答え願おう。貴殿は返り血を浴びておるようだが、どこで何をしておられた」

白い騎士が、馬の歩みを止めた。

「貴殿には、答える必要のないことだ。詮索は無用だ」

「実は先ほど、セルヴィ監獄に、魔物が侵入いたしたばかりでな。もしやこちらもと」

「ここは、アウル神に守られし聖なる場所。魔物ごときが、侵入できようはずもない。いらぬ懸念よ。己の身こそを案じるのだな」

白い騎士がナサレーの言葉を遮り、睨み付けて、吐き捨てるように言った。

ナサレーは、目を細めて白い騎士を見返す。

「最近、王都にも魔物が頻繁に出没するようになっていて。これは、アウル神のご加護が弱まっているという証拠ではないのか？」

「貴様、我等を愚弄する気か!？」

白い騎士の部下である1人が、ナサレーの挑発に耐え兼ね、声を荒げる。

「愚弄する気などないのだがな。しかし、最近ではサヴァン大神官も公務を控えておられるご様子。この上、イサ様にもお目通りかなわぬとなれば、いらぬ勘繰りもしたくなるというもの」

「黙れ! 死にたいか!」

そう言って、またしても別な騎士が、剣を引き抜いた。周囲の騎士たちも、目を血走らせてナサレーを睨み付ける。

「やめろ」

白い騎士が、窘めた。

「しかし、イエーン様」

「やめると言っている」

イエーンと呼ばれた白い騎士が一喝すると、騎士たちは剣をおさめて従う。

「魔道士よ、言葉に気を付けるのだな。王都に魔物が出没するようになったのは、お前たちの不信心が原因だ。平穩を取り戻したくば、神殿に従え」

イエーンが、そう言って、ナサレーを馬上から見下ろす。

イエーンは、門衛に手で合図をして、門を閉じるように促した。

門衛が、慌てて門を閉める。

門は、私たちの前で、硬質な音を立てて閉じられたのだった。

8 王都の惨劇 その5

私は、馬から降り、閉じられた門を見上げていた。少し離れた場所では、ラウシユとナサレーが、何事かを話し合っている。

聞かれたくない話を、盗み聞きする趣味もないので、私は手持無沙汰に門の周りをうろついていた。

それにしても、ナサレーは、誰にでもあやって喧嘩を売る性質なのだなど、私は思い返していた。

さっきのイエンという騎士に対しても、わざと挑発するような態度をとっていた。

あのような性格では、なかなか周りに理解されなさそうだ。きっと友人も少ないことだろう。

「おい」

ナサレーが、私を呼んだ。

私は、何事かと思い、ナサレーを振り返る。

「あまり遠くへ行くな。逃げられてはかなわんからなハイハイそうですか。」

私の額には、今晚何度目かになる青筋が、再び浮かびあがってくる。

「別に、逃げるつもりなんてないし」

小さく呟いたのだが、ナサレーには聞こえたらしい。

「黙っていると言ったはずだ」

くそう、この地獄耳め。

私は口を引き結び、ドカドカと足音を立てて2人の方へ歩みを進める。

「歩き方までガサツな女だな」

呆れたような顔で、ナサレーが私を見た。

私は、怒りがこみ上げてきた。

これはもうブツてもいいよね。私、今までよく我慢したよね。
私は、プルプルと拳を握りしめる。

ナサレーに一言文句を言ってやるつと、口を開きかけたまさにその時のことだった。

突然、ドオオオンという、地鳴りにも似た爆音のようなものが聞こえてきた。

音の場所は、そんなに遠くはないと思われるところから聞こえてくる。

私は音のした方に顔を向けていたが、ナサレーは、すぐさま無言で馬に跨ると、走らせはじめた。

ラウシュが、私の体を無造作に持ち上げて馬に乗せると、自らも馬に跨り、ナサレーの後を追いはじめる。

物凄い勢いで、馬を走らせはじめたので、私は落とされやしないかと、冷や冷やしていた。

「ねえ、何があつたのかな？」

私はラウシュを振り仰ぐ。

「舌を噛むぞ。大人しくしている」

ラウシュはそう言ったが、ナサレーが鬱陶しそうに私を振り返ってこう言った。

「静かにしていると言つたはずだ」と。

またしても黙るように言われて、わたしの臍は、完全に曲がった。質問もダメなのか。よぉーくわかりましたとも。

私は、絶対に口なんかきいてやるもんかと、心に決めたのだった。

馬を走らせた距離は、そんなに長くはなかったはずだ。せいぜい500ガズド（1ガズド＝1？）程度だろう。

森の中の、不自然に開けた場所が、音の発信場所と思われた。

おそらくは、風魔法の痕跡と思われる、地面が抉りとられたあとが残っている。周囲を見回すが、生き物の気配はなかった。

ナサレーが馬を下り、見分をはじめめる。

ラウシュも馬を下り、次いで私も降ろしてくれた。

ずいぶんと広範囲にわたって、術の痕跡が残っている。これを使った者は、かなりの使い手であるのは間違いないかった。

「怪しい者がいないかどうか探すぞ」

ナサレーがそう言ってラウシュを見た。

「お前はそつちを頼む。小娘は私と来い」

ラウシュは頷いたが、私と言えば、ツーンとそつぽを向いてやった。

こんな男と、友好的に口などきいてやる気分ではないのだ。

私は、ラウシュの後を追いはじめる。

「小娘！ お前は、こちらだと言っているだろう」

そんなもん、知るか。

私は、お前とは一緒にいたくないのだ。

「小娘！」

ナサレーが苛立ったような足音で近づいてきた。ガシリと私の後ろ襟首を掴む。

「聞こえぬのか！？」

まるで猫のように扱われ、私の怒りはまたしても増す。

「黙ってるって言ったのは、自分じゃない！」

私は、ギロリと睨んでやった。

ナサレーが、スツと目を細める。

やがて、メラメラと燃えるような怒りを背負って、口を開いた。

「お前は、無駄口が多すぎるから、黙っていると聞いたのだ！ 口を開けば、余計なことばかりしか言わぬではないか！ お前の様な馬鹿な女には、理解できぬやもしれぬが、世の中には臨機応変と言言葉があるのだ。必要最低限の会話ならば赦してやる。いまから、その足りぬ頭の中に、よく叩き込んでおけ」

「うわ！？ 何その自己中心的な考え。喋るなって言ったり、喋っていいって言ったり。さすがお坊ちゃまよね！ 我儘過ぎて、びっ

くりしちゃうわ」

ナサレーの纏う空気が、剣呑なものに変わりはじめた。ラウシュが、ため息をつき、片手で自らの顔を覆う。

「俺は、お前たちを、2人きりにすることが、心配でならないのだが……」

ナサレーが、まったく笑顔に見えない、笑顔らしきものを顔にはりつけた。

「何、私がこの小娘を、少し調教しなおしてやろう。今よりは人間らしくなるだろうさ」

ナサレーの額には、めちやくちや青筋が浮かんでいた。

「ふざけないでよ！ こんな女性の扱い方も知らない、礼儀知らずのお坊ちゃまに、何を教わっていうのよ！ 自分こそ勉強しなおせ！ この若造が！」

ナサレーの、胡散臭いひきつった笑顔が、凍りついた。

「良く聞こえなかったが、若造とはいったい誰の事だ？ 女性なんてものがこの場にいたか？」

かっちゃん。

私は、若造とはお前のことだと教えてやろうとしたが、口を開こうとした時点で、ラウシュの手によって口を塞がれた。

「もうこれ以上はよせ。俺の心臓がもたん」

ラウシュが、ハァーと長い溜め息を一つついたのであった。

9 王都の惨劇 その6

険悪なムードを見事に醸し出しつつ、私とナサレーは、馬を下りて歩いていった。

無論、ラウシユと離れて以来、お互い一言も口をきいていない。だいたい、なんでこんなやつと一緒に行動しなけりゃなんのだ。ナサレーにしたって、私が気に入らないのなら、何もわざわざ一緒にいることもないだろうに。

馬を引きながら、ズンズンと、一人で先を歩くナサレーの後を、私は、渋々小走りに追っていた。歩幅が違うので、追いつくのに大変だ。

セトだったら、こんなに意地の悪いことは絶対にしないのに。不意にセトの事を思いだしてしまい、悲しくなってしまった。今頃どうしているだろう。

ちゃんと無事でいるだろうか。怪我をしていないだろうか。お腹はすかせてないだろうか。

早く会いたいと思った。

ナンにも、イムルードにも会いたかった。

「ねえ、私いつになったら帰ってもいいの?」

「帰る?」

ナサレーが、怪訝な顔をして振り返った。

「私、早く帰りたい。みんなに会いたい」

ナサレーを見上げる。

「会いたいよ」

皆の顔を思い出すと、泣きたくなってきた。ただ、帰りたいと思う。

「…では、おとなしく協力するのだな。協力できたら、放免にしてやる」

「協力? 何をすればいいのよ」

ナサレーが、小さく息を吐いた。

「黙ってついてくればよい」

「ついて行くだけでいいの？ 本当に？」

「……」

ナサレーが、無言で先を促す。

私は、仕方なく後をついて歩いた。

しばらく歩くと、私の視界には、再び城壁が見えた。天空の楔^{エ・ギザラ}を
囲む城壁だ。

「結局、戻ってきちゃっただけじゃない」

私は、塔を見上げる。

「やはり撒き餌がよくないか」

ナサレーが、私を見ながら小さく呟いた言葉は、聞き漏らしてしまっていた。

壁伝いに、私が歩きはじめたその時の事だった。

再び、ドオオーンと、地鳴りに似たような音が響き渡った。間を

おかずして、物凄い風圧が私たちを襲う。

ナサレーが、すぐさま馬に飛び乗る。私の事も引き寄せて馬に乗せると、馬を駆りはじめた。

早すぎて怖い。

少しすると、後方から、別な馬の足音が響きはじめた。

振り返ると、神殿の白い騎士服を纏った集団が、走り寄ってくる
ところだった。

「よそ見をするな。落ちても知らんぞ」

確かに、ナサレーなら、眉一つ動かすことなく、落馬した私を見捨てていきそうだ。

私は慌てて前を向き、目の前の馬の鬣にしがみついた。

「いいか、自分の身は、自分で守れ。魔物は狡猾な生き物だ。心し
てかかれよ」

頭上から、ナサレーがそう呟いた。

私は、怪訝な顔でナサレーを見上げた。

「家に帰りたいのだろうか？ だったら、まずは生き残ることだけを考える。私は、ラウシュほど人が良くない。お前のことなど、守ってやるつもりはないからな」

ナサレーは、前を向いたまま厳しい表情でそう言ったが、わざわざそんなことを教えるということは、ちょっとは心配してくれているのだろう。

可愛いところも、あるではないか。

私は、思わず笑ってしまった。

その姿を見て、ナサレーが、私をギロリと睨み付けてくる。

「まあ、お前のように凶太い生き物は、殺しても死なぬだろうがな」
前言撤回。

やっぱりこいつは可愛くない。

ちよつとでも、可愛いと思った、自分の浅はかさを呪った。

地鳴りのような音は、場所を移動しながら、相変わらず続いている。

何者かが、魔術で戦っているようだ。私たちは、その音を追っている。

神殿の騎士たちは、距離を詰め、間近に迫ってきていた。

不意に目の前を、青色の獣が横切る。

馬が驚き、前足をあげて嘶いた。

私は驚きのあまり、落ちそうになったが、ナサレーに抱きとめられ、なんとか落馬を免れる。

後ろから追いついてきた神殿の騎士が抜刀し、青色の獣に切り付けた。

青色の獣は、攻撃を躲す。

別な騎士が、槍を一度縦に構えた。

すると、槍を中心に、魔法円が浮かび上がってくる。騎士が槍を構えなおし、魔法円を貫くようにして、槍で獣を攻撃した。

槍は、風魔法を纏いつつ獣に襲いかかる。

「聖槍か…」

ナサレーが、小さくそう呟いた。

槍は見事獣を捉えるかに見えた。

しかしその時、獣の前に、突如として魔法円が浮かび上がった。無効化の円だ。

槍の攻撃は、はじかれる。

と、そこに、赤髪の男があらわれた。

二度と見たくない面だった。

「ようやくのおでましか」

ナサレーが、口角を片方だけ吊り上げる。

まるで、現れることがわかっていたかのような口ぶりだ。

私は、不思議に思い、ナサレーを見上げた。

「魔物は執念深いからな。狙った獲物を、そう簡単には見逃さぬ」

ナサレーは、私の意図することを察して、そう答えた。

つまり「獲物」とは私の事で、ナサレーはこうなることが予想できていたということだろうか。

確かに、死魔は執念深い生き物だ。

自分のことだったので、あまり深く思い至らなかったが、冷静になつて考えてみれば、こうなつて当たり前だ。

そう考えると、ナサレーの思惑も察せられる。

「ねえ、もしかして私の事、囿にしてた？」

ナサレーは、皮肉気な顔で私を見下ろした。

「どうだろうな？ いささか役者不足の感はあったようだが」
「やっぱり囿じゃないか。」

なんて酷いやつだ。

ニヤリと笑つたナサレーの顔が、滅茶苦茶にムカついた。

ナサレーの名前を、心の中で、呪ってやるリストの中に書き加えていたところ、目の前で、青色の獣が、眩むような光とともに、かたちを変えはじめた。

やがて獣は、青い髪の美しい女性へと姿を変える。

女が嫣然と笑いながら、私を見た。

『確かに美味そうではあるが、このような小娘を気に入るとは、変わった好みだな』

余計なお世話だ。

本当は、口に出してそう言いたかったが、ナサレーたちが、魔物と呼ぶ者が使う言葉をしゃべっては、増々深みにはまりそうなので、私は黙っていた。

『女だけは、渡さぬ。残りは好きにするがいい』

赤い髪の男が、目を細めて私を見る。

舌なめずりでもしそうな表情に、私は寒気を覚えていた。

白い騎士たちが、それぞれの武器を構えて死魔アジュールに向かって突進した。

先頭をきって、イエンが矢のように走る。

イエンは、剣を縦に構えて魔法円を呼び出しながら馬を駆った。

円を貫くようにして剣を突き出し、赤髪の男をめがけて、馬から飛び降りる。

赤髪の男が、無効化の魔法円を呼び出し、イエンの炎を纏った剣をいなした。

イエンは、大地に足をつけると、すぐさま、二撃、三撃を繰り出す。

イエンの剣が、赤髪の男の衣服を捉えた。

服がわずかに裂けたのと同時に、赤髪の男が舌打ちし、近くにあった木の枝に飛び移った。

『邪魔な犬どもだ。失せる』

赤髪の男が、騎士たちに手のひらを向けた。

巨大な魔法円が呼び出される。

『死ね』

言葉と同時に、炎の渦が円の中央から放たれた。

私は、とつさに騎士たちに駆け寄り、無効化の盾を呼び出す。巨大な魔法の盾が、炎をかき消した。

間をおかずして、イエンが、そばにいた騎士から、槍を受け取る。赤髪の男めがけて、槍を投じた。

赤髪の男が、飛んでよけたのと同時に、イエンは、再び剣を縦に構えて魔法円を呼び出す。炎を纏った剣を、赤髪の男に向けて突き出した。

剣が赤髪の男に届こうかというその瞬間、青い髪の女が、魔法円を呼び出して、剣をはじく。

『こしゃくな人間どもだ』

赤髪の男が、ギリギリと唇を噛む。

青い髪の女が、魔法円を呼び出しはじめた。魔法円の中央が、逆五芒星になった、例の見たことのない円だ。

私が、ウルザからオリス・ラ・トーバに飛ばされた時の円に似てはいたが、細部は違っている。

ナサレーが舌打ちし、無効化の魔法円を作り出して、女の作り出した魔法円にぶつけようとするが、僅かに間に合わなかった。

術式は完成し、魔法円が大地に横たわる。

魔法円が突如輝きだした。

すると、円の中央から、巨大な生き物があらわれ始める。召喚魔法だった。

円の中央に現われたのは、三つの首を持つ、巨大な獣だ。

三つ首の獣は、牙をむき出して咆哮する。

「弓を構えよ」

イエンが、騎士たちに命じた。騎士たちは、すぐさま馬の鞍に取

り付けてある弓矢を構える。

巨大な獣が大地を蹴るのと同時に、イエンが矢を射るように命じた。矢は、三つ首の獣に向かって飛んだが、刺さることなくぶつかって地に落ちる。恐ろしく固い体を持っていた。

騎士たちは、散り散りになり、なんとか獣の攻撃を躲す。

ナサレーが、風魔法を呼び出し、獣を攻撃した。僅かに獣の体の表面を傷つけるが、致命傷には至らない。

青い髪の女が、再び魔法円を呼び出し、攻撃してくる。

私は、無効化の盾でそれを防いだ。

ここは王宮の外であるのだが、相変わらず封魔の術とやらが影響している場所のようだ。おかげで、使える魔法が限られている。

しかし、冷静になって考えてみると、使える魔法の法則が掴めてきた。

死魔が使った見たこともないあの術式は別として、今まで使えた魔法の共通項を探すと、魔法円の中央に描かれる紋が同じなのだ。

中央部に、六芒星が描かれている術式。これが今までの共通点なのである。

私は、試しにひとつ使ったことのない六芒星の魔法円を呼び出してみた。円が具現化する。私は、発動する前に、一度円をかき消した。

やっぱり使えそうだ。

術式はすぐに消したのだが、それを見ていたらしい青い髪の女が、顔色を変えた。

『グルシア、この娘、生かしてはおけぬぞ』

騎士を相手に魔法を使っていた赤髪の男に、青い髪の女がそう言った。

『だめだ、女は殺すな』

『馬鹿が！ この者は、生かしておいてはならぬ相手だ！』

青い髪の女が、恐怖をにじませた表情で私を見ていた。

あれ？ なんかもまずい魔法だったのかな？

私は、首を傾げる。

ナサレーたちは、赤髪の男と、三つ首の獣を相手にしていたので、私の呼び出した魔法円は見えていなかったようだ。それに、古代語も理解できていないようなので、気づかれてはいないはずだ。

これ以上、不審者扱いされて、家に帰してもらえなかったらたまらない。

私は、さっきの系統の魔法円は、呼び出さないことに決めた。もともと耳が痛くなるので、あえて使わなかった魔法だ。使わなくても、別に支障はない。

突如、三つ首の獣が、大きく吠えた。目を向けると、ナサレーが放った炎の魔法が、獣を焼いていた。獣の体が、雲散霧消する。

青い髪の女が、怒りの形相を浮かべ、ナサレーに向かって風の魔法円を呼び出した。ナサレーは、無効化の魔法円を呼び出し防ぐ。

「女、こっちにこい」
いつの間にか、グルシアと呼ばれていた赤髪の男がそばに立っていた。

この男の顔を見ていると、忘れていた恐怖感が蘇ってくる。グルシアは、私の腕をとろうと手を伸ばしてきたが、私は、反射的に大きく避けた。

グルシアに向けて両手を突出し、巨大な魔法円を呼び出す。全てを焼き尽くしてやるつもりで、炎を放った。炎は、唸るような音を上げて、グルシアに襲いかかる。

グルシアは、無効化の魔法円を呼び出して防いだが、術式が乱れ始めた。青い髪の女も、無効化の円を呼び出し、二重にして私が放った炎を防ぐ。

私は、円から片手を離し、もう一つ魔法円を呼び出した。風魔法を追加して放つ。

「本当に出鱈目な女だな」

ナサレーが、呆れとも感心ともつかない声で呟いた。

無効化の魔法円は、術式を乱しはじめ、すぐに消え失せる。

2人の死魔は、炎の魔法を避けて、大きく飛んだ。

と、その時の事だった。

ドオーンという大きな音とともに、何かが飛んできた。

飛んできた何かは、物凄い風圧を受けて、地面を滑りながら進む。

土煙を大きく巻き上げ、やがて、木にぶつかって動きを止めた。

飛んできた何かに目を向けて、私は驚愕に目を見開いた。

私の目に映ったのは、怪我を負って、あちこちから血を流すシン

の姿だったのだ。

「いったい何があったというのだろう。」

「ぐったりと横たわるシンの姿に、私は一瞬呆然と立ち尽くした。」

「めずらしいこともあるものだ。御前の使いが白大陸ワァルラートにいるとはな
グルシアが、シンを見て目を細める。」

「知っているのか？」

「青い髪の女の声に、グルシアが頷いた。」

「私は、その会話で我に返った。」

「ちよつと、シン！ いったい、どうしたのよ！？」

「私は、シンに駆け寄って、頭を抱き起こす。」

「シンが、苦悶に顔をゆがめながら、僅かに目を開けた。」

「お前は…魔道士の仲間ではないか…？」

「荒い息のもと、シンがそう言った。」

「ねえ、酷い怪我よ。大丈夫なの？」

「シンの顔色は悪い。」

「しかしシンは、私の手を振り払うと、傍らに落ちていた槍を引き寄せ、杖のようにして立ち上がった。」

「シンは、立ち上がると周囲を見回す。」

「あの男はどこに行った？」

「あの男？」

「私は聞き返したが、シンの返事は、ナサレーの言葉によって遮られる。」

「お前…魔物だったのか…？」

「驚愕に目を見開き、呆然と呟かれたナサレーの言葉に、私は驚いた。」

「魔物？ 違うわよ！」

「では、何故魔物の言葉を話すことができるのだ。しかも、その男に向けて、シンという言葉を使わなかったか？ 記憶違いでなければ。」

ば、シンというのは、お前の知り合いのはずだ。そのシンとやらも、魔物の言葉を話している。いったいどういうことだ？」

しまったと思った。

ついとっさに出てしまった古代語だが、このタイミングで、アジール魔物や死魔と通じる言葉を話せることを知られたのは、最悪だと言わざるを得なかった。

しかも、シンの名前を、牢屋の中で話していたのに、口に出してしまったことも、明らかに失敗だ。

私は、息を呑んでナサレーを見た。

ナサレーは、問いかけるように私を見ている。

私は、首を横に振った。

言い訳をしようと口を開きかけたが、躊躇われる。

いったいどう説明したらよいのだろう。

シンのことを、詳しく話さなかったのは、人間が、魔族の事を、死魔と一括りにして魔物であると思っているからだ。魔族について、順を追って説明することも面倒だったし、それに、説明したところで、どこまで信じてもらえるのかわからない。

疑いを深めたくなかったのだ。話さなかった理由は、ただそれだけのことだ。

魔族や死魔と通じる、古代語を話せることを隠したのも同じ理由。私は、早く疑いを晴らして家に帰りたかっただけで、他意などなかったのだ。

ただ、その隠し事が、ここにきて、全て裏目に出してしまったことは確かだった。

今、正直に、全てを説明したところで、いったいどれだけ、ナサレーの信頼を得ることができるといえるのだろうか。それを思うと、絶望的な気分にする。

私は、ただナサレーを見つめて、必死に返す言葉を探した。

「魔物であると認めるのだな」

「違う！」

「では、人間なのか？」

「そうだ、と答えたかった。」

だが、とつさに肯定できなかった。

何しろ、私は間の子ウチゴなのだ。厳密に言えば、人間ではないだろう。ハイと言ってしまうえば済むことなのに、言葉が喉の奥に引っかかったままでてこない。

「人間ではないと認めるのか？」

ナサレーが、鋭い視線で私を見る。

今の私には、答えるべき言葉が見つからなかった。

いったい何と答えればよいのだ？

身体的には、人間と何ら変わらないというのに、魔族や死魔は、私のことを間の子と呼ぶ。

知識として、自分は、普通の人間ではないということを知ってはいたが、己の認識としては、ほぼ人間に等しい者であると思っていたし、そのことについて、意識することすらなかった。

ただ、今、こうして、人間なのかと突き詰められると、純粋な気持ちで肯定することができない。

今まで、間の子という私自身のルーツを、どこか他人事のように感じていたが、ここにきて、その不確かな自分という存在を、意識せざるを得なかった。

私は、何者なのだろう？

人間でも、魔族でもない。

ただ、中途半端な存在だ。

私は、呆然とナサレーを見返すことしかできなかった。

「どうなのだ？ 魔物でないのならば、人間なのであるう？ それとも、人間ではないというのか？」

私こそが、その答えを知りたかった。

視線をさまよわせながら、私は言葉を探す。

「私は――」

言いかけたその時、突如、喉元に剣を突き付けられた。

「魔物に決まっている」

剣を突き付けてきたのは、イエンだった。

「魔物の言葉を話すものは魔物だ。排除するのみ」

イエンの剣が、言葉と同時に突き出される。

その切っ先をはじいたのは、シンの槍だった。

『何を呆けている！？ 死にたいのか！』

シンが私を怒鳴りつけ、イエンと私の間に割って入った。

イエンは、シンに切りかかる。

シンが、その攻撃を槍で防いだ。

『面白いことになったな。人間という生き物は愚かだ。愚かすぎて笑いが止まらぬ』

『グルシア、あの女は殺してしまえ。天の使いが使っていた、失われし古の魔術を使うやもしれぬぞ』

『なんだと？』

グルシアは、私を見た。

死魔たちの会話は、耳に聞こえてくるが、理解が及ばない。私は、目の前のことで頭がいっぱいだった。

私の目の前では、シンとイエン率いる白い騎士たちが、戦いはじめている。

私は、ただ呆然とその光景を見つめるばかりだった。

何故こんなことになっているのだろう。

私は、騎士たちと戦うつもりなど全くないというのに。

シンの傷は、深手のようだ。表情が苦しそうに歪んでいる。

「もうやめて…お願いだから、やめてよ」

そう言ったところで、誰も私の話など聞いてくれない。

その刹那、イエンの剣が、シンの肩を捉えた。

シンは、うめき声をあげ、肩を押さえる。押さえた肩からは、鮮血が流れ出していた。

『シン！』

私はシンに駆け寄る。

シンは、肩で荒い息をついていた。

『やはり甘いな、地の使いは。奴らは、たとえ己に向かって刃を向けられようとも、決して人間を殺さぬ。見る、あの魔槍があれば、人間ごとき、一瞬にして始末できるというのに、あやつは防戦一方だ』

グルシアが愉快そうに見る。

『女も甘い。もし失われし古の魔術を使えるのであれば、人間など簡単に消し炭にできよう』

グルシアが、楽しくてたまらないというような笑い声をあげた。

『心底愚かだ。血に弱き、脆弱な生き物が、人間ごときに情けをかけてやっているのだから。地の使いよ、己のその愚かさを悔いるがいい』

そう言って、手を翳し、魔法円を呼び出した。

円から放たれた風魔法が、数名の騎士を襲う。

騎士たちは無残に切り刻まれ、辺りに血しぶきが飛び散った。シンや私に、鮮血の雨が降り注ぐ。

騎士たちは、原型を失いながら、地に倒れ込んだ。

血の雨を浴びたシンも、低くうめき声をあげながら、大地に膝を折る。力なく私に向かって倒れ込んできた。

私は、シンの体を抱きとめる。

シンの顔色が蒼白にかわっていた。

『シン！ 大丈夫！？』

たずねる私の声に、シンは答えるだけの力が残っていない。

力なく寄りかかるシンの表情は、苦悶に歪んでいた。

11 王都の惨劇 その8（後書き）

説明しきれなかったので、補足です。

魔族は、血に弱いという設定になっていますが、自分の流した血の場合は、ただの怪我。他人の流した血に弱いとと思ってください。でないとは穢が…

12 王都の惨劇 その9

イエンは、騎士たちを惨殺したグルシアを、一度睨み付けた。しかし、すぐに視線を私とシンに戻すと、口を開く。

「まずはお前たちから始末をつけてやろう」

イエンが私に向かって、剣を構えた。

「待て」

ナサレーが、口を挟む。

イエンがナサレーを睨み付けた。切っ先をナサレーに向けかえる。

「この女の魔物は、お前が連れて歩いていたな。魔物を神殿に連れ込み、何をする気だった？」

ナサレーが、ため息を吐いた。

「事実を申したところで、そのように血がのぼった頭では、私の言葉を正しく理解することはできまい。そこをどけ。私は、その小娘に尋問しているところだ」

「よくもぬけぬけと。お前の仲間なのだろう。この女は」

「仲間などではないさ。なりゆきで関わり合いになっただけのこと」

「気に入らぬな。素直に認めれば、楽に殺してやったものを」

「殺すだと？ それしか能がないのか、お前たちは。だから、己の頭で考える力のない馬鹿な輩は嫌いなのだ」

「何だと？」

イエンが、低い声で問い返す。

ナサレーが、あざけるように片方だけ唇をあげた。

「神殿の人間は、上から言われることを、神の言葉とありがたがって、そのまま信じ込む。自分で考えることを放棄してな。都合のいいように操られ、利用されていることすらもわからず、功を褒められれば、ただ自惚れる。それが、馬鹿でなくて、なんだというのだ」

「おのれ、我等を愚弄するか！？ 魔道士風情が！ お前のその小うるさい舌を、切り取ってやろうか！？」

騎士たちが、いきり立つ。

「吠えることには長けているな、おぬしらは。だが、今はしばしの間、黙っておれ。うるさくてかなわぬ」

ナサレーが、辟易したように騎士たちを見る。

その態度が、さらに騎士たちの怒りを刺激した。

「まことに面白い。勝手につぶし合いをしてくれるのだからな。手間がはぶけてちょうど良い」

グルシアが低く笑ってから、私とシンを見た。

『地の使いは、美味いぞ。そいつは、シュエダお前にやろう』

グルシアが、青い髪の女にそう言った。

『瀕死というのが、つまらぬがな。まあ、よい。なかなか喰らうことのできぬ一品だ。悪くはない』

シュエダと呼ばれた青い髪の女が、まんざらでもなさそうな顔で笑う。

私は、シンの体を庇うように抱きしめた。

そばでは、怒りに染まった騎士たちが、ナサレーを囲みはじめ。抜刀した騎士たちが、ナサレーに切りかかるうとしていた。

まさにその瞬間のことだった。

突如、夜気を引き裂き、鋭い音を放ちながら、槍が投じられた。

槍は、ナサレーと騎士たちの間に、音を立てて刺さる。大地に刺さった槍が、打ち震えた。

「何をしている」

鋭い一喝のもと、馬に乗った一人の騎士があらわれた。

神殿の騎士服を纏った、30代中ごろの男だ。

男は、夜目にも輝くようなプラチナブロンドと、緑色の鋭い目が印象的な、端正な顔立ちの男だった。

私は、この男を、どこかで見たような気がしていた。

「レッエン総長！」

騎士たちが、慌てたような声を上げる。

レッエンと呼ばれた男は、騎士たちを鋭い視線で見回した。

「これは、何事だ」

重々しい声に、騎士たちが立ちすくむ。レッエンの声に、返すものは、誰もいなかった。

レッエンは、ナサレーを一瞥し、すぐに死魔たちを睨み付ける。ゆっくりと、腰の剣を引き抜いた。

「お前たちは、何をしにここに来たのだ。己の本分を、見誤るな」

レッエンはそう言うと、抜身の剣を、死魔に向ける。

「行け」

レッエンの声に、イエンたち騎士は、はじかれたように走り出した。

13 王都の惨劇 その10

『面倒な輩があらわれたものだ』

グルシアが、舌打ちをする。

グルシアは、無効化の魔法円で、騎士たちの攻撃を避けると、すぐさま風の魔法円を呼び出し放った。

騎士たちは、風魔法にひるむことなく、躲しながら突進する。

その姿を見届けると、レッエンは鋭い眼光で、ナサレーを一瞥した。

「王宮の番犬が、神殿に何用だ。ここはお前たちの居るべき場所ではない、疾く去れ」

「言われずとも、用さえ済めば帰るさ」

そこまで言ってナサレーが、小ばかにしたように鼻から息を抜いた。

「神殿の駄犬どもは、躡がなっておらぬな。最近、飼い主が雲隠れして、野放しになっているせいではないのか」

ナサレーが、腕を組んで馬上のレッエンを見上げる。あからさまに挑発するが、レッエンは、表情一つ乱さない。

「用とやらをさっさと済ませて帰るがよい」

ナサレーは、しばしレッエンの顔を見ていたが、望む答えがかえらぬと悟ると、つまらなそうにため息を一つついて、私とシンに歩み寄ってきた。

その時、恐ろしいほど冷たい表情を浮かべていたレッエンの視線が、はじめて気づいたとでもいうように私に止まり、驚愕に見開かれた。

それは、ほんの僅かな一瞬の出来事だった。

レッエンは、私に視線を止めたまま、すぐに動揺を押し隠す。

あまりに短い間の出来事だったので、その場にいた私以外の人間は、誰ひとり気づくことはなかったはずだ。

私は、レツエンから向けられる、強い視線を感じていた。

ナサレーが、私の目の前に立つ。

「もう一度聞く。お前は何者だ。魔物か、それとも人間か、どちらなのだ」

私は、その答えをみつけれられてはいなかった。質問にある二択の、どちらにも当てはまらないからだ。

ナサレーの、真実を見極めようとする視線を、私は正面から受け止める。

「人間だ」と答えてしまえばいい。そうすれば、この場は丸く収まるはずだ。

しかし、嘘を吐くという行為には、なかなか踏み切れなかった。

ナサレーは、嫌味なやつだが、悪い人間であるとは思えない。再び彼を騙して、いつかその嘘がばれたら、もう二度と彼の信頼を取り戻すことはできないだろう。

それに、何より私は、自分を偽るのも嫌だった。

私は私だ。

それ以外の何物でもない。

例えば、『間の子^{ユイ}』という存在が、この世界で受け入れられ難い存在であるとして、それでも私は、その『間の子』という存在に他ならないのだ。

自分という存在の、居場所を手に入れるためには、そこから目を背けてはいけない。私という存在を知ってもらい、受け入れてもらう努力をするしかないのだ。

私は、観念したように、長い溜め息を一つついた。

ここは、腹をくくるしかなかった。

私は、ナサレーの目を真っ直ぐ見つめ返す。

「私は間の子よ」

「…ユイ…？ 何だそれは」

ナサレーが怪訝な顔をする。

「トルバディア語では間の子という意味になるわ」

私は一度言葉を区切って、深呼吸をしてから続ける。

「私は、あなたたちが、魔物と呼ぶものに属する魔族レイトという種族と、人間との間の子らしいわ。らしいというのは、父親を知らないからよ。母親は人間だったけど…。もしかしたら先祖がえりかもしれないとも聞いているわ。どちらにしろ、いわゆる混血になるわね」
ナサレーは、驚愕に目を見開き、絶句していた。

「…混血…」

そう呟いたのは、レツエンだった。

「あと、誤解があるから言っておくけど、あんたたちが魔物と一括りにしている種族には、二通りあるの。このシンは魔族だけど、あつちの2匹は死魔アシールよ。人間に悪さするのは死魔。魔族は、むしろあなたたち人間を、死魔たちから守ろうとしているの。だから、シンに酷いことしないで」

最後の方は、威嚇するように言った。

すると、ククとシンが低く笑った。同時に、痛みのために、うめき声もあげる。

「シン、目が覚めたの？ 大丈夫!？」

私は、シンを覗き込んだ。

「おぬし…馬鹿だろう」

「………減らず口たたけるなら大丈夫そうね。一応、よかったわ」

「人間は猜疑心の強い生き物だ。そなたの道理を説いたところで、理解できる相手とも限らぬだろうに」

苦痛のためか、シンはゆっくりと小さく言った。

「シンも、トルバディア語がわかるの？」

シンはあえて返事をせず、ニヤリと片方だけ口をつりあげる。

「うわ…、私、損した気分…。ま、今さらだけどね」

「さて、そなたのそのバカ正直さが、吉と出るか凶と出るか…」

シンが、言いながら、体を起こしはじめた。

相変わらず顔色は蒼白で、ふらふらとしている。

『無理しないで、おとなしくしてなさいよ！ だいたい私は、あん

「たに聞きたいことがあるんだからね」

「聞きたいこと？」

身体をなんとか起こし、槍を支えにシンは座り込む。

「あんたウィルナに居たでしょ。それからウルザにも。なんで私たちが行こうとしていた封印の場所に、都合よくあんたがいるのよ。しかも、その封印の術式、いじられてたんだからね。まさか関係あるとか言わないでしょうね」

シンが、ため息を吐いて、呆れるように私を見た。

「疑っている相手に、そのように訊ねて、真実を引き出せると思うのか？ 私が、嘘を言わぬと何故言い切れる」

「あら大丈夫よ。私は、大抵の嘘なら見抜ける自信があるの。さあ、正直に言いなさい」

「…もし…私が術式を乱した張本人だと言ったらどうするのだ？」

シンが、面白そうに私を見る。

その言葉と態度で、わかってしまった。

「つまり、関係がないのね。ああよかった。これで一つすっきりした」

「…私は、まだ答えておらぬぞ」

シンが、釈然としない様子になる。

「だいたい地の王の部下が、そんなことするわけないか」

「おい、人の話を聞け」

「聞いてるでしょ」

シンが、なんとも言えない顔になった。

その時、

「女、お前はその母親の名を知っているのか？」

不意に、レツエンが、そう訊ねてきた。

私は、不思議な既視感を覚えて、レツエンを見上げる。

どこかで、見たことがある顔だった。

なかなか思い出せない。

「母親の名前は知らない」

「…知らぬか…だが…」

レツエンは、一度考えるように視線をさまよわせたが、やがて、鋭い目つきで私を見た。

「お前が、魔物の血を引いているのなら、私の為すべきことは一つだけだ」

馬首をめぐらし、剣を構える。

どうやら、私という存在は、受け入れてはもらえないようだ。

私は、シンを背後に庇って、レツエンに対峙した。

「あの男が持っている剣は魔剣だ。気をつける」

シンが、よろよると立ち上がる。

「怪我人はおとなしくしていなさいよ」

「お前の様な者に守られるのは、性に合わぬ」

「この見栄っ張りの意地っ張り！ 具合が悪い時は、おとなしくしてるものなの！ けが人はすっこんでなさいよ！」

シンが、嫌そうな顔をする。

「うるさい女だな。お前に守られるほど落ちぶれてはいない」

「あんたこそ、ただの強情な頭でっかちじゃない。女に守られるのは男の恥とか思ってるんじゃないの？」

シンは黙り込む。

「ほらね、やつぱり。考え方が古いのよ。けが人は邪魔だからあっちに行つてなさいよ」

その時、レツエンが、馬の腹を蹴って突進してきた。

私は、炎の魔法円を呼び出して、レツエンに向けて放つ。レツエ

ンは、走る馬から飛び降り、炎を躲した。

すぐさま大地を蹴り、再び私に向けて剣を振り下ろそうとする。

私は、なんとか切っ先を躲し、風魔法を放つ。

レツエンが、風圧を受けて、後ろに飛ばされるが、器用に体を捻ると着地して、再び剣を向けてきた。

一つ一つの攻撃がすばやく、無駄がない。

なんとか距離を取らないと、すぐに剣で串刺しにされそうだ。

私は、もう一度風魔法を呼びだして、レッエンにぶつける。

しかしレッエンが、剣を縦に構え、魔法円を呼び出し、同じ風魔法を纏う剣をぶつけてきた。

風魔法は相殺される。

レッエンは、間をおかずして二撃を繰り出してきた。

私は慌ててもう一度魔法円を呼び出す。

間に合わないかもしれないと思ったその瞬間、突如、シンが割り込んできた。

槍でレッエンの剣を受け止める。しかし、力で押し負けていた。

シンが、苦しげに呻きながら大地に片膝をつく。

なんとか、レッエンの剣を押し返すと、肩で息をしながら、槍を大地に突き刺した。

『一度引くぞ』

シンが苦しそうにそう言って、魔法円を呼び出す。

中央に六芒星の描かれた移転魔法だ。

魔法円は大地に横たわり、輝き始める。私たちの体が円の中で消え始めたその瞬間。

「待て！ サリエ！」

レッエンがそう叫んだ。

私は、驚きの表情でレッエンを見返す。

レッエン自身も、自分の言葉に驚いた様子だった。

「サリエ」の名前で、思い出したことがある。

クイナに言われたことがあった。私は、サリエという人物に、よく似ているらしいということ。

そしてその人は、すでに亡くなっているということ。

そうやって思い出しているうちに、やがてうすばやけていた記憶の糸が、つながりはじめる。

私の母と思われる人物が、男に殺されたこと。

その母の仇と思われる男に、幼少時代、プルシャーラで一度会っていること。

その男の容貌が、プラチナブロードと緑色の目をしてたこと。忘れかけていた事柄が、次々と脳裏に浮かび上がってくる。

「あなた…もしかして…」

私は、そう言いかけた。

しかし魔法円は、無情にも私たちの体を、あっという間にそこから連れ去る。

私は、その場から消え去る最後のその瞬間、困惑したような緑色の目をみたような気がしていた。

1 死魔の紋

移転魔法によって、どこかの室内に移動すると、シンが力なく倒れ込んだ。

『シン！？ 大丈夫！？ しっかりしてよ！？』

抱き起こそうと駆け寄ると、シンが片目だけをうつすらと開けた。騒がずとも、聞こえている』

苦しそうにつぶやかれる言葉を聞いて、私は安堵した。思わず体の力が抜ける。

シンが体を動かそうとして、呻いた。

『無理しないで、おとなしくしてなさいよ』

私は、寝ているように促し、汗で額に張り付いた髪をどけてやる。ゆっくりと室内を見回してみた。

簡素だが、値の張りそうな調度が揃っている立派な部屋だ。

何よりとても静かな場所だった。

つい先ほどまでの喧騒が、まるで嘘のようだ。

『ここは何処？』

『^キ地の中心だ』

『そうなんだ…』

私は、ほっと息を吐く。

『私誰かを呼んでくるね』

言って立ち上がる。

ドアを開ける前に、一度背後を振り返って、シンの様子を確認めようとした。すると、シンの体がうつすらと輝いているように見えた。

なんとなく、輪郭もぼやけているような気がする。

目の錯覚かと思い、擦ってみるが、やはり錯覚ではない。

私は、慌てて駆け寄る。

近づいてみると、やはり、目を瞑ったままのシンの体が、消えは

じめていた。

『…シン…？ ちょっと、シン！？』

呼びかけるが、シンは返事をしない。それどころかシンの体が、
どんと消えていく。

『やだ！ どうしたの！？ ねえ、シン！ 返事してよ！ シン！
？』

私が叫んでいると、部屋のドアが開いた。

目を向けると、地の王エナキが入ってくる場所だった。

『地の王！ シンが！』

『わかっておる、案ずるでない』

地の王が、落ち着くようにと私に言う。

でも、これが落ち着いていられるわけがない。

『地の王、シンを助けて！ お願い！』

私は、必死になって懇願する。

『大丈夫じゃ、確かに弱っているが、命に別状はない。魔力が弱ま
って、人の容をとれなくなっているだけじゃ』

地の王が、私の頭を安心させるように撫でる。

『ほれ、その証拠に…』

そう言っただの王に促され、シンに視線を戻すと、すでにシンの
姿はそこにはなかった。代わりに、黒い豹に似た生き物が寝転がっ
ている。

『…これが…？ シン…？』

地の王が頷く。

『これが、シンの本質じゃ。確かに、怪我也酷いのう。特に肩の傷
は、退魔の術の施された魔剣によるものだ。放っておいては、腐っ
てゆく。誰ぞ人を呼んで治療させよう』

大丈夫だと、安心させるように笑った地の王の笑顔に、私は心底
安堵した。

『しかし、何故そなたがシンと一緒にいるのじゃ』

別室に移った私は、地の王に、ここ数日、自分の身の上起きた出来事を、順を追って説明した。

『そうか…』と言って、地の王が頷く。

『逆五芒星の紋は、死魔アジュールの定紋。おそらくは、死魔によって飛ばされたのじゃろな。意図あつてのことか、それとも固定してある魔法円に、偶然触れてしまったのか…今の時点ではどちらとも言えぬ。真偽は、シンの回復を待つしかないのう』

地の王はそう言って、考えるように顎に手をあてた。

『シンは、やっぱり封印のことを調べていたのですか？』

私の質問に地の王は頷く。

『魔道士が、封印を乱す者がいると言っておったので、シンに調べさせておった。それなりの収穫もあったようじゃ』

それよりも、と言って、地の王が私を見る。

『無事なようだなによりじゃ。ナンが、血相をかえておったぞ、そなたが消えてしまったと』

『そうだ！ ナン！ セト！ 私、帰らなきゃ！』

私は、反射的に椅子から立ち上がる。

『そう慌てるでない。ナンは今地の中心におるぞ』

『ほんとうですか！』

地の王が頷く。

『今、呼んである。そろそろ戻って来るころであろう』

地の王の、声が終わるや否や、突如、騒々しく部屋のドアが開かれた。

目を向ければ、ナンが飛び込んできたことだった。

『ナン！』

『…！』

私たちは、互いに走り寄る。

私は、ナンに飛びこむと、久しぶりに触れたナンの毛皮に頬をうずめた。

『一！ 心配シタゾ！ 何処ニ居タノダ！』

怒ったように言うナンを、私は見上げる。

少しだけ、痩せたような気がした。

『心配かけてごめん』

懐かしいナンの声に、私は、安堵のあまり涙がこみ上げてくる。

流れ落ちる私の涙を見て、ナンが驚いた。

慌てた様子で、鼻先で涙をぬぐいはじめる。

それでもぬぐいきれないほど流れ落ちる涙を、ナンが困ったように舐めとった。

『怒鳴ツテ悪カッタ…泣クナ…無事デヨカッタ…』

少し気まずそうに、何より困った様子でナンはそう言いながら、私の涙を拭い続ける。

私はというと、安堵のために、なかなか泣き止むことができなかった。

すぐ後に、ウトウもやってきた。

私とウトウは、お互いに抱き合って涙を流し合い、再会を喜んだのだった。

2 選り取る道

私は、地の王^{エンキ}への挨拶もそこそこに、ウルザへ向かった。

セトが、まだウルザに居ると聞いたからだ。

ナンは、地の中心^{キシエル}に残っている。

実は、私が王都にいた頃、封印の状態が、かなり危ない状態になっていたらしい。おかげで、ナンは地の中心に呼び戻されていたのだ。

イムルードが奔走し、なんとか封印の状態は安定したようだが、いまだ予断を許さない状況にあるようだ。

イムルードは、相変わらず封印の補強にかかりきりになっていて、私の捜索には手を付けられなかったそうだ。その分、セトが一人で頑張っていたらしい。セトは、ウルザで私の手がかりにつながるものを、必死で探し続けていたというのだ。

イムルードも相当心配してくれていたようなので、あとで謝らないとならない。

封印については、シンが何かを掴んだようなので、おそらく状況は好転するはずだと地の王が言っていた。その点は安堵していた。

私は、地の中心のドアを借りてウルザに移動する。

着いた場所は、クイナの家の近くだ。

私は、クイナにも確認したいことがあった。

王都を去る間際に会った、あのレツェンという男のことが、どうしても脳裏から離れないのだ。

たぶんサリエという人は、私の母親なのだ。

ならばクイナは、私の母親の知り合いということになる。もしかしたらあのレツェンという男の事も、何か知っているかもしれない。何より、私が何者であるのかさえも、知っているかもしれないのだ。

人間でも、魔族でもない、中途半端な間の子^{ユイ}という存在の私。

私と母は、15年前のあの日、何故殺されなければならなかったのだろう。

その疑問の答えが、もしかしたら見つかるかもしれないのだ。気持ち急いでいた。

私は、ウルザの地を一步踏み出す。

まずは、セトを探そうと思った。会って、とにかく無事を確認したかったのだ。

しかし、遠見の魔法を使おうとしたその瞬間、

「まあ、無事だったの!？」

クイナが、私の姿を見つけて、走り寄ってきた。

私は、半ば呆然とクイナを見返した。

これが、偶然と呼べるのだろうか。

私には、何か見えない意思のようなものを感じた。

もしかしたら、これが運命というものなのかもしれないと、私は漠然と思っていた。

偶然などというものは、この世には存在しないのかもしれない。

全ては必然のもと、あらかじめ道筋を決められ終えていて、私は、

その決められた一本道を、ただなぞっているにすぎないのではないだろうか。

巨大な大河の奔流に、小舟が無力に押し流されるように、私は、すでに巨大な運命の渦に飲み込まれているのかもしれない。

巨大な手のひらで踊らされているような錯覚に陥り、私は恐怖感を覚える。

まるで、無数の蜘蛛の糸に絡め取られ、自由に身動きできないでいる蝶のようだ。

いいよつのない無力感を覚え、思わず私は、自分で自分の体を抱きしめた。

マイナス思考に陥りそうになって、慌てて頭を振る。

ダメだ。

気持ちで負けちゃダメだ。

私は拳を握りしめる。

違う。

そうじゃない。

例えばすでに道筋があったとして、しかし、それを選び取るのは自分だ。

決められた道筋を歩くのではない。

自分で選び取った道を歩くのだ。

そうでなければ、どうやってナンを助けるといふのだ。

私は空を睨みつける。

これが、誰かが私に与えている未来だというのなら、私はそれをあえて拾ってやるうじゃないか。

そうすれば、この道はすでに与えられたものではない。私が選び取った道になるのだ。

私は、深呼吸を一つする。

これは、私が選び取った道。

決して与えられた道などではない。

言い聞かせながら、私はクイナに視線を戻す。

怪訝な顔で見返すクイナに言った。

「私、聞きたいことがあるんです」と。

「お連れの方が、大層心配なさっていましたよ」

じきに帰ってくるはずだから、入れ違いにならないように、家にもどりましょうと言われ、私はそのままクイナの家を招かれていた。どうやらクイナは、セトに食事と部屋を提供してくれていたようなのだ。

ちゃんと寝食を確保できていたことに、私は安堵した。

獣人が、トルバディアでどんな扱いを受けているのか分かっていたので、心配で気が気ではなかったのだ。

私は、クイナにお礼を言う。

クイナは、自分こそ礼を言いたかったと首を横に振った。

「それで、聞きたいことは？」

「サリエさんについて知りたいんです」

「サリエ様の事を？」

クイナは、私をじっと見返す。

やがて頷き、遠い過去を思い出すために視線をさまよわせはじめた。

サリエというのは、トルバディアのシャントクレール侯爵家の娘であつたらしい。

クイナは、サリエと、そのすぐ上の兄レッツェンの乳母であつたそ
うだ。

レッツェンが、サリエの兄だったことに、私は少なからぬ衝撃を受けていた。

当時クイナは体調を崩し、侯爵家への奉公を辞して、ウルザにある生家で隠居生活を送っていた。

穏やかな日々を送っていたところ、ある日サリエが、身重の体で、クイナを頼ってきたそうなのだ。

サリエは、黙って家を出てきたらしく、クイナは帰るように説得したが、サリエは絶対に頷かなかつた。一人で産み育てると言い張っていたらしい。

子どもの父親については、とうとう最後まで洩らさなかつたそ
うだ。

良家のお嬢様が、市井で、一人子供を産み育てるなどという無謀を、クイナが見過ごせるはずもなく、困った末に、サリエの兄であるレッツェンに相談した。

それが全ての過ちだったと、クイナは唇を噛んでいた。

最初は、捨て置けと非情なことを言っていたレッツェンが、数日の
のち、ひっそりとクイナのもとを訪れたらしい。

生まれた子供の背中を調べる。背中に痣があったら、知らせるよ
うにとレツェンは言ったそうだ。

クイナは、たかが痣の有無に、何の意味があるのか、はかりかね
ていたようだったが、やがて産み月になり、とり上げた子供の背中
を見て、何か重大な意味を持つのではないかと、ようやく悟ったよ
うだ。

レツェンの言う通り、子供の背中には、不思議な形の痣があつた
というのだ。

その旨を、近くに逗留していたレツェンに、知らせに行つてい
たところ、サリエはその間に家を出てしまつていた。

どうやら、子が生まれたら、すぐに出ていく算段をつけていたよ
うなのだ。

その時になつて、ようやくクイナは、サリエの本気を悟れたそう
だ。

しかし時すでに遅く、もはやサリエの姿はどこにもなかった。
やがて頼みのレツェンが、戻ってきたとき、一緒に戻つたのはサ
リエの遺体だった。

刀疵を負つて、事切れていたサリエの姿と、表情を消し去つたレ
ツェンの姿を見て、何が起こつたのか、クイナは察したそうだ。

兄が妹を殺す。

そんな悲劇の一端を、自分が担ってしまったことを、クイナは今
でも後悔し続けていた。

私は、クイナに、その赤ん坊にあつた痣というのがどんなものだ
つたのか聞いてみた。

するとクイナはこう答えた。

小さな赤ん坊の背中には、不思議な形の痣があつた。
まるで二枚の羽を広げたような、翼のかたちをした痣があつたの
だ。

3 再会

私は、少し頭を冷やそうと、クイナの家を出た。

私の背中には、痣がある。

2枚の翼を広げたような形の痣だ。

不思議な形をしているものだ、自分でも思っただけだが、とくに気にすることもなかった。

まさか、この痣に何か意味があるのだとは、思ってもみなかった。私は自分の肩に手をかけて、ギュツと握りしめる。

私は、サリエの子で間違いない。すると、レツェンは私の伯父になるのだ。

血のつながった伯父が、母の仇。

私の胸中は複雑だった。

この背中の痣に、いったいどんな意味があるのだろうか？
そして、私の父親はいったい誰なのだろうか？
もしかしたら、生きていたのだろうか？

謎を解くつもりが、さらなる謎を引き寄せただけだった。

たぶんこの謎の答えは、レツェンが知っているのだ。

王都で最後に見た、冷たい緑色の目を、私は思い出す。

レツェンは、私がサリエの子供であることに気づいたのだろうか？
たぶん、気づいたに違いない。

だから、再び私を殺そうとした。

私は、生きていてはいけない存在なのだろうか？

私はいったい何者なのだ？

答えのない疑問を抱きながら、私は、ぼんやりと棧橋を歩く。
とてつもない寂寥感に襲われた。

世界の中で、一人ぼっちになってしまったような錯覚に陥っていた。

私は、生きていてよいのだろうか？

母であるサリエと一緒に、あの日死んでいた方がよかったのではないだろうか？

わからない。

私はいつたい何者なのだ？

出口のない迷路をさまよっていたその時、

「ヒト!？」

突然、頭上から声がした。

見上げると、棧橋の上にかかっていた橋の上に、セトの姿があった。

セトの目は驚愕に見開かれている。

「セト…？」

私が小さく返すと、セトは必死の形相で、すぐさま橋を飛び降りてくる。

棧橋に着地すると、なりふり構わず、走り寄ってきた。

ぶつかるように体を引き寄せられ、ギューギューと苦しいほどに抱きしめられる。

「ヒト…ヒト…」

セトは、何度も私の名を呼んだ。セトの体は、震えていた。久しぶりにセトの匂いを嗅いだ。

「セト…」

私は、セトの胸に顔を埋める。

「ヒト…無事でよかった…気が狂うかと思った」

そう呟いた声も震えていた。

「ヒト…もうどこにも行かないで」

きつく抱きしめられて、私は返事をする事ができない。

何とか小さく頷いて返し、セトの背中に手をまわした。

「ヒト…ヒト…」

泣きそうな声で、繰り返し呼ばれ、私の寂しさは、しだいに薄れていった。

こんなにもセトが、私を必要としてくれているのだ。寂しいなん

て言ったら、罰が当たってしまう。

久しぶりに感じたセトの腕は、とても温かくて安心できた。

セトは少し落ち着くと、家に帰りたいと漏らした。

ウルザには、もう居たくないのだと。

また私が、何処かに消えてしまいそうで怖いのだと、セトは言った。

そこまで、心配をかけてしまったのかと、私は深く反省した。

私たちは、クイナの家立ち寄り、無事再会できたことを報告すると、すぐに懐かしの我が家へと戻る。

セトは、家に着くなり、気絶するように眠ってしまった。

どうやらセトは、この3日間、睡眠も食事も、ろくにとっていなかったようなのだ。

確かに目は、寝不足で真っ赤に充血しているし、身体つきも、以前より痩せたようだった。

私は、空腹感を覚えていたのだが、セトにがちりと抱き込まれ、離してもらえず、しかたなく空腹を我慢して一緒に横になった。

セトは、真夜中に何度もうなされて飛び起きては、私を見つげ出し、安堵して眠りにつくという行為を繰り返していた。

私は、安心させるように、ずっとセトの側で、頭や背中を撫で続けていた。

明け方近くになり、ようやくセトは安らかな寝息をたてるようになり、私も一緒になって、深い眠りに落ちることができた。

縫りつくように回されている腕に、私は、ここに居てもいいのだ、必要とされているのだと、酷く安心できていた。

3 再会（後書き）

今までだったら、ここで終わっていたはずですが、一部読者様からのご要望もあり、もうちょっと突っ込んで書くことにしました。

一応経緯は、6/30の活動報告に書いてあるのですが、とくにやめてほしいとの意見もなく、むしろいつも感想をくださる一番の読者様からは、羞恥心は投げ捨てるものだ（笑）とのアドバイスもあったので、思い切って書きました。

というわけで、セトのイメージが違うと思われる方もいるかもしれないので（一応極力違和感のないように書いたつもりですが）、今まで通りほのぼのな感じがよいというかたは、次話「4 乱心？」は読まないでいただきたいです（汗）

そんなものすごいことは書いていませんが、一応予防線です。

宜しくお願いいたします。

4 乱心？ (前書き)

注意報発令中

一話前の、後書きを読んだうえで、ご了承いただけた方のみお進みください。

ここを読まなくても、本編に差し障りはないですので。
嫌だという方は、次話も含めて、2話ほど飛ばしていただければ、
全く問題はありません。

4 乱心？

どれだけ眠っていただろう。

私は、空腹感を覚えて目が覚めた。冗談抜きに、お腹と背中がくつつきそうなほどだ。

室内は明るい。おそらく昼近くになるのではないだろうか。

私は、寝ぼけ眼をまゆをこしこし擦る。まだ眠り足りないが、お腹のあんばいがよくない。空腹感が、睡眠欲にぶちぎりで勝っている。

『ヒト、目が覚めた？』

間近でセトの声がした。

声の方に視線を向ければ、セトもすでに目が覚めている。

『起きてたの？』

私の声にセトが頷いた。

セトは、手を伸ばして、私の頬にかかる髪をどける。

そのまま、私の頬の傷をなぞった。

『頬、怪我してるね。女の子が顔にけがをするなんて…。いったい誰にやられたの？』

セトが、私の頬の傷を覗き込む。

私は、寝ぼけた頭で、ぼんやりと思い返していたが、頬の傷の経緯を思い出し、思わず体をこわばらせた。

『…どうしたの？』

セトは、あからさまに様子のおかしくなった私を、怪訝な顔をして見る。

私は、内心で焦っていた。

グルシアとかいう死アシル魔の、変態チックな行動を思い出してしまったからだ。

『べ別に、なな何でもないよ？ ちょ、ちょっと…引っ搔かれただけ…』

私は、言いながらセトから視線を逸らした。

セトがスツと目を細めて、私の顎を掴んで引き戻す。

『ふーん、何でもないので、視線を逸らすんだ。変なの』
ギクギク。

セトが、ニツコリと怖い笑顔を張り付けた。

『で、どうしたのかな？』

これはもう、絶対にはばれてはいけないと、私の野生の感が言っていた。

『や、やだなあ。何にもないわよ。セトは心配性よね』

私は、ヘラリと乾いた笑いを返す。

『ずいぶんと見くびられたもんだね。俺が、ヒトのわかりやすい嘘を、見抜けないとも思う？』

セトは笑っていたが、目が全く笑っていないかった。

『だいたい、ヒトがそうやって隠し事しようとするときは、ろくでもないことであつてる証拠なんだよね。で、今度はどんなことになつていたのかな？』

私は、蛇に睨まれたカエルのようにになった。

どうやったたら、セトの追撃を振り切れるだろう？

必死になつて考えをめぐらす。

『下手な嘘をつこうとしているなら、時間の無駄だからやめてくれる？ 俺、今日は、そういうことを大目に見てあげるような余裕はないからね』

そう言つて、セトの笑顔が、増々怖くなった。

私は、笑顔じゃなく怒つた時のセトを思い出して、身震いする。

『ほんと…たいしたことはないんだよ？ ちょっと引っ掻かれただけだし』

おずおずと口を開く。

『誰に？』

『赤い髪の毛、グルシアとかいう死魔』

『それだけ？』

うっ。

そこは突っ込まれたくなかった。まったく、こついつ時のセトは鋭いんだよな。侮れん。

『そ、それだけだよ』

私はそう言つて、不自然にならない程度に、視線を逸らした。

『嘘だね』

私は、息を吞んでセトを見た。

『嘘をつくとためにならないって、何度も言ってるよね』

セトの笑顔が、不穏なものに変わりつつある。何だか、最後通告のように聞こえた。

『で、本当のところはどうなの？』

私は、もはや逃げられないと悟った。

真つ青になりながら、覚悟を決めて、口を開く。

『……………舐められ……………ました……………』

直後セトが無表情になった。

『……………どこを？』

低くたずねてくる。

ひい！ 怖いんですけど！

『……………ここです……………！』

私は、びしりと気をつけをして、自分の頬の傷を指さした。

『……………そう……………』

短く答え、セトは、目を細めて怒りを含んだ視線で私を見下ろす。

私は、息を吞んでセトを見上げていた。

どれだけそうしていたことだろう。

やがて無表情なセトの顔が近づいてきて、私の頬にセトの唇が触れた。

私は、驚きのあまり、目を見開き、硬直する。

セトの唇は、ゆっくりと傷を辿っていく。

湿った暖かい唇が、優しく頬を移動してゆく感触を、ただ呆然と感じていた。

やがて唇を離すと、セトは私を覗き込む。

『まさか死魔相手にも、そんなふうは無防備に固まってたわけじゃないよね』

へ？

私は、呆然とセトを見返した。

セトがため息をつく。

『少しは、危機意識を持ってもらわないと』

へ？

セトが、私の後頭部に手を差し入れた。そのまま、ぐいと顔を引き寄せられる。

『これでもまだわからない？』

間近な位置で、甘さ全開にセトがささやく。

へっ！？

私の目は、これでもかというほど驚愕に見開かれる。

いったいなんなんだ！ このメツチャ甘い雰囲気は……！

まさかのまさかだよね！？

無理だし！ ありえないし！？

私の頭は、パニック寸前になっている。

セトが、フツと優しく笑い、目を閉じた。

ゆっくりと唇を落としてくる。

私は、セトが近づくそのさまを、まじまじと見つめていた。

セトの唇が、私の唇に触れる。

あまりの想定外の出来事に、私の脳みそはキャパオーバーになった。

全身を硬直させて、ただ呆然とする。

何度も、何度も角度を変えては落とされる唇に、私はなすすべもない。

やがて私は、自己に備わっていた防衛本能のおかげで、意識を手放すという現実逃避をおこなったのだった。

4 乱心？

(後書き)

実のところ、今までの話の中にも、読者様の意見を取り入れた部分はありません。今回だけは特別というわけではありません。

今回は、ちょっと特殊なケースだったので、前置きをかかせていただきましたが。

私自身が、それもありかな、と思えば、今後もどんどん取り入れていきたいと思っています。

無理なことと言われるのは困りますけどね。

5 丸め込まれる女

私は、猛烈な空腹感を覚えて目が覚めた。
眠ったはずなのに、疲れがとれていない。
なんでだっけ？

私は、首を捻って、眠りにつく前のことを思い出す。そして、ぶち当たった難問に、飛び起きた。

慌てて周囲を見回したが、セトの姿はない。

私は、めっちゃめっちゃホツとして、胸を撫で下ろした。
ため息を一つつく。

気絶する前のあれは、いったい何だったのだ？
考えたところで、よくわからない。

.....
やっぱり夢だったのではないだろうか？

もし夢だったというなら、いったいどこからどこまでが夢だったのだ？

私は首をかしげる。

もし夢ではなく、現実だったというのなら.....

いったいどの面さげて顔を合わせるといふのだ!!!
相手はセトなのだ。

血のつながりのある実の息子ではないが、我が子同然に思っていた存在だ。そんな相手にあんなことされて、いったい私は、どんな顔をして会えばいいというのだ！

私は頭を抱えたくなった。

ベッドを下り、私はドアの前をウロウロしはじめる。

夢であってほしい。

でも夢じゃないに違いない。

私は、意味もなく、ドアの前を何十往復もしていた。

コンコン。

突然ノックの音がした。私は、飛び上がって驚く。反射的に窓際にダッシュした。そのままカーテンにくるまって隠れる。

『ヒト起きてる？』

起きてません！

私は、カーテンの中で、息を呑む。

『入っていい？』

ダメだし！

しかし、私の必死の思いは通じず、無情にもドアが開く音がする。私は息をひそめて、カーテンの中に隠れていた。

『……何やってるの？』

セトの呆れたような声が聞こえてきた。

ひー！ もう見つかった！

私は、それでもあきらめがつかず、息を殺してカーテンの中に潜む。

セトがゆっくりと近づいてくる足音がした。

気のせいだから、あっちに行ってください！

お願いだから！

心の準備が……！！

私は、顔面蒼白になる。

『ご飯の用意ができたんだけどな』

私はビクリと肩をふるわせた。

急にお腹が、空腹を主張しはじめた。

『ヒトが大好きな魚料理だよ』

私の耳がピクピクと反応した。

『せっかく用意したのに、食べないの？』

『食べる！』

甘い誘惑に勝てず、私は、反射的にカーテンから抜け出していた。瞬時に、しまったと思ったが、表では、セトが、優しい笑顔で待ち構えていた。

あれ？

「思ったよりも普通だ。」

私は、ちよつと拍子抜けした。

『じゃあ、冷めないうちに食べよう』

セトが手を差し出す。

思わず、まじまじとその手を眺めてしまったが、やがてお腹が、グルグルと存在感をアピールしはじめた。

私は素直に頷いて、セトの手のひらに手を重ねる。

セトの笑顔が、深くなった。

やっぱり、夢だったのかな？

私は腑に落ちなくて、首を傾げる。

『ヒトは、あんまり好きじゃないかもしれないかもしれないけど、甘いものも用意してあるんだよ』

甘いものか：確かにあまり得意じゃない。セトが作るものは、甘さ控えめにしてあるので、何とか食べられるけど。

私は根っからの辛党だ。ちなみに、セトは甘党だ。

こんな、もやもやした気分の時には、お酒でも飲みたい気分なのだが…。

この世界では、まだ一度しか飲んだことないけど、体質的に、酒には目茶目茶弱いことだけはわかった。

以前、地^キの中心^{シエル}で、イムルードの酒を飲んだ時に、あれしきのワインごときで、かなり足にきた。ワインなんて、色水みたいなものなのに。

ほんのわずかな酒で、顔も熱くなってしまったことだし、前みたいにウイスキーとかバーボンをロックで飲むのは無理そうだ。

酒が体質に合わないんだったら、炭酸飲料^{ピール}でもいいんだけど…。

思う存分、浴びるほど飲んでやりたい気分なのになあ。

お腹の虫が、グルルルと鳴いた。

『随分、盛大な自己主張だね』

セトが苦笑する。

『あたりまえよ！ だいたい何食抜いたと思ってるの！』

私は、指折り数えはじめ。合計3食は抜いているはずだ。

『うわ！ もったいなさすぎる！！！！』

頭をガシガシとかきむしりたい気分になった。

セトが、クスクスと笑った。

『いっぱい用意してあるから、大丈夫だよ。食べそこねたぶん、取り返そうね』

私は、目をキラキラとさせて、満面の笑みで頷き返したのだった。

その後、私は無心で料理を口に運び続けた

目の前では、セトが頼杖をついて、私が食べるところを見守っている。

『セトも食べなよ。美味しいよ？』

『気にしなくても、後で食べるから大丈夫だよ。ヒトこそお腹すいてるんだろ？ お腹いっぱい満足するまで食べてもいいよ』

言って、セトが目を細める。

お腹いっぱい！！！！

なんてステキな響きだろう。

私は、ニコニコと笑顔を浮かべる。

ウキウキとした気分で、再び食事を開始した。目の前のご飯の事で、頭がいっぱいになる。

おかげで、私はセトが呟いた言葉は、聞き漏らしていた。

セトは私を見ながらこうつぶやいていた。

『安全な男と思われるのもしやくにさわるけど、警戒されるのもよくないよな。さじ加減がむずかしいな』と。

6 怒ると怖い人

「ご飯を食べ終え、人心地ついたころ、我が家の主がようやく帰ってきた。」

イムルードの帰宅だ。

私は、心配かけて悪かったと思い、『ゴメンね』と言いながら、イムルードを出迎えたのだが、当のイムルードは、無言のまま私を見返した。

イムルードの顔を見ると、なんだかいつもと様子が違う。

いつものとぼけた雰囲気は、今はなりを潜め、物凄く怖い顔をして私を見ていた。

『ヒト、座りなさい』

静かに、言われたのだが、反射的に、背筋がピンと伸びるような重みがあった。

私は、背中を伸ばして、すぐさま着席する。

セトは、それを見て、苦笑しながら部屋を出て行こうとした。

見捨てないで！ と視線を向けたが、セトは一度考えるそぶりを見ながらも、やっぱり部屋を出て行く。

ぎゃー！

見捨てられた！

後に残ったのは、私と、物凄く機嫌の悪いイムルードだけ。

何故だろう？

冷や汗が勝手に流れってくる。

室内には、奇妙な緊張感が漂っていた。

イムルードは両腕を組んで、私の目の前に立つ。

『まずは、なんで急にいなくなったのか。そして、どこで何をしていたのか、きちんと説明してもらおうか』

恐ろしく静かな声で、イムルードがそう言った。

私の危機察知能力が、物凄い警報をならしている。

これは、答えを間違ったらえらい目にあつに違いない！

私は、必死になって言葉を探した。

イムルードが、視線で先を促してくる。

『ウルザでシンを見かけて、後をつけたの…。ウイルナでもシンを見たから、変だなと思つて…』

『ウイルナでシンを見かけたときに、セトやナンには相談した？』

イムルードの赤い眼が、キラリと光つて聞いたです。

してません…。

私は、とつさに言葉が出ず、ただイムルードを見返す。

イムルードは、すぐさま答えを察したようだ。

『そう、相談しなかつたわけだ』

イムルードが、赤い眼をスツと細める。

ぎよえー！

何だか、早くも答えを間違つた気がする！

私は、何やら腹の奥の方が冷えていくような気がした。

『それで？』

『へ？』

『続きは？ どうしたの？』

赤い眼の奥には、明らかに怒りと呼べる色が潜んでいる。

私は、恐ろしさで、増々背筋をピンと伸ばした。

『つ、続きはですね。えーと、なんか移転魔法に捕まってしまい、

気がついたらトルバディアの王宮に居て、牢屋に入れられてました』

『…牢屋…？』

『あ、牢屋のご飯は、本当は最悪だったけど、最後はとっても美味しいご飯に変わつてね…』

私は、チラリとイムルードを見る。

イムルードは、無表情に私を見返していた。

『ええとね、そのあと気持ち悪い死魔アシールが急に来て、それでラウシュとナサレーに助けってもらつて…あの、ラウシュたちは王宮の人間なだけで…』

私は、だんだん声が小さくなってゆく。

『それで？』

『その後、天空エ・ギザラの楔に連れて行かれて
そこでまたイムルードが反応した。』

『まさか、天空の楔に入ったと言わないよね？』
剣呑な表情で確認してくる。

『入ってません！ 絶対に、入ってません！』

私は、またしてもビシリと気を付けをする。

『そう…』

ふー、今度は間違っていなかったようだ。よかった。

『で？』

短く先を促すイムルードが、本気で怖い。

こんな人だったっけ？ と、思わず首を傾げなくなる。

『その後、また同じ死魔があらわれて、シンに合流して、地キの中心シエル
に連れ帰ってもらいました』

ちよつと端折った感があるけど、大筋間違っていないし。

『つまり、死魔に付け狙われていたわけだ。ちゃんと始末はできて
るの？』

できていません…。たぶん…。

私は、ゆつくりと視線を外した。

『まさか、まだ生きてるわけ？ その死魔は』

イムルードが、視線を細める。

『じゃあ、今後も付け狙われる可能性があるわけだ』

フーと長い息をついて、イムルードが私を見た。

そして、急にニツコリと笑う。まったく笑顔に見えない、張り付
けたような笑顔だ。

私も、つられてヘラリと笑った。

不意に、イムルードが、大きく息を吸い込んだ。

そして。

『この、バカ娘がつ！！！！』

思いつきり大声で怒鳴った。

私は、驚きのあまり、目を白黒させる。イムルードに怒鳴られたのなんて、はじめてのことだ。

『どれだけ、皆に心配をかけたなら気が済むんだ！』

ガシリと、頭を掴んで引き寄せられた。

『どうしてそう無鉄砲で、考えなしで、迂闊なんだ！』

イムルードの胸に、思いつきり頭を押し付けられる。

『私がどれだけ心配したと知っているんだ』

絞り出すようにイムルードがそう言っ、苦しいほどに抱きしめられた。

確かに、セトにもナンにも心配をかけている。イムルードが怒るのも当たり前だ。

でも。

『悪気があつたわけじゃないの』

『悪気があつたら、最悪だ』

その通りですね。

『ごめんなさい』

私は、小さくなる。

イムルードが小さく息を吐いた。

私のつむじに唇を落としてくる。そして、しみじみと呟いた。

『無事でよかった』と。

私は、イムルードを見上げる。

『心配かけてゴメンね。これからは気を付けるから』

『そうしてくれ。でないと私の心臓が持たない』

苦笑ったイムルードの表情は、ようやくいつもの顔に近くなっていた。

『本当にごめんなさい』

イムルードが、しかたないとはかりに、諦めたように小さく笑う。

私の額に唇をおとし、その後、まぶたにも口づけた。

『今度同じことをしたら、お仕置きだからね』

どんなお仕置きだ？

内心でつつこみたくなっただが、今は黙っていた。

これ以上、さっきみたいに怒られたら、私のチキンなハートが持たない。

ようやく怒りがおさまったらしいことに、私はただ安堵していた。

おかげで、いつも以上に過剰なスキンシップを受けたことは、全く気にならないでした。

7 存在の意味

目の前で、イムルードが幸せそうな顔をして酒を飲んでいた。先ほどの怒った様子は、まったく跡形もない。

これは、あれだ。

きっとアルコール分の不足によってイライラしていたに違いない。この前から、私が禁酒なんてものをさせてしまったから、情緒面に影響が出てしまったのだろう。カルシウム不足に似た現象だ。

『少しは、反省した？』

セトが聞いてくる。

くそう、やっぱり確信犯で私を見捨てたんだな。

私は、やられたことは根に持つタイプなんだからね。あとで覚えてなさいよ。

『反省なら、ちゃんとしてるし』

私は、ムカついたので、パイと横を向いた。

『だといいんだけど』

うわっ。かわいくなっ。

『ところで、シンが何かを掴んだって本当？』

イムルードが聞いてきた。

私は頷く。

『地の王エンキがそう言ったの』

『そうか、じゃあ私はちよっと地の中心キシヘルに行ってくる』

『何言ってるのよ、あんた出入り禁止でしょ。私が行くわよ』

私がそう言くと、イムルードが、ニッコリと冷たい笑顔になった。

『ヒトは留守番ね』

『え、なんでよ！』

セトがため息をついた。

『自分の胸に手をあてて考えてみたら？』

私は思わず言葉に詰まる。

そりゃね、今回はちょっと心配かけることもあったわよ。でもね、私だって気になるじゃない。いきなり蚊帳の外にされるなんて、納得できないわよ。

私は、不満げな顔で2人を見る。

『とにかく、留守番。家でおとなしくしてて』

イムルードがそう言うのと、2人がかりで、偽物の笑顔を向けてきた。有無を言わせない無言の圧力とともに。

くそう。なんなのよ2人して。

私は、不承不承頷くしかなかった。

『そう言えば、俺は経緯を聞いてないんだけど、どこで何をしていたの？』

セトに聞かれて、私は大まかな経緯を話す。

だいたいイムルードに話したことで変わらぬ、さしさわりのない部分を伝えた。

私の、出生についての部分は、まだ話すことが躊躇われていた。

何しろ、ちよつとへビーな話だ。

実の伯父に母を殺され、あげく、その伯父に殺されそうになったなんて、なんだか言いづらい。

それに、背中のお痣についても何か意味がありそうなのだが、手がかかりとえば、その伯父だけなのだ。もう一度会って話したいと言ったところで、正直に全部話したら、絶対に止められるに決まっている。

まあ、相手も、話す機会を与えてくれるとも思えないんだけど…。

生真面目そうな、レツエンという騎士の顔を思い出して、思わず苦い笑いがこみ上げてきた。

母親であるサリエと、ともにいる時間が少なかったせいだろうか。全てが、どこか、遠くの出来事のように感じられていた。不思議と、仇であるはずの男に対して、憎しみの感情を抱けない。

むしろ、男が可哀想にすら思えてきた。

自分の血を分けた妹を手にかけて彼の心中は、如何ばかりであったろう。

私にとって、家族とは、かけがえのない大切なものだ。その家族を手にかける気持ちなど、理解できようはずがない。

その理解の範疇を越える決断を下した彼の心中を、私が知り得ようはずもなかった。

おそらく、葛藤があったはずだろう。私には、それくらいしか慮ることはできないのだった。

そして、あの冷たい眼差しを思い出すと、何故だか悲しくなる。

表情を消してしまうのは、その後ろにある隠された感情を隠すためだ。彼の隠さねばならぬ感情とは、いったいどんなものであるのだろう。

ふとクイナのことを思い出された。

彼女は、15年たった今でも、後悔し続けている。

もし、彼が人間らしい豊かな感情を持っていたとしたら、いまだに自分を責め続けているのかもしれない。

全ては私の推測にすぎず、確かめるすべなど持っていないのだが。そして、その一連の悲劇の発端が、この痣にあるとしたら…。

サリエが殺されねばならなかった原因が、もし自分にあるのだとしたら…。

私は、どうするべきなのだろう？

わからなかった。

少しだけ意識を飛ばしていたところ、セトが私を心配そうに覗き込んできた。

『どうしたの？ 何かあった？』

私は、我に返る。

心配そうなセトを見返して、首を横に振った。

『なんでもないよ。ちょっとボーっとしちゃっただけ。疲れてるみたい』

『本当に？』

セトが、もの問いたげに視線を向けてくる。

本当だと私が頷くと、セトが、なんだか悔しそうな表情をした。

私は不思議に思い、首を傾げる。

『セトこそどうしたの？ そんな顔して』

私は手を伸ばして、セトの頭を撫でる。

するとセトが、その手を掴んで、私を引いた。そのまま胸に抱きしめられる。

しばらくして、

『俺じゃ頼りない？』

セトが、小さく聞いてきた。

『何が？』

私はびっくりしてセトを見上げる。

セトは、口を引き結んだまま、私の髪に指を通すと、何度か髪を梳いた。

『心配事があるんだろ？ 俺には話せない？』

セトの言葉に、私は息を呑んだ。

まさかばれているとは思わなかった。

セトが、そんな私を見て苦笑する。

『俺が、どれだけヒトのこと見てると思ってるの？ それくらい、分からないわけないだろ？』

少し悲しそうにセトが笑う。

セトにそんな顔をさせている原因が自分なのだと思うと、私まで悲しくなってしまった。

『ごめんね、セト』

『ヒトがそんな顔する必要はないよ』

セトが私の頭を撫でる。

私は、思わず視線を下げた。

私は、いったい何者なのだろう？

もし私が、母親が殺されねばならないような原因を作るような、

生きていてはいけない存在なのだとしたら、こうしてセトに心配してもらって価値もないのではないだろうか？

『私…いったい誰なんだろうね…？』

私がポツリと漏らすと、セトが不思議そうな顔をした。

『ヒトは、ヒトだろう？』

私は、セトを見上げる。

『例えば…の話よ。私が生まれたことによって、誰かが死ななきゃならなくなつて…そして、私は生きてちゃいけない存在だとしたら、私、どうしたらいいんだろう？』

セトが、スツと目を細めた。

『そんな馬鹿なこと、誰が言ったの？』

『例えば、の話よ』

『へえ、例えば、ね』

セトが、怖い顔で私を見下ろす。

『そんなこと言うやつがいたら、俺が殺してやる』

『ちよつと…殺すとか物騒なことは』

『俺からヒトを奪おうとするようなやつがいるなら、俺はたとえ神様が相手だつて、戦うよ』

セトが真つ直ぐに私を見下ろしてくる。

『だいたい、生きていちゃいけない存在って何？ 生きていちゃいけないものが、生まれてくるはずないだろ？ だいたい、ヒトが生まれたからって、何で誰かが死ななきゃならないのさ？ そんなのただのこじつけだろ？ そんな言葉に惑わされるなよ』

セトが私の頬に両手を添えた。

『俺は、ヒトが生まれてきてくれて嬉しい。生きてここに居てくれて嬉しい。これからも俺のそばにいてくれたら、もっと嬉しい』

そう言つてセトが、私の額に口づける。

『私…生きてていいのかな…？』

『そんなの、当たり前だろ。そこを疑うことの方がおかしいだろ』

セトが怒つたように言つて、ギョツと私を抱きしめた。

私は、思わず涙が零れてしまった。そのままセトに縋りつく。

セトが私を抱き込んで、よしよしと頭を撫でた。

『やっと頼ってくれたね』

愛しげに言葉を落とす。

そうやって私は、はじめてセトに涙を見せるという醜態をさらしてしまったのだった。

8 ある男の傍白 その3

「ナサレー、それは本当なのか。きちんと確かめたのか？」

「本人が言っていたのだ。間違いはない、あの女に、私をだませるほどの嘘がつけるとも思えぬ。事実なのであるう」

目の前で、にべもない返事をするナサレーに、俺はとにかく混乱していた。

ここは、王宮にあるナサレーの私室。

俺たち2人は、服務違反により、上から謹慎を命じられている。つまり、沙汰待ちの身だ。

俺は、ナサレーの返答に、酷く困惑していた。

あのヒトとかいう娘が、まさか魔物と人間の混血であるなどと……。事実を本人に確かめたいところではあるが、あの娘はすでにここにはいない。ナサレーの話によると、魔物の仲間とともにどこかへ消えたのだという。

俺は、どうしたものかと途方に暮れていた。

あの娘は、今まで見たどんな娘とも違っていた。己を飾りたてたり、取り繕ったりすることをしない、変わった娘だ。

だからこそ、凍りついていたりしたナサレーの心も、溶かすことができただけではないかと俺は思っている。

本心のままぶつけられる、裏表のない感情は、心地よいものだ。

もう少し言動に、憤みがあれば、なおよかったことだろうが……。

本能のままに動いていそうな、あの娘の顔を思い出して、俺は苦笑を禁じ得なかった。

真っ直ぐで、嘘などつけるような人間ではないことだけは確かであった。

謎も多く、無心で信じることはためらわれたが、人柄だけを取り上げれば、まさしく信用に足る人物であったことだろう。

その娘が、魔物の混血。

俺の胸中は複雑だった。

俺は、知識として、人間の女の腹から、稀に、魔物の子供と思われるものが生まれ落ちるということは聞き及んでいる。ただしその姿は、動物そのものの姿となって生まれるのだと聞いていた。

恐ろしい話だ。人間の腹から、動物が産まれるというのだから…。その異端さゆえ、生れ落ちてすぐ、魔物の子供は殺されてしまう。生き延びられるはずがないのだ。

にもかかわらず、あの娘は、自分が混血であると言ったのだという。

あの娘は、どこをどう見ても人間だ。それ以外の何物にも見ええない。

なぜ、自分が混血であるなどと言ったのだろうか？

いったいどんな根拠があるというのだ？

「なんで、そんな嘘を…」

「嘘などではないさ。おそらく、事実だ」

ナサレーが、無表情のまま言った。

あの娘がいなくなってから、再びナサレーの表情は凍りついたまままだ。

つい先日は、あんなにも表情豊かだったというのに。

「しかし、魔物の混血は、人のかたちをしていないと聞く。あの娘は、どこをどうみても人間だ」

魔物の血を引いているはずがなかるうと俺が言うと、ナサレーは鼻で笑った。

「動物のかたちばかりとは限らぬさ…」

ナサレーが、窓の外を見やりながらそう答えた。どこか、皮肉気な気配を纏っている。

「どついうことだ？」

「言葉通りの意味だ」

「言葉通り？」

「そつだ」

言つて、ナサレーが振り返つた。

「混血は、人間のかたちで、産まれ得る可能性もある。そういうことだ」

「…人間の…かたちで？」

ナサレーが頷く。

「私自身がその証拠だ」

「…証拠…？…何を…言つて…？」

「私も混血らしい。つまり、そういうことだ」

俺は、驚愕に目を見開いた。

ナサレーの言っていることが、すぐには理解できない。

ナサレーが混血？

つまり、魔物の血を引いているということか？

俺は、呆然とナサレーを見返す。

ナサレーが皮肉気に笑つていた。

「私の場合、かなり薄まつてはいるようだがな…確かに魔物の血を引いている。どうだ？ ラウシユ、お前は私を殺すか？」

ナサレーが、冗談を言っているようには見えない。

しかも、ここ数年纏い続けていた退廃の色が濃い。殺すのか？

と聞きながらも、殺してくれと言っているようにすら聞こえる。

もしかしたらこれが、ここ数年の、ナサレーの鬱屈の原因だったのだろうか？

俺は呆然とナサレーを見返すことしかできなかつた。

ナサレーが混血。そして、あの娘も混血。

だとして、俺に2人を殺すことなどできるのか？

ナサレーは、大切な友である。

そして、あの娘は、友の心を取り戻してくれた恩人だ。

だいいち、この2人が、今までどんな罪を犯したというのだろうか。

ナサレーは、今まで国のために働き、尽くしてきた。俺は、それを良く知っている。

あの娘も、確かに腑に落ちない点はあるが、何か叛意を持って

いたようには見えなかった。

「いったい、この2人が、すぐさま命を奪わねばならぬ、どんな大罪を犯したというのだ。」

生かしておいたからと言って、今後罪を犯すとも思えない。

「どれだけ考えたところで、俺には、2人の命を奪う理由など、みつからなかった。」

「そう、命を奪う理由など、何も存在しないのだ。」

俺は、ナサレーを見返す。

「俺には、お前を殺す理由がない」

ナサレーは、虚を突かれたような顔をした。

「そうだ、何故俺がお前を殺さねばならないのだ。」

大切な友を、手につけねばならぬほどの理由など、どこにもない。言われなければ自覚することもない程度の実情が、何故生死を決めるほどの重要性を持つ必要があるのだ。

ナサレーは、しばらく俺を見ていたが、やがて額を押さえ、低く笑った。

「そうか…殺す理由がないか…」

「めずらしいことに、肩を揺らして笑っている。」

「ひとしきり笑い、やがて笑いをおさめると、ナサレーが、長い溜め息をつく。」

「まさか、あんな小娘に教えられるとはな…」

「? 何を教えられたのだ?」

ナサレーが、真つ直ぐな笑顔を向けてくる。

「鬱屈の消え失せた、晴々としたいい顔だ。」

「事実を事実と認める、潔さだ」

1 天魔の揺籃

イムルードは、ほどなくして地の中心キシエルから戻ってきたが、セトに何か言い置くと、すぐにまたどこかに出かけてしまった。

忙しい男だ。

私も、その忙しさ、是非お手伝いしたかったのだが、すっかり蚊帳の外に追いやられてしまっている。

身から出た錆とはいえ、いつまでこの立場に耐えられるのか、ちよつと自信がなかった。

何せ、帰ってきたイムルードに、シンや地エンキの王からどんな話を聞いたのか尋ねても、絶対に教えてくれないのだ。

いくら聞いても、『問題ない』『目途はついた』『心配するな』と、そればかりだ。フラストレーションがたまっても、当たり前だろう。

じゃあ、私は何をすればいいのだと聞いたところ、封印の術式を乱されないように見張っていてと、体よく追いつかれてしまった。

やんわりと協力を拒絶され、私は、めちゃくちゃ虫の居所が悪い。イライラした様子を隠すこともなく、仏頂面で過ごしていると、

セトが私の頭に手をのせた。

『そんな顔、ヒトには似合わないよ』

『2人がかりで、こんな顔にしてるんじゃない』

セトが苦笑した。

『イムルードは、ヒトが心配なんだよ。ヒトがいなくなった時のあの動揺ぶり、見せてあげたいくらいだよ。まあ、俺も人のことは言えなかっただろうけどね』

『そりゃあさ、心配かけたのは悪かったわよ。でも、こんなのおかしいよ』

私は両手で拳を作る。

『私だけ、一番後ろの、安全な場所で待ってるなんて言われて、納

得できるわけないじゃない。またイムルードが一人で抱え込むつもりなんでしょ。それじゃ何の意味もないわよ。心配してくれてるのは、よくわかってる。でも、これは方法が間違ってる』

セトが、困ったように笑った。

『でも、封印を見回ることだって、大事な仕事だろ？ まだ、犯人が捕まらないんだからさ』

『そりゃそうだけどさ…』

『それに、ヒトが考えなしに暴走したら、かえってイムルードの邪魔になるかもよ？』

私は、黙り込んだ。

暴走と呼ばれることにひっかかりは覚えるが、何もわからないのに闇雲に動いたところで、確かに邪魔になるかもしれない。

『ヒトは、今、ヒトができることをやって頑張ろうよ』

ね？ お願い、と言って、セトが首を傾げる。

私は、その姿を見て、ウツと息をつめた。

私は、こうやって、セトに可愛くおねだりされるのに、めっぼう弱いのだ。

なんだか、昔の小さかった頃のセトの姿が、ダブって見えてしまつて、嫌とは言えないのだ。

セトも、それがわかっていて、やっている節があるから夕チが悪い。

ダメだ、ダメだ。これじゃ、セトの思うつぼだ。

思わず、分かったと頷いてしまいそうになる自分を、自ら叱咤してみる。

『けどね、何も教えてもらえないって言うのはおかしいと思うの。

セトは何か聞いているんでしょ？ 教えてよ』

セトが考えるそぶりを見せた。

『ちよつとでいいから、お願い』

私は両手を合わせ、必至でセトにお願いする。

やがてセトは、頭を掻いて、諦めたようにため息を吐いた。

『まったく…しょうがないな。これ以上は、ヒトの我慢の限界だろうからね。教えてあげるけど、でも約束して。聞いたことは教えるけど、そっちには絶対に首を突っ込まないって』

『わかった』

絶対だからね、と念を押されて、私は真摯な気持ちで頷く。

『シンは、封印を解いてまわっている奴と会ったらしいんだ』

『ほんとに!?!』

セトが頷いた。

『でもあと一步のところで逃げられたらしいよ』

『ねえ、そいつどんな奴なの?』

『男だつて聞いている』

そういえば、トルバディアであった時、シンは誰かと戦っていた。もしかしたら、あの時の相手がそうだったのだろうか。

だとしたら、自分もその近くに居たというのに、むざむざと見過ごしてしまったということになる。己の不甲斐なさが、情けなくなつた。

『そいつが、トルバディアの王室礼拝堂から何か盗み出したらしいんだ』

『王室礼拝堂?』

どこかで聞いたことがあったような気がする。

そうだ、私が最初にラウシュに会ったときに、そこに居たことを疑われてたんだつた。

『盗んだの? 何を? ラウシュたちは、そんなこと何も言つてなかつたけど』

『ラウシュ? 誰? それ』

『トルバディアに居た時に、よくしてくれた人。一度危ないところを助けてもらつてるの』

『そうなんだ。じゃあ、今度会ったらお礼言わなきゃね』

『そうだね』

もし、言わせてもらえたらの話だけだ。

私は、少しだけ苦笑った。

ラウシュには、何も言わずにお別れをしてみました。

ナサレーには、最悪な印象を植え付けたままのさようならだった。間の子であることを告げてしまったのだ。次に会った時の2人の反応が怖い。きっと前のようにはいかないだろう。

事実なのだから、それも仕方のないことなただけだ。

『一応、盗んだことがばれないように、目くらましの細工をしてあったんだって。見る人が見たらわかる程度のものだっいたらしいけど、盗まれていたものを、その男が身に着けていることを、シンが確認したんだって』

『盗まれた物って、身に着けられるようなものなの？』

セトは頷いた。

『盗まれたのは指輪らしいんだ。王家の指輪で天魔の揺籃アル・ドゥ・クナ。なんでも、トルバディアの王様が、即位するときに引き継ぐ大事な指輪らしいよ』

『天魔の揺籃？ 変わった名前だね』

『そうだね。その件でイムルードはどこかに出かけたみたい。これで俺が聞いた話は全部だよ。どう？ 少しは機嫌なおった？』

セトが、クシヤリと私の髪をかき回す。

私は素直に頷いた。

『うん、ありがとう』

セトが、私の言葉に笑顔を深くした。

2 はじまりの場所

私は今、トルバディアに居た。イムルードの言い付けどおり、おとなしく封印を見て回っているのだ。

ここはウルザのそばにある山深い森の中だ。

思い起こすと、私は、この森でナンと出会っていた。今の私の記憶に残る、最初の場所だ。

つまりここは、レツエンがサリエを斬った場所でもあった。

セトは、私は生きていてもいいのだと言ってくれたが、サリエのことを思うと、自分だけのうのうと生きていることが、なんだか申し訳なく思えた。

彼女は、たぶん私を産んだせいで殺されてしまったのだから。

母であるサリエの顔を思い出そうとするが、もうぼんやりとしか思い出せない。

クイナやレツエンの反応を思い出すと、私は彼女に似ているのだろうが、私の思い出に残っている彼女の表情は、穏やかで優しい微笑みばかりだ。

大口を開けて笑う私とは、似ても似つかないタイプに思える。

どこことなく幼さも残る顔立ちだった気がする。

たぶんまだ十代の少女だったのではないだろうか。

そんな年端もいかぬ少女が、無残に殺されねばならなかったことを思うと、酷く胸が痛んだ。

今の私の命は、サリエという犠牲の上に成り立っているのだ。

『ヒト、眉間にしわが寄ってるよ』

言って、セトが私の眉間に触れた。

私は、我に返って、セトを見上げる。

『また、何か深刻な考え事してるでしょ』

セトが困ったように眉を下げて言った。

『まあ、ちょっとね…色々と思うところがあってさ』

私は、笑いながら肩を竦めてみせる。

この前は、思わずセトに涙を見せてしまったが、そんな醜態をたびたび見せるのも、私の沽券にかかわる。

私は、つとめて明るく振舞ってみせた。

セトはため息をつく。

『そんなから元気を見せてほしいわけじゃないんだけど。本当にヒトは意地っ張りだよ』

セトが少しだけ寂しそうな顔をしながら、私の頭を撫でる。

まただ。

私は、セトにこんな顔をさせたいわけじゃないのに。

私は胸が痛んだ。

セトには、いつも笑顔でいてほしいのに。

私は、何度もセトに救われている。

この世界で生きる意味を与えてくれたのもセトだ。

わけも分からずこの世界で生きることになってから、ずっとセトが私の心のよりどころだった。

必死になって生きようとしたのも、全てはセトを守らなきゃならないというその一心からだ。その目標がなければ、きっと私は、この世界で生きること、ここまで必死にならなかつたのではないだろうか。

もう私の方が守ってもらえるほどに、立派に成長してしまっていたが、それでもセトは、まだ私を必要としてくれている。それが嬉しかった。

『ちよつと昔を思い出しちゃったの。ここはね、ナンとはじめて会った場所なんだよ』

『そっか、そういえばナンが言ってたね』

ナンは、ここの封印を訪れていて、偶然にも私と出会った。

おかげで私は命を繋ぐことができたのだ。

私は、ナンと出会ったおかげで、イムルードに会い、セトに会い、どんどんと世界は広がっていった。

そんな場所で、サリエは命を落としていた。皮肉な話だ。

『ナンは、ここで自分が、封印のために命をなげうつ覚悟を、決めたように思っていたんだよね』

セトがそうたずねてきた。

私は頷く。

人間は、ナンたち魔族を、死魔と一緒に扱って、酷い扱いをする。

それでもナンは、そんな人間たちを守らなければならないのだ。

ナン自身も、そこに葛藤はあったようだ。

『何でだろうね。何で人間は、魔族をあんなふうに扱んだらう』

『真実を歪める者がいるからだよ』

突然聞こえてきた第三者の声に、セトが腰の剣を抜刀して構えた。

声のしたほうを見ると、そこには意外な者がいた。

そこにはクロウの姿があったのだ。

3 いざなう手

『クロウ：なんであんながここにいるのよ』

『ヒトに会いにきたんだよ。いけない？』

『失せる！』

セトが私を背中に庇って、クロウを威嚇する。

『半獣の坊やは、相変わらず余裕がないみたいだね』

クロウがニヤリと笑う。

セトの怒りが、背中越しにも伝わってきた。

なんでこいつは、こうやって、セトの神経を逆なですることばかり言うのだろう。頭が痛くなってきた。

はやくどこかに行ってほしいものだが、しかし、ちょっと聞き捨てならない発言があったのも事実だ。

私はセトの背後から顔を出し、クロウを見る。

『真実を歪める者って何よ』

『ヒト！』

セトが咎めるように振り返る。

私は首をすくめて見せた。

だって気になるじゃない。

クロウが、面白そうに目を細める。

『言葉通りの意味だよ。遠い昔、神と同等に崇められていた魔族の正体を、歪めて広めた者がいるってことだよ』

『何だよ』

『神を一つに作り変えたかったのさ』

『神様を？ 何それ？ 何のために？』

『その方が、都合がよかつたんだろう？』

クロウが言って、口元をつりあげる。

『ねえ、言ってる意味が、さっぱりわからないんだけど』

私は眉根を寄せた。

『難しそうに見える答えほど、実は単純なものだよ。答えを知りたい？』

言いながら、クロウの唇が弧を描く。しかし、その笑顔は、ものすごく邪悪な笑顔に映った。

私の背筋を、何か這いのぼるものがある。

私はクロウの不気味さに、思わず一步後ずさってしまった。

『教えてあげるから、僕の手を取りなよ』

そう言っ、クロウが白い手を差し出してくる。

私は、呆然とその手を見つめた。

刹那、セトが剣を振り下ろし、クロウの腕を切り落とそうとする。しかし、クロウはそれを避けて後ろに跳んだ。

セトは続けて踏み込み、返し刀でクロウを斬り伏せようとするが、クロウはその剣も躲す。

『やれやれ、お前がいると、話も満足にできないな。邪魔だから消えろよ』

冷たい表情を浮かべると、クロウが無造作に手を翳して、魔法円を呼び出しはじめた。

私は、反射的に我に返る。

無効化の盾を呼び出し、クロウの攻撃を防いだ。

しかし、クロウの魔術は、私の上をいくようだ。私の呼び出した魔法円が、術式を乱しはじめる。

私は両手を使って、術式の綻びを必死で修復する。

周囲の森は、クロウの魔術によって、えぐり取られ、無残な形に変わっていった。

嵐のような凄まじい風魔法が、私たちを襲っている。

私は、歯を食いしばって、何とか魔法円を持ちこたえさせた。風魔法をしのぎ切ると、私はクロウを睨み付ける。

『何すんのよ！ 危ないじゃない』

するとクロウが、心底嬉しそうに私を見下ろしていた。

『さすが刻印を持っているだけある。素晴らしい魔力の量だ』

『刻印？』

私は、怪訝な顔でクロウを見返した。

『背中印のことだよ』

クロウが楽しそうにニヤリと笑う。

私は、はじかれたようにクロウを見た。

『知ってるの？ この痣のこと。ねえ、これは何なの？ 刻印って何？』

クロウが、うっとりするような笑顔を浮かべる。

『知りたいのなら、僕の手を取るべきだよ』

そう言って、白い手を再び差し出してきた。

『ヒト！ 聞く耳持たない！』

セトは、再びクロウに斬りかかる。

クロウはセトの攻撃を躲し、鬱陶しそうに眼を眇めた。

『邪魔だと言っているだろう』

クロウが、セトの心臓部をめがけ、再び魔法円を呼び出す。

セトは体を沈めて魔法を躲して、クロウの懐に飛び込んだ。セト

の剣が、クロウの着衣を捉える。

その瞬間、クロウは、逆さの五芒星が中央に描かれた移転魔法を呼び出し、移動した。セトから距離を取った位置に再びその姿を現す。

クロウは、明らかに興ざめしたと言うような表情を浮かべていた。

『まったくしつこいな。今日のところはこれくらいにしておくよ。』

ヒト考えておいてね』

そう言つと、クロウは再び移転魔法を呼び出す。

『待って！ 刻印ってなんなの！？ この痣に、どんな意味があるの！？ 知ってるなら教えて！』

クロウは、必死になる私を嬉しそうに見る。

『知りたかったら、僕のところにおいで』

クロウは楽しげに眼を細める。

『待って』

私は、追いつがるように一歩踏み出し叫んだが、すでにクロウの姿はない。

後には、無残な姿に変わり果てた、森だけが残っているのだった。

4 支え合うこと(前書き)

またしてもちょっとぬるい感じが入っています。
了解いただけた方のみどうぞ。

4 支え合うこと

『ねえ、どういうこと？ 刻印て何？』

セトが私を覗き込み、聞いてきた。

私は何と答えるべきか、言葉を探す。だが、答えなど見つからなかった。

私自身もその答えを知りたいのだ。

『わからないの』

私は、力なく呟く。

この背中の刻印とやらに、何か意味があるらしいのだが、どんな意味を持つのか分からない。

私は俯き、自分の両肩に手を添え、ギユツと拳を握りしめた。

レツエンだけではなかった。クロウも知っているのだ。この背中の痣の意味を。

この痣はいったい何なのだ？

私はいったい何者なのだ？

私は、ギユツと自分を抱きしめ、両目を閉じる。

痣の意味を知りたい。でも反面、知ることが怖かった。

もし私が、生きていることを許されないような存在だったら、私はいったいどうするべきなのだ。

セトは、生きていてはいけないものが、生まれるはずがないと言ってくれた。

私もそう思う。

でも、私という存在は、すでにサリエという女性の命を奪っている。たとえこじつけと言われようと、これは、変えようもない事実だ。

この先も、私が生きていることで、また別な誰かの命が奪われな
いという確証なんてどこにもない。

もし、今度その犠牲になる人が、セトだったら？ イムルードだ

つたら？

考えただけで、恐ろしさに身が竦む。

私という存在が生きていることで、2人の命を脅かすようなことになるのなら、私は

『ヒト』

セトが私の頬に両手を添えた。

私は両目を開ける。

目を開けると、セトが地面に片膝をつき、俯く私を心配そうに覗き込んでいた。

『またそうやって1人で抱え込んで……。ヒトは、イムルードの事は1人で抱え込むなって怒るくせに、自分の事となると、どうしてそうなるんだよ？ 1人で抱え込むことは良くないことなんだろう？』

セトが苛立ったように言う。

『他人の事には、お節介なほど首突っ込むくせに、どうして自分の事はそうやって壁を作って閉じこもっちゃうんだよ。そんなのおかしいだろ？ なんで俺がここに居るのに、頼ってくれないわけ？』

そんなふうには1人で頑張るなよ。俺、見ていられないよ』

セトが苦しそうに眉根を寄せる。

『全部1人で何とかしようなんて思うなよ。何のために、俺がここにいるんだ？』

セトがそう声を荒げて、唇を噛んだ。

私は、セトを半ば呆然と見つめた。

辛そうに歪められた顔が、私を苛む。

そうか、私は酷いことをしていたのかもしれない。

イムルードたちに頼ってもらえず、私だけただ安全な場所にいると言われた時に、私はただ悔しかった。自分も一緒に頑張れるのに、なんで？ と。

まさか私自身が、セトにそんな思いをさせているとは、今の今ままで思い至りもしなかった。

なんて傲慢なんだろう。

私は、自分のことは、全部自分でできるつもりでいた。誰かに寄りかかったりせずに、1人でも立てるのだと。

でも、いつもそばにいる人間が、そんなふうに肩ひじを張っていたら、私だったらどう感じただろう？　まさしく、今のセトと同じように思ったのではないだろうか？

私は、ただ呆然とセトを見返す。

セトが私の顔を引き寄せ、額をくっつけてきた。

『俺は、そんなに頼りない？　でも、俺は、ヒトのためなら、どんなことだってできるよ？　お願いだから、1人で抱え込んだりしないでくれ。俺にも手伝わせてよ。俺はヒトのそんな辛そうな顔、ただ見てるだけしかできないなんて悔しい。俺は、いつだってヒトのそばにいる。だから、俺にもヒトのこと支えさせて？』

セトが私の目を覗き込んで、お願いだからと呟いた。

寄りかかっていいのだろうか？

私は、重荷にはならないだろうか？

今まで私は、セトを守っているつもりでいた。だから、弱みなんて見せるつもりもなかった。

けれどもセトは、もう私が守ってあげる必要なんてないほどに、成長してしまっているのだ。

逆に、私のことを支えようとまでするほどに。

不意に私の目から、涙が零れ落ちた。

セトが指で、零れ落ちた涙を拭う。

セトがそのまま私を抱き込んだ。優しく、いたわるように抱きしめられる。

何度も何度も、優しく頭を撫でる手に、私は酷く安心してしまった。

体中の力が抜けて、私は、思わずセトの首に縋りつく。

そのまま、声を上げて泣いた。

セトに守られるように抱きしめられながら、疲れ果てるまで泣き続けた。

そうやって泣きながら、心の中の不安を余すことなくセトに漏らしていた。

セトは黙って私の言葉を聞き続ける。

時折、涙でぐちゃぐちゃになった顔に唇を落としては、愛しげに眼を細める。

やがて泣き疲れて、ウトウトしはじめた頃に、夢心地にセトの言葉聞いた。

『俺は酷いよな。殺されたのが、ヒトのお母さんでよかったと思ってるんだから……。ヒトが罪悪感なんて背負う必要はないよ。俺は、ヒトさえ生きてくれていたら、他はどうでもいい。罪悪感なら、俺が背負うよ』

言葉と一緒に、温かいものが唇に触れた気がした。

5 ある男の傍白 その4

魔道師団長のトールが、謹慎中の私の私室を訪れたのは、深夜の出来事だった。

普段は、にやけた顔ばかりを張り付け、めったに本心を表に出すことのない食えない男だが、今日の様子はいつもと違った。

いつもの軽薄さはなりを潜め、厳しい表情をしている。めずらしいことだ。

「ナサレー、お前神殿に行ったそうだな」

改めて何を聞くかと思えば、そんなことが。

いちいち答えてやる義理などない。私は、無言でトールを見返した。

トールは、相変わらず可愛げのないやつだと苦笑した。

「イサ殿をたずねたそうだが、お会いできたのか」

私は、その質問には軽く息をつき、首を横に振る。

そうかと言って、トールは考えるそぶりをみせた。顔には疲労の色が濃い。

このところ、血迷ったとしか表現できない、ヴェルテ王の奇行の数々を、收拾するべく腐心しているせいであろう。

そう、まさしく暴拳と呼べる愚行を、ヴェルテ王は繰り返している。た。

そもそもの発端は、レントへの侵攻からはじまっている。

約2ヶ月前の朝議の席で、突然ヴェルテ王はレントへの侵攻を宣下した。

寝耳に水とは、まさにこのことである。

むろん、諸侯からは反発の声が上がった。

当然であろう。一国の主とはいえ、臣の調和もなく、独断で他国への侵略の、裁可を下すなど、許されるはずもない。

しかし王は、反対する者は、爵位の剥奪をすると宣告し、進軍を

独断で敢行した。

軍の指揮は、近衛師団の長であったケイル將軍が一任されることとなった。

朝議に臨席していた誰しもが、我が耳を疑ったそうだ。

私は、参席する立場にはなかったが、顛末を耳にして、やはり正気を疑ったものだ。

いったい何がヴェルテ王を衝き動かしているのか。

かつてのヴェルテ王は、温和な王であった。

荒事を好まず、自分の意見よりも、他人の意見を尊重するような、いささか覇気の薄い印象を与える王であったほどだ。

しかし、必要最低限の分別はきちんと備わっていた。

民草から搾取をするような王でもなかったし、善王と呼べる部類に入っただけではないだろうか。

あえていうなら、いささか信心深いところが難点で、自身は神殿の教えに傾倒していた。サヴァン大神官の傀儡とも揶揄されるほどの、熱心な信者であったのだ。

しかし、公私の区別はつけており、政治の場に、信仰を持ち出すほど愚かな振る舞いはしなかった。

その王が、突如道を踏み外したのだ。

レントへの侵攻を諫めようとした者は、ただちに爵位を剥奪され、幽閉された。

何をしてヴェルテ王を凶行に走らせているのか、皆が量り兼ねていた。

人が変わったと言う者がいたが、まさしくその通りだ。同じ人間とは思えぬほどの変貌ぶりだ。

ヴェルテ王はその後、公の場に姿を現すことはない。

一部の、阿諛追従を得意とする近侍とともに、内廷に引きこもり、為政にあたっている。

「肅清が断行されたそうだ」

不意にトールが重い口を開いた。

「肅清？」

私は片眉をあげる。

トールが、重いため息を吐いた。

「レントとの開戦に反対した貴族が、爵位を取り上げられ幽閉されていただろう。ランド公爵をはじめとする反対派が、有志を集め、彼らと結託し、王に謀反を企てたのだ。しかし、事前に情報が洩れ、肅清された。公爵は死刑だ。しかも、すでに刑は処された後らしい」
私は、絶句してトールを見た。

トールは、息を吐き、両腕を組む。

「2ヶ月ちよつと前の話だが、ヴェルテ王が、供も連れずに、内々で神殿を訪れたことがあったようだ。知っているか？」

私は首を横に振る。

「サヴァン大神官が、体調不良を理由に、公の場から姿を消した時期と一致する。そして、レントへの侵攻を開始した次期。さらには魔物が王都をうるつきはじめた時期とも重なる」

トールは、同意を求めるように私を見た。

「神殿は、守りが固くて、なかなか内情が掴めん。イサ殿は、お前の師であるう。会って、神殿で何が起こっているのか探ってこい」
トールは厳しい表情を浮かべると、そう言葉を括ったのだった。

1 手がかりを探して

朝独特の、清々しい気配の中で、私は目を覚ました。

『起きたの？』

目を開くと、すぐにセトに顔を覗き込まれる。

目の周りがヒリヒリと痛い。

そういえば、泣きつかれて眠ったんだっけ。まるで子供みたいだな。

ぼんやりとした頭で思いかえしていると、少しだけ気恥ずかしくなった。

でも、心の中は、前より幾分すっきりしている。たぶん、思っていたことを全部吐き出したせいだろう。

セトが手を伸ばして、私の額に張り付いていた髪をどけた。

『ヒト、昨日の話だけだね、ヒトのお母さんはトルバディアの貴族だったんだよね。だったら、痣の事はともかくとして、お母さんの事なら、レヴトリアのカルナス王が、何か知っているかもしれないよ？ もしかしたらだけど、お父さんに繋がる何かも知っているかもしれない』

『王様が？』

私が、目を瞬かせながら聞き返すと、セトは頷く。

セトの話によると、カルナス王は、もとはトルバディアの貴族で、軍人だったらしい。

レヴトリアが、トルバディアから独立したのは18年前。

クイナが、シャントクレール侯爵家に暇乞いをしたのは27年ほど前の、サリエがまだ幼かったころの話だと聞いている。

クイナは、その後も、何度かサリエの元を訪れたことはあったようだが、当時の上流社会の話題には疎かったようだ。だから、私の父親については何も知らない。

しかしカルナスは、少なくとも18年前まではトルバディアの貴

族であったのだ。確かに、私の父親に繋がる何かを知っている可能性はあった。

淡い期待であることは承知していたが、その期待を抱かずにはおれなかった。

父親さえわかれば、この痣の意味も分かるかもしれないのだから。『どうする？ カルナス王のところに行ってみる？』

覗き込んできたセトに、私は頷いた。

セトは、トルバディアの王都に近づくことは、ゆるしてくれなかったが、カルナスのもとを訪れることは、ゆるしてくれた。

風の便りに聞いた話では、カルナスはすでにシエルマを落城し、一路王都に向かって進撃を開始しているらしい。

微妙な位置ではあるが、なんとかセトの了解を得ることはできた。どうやらセトは、イムールドから、オリス・ラ・トーバに近づいては駄目だと言い含められているようなのだ。

そして、もとより、私の命を狙っているレッエンに近づくことなど、ゆるしてくれようはずもなかった。クロウもまたしかりだ。

『そっか、王様か…』

よし、と言って私は頭を起こす。

目的が決まれば、そこに向かって歩けばいい。くよくよしているのは、性に合わない。

私は、気合を入れて立ち上がった。

セトがそれを見て苦笑する。

『ようやく元気出たみたいだね』

『ごめんね、迷惑かけたね。思考がちよっと後ろ向きになってさ』『迷惑なんかじゃないよ。頼られるのは、俺としたら嬉しいことだしね』

私は、夕べのことを思い出して、少し照れくさくて、鼻の頭を掻いた。

まるで、子供に戻ったみたいだ、思いつきり泣いてしまった。

『ありがとうね、セト。おかげで、大分すっきりしたよ。私、また

頑張れるから』

セトが、小さなため息を吐く。

『頑張るのはいいけど、ほどほどにしておいてよね』

セトの言葉に、私は素直に頷いておいた。

その後、私たちは、シエルマを西に向かって進み、王都に向かう街道沿いにある都市サダンを目指していた。レヴトリア・レント同盟軍の、王都を目指す進路を追っているのだ。

獅子王ことカルナス率いるレヴトリア本体と合流した同盟軍は、破竹の勢いで、快進撃を続けていた。想像していた以上に、王都に迫っている。

私たちは、移転魔法を使って、なんとか追いつくことができた。

日は西に傾き、空を茜色に染め上げている。

同盟軍の、今宵の本陣は、サダンの東側で張られていた。

同盟軍の兵士に、フォルムの所在を尋ねる。

さすがに、アポなしで、突然王様を訪ねるのも気が引けたので、ワンクッション置いたのだ。

フォルムとは、レヴトリアの王都コトルで別れて以来、一度も会っていない。こんな時に急に押し掛けるのは、申し訳なく思ったが、他に伝手もない。心の中で手を合わせて、フォルムを待った。

しばらく待たされたが、やがてフォルムがあらわれた。

「剣士殿、魔道士殿、お久しぶりでございます。ご壮健なご様子、何よりです」

あいかわらず真面目で、清潔感のある爽やかな男だ。

私は、さっそくカルナスに会いたい旨を切り出す。

フォルムは快諾し、王の陣幕へと案内してくれたのだった。

2 端緒

私たちは、一際豪華な、絹張りの陣幕の内側に通された。

中では、カルナスが剣の手入れをしていたが、私たちの姿をみとめると、手を止める。

「確か白き賢者の

」

カルナスはそう言って、剣を鞘に納めた。

席を勧められる。

私とセトは、促されるままカルナスの前に座した。

フォルムは、気を利かせて席を外す。

「白き賢者はご壮健か」

「はい」

セトが答えた。

カルナスの鋭い眼光を向けられ、私は内心ちよつとビビっていた。戦場に身を置いているせいだろうか、前回見た眼光の鋭さよりも何割か増しになっている。

それにしても、良い男だと思う。

無精ひげの生え具合といい、胸板の厚さといい、粗削りな男くさい顔立ちといい、モロ好みだ。酒の好みが合うところもいいし、目つきが悪くて、ゾクゾクさせられるところもそそられる。

こんな小娘の姿でなければ、絶対にアタックしているところなんだけど。

あの顔で、ロリコンのレッテルを貼らすのも気の毒だし、もったいないけど、今はおとなしくしているしかないか。

密かに、あと十年したら…と野望を抱いたのは内緒の話だ。

私が、そんな不謹慎な思いを抱いていることなど、知る由もない2人は、戦況や今後の展開について、まじめに話し合っている。

難しいことを言われてもわからないし、私は手持無沙汰になって、視線を周囲に彷徨わせはじめた。

それにカルナスが気づいた。

「退屈であったか。すまぬ、武骨者ゆえ気が利かぬ、フォルムを呼ぼう」

私は、慌てた。

「いえ、お気遣いなく！ あのもの…私の方こそ…ごめんなさい。こんな時期に、急に押し掛けたりしてしまつて…」

恐縮して小さくなる。

そういえば、何用かとカルナスに問われ、一度セトと顔を見合わせた。

セトが頷いて切り出す。

「つかぬことをお伺いしますが、王は、トルバディアのシャントクレール侯爵家をご存知でしょうか」

「存じておるが」

質問の意図が掴めなかつたのだろう。カルナスが、怪訝そうな顔をする。

「サリエさんという女性をご存じないでしょうか？ シャントクレール侯爵家の方らしいのですが」

私が、セトの言葉尻を受けて、そうたずねた。

「サリエ…？さて、覚えはないが…」

カルナスが言つて、首を捻る。

「すまぬな。トルバディアと袂を別つてから、すでにだいぶ時が経つ。今のトルバディアの世上には疎いのだ」

「今の話ではないのです。15年くらい前の話なので…。でも、そうですか。ご存じないですか」

やっぱり知らないのか。

父への糸口が再び途切れ、私は、肩を落とす。

「なぜ、そのようなことを？」

カルナスが、真つ直ぐに視線を向けてきた。

私は、一度口を引き結んでから、言葉を選ぶ。

カルナスにどこまで話したもののか、考えをめぐらしたのだ。

「その…サリエさんが、懇意にしていた男性を、ご存じないかと思
いまして…」

カルナスは、一度驚きに軽く目を開いてから、苦く笑った。

「それは、たずねる相手を間違っておるな。見ての通りの武骨者ゆ
え、男女の機微など、とんと疎い。たとえサリエなるご婦人と面識
があつたところで、力にはなれなかつたであろう」

腕を組み、困つたような笑いを浮かべた姿が、私には物凄く可愛
く映つた。

くー、やっぱり、私好みの男だ。

思わず、悶えそうになる。

「ヒト」

急に、低くセトに呼ばれ、何だろうと顔を向けると、物凄く冷た
い目を向けてくるセトの姿があつた。

あれ？

何だか急に、自然と背中汗をかいてしまうのだけだ。

私は、とつさに本能的な危機感を覚え、とりあえず、ヘラリと笑
つて、誤魔化そうと試みた。

セトも笑い返してきたのだが、全く笑顔に見えない笑顔だった。

ひょえー、メツチャ怖いんですけど。

「それにしても、何故そのようなことを？」

再びカルナスに問われ、私は、ホッと一息ついて視線を戻し、ど
う答えるべきか、考えをめぐらした。

背中が、どんな意味を持つのかわからないのに、簡単に誰か
に教えていいものだろうか？

やはり、痣の部分は伏せておくべきなのかもしれない。

私は、カルナスを見た。

「どうやら、私の母親というのが、そのサリエさんのようなのです。
サリエさんはすでに亡くなっていますが、もしかしたら、父親にな
る方は、生きているのではないかと思ひまして…」

「そうか、父親を探しておるのか」

カルナスが、顎に手を添える。

「そういう仔細であるのなら、私としても最善を尽くそう。知己にも質しておく」

「ありがとうございます」

思わぬ助力を得ることができて、閉ざしかけていた道が、再び照らされはじめた。

それにしても、父親という存在を改めて認識して、不思議な気持ちになる。

この世界で、私が生まれるには、必要不可欠な存在であるのだが、あまり実感がわかない。

サリエにしてもそうだ。

母親であることを、頭では理解できているのだが、心情的にはかなり遠い。

むしろ、セトやイムルードたちの方が、家族と呼ぶのにしっくりしてしまう。

だいいち、もし父親になる人間が、私が生きていることを知ったとして、私の事をどう思うのだろうか。

痣を持つ私の存在は、もしかしたら疎まれるのではないだろうか。15年も経てば、新しい家族を作っている可能性だってあるのだ。

父親に繋がる僅かな光が、希望と同時に、恐れをも抱かせる。

少し臆病になっていた。

セトがため息をついて、私の頭に手をのせる。

「何考えてるのか、想像がつくけど、今、あれこれ考えても、いい考えはうまれないよ」

覗き込むようにして、優しく向けられるセトの眼差しに、私はひどく安心感を覚えた。

そうだ、私は1人ではない。セトがそばにいてくれるのだ。

胸のあたりが、ほんわりと温かくなる。

私は小さく頷いて、微笑み返したのだった。

3 際会

カルナスの天幕を辞して、私たちはハールマーの姿を探した。どうやら、ハールマーの所属する部隊も、カルナスと一緒に行動しているらしいのだ。

フォルムから聞き出した場所付近を、小走りで移動しながら、きよきよと見回してみる。

やがて、見覚えのある後頭部を発見した。ハールマーは、誰かと話でもしているようだ。

私は、その後ろ姿めがけて、突進していった。

瞬時にハールマーが、剣の柄に手を伸ばしながら、厳しい顔で振り返ってくる。

しかし、私の姿を見止めると、少し驚いた表情をしながらも、剣から手を離し、両腕を広げて、抱きとめる態勢をとった。

私は、その懐にジャンプして飛び込んでいく。

ハールマーは、軽々と私を抱きとめた。そのまま肩の位置まで抱え上げられる。

「つたく、相変わらずのお転婆ぶりだな。なんでお前がこんなところに居るんだよ」

ハールマーが、手を焼かされて困るとも言いたげな表情で、私を見る。

「それにしても、あんまり成長してねえな。相変わらずのチビぶりだ」

私を、片腕でかかえなおし、ハールマーが頭をグシャグシャと撫でまわす。

その乱暴な所作が、実にハールマーらしかった。

私は、唇を突き出しながら、ハールマーを軽く睨む。

「チビなのは、成長期に栄養が足りてなかったせいだもん。これから、びっくりするくらい豊満な女性になる予定なんだからね。その

時になって後悔したって遅いんだから」

「そうかよ。せいぜい後悔させてくれ」

ハールマーが、私の話を聞き流しながら、ポンポンと頭を叩く。めっちゃくちゃ本気で言ってるのに。なんだその態度は。

後で吠え面かくなよ。

「そっぴや、相変わらずお前の父親は、酒浸りなのか？ お前ら、ちゃんと飯は食ってるのか？」

後半部分については、後から追いついてきたセトに訊ねた。

父親とは、もちろんイムルードのことだ。

「まあ、酒については相変わらずだね。ほんのちよつとの間だけは、禁酒してたみたいだけど」

セトが肩を竦める。

「まったく、お前も、ろくでもねえ父親を持ったもんだな」

ハールマーが、憐れむような視線を私に向けて、再び頭を撫でる。イムルードの散々な評価が、少しだけ可哀想になった。

「あれでも、いいところもあるのよ？」

ちよつとだけフォローをいれてみる。

「…そうだな、あんなしょうもない奴でも、親父だからな」

ハールマーが、仕方ないとばかりに苦笑を浮かべる。

イムルードは、実の父親ではないのだけれども、とくにこの誤解を解くことはしていなかった。

前に、一度だけハールマーとイムルードは対面している。

その時、ハールマーが、物凄く非友好的な態度で臨んでいたことだけは覚えていた。

対して、イムルードはというと、いつものとぼけた態度であったことも記憶している。

あの当時、私は満足にトルバディア語を話せなかったので、事情はよくわからないが、一悶着ののち、ハールマーが折れたような感じだった。

思えば、あのころからすでに「イムルード＝私の父」という図式

が出来上がっていた。

なんでこんな誤解に至ったかは、今だに不明だ。しかし、説明も面倒なので、あえてその誤解を解いてはいない。イムルードが保護者なのは事実だし、別に何か不都合があるわけでもないから。

「確かにしようもないんだけどね。でも、最近は色々頑張ってるんだよ？ 私、見直しちゃったんだから」

あれをか？ とハールマーが胡乱な表情を浮かべる。とことん評価の低いイムルードが、とても哀れに思えた。

私は苦笑する。

「そ、あれでも、だよ」

言って、私はハールマーの顔を覗き込んだ。

ハールマーは、諦めたように鼻から息を抜きながら、そうか、お前がそう言うならと短く答え、肩を竦める。

やがて私の笑顔に、つられるようにして笑った。実のところ、ハールマーの、こういう表情が、私にとってはものすごくツボだったりする。

冗談抜きに可愛いと思うのだ。頭をぐりぐりと撫でまわしてあげたくなるほどだ。

強面のおっさんの、屈託ない笑顔ほど癒されるものはない。

私は、密かに胸をときめかせて、思わず、ガシリとハールマーの首に抱きついた。

ハールマーがギョツとした。

おい、何をするんだと言って、必死で私をはがそうとする。しかし、私は、ギョツとしがみついてやった。

すると、ハールマーの背後にいた人物と、思わず目があったしまった。たぶん、先ほどハールマーと話をしていたと思われる人物だ。その人物は、驚いた表情で固まったまま、私を見ていた。
？

どこかで見たとような気もするが、思い出せない。

その男は、暗めの金髪に、青い目、無精ひげを生やした30代後半くらいの整った顔立ちの男だった。

あまりに、まじまじと見られるので、私は不思議そうに相手を見返す。

お互い、ずいぶんと見つめ合っていた気がする。

私の気が抜けたそのすきに、ハールマーが、私を無理やり首から剥がした。

そして、不自然に固まっていた私の視線を、怪訝そうな表情で辿って、金髪の男に目を止める。

すぐに、しまったとばかりに、自分の後頭部を掻きむしって、私を下ろした。

「邪魔が入ってすまなかった」

金髪の男に一言詫びを入れる。

「セト、こいつを連れて、あつちに行ってる。すぐに行くから」

言いながら、私の首根っこを引っ張って、セトの方に押しやる。

もはやハールマーの表情に、ふざけた様子はない。

後ろ髪をひかれる思いもしたが、ハールマーの仕事邪魔したくもない。

私は、おとなしくセトに促されるまま場所を移動しはじめた。

しかし、遠ざかる背後から、ハールマーたちの声が聞こえてくる。

「どうかしたのか？」

ハールマーが、不思議そうに金髪の男に声をかけたようだった。

「…知り合いに…似ていたのだ」

半ば、呆然と咳かれる金髪の男の声に、私は男を振り返る。

真っ直ぐに向けられる青い眼と、視線がぶつかった。

「めずらしいな、あんたが、そんな隙だらけの姿を見せるとは」

ハールマーが、意外そうにつぶやいて、腕を組む。

「まさか、昔の女にでも似ていたか？」

ニヤリと、人の悪い笑顔を浮かべ、ハールマーは男を揶揄する。

しかし、金髪の男は、グツと口を引き結び、こぶしをも握りしめ

ながら、両目を閉じることで、私を視界から消し去った。

「もはや未練などないつもりだったが…」

男は、吐き出すようにそう言っつて、やがて苦く笑う。

酷く悲しそうな笑顔だ。

ハールマーが、その様子に驚いたようだった。

「おいおい冗談のつもりだったのに」

焦るハールマーの声がある。

男は、私を見たくないとはかりに踵を返し、背を向けて歩き出した。

ハールマーは、男と私とを見比べる。

「洒落にならねえな」

そう呟いた様子は、酷く困惑しているように見えた。

私は、悲しみの漂う、男の背中から、何故か目が離せなかった。そこから何か、懐かしさに似たものを、自然と感じ取っていた。

く小話く お宅訪問

あれは、今から10年ほど前の話だ。

ある日ハールマーが、突然、我が家に行きたいと言い出した。

当時は、食糧不足のため、ろくなおもてなしもできないような状態だったが、それでも大恩あるハールマーのご要望だ。私とセトは二つ返事で頷いて、ハールマーを家に招待した。

ところが家に着くと、普段は、ろくに家にはいないはずのイムルードが、偶然帰宅しており、ハールマーとかちあうこととなった。

すると、なんだか雲行きの怪しい事態へと発展していった。

当時の私は、トルバディア語がほとんど話せなかったため、いまだに彼らの間でなされたやり取りは、謎のままである。

しかし、ハールマーが、一方的にイムルードを毛嫌いしていることだけは理解できていた。

当時の出来事を再現すると、以下のようなになる。

「お前が、ヒトの父親か？」

珍しく在宅していたイムルードの姿を見止めると、ハールマーは剣呑な表情を浮かべて、腰の剣を引き抜いた。

とても、女房を斬るようなタマにゃあ見えねえがな、と小さく呟き、その切っ先を、イムルードに突き付ける。

私とセトは、ギョツとした。

剣を突き付けられた、当のイムルードは、キョトンとした表情で、赤い眼をゆっくり瞬く。

「そうだよ？」

不思議そうに首を傾げる。

イムルードは書斎の椅子に腰かけ、手には酒の入ったグラスを持っていた。

読みかけの本を閉じ、グラスを置くと、イムルードは立ち上がる。
「君は誰？」

ハールマーが、その問いかけに、苛立ったように舌打ちをする。
「何が「君」だ。胸糞の悪い野郎だな」

言つて切つ先を、イムルードの首筋に突き付ける。

「おいてめえ、酒なんぞ飲んでねえで、性根を入れ替えて、こいつらに、きちんと父親らしいことをすると約束しろ」

でない、首と胴体が離れることになるぞ、とハールマーが凄んだ。

イムルードは、私とセトに視線を向ける。

『この人、ヒトとセトの知り合い？』

私は、大きく頷く。

『すぐよくしてくれる人なの！ いい人なの！ なんだか今日は虫の居所が悪いみたいだけど…』

私は心配になって、ハールマーを見上げた。

ハールマーは、安心しるとばかりに、私の頭を撫でる。

「そうか、子どもたちが、お世話になっているみたいだね。ありがとう」

イムルードの言葉に、ハールマーが目を眇める。

「ずいぶん言い草だな。てめえが、面倒を見てやらねえからだろうが。飯くらいちゃんと食わせてやれ」

ハールマーが、吐き捨てるように言つて、剣の柄を握りなおす。

「ああ、それ、ナンにも言われたことがあるな。気を付けるよ」

イムルードが軽い様子で返す。

すると、ハールマーの周囲の空気が、一気に冷えた気がした。

顔を見上げると、恐ろしいほどの怒りの表情を浮かべている。私は思わずハールマーの腕にすがりついた。

『ごめんね！ どうせ、イムルードが、なんかムカつくこと言ったんでしょ？ でも悪気はないのよ。こいつ、どうしようもない馬鹿なの！ 許してあげて』

私は、必死になってハールマーを止める。

なんで、こんなことになったのか事情は呑み込めないが、ハールマーみたいな人間が怒っているのだ。きっと、イムルードが、また突拍子もないことを言ったのだろう。

こいつに一般常識がないのは、折り紙つきである。

かたや常識人のハールマーに、こいつの非常識さを理解しろと言っても無理な話だ。

腕にすがりつき、必死で止める私を見下ろし、ハールマーは唇を噛む。

「こんな、どうしようもない父親でも、庇うのか」

ハールマーは、私の姿を見て、怒りを逃すように、フーと長い溜め息をついた。

少し怒りをおさめてから、イムルードを見る。

「おい、今後、ヒトたちを蔑ないがしろにするような真似、絶対にすんじゃねえぞ」

ハールマーが、真剣な顔でイムルードに言う。

「わかった、約束するよ」

頷くイムルードを一瞥してから、ハールマーは私を見た。

「何かあったら、俺に言えよ。あんな優男、すぐにぶった切ってやるからな」

ハールマーは、大きな手を伸ばし、私の頭をぐりぐりとかき混ぜる。

そんなこんなで、ひとまずは事なきを得た。

その後も、ハールマーの、イムルードに対する評価は、最悪なままだった。

4 パプロフの犬

「おい、ヒト、お前あの男を知ってるのか？」

ハールマーが、困惑した顔で私を見る。

「知らない。でも、どこかで見たような気はするの」

私は、首を傾げる。

するとセトも頷いた。

「俺も、見たような気がするんだよな」

「セトも？」

「私は、セトを見上げる。」

「2人の意見が一致するんだから、どこかで会ったことがあるのかも」

セトが肩を竦めてみせる。

「ねえハールマー、あの人は誰？」

私の言葉に、ハールマーが腕を組んだ。

「俺の隊の隊長閣下様だ。名前はギエンという」

大仰に言ってみせたのは、馬鹿にしているわけではなく、この男の親愛の表れだ。

「ギエン…？ 聞いたことないよね」

私とセトは、顔を見合わせる。

「あんな顔だが、中々に腕がたつ。…それにしても、つまらねえ堅物かと思っただら、ちゃんと女がいたんだな」

ハールマーは、クソツと言って、後頭部をかきむしる。

おそらく、茶化してしまったことを反省しているのだろう。

そういうところも可愛いと思ってしまうのだった。

「ハールマーさんが認めるんだから、相当の腕前なんだね」

セトの言葉に、ハールマーは、ああ、と言って頷く。

「そっか、俺、一度手合せしてもらいたいな」

「閣下にか？ やめておけ、怪我するぞ」

セトはムツとした顔になる。

「あのね、俺だって日々成長してるの。ハールマーさんと最後に会ったのは、もう一年も前の話だろ、いつまでも同じだとは思わないだよ」

セトがむきになって言った。

「だいたい俺が、どれだけヒトに振り回されてると思ってるんだよ、とセトが言葉を続ける。

あれ？

何で私が、そこで引き合いに出されないとならないのだ。

「ちよつとセト、何でそこに私がでてくるのよ」

セトは、作り物の笑顔を張り付けて私を見た。

「自分の胸に手をあてて考えてみたら
かつちーん。」

「何それ、どういう意味よ」

「おいおい、痴話喧嘩なら、あつちでやってくれ。面倒でかなわん」

ハールマーが聞き捨てならないセリフを吐いた。

ハールマーをギロリと睨む。

「何ですって！？ これの、どこが痴話げんかなのよ！ だいたい私の愛の八割がたは、ハールマーに向いてるんだからね！」

残りの二割は、カルナスに向きはじめているが。

ハールマーが、それを聞いて、たたらを踏む。

私は、そのままハールマーに走り寄り、ガシリと腹部に抱きついてやった。

「おい！？ ヒト！？」

ハールマーが慌てる。

離れると言いながら、私の腕を解こうとする。

「私の愛を疑うのね！ 酷いじゃない！」

騒ぎを聞きつけて、だんだんと人が集まってきた。

おそらくは、ハールマーの隊の人間ではないかと思われる。

ニヤニヤ笑いを浮かべながら、冷やかす者まで出てくる始末だ。

「違うぞ、こいつは！ そんなんじゃないからな！ ヒト！ いい加減にしろ！ 離れる！」

「イヤ！ 絶対に離れないんだから！」

私は、増々力を込めてしがみついてやる。

「ヒト！」

ハールマーが、腕に力を入れて、無理やり力づくで私をはがそうとした。

おのれ、このままでは力で負けてしまう。

くそ、大人しく剥がされてなどやるものか。

私は、女の武器を行使することに決めた。

上目づかいでハールマーを見上げる。

「お願い、痛くしないで」

しおらしく言ってみた。

ついでに、目も潤ませてみる。

すると、ハールマーが絶句し、ビシリと体を固まらせた。

思った通りの反応を得ることができて、私は、内心でニヤリとほくそ笑む。

絵にすれば、きっと私のお尻には、悪魔のような尻尾が生えているはずだ。

悪のりをして、今度は、ハールマーに、てき面に効果があると思われる、女の涙を使って、嘘泣きをはじめた。

しくしくと嘘泣きをしながら、さらにはハールマーの腹部にすり寄ってやる。

「かんべんしてくれよ……」

ハールマーの、お手上げだとも言いたげな声が、頭上から聞こえてきた。

ハールマーが、ハ―と深いため息を吐き、左手で困ったように自分の目元を覆う。

「頼むから、泣くなよ」

あいた右手で、私の頭を撫でる。いつもの乱暴な撫で方とは違っ

て、とても優しい手つきだ。

なんて扱いやすい男なのだろう。

あまりの可愛さに、キュンと胸が高鳴ってきた。

しかし、その高鳴りは、一瞬のうちに雲散霧消させられるのだった。

「ヒト」

いつもより、思いつきり低い声で、セトが私の名前を呼ぶ。ギクリ。

私は、反射的に両肩を振るわせる。

漂ってくる冷気のものすごさに、私は、セトを振り返る勇気がでないほどだった。

ハールマーに抱きついたまま、体を硬直させる。背中には、滝のような冷や汗が流れはじめた。

ハールマーも、息を呑む気配がする。

「ヒト」

もう一度呼ばれて、私は思わず背筋を伸ばした。

「はい！」

ビシリと気を付けをして、警官がするような敬礼の姿をとる。

「おいで」

有無を言わせない口ぶりで、セトに呼ばれる。

私は、条件反射で、ダッシュでセトのもとに走り戻った。

恐ろしくて視線が合わせられないので、セトの足元を見たまま気を付けをして待つ。

「ハールマーさんの事、からかつてる場合じゃないよね
ばれてましたか！」

「は、はい！」

「いい加減にしておかないと、俺怒るよ」
もう怒ってるじゃん。

でも、今、そんなことを口に出す勇気はない。

「はい！ すみませんデシター！」

冷や汗を流しながら、気を付けをする。

しばらくすると、セトが、ハールマーの方に歩き出す気配がした。私は、ホウとため息を吐いて、体の力を抜く。

よかった、注意がそれてくれて。

やがて背後から声がした。

「ハールマーさん、少し剣の相手してよ」

ハールマーが息を呑む気配がする。

きつと、邪悪な笑顔でも浮かべながら言っているのだろう。

ハールマーががんばれ！ 骨は拾ってあげるぞ！

「なんで俺がこんな目にあわにやなんのだ」

小さく呟かれたハールマーの声に、私は心の中で合掌した。

く小話く かみ合わない会話

セトとハールマーは、剣の鍛錬をしていたが、案の定、最後はハールマーの手によって終止符を打たれた。

セトが、悔しそうな顔で、額の汗を腕で拭う。

対して、ハールマーといえば、それほど汗をかくこともなく、涼しげな様子で剣を肩に担ぎ上げた。

「お前は、押すことしか考えてないだろ、少しは状況見て、引くことも覚えるよ」

私の感想としても、同じ意見だ。

セトはがむしやらに突っ込んでいく場面が多すぎる。

見ていて冷や冷やする場面が多すぎだ。もうちょっと、ハールマーみたいな、ずるさを学ぶべきだろう。

ハールマーの言葉に、セトは黙り込んだ。

やがて、小さな声で口を開く。

「…押しては…いないよ、怖がられたくないし…」

「あ？」

ハールマーが、間抜けな顔で聞き返した。

「押して、警戒なんてされたくないし。…だから、引くも何もないよ」

セトは、ため息を吐く。

ハールマーが、担いでいた剣を地面に突き刺し、首を傾げた。

「何言ってるんだお前、意味が解らんぞ」

ハールマーが、腑に落ちないという顔で、顎を撫ではじめる。

しかし、私はピンときた。

キターッ!!!

これは、もしかして、もしかしなくても、恋バナではないだろう

か！

セトだったら、なんでよりもよって、こんな朴念仁にそんな相談をするのだ。ここにマイスターともよべる存在がいるではないか！私は、セトの視界に入るように移動した。

任せなさいというドヤ顔を作って、アピールしてみる。

セトは、そんな私を一瞥すると、あからさまなため息を一つついた。

あれ？ 何それ！ 師匠に対して、あまりにも失礼じゃないか！ハールマーが、そんな私たちのやりとりを見て、何やら納得した様子になった。

「ああ…なるほど…なんだそういうことか」
「はあ！？」

何納得してるのよ、ハールマーのくせに！

「ぶつちやけ、攻めあぐねてるんだよね」

セトが困ったというような表情を浮かべた。

「…まあ…そりゃあそうだろうなあ、相手が相手だからな。難儀なことだ、その点は同情するさ」

ハールマーが、引きつった笑いを浮かべる。

「そういうことなら、俺から教えられることもないし、ま、せいぜい頑張れよ」

ハールマーが、ヒラヒラと手を振り、やってられるか、というよくな顔をして、踵を返そうとする。

「待ってよ、ハールマーさん」

「んだよ」

ハールマーが、心底面倒だとしても言いたげな顔で振り返る。

「俺、ハールマーさんに、教えてほしいことがあるんだよ」

「俺にか？」

ハールマーが、驚いた顔をする。

私も、ギョツとした。

何言ってるのよ！

セト！ 考え直しなさいよ！

ハールマーなんか、見るからにモテなさそうじゃん！

こいつに教わったら、落とせるものも、落とせなくなるわよ！

しかしハールマーは、セトの言葉に気をよくした。

俺に相談するとは、なかなか見る目があるなと言いながら、セトに近寄る。

「つたく、仕方ねえな。よし、俺が女の扱い方を教えてやる」

ハールマーは、セトの肩にガシリと手を回し、あつちに移動するぞと言って歩き出した。

「待ちなさいよ！ ハールマー！ あんたに、この手の事で、教えられることなんてあるわけじゃない！ セトに変なこと吹き込むの、やめてよね！」

私は、連れて行かれそうになっている、セトの腕を掴んで引つ張る。

「おい、お前に言われたくねえぞ。子供はすつこんでる。これから大人の時間だ」

ぎゃー、このジジイ、絶対玄人さんたちの相手のしかたを教えようとしているんだわ！

だめだめだめ！

私の可愛いセトに、変なこと吹き込まないで！

初級者には、初級者なりのレッスンの仕方があんのよ！

おっさんは、あつちいけ！

「セト、行ったらダメだからね！」

私は、必死でセトの腕を引く。

「だ、か、ら、お前がいると、色々都合が悪いんだよ。あつちいつてろって」

ハールマーが、シッシと手で私を追い払う。

私がいると、都合が悪いですって！？

「ばかー！ 花街なら、ハールマー1人で行きなさいよ！」

絶対ダメなんだから！

入門編をすつとばして、いきなり実地なんてあんまりじゃないの！
お母さんは、絶対にゆるしません！！！！

私は、セトの腕に、ギュツとしがみつく。

「ばっ！ 誰が花街に行くなんて言っただよ！」

「顔が言ってる！」

「顔！？ 俺は普段からこの顔だ！」

「私のセトに、変なこと教えないで！ 一人で楽しんで来い！ ばかハールマー！」

言っただよ、セトを引き留めようと、腰にガシリと抱きついた。すると、不意に頭を撫でられた。

顔をあげると、めちゃくちやうれしそうに笑うセトの顔がある。

あれ？ なんだ？ 急に機嫌よさげだぞ？

私が不思議そうに見上げていると、セトがギュツと私を抱き込んだ。できた。

「行かないよ、そんなところ」

ヒトは、そんな心配なんて、しなくてもいいよとセトが言う。

え？ 行かないの？

そうだよ、こつこついうことは、やっぱり段階踏んでいかないと。

この私に任せなさい。

ハールマーは、生ぬるい目で私たちを見ながら、後頭部を掻きはじめた。

フーと息を吐く。

「馬に蹴られたくもねえし、俺は行くぞ」

やってられるかとハールマーが舌打ちする。

セトは、幸せそうに私を抱きしめたまま、ハールマーに顔を向けた。

「待つてよハールマーさん、俺、ハールマーさんに聞きたいことがあるんだ」

「聞きたいこと？ さっきも言っただよ。何だ？」

ハールマーが、振り返る。

セトは生真面目な顔になって口を開いた。

「俺、ハールマーさんみたいになりたいんだ。どうやってたら、ハールマーさんみたいなの、汚くて、くたびれた、むさいおじさんになれるのかな？」

ハールマーは眼を見開いて固まった。

だいぶダメージをくらった模様だ。

「おい…いくら俺でも、それは傷つくぞ…」

やがてハールマーは、そう言っただけで眉を下げる。

私も、なんだかハールマーが可哀想になってきた。

確かに事実だけども、でも、そこが可愛くもあるんだよ？

ただ、ちょっと、あまりにもストレートな表現過ぎるよな。

もうちょっと、オブラートに包んで言っただけくらいの気遣いはしないと。

それにしても、なんでそんなもんになりたいんだ？

よりにもよって、おっさんになりたいだなんて…。

私には、セトの真意が読めないのだった。

く小話く かみ合わない会話（後書き）

お前のせいだよ！

とつつこみたくなる話でした（笑）

5 死魔来襲 その1

それは、茜色だった空が陰り、夜空へと変わろうとしていた時の事だった。

地上では、早めの食事の準備が為され、兵士たちが束の間の休息に、身を浸している。

その時、空の一部に残る、鮮やかな橙に、突如、黒い点があらわれだした。兵士の一部が、訝しむように、その空を見上げる。

次第に近づくその影が、異形の群れであることに気づいたのは、いったい誰であったことだろう。

その群れは、空を飛ぶものばかりではなかった。地上を見渡せば、地平線を駆け抜ける四足のものもいる。

事態を把握できた頃には、すでに異形の群れが軍に迫り、地上では蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。

しかし、それもほんのわずかな間の事、すぐに下知がとび、隊は整然とかたちをつくる。

「弓方用意！」

屈強な兵士たちが、声と同時に、剛弓を引き絞る。

「射よ！」

合図とともに、無数の矢が、空飛ぶ異形の群れに、大地を駆ける異形の群れに、襲いかかった。

それが契機となり、戦いの火ぶたは切って落とされたのだった。

「ヒト！ お前は天幕の中に隠れてろ！」

ハールマーが、私の肩を押して、天幕の方へ押しやった。

おやおや？ 何だ？ その扱いは。

私の表情は、早くも臨戦状態に変わった。

セトが、それを見て、ハーとため息を吐く。

「ハールマーさん、そんなことするだけ時間の無駄だよ。ヒトが、そんな言い付け守るわけないじゃないか」

ハールマーが、セトを睨んだ。

「ばか野郎！ 魔物がこんだけ押し寄せてきてんだぞ、怪我したらどうすんだ。女はひっこんでるように言っておけ！」

「大丈夫だよ。確かに数は多いけど、見る限り、下級のやつだし。下手に天幕なんか押し込んで、後で何されるか戦々恐々とさせられるより、目の届くところで好きにさせておいた方が、俺の精神衛生にはいいんだよ」

「おいセト…お前、ちゃんと状況わかってんのか？」

「分かってないのは、ハールマーさんの方だよ。前に言っただろ、ヒトはれっきとした魔道士なんだから」

「魔道士なんて、そうそうなれるもんじゃねえんだぞ。素人がちよつとかじつたくらいで、何言ってるやがる。怪我する前に、おとなしくさせておけ」

ほほーう。

そんなこと言っちゃうわけね。

じゃあ、思いつき張り切らないと。

私は、やる気満々に腕まくりをはじめた。

セトがそれを見て、再びため息を吐く。

「もう、ハールマーさんは黙っててよ。これ以上、このじゃじゃ馬刺激しないでよ。頼むから」

セトが、見てられないとばかりに、片手で顔を覆う。

「お前：本当に振り回されてるな。こういうじゃじゃ馬には、一度ガツンと言ってやらねえと、きちんと理解しねえぞ」

ハールマーが、セトにそう言ってから、私に向き直る。

両手を腰に当てて、私を睨むように見下ろした。

「いいかヒト、子供はおとなしくすっこんでろ。口じゃあ魔物に勝てねえんだらな。し、ず、か、に、お、と、な、し、く、そこに隠

れてる、分かったな」

ハールマーは、嫌味たらしく、区切つて言いやがった。

「全然分らないし」

私は、ニッコリ笑つて言いかえす。

ハールマーが、ヒクリとひきつった笑いを浮かべた。

「ヒト、いい加減にしるよ」

ハールマーが、低く唸るように言った。

「いい加減にするのは、ハールマーの方だし。自分こそ黙つてみてればいいのよ」

私は、そばにあつた岩の上に登る。

地上は、死魔も人間も入り乱れているので、大技は使えない。けれども空飛ぶ敵には、存分に魔術を使えるのだ。

私は空に向かって両手を突き出した。

巨大な炎の魔法円を呼び出す。

ハールマーの顔が、驚愕に固まった。

巨大な円の中央から、業火が放たれる。

炎は、まるで生き物のようにうねり、死魔を次々と捉え、焼き尽くしていった。

一段落してから、私はハールマーを見る。

「どう？ これでも文句ある？」と。

6 死魔来襲 その2

ハールマーが、呆然と私を見ていた。

しばらく、そのまま固まっていたが、やがて両手で顔を覆うと、ハーツと盛大なため息を吐いた。

「まったく、本当にお前は……」

そのまま、頭に両手を持って行って、ガシガシと掻き毟る。

「あー、くそっ！ 勝手にしろ！ セト、お前が面倒見るよ！」

ハールマーはそう言って、私に背中を向けた。

そのまま軽く走りだし、少し離れた場所で指揮をとるギエンのもとに向かう。

私とセトも、ハールマーの後に従った。

ギエンにも、先ほどの魔術が見えていたようだ。近寄ると、驚いたように、私を見下ろす。

「魔道士なのか」

ギエンのその言葉に、私は頷いた。

「私、役に立つし！ 遠慮なくこき使ってくれてもいいわよ？」

私は、ギエンにウィンクして見せる。

ギエンが苦笑した。

似ているのは、外側だけかと小さく呟いたのを、私は聞き漏らさなかった。

笑顔には、どこか寂しそうな影が付きまとう。

もしかしたら、ギエンもサリエの知り合いなのだろうか。私は、サリエによく似ているようだから。

この騒ぎが終わったら聞いてみようかと思う。

でも、今は目の前の事に集中しないと。

飛びかかってきた、獣型の死魔を、セトが切り伏せる。

「ヒト、俺が下を担当するから、ヒトは上を頼むよ」

セトが顎で空を指す。

「了解！ 上なら、手加減とか気にする必要ないもんね」
鳥型の死魔めがけて、私は魔法円を呼び出す。
炎を駆使して、死魔を駆逐した。

それにしても、きりがない。

斃しても、斃しても、後からどんどん湧いて出てくるようだ。

正直、気味が悪い。

それに、いつもの死魔の様子とは、何処か違っていているような気がした。

死魔は、下級のものほど群れて行動する。人間を襲ってしとめるのに、その方が、効率がいいからだ。

対して、上級の死魔は、単体で行動することが多い。一人一人の能力が高く、群れる必要がないのだ。

上級の死魔は、知能が高い分、気分屋な者が多く、各々自分勝手に行動する。ともに行動するのは、利害が一致した場合のみであるのだ。

人間を襲う理由も、下級の死魔が、純粋に食欲を満たすためであるのに対して、上級の死魔は、食欲だけではなく、面白いからとか、つまらないからとか、人間の感情に似た、高度な感覚を伴う。

今回の相手は下級の死魔である。

だから、死魔が群れて行動するのは理解できる。

だが、数が半端ではない上、何故か、殺した人間を食べる数が、極端に少ないのだ。

確かに、遺体を食べ散らかす輩もいる。しかし、大半は、殺したら、次の獲物に向かっていくのだ。

食べるため以外に、人間を殺す。

この死魔の群れには、何か目的があるとでもいうのだろうか。

何より私を不安にさせるのは、封印が無事なのかどうかということ。

イムルードが大丈夫だと言ったのだから、大丈夫なはずだ。

根拠は、心もとないものだが、イムルードの言葉に、私は信頼を寄せている。イムルードを疑うつもりはない。

ただ、少しだけ不安がよぎった。

イムルードは、いつも一人で、何もかもを背負おうとする傾向がある。

私自身も、同じその間違いを、つい先日ようやく理解できたばかりだから、他人のことは言えないのだが、イムルードも、誰かを頼る必要なんて、ないと思っっているのではないだろうか？

自分は、一人で立っているのだと、一人でも立てるのだと、勘違いしているのではないだろうか？

セトが、私を支えたいと言ってくれたあの時から、私の心は確かに軽くなったのだ。

無条件に信頼でき、寄り添える誰かがいるということは、温かく、とても幸せなこと。

一人で立たねばならないと思い込んでいたあの時に、時折、襲った無性な寂しさを、今は感じることもない。

イムルードは、理解しているのだろうか？

人間は、一人で生きているわけでは、ないのだということ。

誰かを、頼ってもいいのだということ。

私は、イムルードの赤い眼を思い出していた。

無理をしていないだろうか、そればかりが気になりになるのだった。

7 死魔来襲 その3 (前書き)

残酷な表現があります。大丈夫な方のみどうぞ。

7 死魔来襲 その3

死魔たちの群れの中に、見覚えのある、毛色の違った生き物が、一匹紛れていた。

真つ青な毛並みを持つ、四足の、異形の獣だ。

青い獣は、兵士の刃を軽々とかわし、時折、鋭い爪や牙で、兵士の体を引き裂いては、いたぶるようにして、鬨り殺してゆく。殺戮を、まさに楽しんでる風であった。

あれは、たぶん王都であった上級の死魔だ。

私は、とつさに走り出していた。

あの後、ナサレーたちはどうなったのだろう。

彼らの事を思い出すと、胸が痛くなる。

私が、間の子であると知った彼らに、前のように受け入れてもらえることは、ないかもしれない。でも、彼らが無事であるなら、それだけでかまわないと思う。

生きてさえいれば、いつか分かり合える日もくるかもしれないのだから。

私は、青い獣の前に飛び出した。

『才前八…』

青い獣は、私を視界に捉えると、姿を人型に変える。

『このような場所で会うとはな』

青色の髪の毛の、美しい女性体へと変わったシユエダは、私を見て嫣然と笑った。

すぐに両手を突き出して、巨大な魔法円を呼び出す。

『先日は、お前を仕留めそこなってしまったが、ここで帳尻を合わせればよいことだ。死ね』

言葉とほぼ同時に、炎の渦が放たれる。

私は、無効化の魔法を使って、それを防いだ。

炎の魔法をやり過ぎした後、風魔法を呼んで攻撃するが、すぐに

かき消される。周囲に、人間がいるので、あまり大技を使えないのだ。

逆に、シュエダは、周りを気にすることなく、高度な魔法を次々と繰り出してくる。

おかげで、私は被害が広がらないように防ぐことが精一杯で、防戦一方になった。

そこに、セトが追いついてきた。

「ヒト、勝手にウロウロしないでよ。しかも、なんで上級の死魔なんか相手にしてるんだよ。少し目を離すと、すぐこれなんだから」

セトが、盛大なため息を吐いて、私を軽く睨む。

「でも、なんでこんなのが混ざってるんだろ？ 他は、みんな雑魚なのに」

セトが、シュエダを警戒するように見た。

私は、分からないとばかりに肩を竦めてみせる。

「今度は、獣人か？ 獣人は、魔力がないゆえ、まずくてかなわぬ。喰らう価値もない」

シュエダは、そう言って、顔をしかめた。

「俺も、お前みたいなヤな女に、食べられてやる義理なんてないし、けっこうだよ」

セトの言葉に、シュエダが気色ばむ。

「小僧、お前から殺してやるう」

残忍な笑顔を浮かべながら、魔法円を呼び出しはじめる。

私も手を構えて、無効化の魔法円で応戦する準備をした。

しかしその時、不意に私とセトのそばをすり抜け、ハールマーが、シュエダめがけて突進していった。無駄のない素早い動きだ。

ハールマーは、しなやかな身のこなしで、軽く跳躍すると、シュエダめがけて、鋭い剣を振り下ろす。

シュエダは、ハールマーの攻撃を躲したが、ハールマーの切っ先は、軌道を変えてシュエダを狙う。

刹那、シュエダが、絶叫をあげた。左腕を肘の辺りから両断され、

切り取られた腕が弧を描いて宙を飛んだ。

腕が大地に落ちる前に、ハールマーは二撃を繰り出す。

ハールマーの剣は、シュエダの腹部に深々と刺さった。

シュエダの口から、大量の血が吐き出される。

『おのれ…人間め、…よくも』

「つたく、お前ら、相手は選べよな。こんな面倒そうなのは、よけとけよ」

ハールマーが、シュエダから剣を引き抜き、血のりを振り払う。

あつちに戻れと、私たちを、手で追い立ててくる。

「人間ごときが、妾を、見くびるでないぞ」

シュエダが、憤怒の形相でハールマーを睨み付けた。

「お？ 魔物も、ちゃんと人間様の言葉がしゃべれんのか」

緊張感のないハールマーの声に、シュエダが、ギリりと唇を噛む。

残り一本となった腕を伸ばし、魔法円を呼び出しはじめた。

「しゃあねえな、お前、わりといい女だし、その魔術、完成するくらい時間は待ってやるよ。ヒト、セト、お前ら離れてろ」

ハールマーは、ニヤリと片方だけ唇を吊り上げ、不遜な顔をして、シュエダを見ていた。

「その増上慢、後悔するがよい」

シュエダは、憤怒の形相でハールマーを見る。逆五芒の紋の描かれた、召喚魔法の円を呼び出した。

巨大な円は、大地に横たわると輝きはじめる。

円の中央から、四足の死魔があらわれた。

その死魔は、金色の鬣を持つ、獅子に似た容姿をしている。しかし、額には、縦に割れた三つめの目が存在していた。

三つ目の獣は、呼び出した主の怒りに呼応するように咆哮し、大地を蹴る。ハールマーの首筋をめがけて飛びかかった。

ハールマーは、剣を構えたまま体を捻って攻撃を躲し、すれ違わずさま手首を返して、三つ目の獣の腹部を抉る。

三つ目の獣は、痛みを感じる器官がないのか、腹部から大量の血

を流しながらも、何事もなかったかのように、地面に着地した。大地に足をつけるなり、獣は再び二撃を放つ。

ハールマーが、飛びかかってきた獣の、重たい前足を、剣でいなす。ガキンという鈍い音がした。

ハールマーは、三つ目の獣の前足をいなすと、すぐさま獣の背後を取る。一呼吸遅れて、振り返ろうとした獣の、首筋に、一太刀あびせた。

重い手ごたえのある一撃だ。

三つ目の獣の、首の側面に深い溝が生まれ、噴水のように血が流れ出る。

ハールマーは、その血を避けるようにして、距離をとった。

しかし、獣は怯まない。再び大地を蹴って、ハールマーに突進する。

「やれやれ、面倒な奴だな。引き際くらい、飼い主がちゃんと仕込んでだよ」

ハールマーは、軽口をたたいてから、表情を引き締め、剣の柄を握りなおす。

今度は、攻撃を躲すことなく正面から迎え撃った。ハールマーは、獣の顎下から、鋭く剣を突き上げ、頭蓋を打ち抜く。

頭を串刺しにされ、三つ目の獣の体が、大きく震えた。

それが、獣の最後だったようだ。

力を失った獣の体躯は、地に倒れ、動かなくなる。

ハールマーは、獣から剣を引き抜くと、血塗れた剣をシュエダに向けた。

「さて、今度はお前の番だな。俺は優しい男だからな、次は一瞬であの世に送ってやるよ」

すると、シュエダがクツクツと笑い出した。

「今だけだぞ」

口の端から、血を流しながら、シュエダが怨嗟の言葉を吐きはじめる。

「今だけ、束の間の勝利に酔いしれるがよい。我が王が、再臨する日も近い。混沌の世は、間近に迫っているのだ。弱きものは、ただ滅ぶのみ。お前たち脆弱な生き物は、じき滅び去る運命なのだ」
その言葉に、私の両肩が震えた。

「どういう意味だ？」

それは、もしかして、封印が解けると言うことだろうか？

そんなことになったら、ナンはどうなるのだ？

私は、恐ろしさに息を呑む。

不意に、セトが私の手を握りしめた。

「大丈夫だよ」

不安な表情のまま見上げると、セトは、私を安心させるように頷く。

「大丈夫。絶対にそんなことにはさせない」

力強く言い切るセトに、私の不安も和らいできた。

「うん、そうだよね…。私も、頑張る。絶対、そんなことにはさせないから」

私は、セトの手を握り返す。

ハールマーが、シュエダを馬鹿にするように笑った。

「お前さあ、頭悪いな。弱いから、お前も今から死ぬんだろ。弱い奴が、もつともらしく、でけえ口、叩くんじゃねえよ」

シュエダが、凄絶な笑顔を顔に張り付ける。

魔法円を呼び出しはじめたが、ハールマーがそれをゆるさなかった。

袈裟懸けに胸部を斬られると、シュエダは仰向くようにして地に倒れ、事切れたのだった。

8 守るといつこと

シュエダをたおした後、ハールマーが、私とセトを見た。

「何しけた面してんだよ、あんな言葉気にすんな」

ハールマーが手を伸ばし、私の頭をグシャグシャと撫でる。

「いつもの、威勢のよさはどうした。お前がそんなんじゃ、調子でねえだろうが」

ハールマーが、頭を撫でる手を止めて、私の鼻をつまむ。

「痛いじゃない」

私は、軽く唇を突き出して、ハールマーを睨んだ。

ふと、ハールマーが優しく笑う。

「お前は、そうやって、憎まれ口叩いてるくれえじゃねえとな。あんな言葉、いちいち気にすんなよ。負け犬の遠吠えなんだからよ」

さあ、あつちに戻るぞと言って、ハールマーが私とセトの背中を押す。

その手の温かさに、何だか鼻の奥がつんと痛くなってきた。

「でも、もし本当だったらどうするの？ 本当に、こいつらの王様があらわれたりしたら……」

思わず、弱音がこぼれてしまう。

先ほどセトの言葉に励まされ、自分の与えられた仕事を頑張ろうと、心には決めていた。

だが、シュエダの言葉が、脳裏から離れないのだ。

すぐ目の前で、山のように群がる死魔を見ると、恐ろしさと、焦燥感、不安とが、ないまぜになってこみ上げてくる。

もしかしたら、ナンが、命をささげなければならぬ時間は、すぐそばまで迫っているのではないだろうか？

私が知らないだけで、ここでこうしている間にも、ナンやイムルードたちだけで、勝手に解決しようと奮闘しているのではないだろうか？

何故私だけ、蚊帳の外で、待っていないといけないのだろう。指をくわえて、待つことしかできないことが、とてももどかしい。私がここでぐずぐずしている間に、どんどんと事態は進んでいるのかもしれないのに。

自分だけ、置いてきぼりにされているような錯覚に陥り、どうしようもなく不安になるのだ。

ハールマーがため息を吐き、片膝を地につけ、私と視線の高さを合わせた。

「あんな、ただの仮定の話に、何、そんな弱気になってんだよ。らしくねえぞ。いつもの凶太さはどうしたんだよ。あんな死に際の一言くらい、笑い飛ばしてやれ」

私は、グツと唇を引き結ぶ。

今口を開くと、どんどん弱音がこぼれ落ちてきそうだからだ。

ハールマーが、ピンと私の額を指ではじいた。

「なんつー顔してんだよ、ったく。別に、そんなもん、どうだっていいだろ？ 例えば魔物の王様とやらが出ばってきたって、たおしやいいだけの話だろうが。俺と、その魔物の王様とやら、どっちが強いが賭けでもしてみるか」

ハールマーが、私を元気づけようと茶化してくる。

でも、私は不安だった。

「だって、その王様が出てきたりしたら、ナンが……」

私は、それ以上の言葉が、つかえて出てこない。

もし、このまま二度とナンに会えなくなったりしたら……。

そう思うと、どうしようもなく不安になるのだ。

イムルードたちが、何をしているのか、私にはまったく知らされない。

私も一緒に皆と頑張りたいのに、私だけは、待っていることしかできないのだ。

目頭が熱くなってくる。

「私も、一緒に頑張りたいのに……。一番後ろで、待ってるだけなん

て、嫌なのに」

ポロリと一粒涙がこぼれ落ち、ハールマーがギョツとする。

「おい、泣くなよ。ったく、セト、何泣かしてんだよ！」

「泣かしたのは、ハールマーさんじゃないか」

「俺じゃねえぞ、どうせ、お前がヒトに、何か我慢させてるんだろ？ お前のせいだろうが」

セトは、思い当たったのか、口を引き結んで黙り込む。

「このじゃじゃ馬、おとなしく待ってられる性分じゃねえのは、お前が一番わかってんだろ？ さつき、お前が言ってたみたいに、好きにさせて、そばで見張ってりやいいじゃねえか。こんな風に泣かすんじゃねえよ」

ハールマーが、ゴツゴツした手を伸ばして、私の涙を乱暴にふき取る。

「お前も、それくらいでメソメソすんじゃねえ。いつもやってるみたいに、セトを振り回してやればいいだろうが」

「でも、ハールマーさん、ダメなんだよ。今回の件には、ヒトを首突っ込ませちゃダメだって言われてるんだ」

ハールマーが、その言葉に目を眇める。

「で、お前はそうやって、誰かの言い付け守って、惚れた女泣かすのか？」

セトが、グツと言葉に詰まった。

「確かに、こいつは無鉄砲だし、心配なもの分かるが、女1人ぐれえ守れねえで、どうする？ 俺は、そんなヤワな稽古つけてねえぞ。こんな時こそ、死ぬ気で守るぐらいの気持ちを持って」

ハールマーは、立ち上がり、膝を叩いて埃を落とす。

「だいたい、ヒトはおとなしく守られてるだけの女じゃねえだろ？ 待つてるだけの女でもねえ。それは、お前が一番よくわかってんじゃねえのか？」

セトは、黙り込んで拳を握りしめた。

「大丈夫だ。こいつは、ただの小娘じゃねえ。俺が見た限り、お前

の背中預けられるくらいの腕は持つてるぞ」

ハールマーはそう言って、私の頭を乱暴に撫でる。

「まあ、俺も、セトの気持ちだが、わからねえわけでもねえがな。お前、無茶ばかりして、危なっかしいんだよ。だから、後ろで待つてるなんて言われんだよ。少しは、そういうところ反省しろよ」

「わかった。反省する」

私は、目をごしごし擦って、涙をふき取った。

このところ、めっきりゆるくなってしまった涙腺を、必死で押さえながら、私はセトを見上げる。

「セト、私、王都に行きたい。一番後ろで、守られてるだけなんていやなの」

セトはじつと私を見下ろし、やがてハーと息を吐いた。

「ヒトはずるいよな。そんな顔して言われたら、折れるに決まってるだろ。まったく、ハールマーさんの時みたいに、計算づくならよかったのに」

セトが苦笑する。

「そのかわり、絶対俺のそばを離れるなよ。何があっても、俺が守るから」

セトは、自分自身にも言い聞かせるようにして、そう言っていた。

9 ある男の傍白 その5

子供というのは、知らぬ間にでかくなっているものだ。

俺は、乱戦のおさまった戦場を見て回りながら、何だか寂しさに似たような気持ちをも、ひしひしと感じていた。

ついこの間までは、足元にチマチマとまとわりついて、無性に可愛かったものだが、今ではでかくなり、憎まれ口もめいっぱいたたいて、時折、頭をはたいてやりたくなることもある。

自分には、子がないが、もしあれば、同じくらい無性に可愛くて時々、ムカついたに違いない。

ヒトは、チビの頃と変わらずに、今でも好き勝手し放題の、お転婆ぶりだが、セトは、すっかり男の顔になってやがった。

今日も、あいつらを、守ってやるつもりでいたが、いつのまにかもう俺の手なんか必要ないくらいに、でかくなっちまっていた。

一面誇らしくもあるが、それはそれで寂しいものだった。

きつと、子供が結婚して家を出ちまうときに、親はこんな気持ちになるんじゃないだろうか。

「ハールマー」

不意に呼び止められ、俺は振り返る。

そこにはギエンが居た。

「閣下、何か用か？」

「先ほどの娘は、無事なのか？ 何処へ行ったのだ」

俺は、ギエンをまじまじと見返した。

「娘」というのは、ヒトのことだろう。

どうやらヒトは、この男の、昔の女に似ているようだが、それにしてもこの堅物が、女1人に、ここまでこだわるとは、相当な入れあげようだ。

「あいつなら無事だ。一足先に、王都に行ったよ」

「王都に？」

「事情はよく知らんが、王都に何か用があるようだ」

「そうか…」

いくぶん、がっかりした様子がかがえる。

それにしても、他人様の趣味をどうこう言うつもりもないが、ヒトみたいな女、俺だったら、絶対御免こうむりたい種類の女だ。

真面目一辺倒のこの男が、あんなのを相手にできるようにも思えないが…。

まあ、まてよ。

顔が似ているだけなのかもしれないしな。

きつとそうだな。

この堅物が、ヒトみたいな女の相手を、できるわけもない。

あんな突飛な言動、され続けたら、怒りを通り越して、呆れて終わりそうだ。

その点、セトはうまく乗りこなしてやがる。上手に、軌道修正もすることだし。

ま、多少の我儘を大目に見てしまうのは、惚れた弱みというやつだろう。

「あの娘には、愚にもつかぬ父親がいると言っていたが…」

「ああ、とんでもねえ表六玉だ。酒好きの優男で、子供の面倒も、まともに見れねえようなクズだ」

俺は、十年前に一度だけ見た、顔だけは極上の部類に入るだろう、あの若造の顔を思い出し、鼻の頭にしわを寄せた。

やっぱり、ぶった切っておくべきだったと、あの後、何度後悔したことだろう。

ヒトが懐いていなきや、確実に殺っていた。

急に殺気を帯びはじめた俺を、ギエンが訝しむように見る。

と、そこにカルナスがやってきた。

「ギエン殿、こちらにおられたか」

お主もいたのか、と言って、カルナスは俺を見る。

俺は、この男が嫌いではない。

この男は、金で雇うということを、きちんと理解できているからだ。

色々な国を転々としてみたが、レヴトリアが、一番性に合う。気持ち悪い愛国心やら、見せかけの友誼やらを持ち出して、傭兵の俺を、飼いやらそうとはしないからだ。

割り切った関係と、信頼とを、同時に結べる雇い主は、なかなかいるものではない。

その点、この男は、十分及第点をくれてやるに値する男だった。

「獅子王、今回の魔物、ちとおかしいぞ。魔物は確かに群れるもんだが、数が半端じゃねえ。それに、やつら人間を食うことより、殺すことを目的にしてやがった。何かおかしい。今後も、奴らの動向には注意した方がいいだろうな」

カルナスは、俺の言葉に、承知したと返す。そのまま、ギエンを見た。

「ギエン殿、貴殿、シャントクレール侯爵家の、サリエなる女性を存じておるか」

ギエンは、打たれたように体を震わせてから、睨み付けるようにカルナスを見た。

カルナスはというと、ギエンの反応が意外だったようで、驚いたようにギエンを見ている。

「何故、それを…」

ギエンが、絞り出すように言った。

「知っておるのか。故会って、人探しを頼まれているのだ」

「人探し？」

ギエンが、訝しむようにカルナスを見る。

「サリエなるご婦人の、御息女に頼まれて、父親を探しているのだ」その言葉に、ギエンが驚愕の表情のまま固まった。

この男らしからぬ、あまりの動揺ぶりに、俺とカルナスは、一度視線を合わせる。

「ギエン殿、如何いたした」

カルナスが口を開く。

ギエンは、しばらくの間、放心したままだった。

やがて、カルナスの言葉が理解できたのか、ギエンはカルナスの両腕を掴むと、鬼気迫る勢いで口を開いた。

「どこにいる！？ どこにいるんだ！？ サリエの娘は…俺の娘は何処にいる！？」

カルナスの腕を揺らして、ギエンが必死で叫んだ。

悲痛に叫ばれたギエンの言葉に、今度は俺とカルナスの方が固まる番だった。

「…娘？ 貴殿が、父親なのか…？」

カルナスが、呆然と呟いた。

俺も、一緒になって混乱した。

娘がいるのか？ この男に？

カルナスが、俺を見る。

「お主のもとに居たはずだ。ヒトという娘、今、どこにいる」

「あ？」

「ヒトという娘だ。あの娘がギエン殿の娘だ」

「なっ…」

俺は、そのまま目を見開き、絶句した。

ヒトが、閣下の娘…？

似てねえだろ。

いや、違う。

「待てよ、ヒトには、酒にだらしない優男の父親がいるぞ？」

「酒に…？ それは、白き賢者のことであろう。賢者殿はあの娘の養い親だ」

今度は、白き賢者だと？

俺の頭は、混乱に達し、頭を掻きむしった。

ちよつと待ってくれ、俺に考える時間を与えてくれ。

ヒトの父親は、白髪、赤眼の男だった。

うわさに聞く、賢者の容姿と、確かに一致するが、それにしても

若すぎだろつ。

あいつは、前に会ったあの時、20歳をいくつか越したくらいの若造に見えたのだから。

しかも、あんまり賢そうにも見えなかったし、とても賢者なんて柄じゃねえ。

「俺が見たヒトの父親は、確かに白髪に赤眼だったが、まだ若い男だったぞ」

「賢者殿は、年を召されぬ。私も、はじめてお会いしたのは、20数年も昔のことだが、あの時と一つも変わらぬ」

「なんだよそれ、どんなバケモンだよ」

賢者は白髪と聞いていたから、耄碌したじいさんかと思っただのに。

しかも、年をとらないって、どういうことだ？ 薄気味悪いじゃねえか。

「…あの娘…サリエの娘だったのか…。どうりで似ているわけだ。そうか…あれが俺の…」

ギエンが、そう言って、拳を握りしめた。何かを耐えるように、口元を引き結んでいる。

素直に、よかったなと、言ってやりたい気分だった。

しかし、世の中狭いといふかなんといふか…。

たまたま縁のあった上司が、可愛がっている子供の父親とはな。まさか、こんな話になるうとは、想像もしていなかった。

けど閣下、喜んでる場合じゃねえぞ。

あんな娘持ったら、心配で、心配で、安心する間もねえんだからな。

あんたきつと、すぐに老けるぜ。

俺は、涙をこらえ、喜びをかみしめている様子のギエンに、気の毒そうな視線を送る。

と、その時の事だった。

周囲が、急に騒がしくなりはじめた。

「敵襲！ 敵襲！ トルバディア軍だ！ 敵が攻めてきたぞ！」

俺たち3人は一瞬だけ、視線を合わせて頷き合う。

魔物の襲撃の後に、敵軍の攻撃。

この奇妙な符号に、俺の感は、何やら薄気味悪いものを感じているのだった。

1 告白(前書き)

タイトル通り、生ぬるいことになっております。

できれば、次話も含めて、2話ほど、男性読者様には、読んでいただきたくないというのが本音です(汗)。是非飛ばし読みしてください。

というわけで、大丈夫という、乙女な方のみどうぞ。

1 告白

闇色に染まった大空には、あまたの星が瞬いている。

この空の広さに比べ、自分はなんと卑小なことだろう。

私は、寝転がったまま、両手を空に伸ばしてみる。小さくて、取るに足りない手だ。

私にできることなんて、限られているのかもしれない。

でも、この手で、もっとたくさんのお事をしたい。

皆を助ける力になりたい。

私は、拳を握りしめる。

「ヒト、眠れないの？」

セトが体を起こし、覗き込んでくる。

私は、セトの顔を見てから、小さく頷いてかえした。

「いつもなら、寝つきが良くて、すぐにぐうぐう寝てるのにな」

セトが、少しだけ笑って、私の髪を手で梳く。

「セト、わがまま言ってゴメンね」

「急にそんなしおらしいこと言ったりして、どうしたの？」

「だって、セトずっと黙ってたし…怒ってるんじゃないの？」

私たちは、ハールマーと別れてから、移転魔法で王都のはずれに移動していた。

ドアなしの移転魔法は、初チャレンジだったのだが、なんとか成功できた。そんなに見当はずれでもない場所に移動できて、私は内心で、かなりほっとしたものだ。

おかげで、気づくのが遅くなってしまったのだが、よくよく考えると、セトはずっとその間黙りっぱなしだったのだ。

セトは、一度軽く目を見開いてから、困ったように笑う。

「別に、ヒトに怒ってたわけじゃないよ。怒ってたつもりもないんだけど…そうだな、もし怒ってるとしたら、自分自身に対して…だよな」

セトが、私から視線を外して空の一点を見る。

「ハールマーさんに言われてさ、俺もちょっと反省したんだよ…」
私も起き上がってセトを見た。

「反省？ セトが？」

セトは頷く。

「この前、ヒトがいきなりいなくなつたる？ あの時、俺、心配で心配で…おかしくなりそうになつて…。でも、無事見つかつて、ほつとして…。そしたら、怖くなつちやつたんだよ。これ以上、ヒトには危ないことさせたくないって思うくらい」

私は、返す言葉がみつからなかった。

確かに、あの時、たくさん心配かけただろうと思つたからだ。

「たぶん、イムルドもそうなんだと思うよ？ ヒトを危ない目に合わせるくらいなら、自分がなんとかしようとも思つたんじゃないのかな？」

推測の話だけどねと言つて、セトが肩を竦める。

「でもさ、それって、俺たちの勝手な都合であつて、ヒトの意見を無視してることになるんだよな」

言つて、セトが大きなため息を吐いた。

「ハールマーさんにああやつて言われて、俺、ようやくわかつたよ」
セトは少しだけ苦笑つてから、真つ直ぐに私を見る。

「こうと決めた時の、猪突猛進な無鉄砲さは困るんだけど、お節介で、どうしようもなくお人好しな、ヒトのそういうところを好きになつたのに、俺自身が、ヒトのいいところをダメにしようとしてた」

「セト…」

「俺のほうこそゴメンね、ヒト」

セトが、そう言つて私の頭を引き寄せて、覗き込むようにして、額をくつつけてきた。

私は、首を横に振る。

「違う、私が悪かつたの。2人の気持ちも考えないで、いつも好き勝手に行動して…ハールマーにも、そういうところ反省しろって怒

られたばかりだもの」

私はセトを見上げた。

「セト、ごめんね」

セトがふと優しく笑った。

「じゃあ、お互いにごめんなさいだね」

「うん、そうだね」

私もつられて笑顔になる。

セトの手が私の頬に触れた。

「好きだよ、ヒト」

「私もだよ？」

そう返すと、セトが少しだけ困ったように笑う。

「そうじゃないんだよな。…つまり、こういう意味で好きってこと」

セトが首を傾いで、軽い口づけを落としてきた。

直後、私は、驚きで硬直した。

今、セトは、何をした？

「ああ、またそうやって混乱しはじめる」

困ったなと言って、セトが私を抱き寄せた。

「ちょっとは落ち着いて、よく俺の話を聞いてよ。せっかくした、俺の一世一代の告白、なかったことになんてされてたくないんだからさ」

ゆっくり深呼吸してと、セトが言うのが聞こえるが、この状況で？ どうやって？ という感じた。

私は、どんどんパニックになりはじめる。

だって、この状態で、私は、いったい、どうしたらいいというのだ！？

「ヒトが、俺の事、家族と同じにしか思っていないことは、よくわかってるよ。でも、これからも、家族なんていう立場に甘んじてるのは嫌なんだ」

ああ、ヒトの旦那さんという立場の家族なら、別だけどねとセトは続ける。

「ヒトの好みが、ハールマーさんみたいな人だつてことも知ってるけど、俺、絶対ハールマーさんよりいい男になるから、だから俺の事もちゃんと見てよ」

セトが、ギョツと抱きしめてくる。

ええと、それはつまり、セトが私の事をI o v eという意味で好きということだろうか？

あ、ありえないし！

私はセトのお母さんであつて…。

いや、実の母親じゃないけど、でもそういつつもりであつたわけ…。

だつてセトなんて、私と幾つ年が離れているのだ！？

いや、外見的年齢で言ったら、セトのが年上だけど、でも、でもね。

不意にセトが私の顔を上向させた。

じつと見下ろしてくる。

「相当、混乱しているって顔だね。でも、ようやく俺の気持ちわかってくれた？」

私は、答えることができなくて息を呑む。

そんな私を見て、セトは、ああよかったと言って微笑んだ。

「これでちよつと前進もできたことだし、今はそうやって困っててもいいよ。俺は、逃がしてあげる気なんてないしね」

そう言つて、セトが私の髪の中に手を差し込む。

目を閉じて、唇を落としてきた。

そうやって、優しく口づけられて、私はただ呆然とすることしかできなかつた。

頭の中の混乱は、どんどんと増すばかりだつた。

2 見つからない答え（前書き）

前話にひきつづき、超ぬるいです。
大丈夫な方のみどうぞ。

2 見つからない答え

セトに告白されるといふ、衝撃の夜が過ぎ去り、ほとんど眠れな
いまま空が白んできた。

私は、改めてセトの言葉の意味を考えてみた。

さすがの私でも、セトが私に対して抱いているであろう感情を、
理解することはできる。

しかし、それに応えられるのかと問われたら、自分でもよく分か
らない。

しょうがない。本当に分からないのだから。

結局そこで、思考も止まってしまふ。

私は、困った顔で、隣で眠るセトを見た。

セトは、安らかな表情で、すやすやと寝ている。

くそう、1人だけ気持ちよく寝てくれちゃってさ。ずるいじゃな
いの。

思わず鼻でもつまんで、起こしたくなる。

私は、ため息をついて、再び空を見上げた。

もう、難しい問題は棚上げだ。

だって、考えると、それだけで疲れてしまふ。当面、答えも出そ
うにないことだし、しばらく放っておこうと思う。

だいいちセトの気持ちにしても、若さゆえの一過性のものかもし
れないのだ。今頭を悩ませても、余計な気力を使うばかりだ。

私は、首を振って、頭の中から考えを追い払った。

少しくらいは寝ておこう。

これから忙しくなるかもしれないわけだし、体力は温存しておか
ないと。

ふとセトの手が視界に入り、私はその手に自分の手を重ねてみる。
不思議と、気持ち落ち着いてきた。

私は両目を閉じる。

その手の温かさに、引き込まれるようにして、そのまま、すとんと眠りに落ちたのだった。

目を開けると、セトはすでに起きていて、私が目を覚ますのを待っていたようだった。

「どう？ よく眠れた？」

セトが聞いてくる。

眠れるわけじゃないじゃないか。寝不足だよ寝不足。

私は、無言で口をとがらせる。

「俺は、久しぶりに良く眠れたよ」

知ってるし。

自分だけ、気持ちよさそうに、よく寝てたもんね。

私はプイと横を向いた。

「ヒト、怒ってるの？」

「怒ってはいないけど…」

正直、どう反応したらよいものか、困っている。昨晚セトに、とんでもない爆弾を落とされたばかりなのだから。

セトは、私の気持ちを察したのだろう。私の頭を撫でた。

「ヒトにしたら、びっくりするような話だったかもしれないけど、俺にしたら、ようやくって感じたよ。ヒト相手に、ここまでこぎ付けられた自分のこと、褒めてあげたいくらいだ」

言いながら目を細める。

「これからは、遠慮なんてするつもりないから、覚悟してよ」
覚悟？

いったい何の？

なんだか、聞きたくない気がした。

まいったな、ほんとに。

私は、心底困ったという表情で、セトを見上げた。

私、自分が押す分にはいいんだけど、人からこんな風に押される

のは苦手だ。どう反応したらよいものか、困ってしまう。

どうしたものかと、返す言葉を探して、私は途方に暮れていた。

目の前では、私とは真逆の表情をしたセトが、心底嬉しそうに笑っている。

不意に顔が近づいてきて、上唇を軽く噛まれた。

ぎゃあ！

何をするんだ！？

私は、慌てて顔を背けて、手の甲で口を隠す。

恐る恐るセトを見上げると、幸せでたまらないといった顔で、セトが私を抱き寄せてきた。

「ヒトが、俺のこと考えて、そんなふう困ってるんだと思うと、俺、物凄く幸せ」

セトが、聞き捨てならないことを言う。

Sだ。セトは真正のSに違いない。

私が、困ってるところ見て喜ぶなんて、あんまりだ。

「今知ったけど、セトって意地悪だね」

私は、唇を尖らせた。

「そう？」

セトが、少しだけ体を離し、首を傾げて、私を覗き込んでくる。

「そうだよ。私がこんなに困ってるのに、それを嬉しいなんて、酷いよ」

私は、セトを睨み付けた。

「うーん、そうか。ヒトにしたらそうかもね」

でも、俺は幸せと言って、セトは再び私を抱きしめる。

良く見れば、尻尾もご機嫌な様子で揺れていた。

あの尻尾は反則だよな。

滅茶苦茶可愛いんだもの。

仕方ない。

セトが嬉しいのなら、いいか。

私は、おとなしくセトの腕におさまり、ワンコのように喜びに揺

れる尻尾を、穏やかな気持ちで眺めていたのだった。

3 生理的に受けつけない

前回訪れた時は、移転魔法によって、意図せず強制的につれてこられた王都だったが、こうして自らの意志で訪れてみると、少しだけ気後れしてしまう。

ドーム型の小高い丘の上には、岩山を利用して作られた王城が、異様な存在感を放っていた。周囲を、分厚い城壁と円塔が守り、さらに一番外側には、環状掘をめぐらして、そこに水を溜めてあるのが見える。

その王城を緩やかに東に下り、丘の麓に広がる、深い森の中には、一際大きくそびえ立つ塔の姿が見えた。

こちらの塔も、周囲を堅固な城壁が囲んでいる。

まるで、二つの城が競い合うかのようにも見えた。

「あれが、天空の楔^{エ・キサラ}？」

巨大な塔を見つめるセトの言葉に、私は頷いて返す。

イムルードが、近づいてはいけないと言っていた場所だ。

恐らく、あそこが、封印の重要な場所であるに違いなかった。

イムルードにしたら、不本意かもしれないけど、私行くから、ごめんね。

私は、心の中でイムルードに謝る。

「行こう」

私はセトを見上げて声をかけた。

セトも頷きかえし、2人で歩き出したのだった。

王城の麓には、深い森が存在する。

その森の外側に、距離を置いて、城と神殿を包みこむようにして、ぐるりと町が囲み、さらに町の外側には、長く高い塀がめぐらされ

ていた。

オリス・ラ・トーバは、実に広大な都市であるのだ。

当然ながら、その町に入るためには、塀の所々に設置されている門をくぐらねばならず、入るためには門衛のチケットが入る。

セトは、獣人なので、トルバディアでは登録証が必要だが、そんなものを私たちが持っているはずもない。

一応、セトの頭にはターバン状の布を巻きつけ、その上から外套ですっぽりと覆い隠し、一見してはわからない工夫はしてある。でも、ちよつとつつかれれば、分かる程度の誤魔化しだ。堂々と門をくぐる勇気もなかったたので、しかたなく私たちは、移転魔法を使って不法侵入を試みた。

王都では、封魔の術とやらが施されている場所があるようなので、念のため、六芒星の紋の魔法円を呼び出す。

前にシンが使っていた魔法円を真似てみた。

目標地点は、天空の楔の、周りにある森だ。

どうにかこうにか、魔法は成功し、目標にしていた場所に到着する。

ただ、ちよつとだけ想定外の出来事が起こってしまった。

私とセトが移転した先には、先客がいたのだ。

先に居たのは、30歳そこそこの、整った顔立ちをした男だった。

男は、若干たれ気味の、董色の目が印象的な線の細い男で、実に女性受けしそうな容姿をしていた。

男は、突然現れた私たちに、最初こそ驚いていたようだが、やがて不敵な表情を張り付けると、両腕を組む。

「ウトナの魔法を操るとは、なかなかの腕を持つ魔道士のようだな。見かけぬ顔だが、何者だ」

男は、小さく片方だけ唇をあげ、作り物めいた笑顔を、顔に張り付けた。

人を食ったような、その態度が、気に入らなかった。

「人に名前をたずねるのなら、まずは自分から名乗るのが筋じゃない

いの？」

私も腕を組んで、男を見返してやる。

セトが、ため息を吐いて、額に手をあてた。

「誰彼かまわず、そうやって喧嘩ふっかけるの、やめてくれる？」

「別に、喧嘩なんか売ってないわよ。常識を教えてあげてるのよ。」

「なんで、こんな見ず知らずのやつに、上から目線で、名前聞かれなきゃなんないのよ」

「ヒト、それ、相手に、まる聞こえだからね」

「聞こえるように言ってるの。いい年して、常識が欠落してるようだから、教えてあげてるのよ」

男の胡散臭い笑顔が、いつそう深くなった。

「お嬢ちゃんは、随分と気が強そうだな。あまり、おいたが過ぎると、大人に叱られるぞ」

「うるさいわね。常識もわきまえないで、無駄に年だけ重ねちゃったやつに、お子様呼ばわりされたくないわよ。あんたの方こそ反省しなさいよ、このおっさんが」

「…おっさ…？」

すると、男の笑顔が、見事に凍りついた。たぶん、普段言われ慣れていないであろうその言葉に、酷く反応している。

私が見たところ、この男は、相当遊んでいそうだ。

態度の節々に、遊びなれた雰囲気があるのだ。自分の顔や、立ち振る舞いが、異性に対して、どんな効果があるのか、十分に把握できている口だ。

私も舐められたものだ。

その胡散臭い笑顔に、舞い上がると思ったら大間違いだ。

私は、この手の軽薄な男が大嫌いなものだから。

「セト、あっち行くわよ。こんな公所良俗に反してるような生き物、相手してられないからね」

こんなの呼ばわりされ、男が、驚きに目を瞬かせる。

と、その時、辺りに、いくつもの馬蹄の音が響き渡った。

私は、セトと一緒にあって木の影に隠れて、その集団をやり過す。

木の影から覗き見れば、馬を走らせているのは、神殿聖騎士の集団だ。嫌味なくらいに白いマントを、颯爽とはためかせている。

馬の後ろ姿を見送り、木の影から出ると、自意識過剰そうな男も、木の影に身を隠していたことに気づいた。

「何よ、人の事、不審者みたいに扱ったときながら、こそこそ隠れたりして……。オジサンの方こそ、不審者なんじゃないの？」

「オジサン」の言葉に、男が、再び反応する。

先ほど、子ども扱いされたことに、腹が立ったので、揶揄してやったのだ。

男は、一瞬呆然とした様子だったが、なかなか図太い神経の持ち主らしい。

すぐにペースを持ち直し、お子様には、大人の色気を理解するのは、まだ無理だったかなと言いながら、再び胡散臭い笑顔を張り付かせた。

「うわ、懲りもせずに、よくその笑顔見せられるわよね。私ダメなの、そういう顔。生理的に受けつけないの」

私の「生理的に受けつけない」のセリフに、男は再び固まった。

しかも、少なからず、ショックを受けた様子も見て取れる。

たぶんこの男は、今まで一度もそんなことを言われたことがないに違いない。

セトが、少しだけ気の毒そうに、男を見ているのが見えた。

4 オジサン

「で、何でついてくるのかな、オジサン」

私は、笑顔など全く見せることなく、無表情のまま男を見上げた。私とセトは、視線の先で、見事なまでの、作り物の笑顔を張り付けているこの変態男に、ストーカーされていた。

「オジサンも、偶然行き先がこっちなんだ」

奇遇だなと、男が続ける。

私は、一度口を引き結び、男を睨み付けた。

そもそも、この気に食わない男の、鼻っ柱をへし折ってやるつもりで、使いはじめた「オジサン」だったが、この男は神経が図太いので、開き直りやがった。

そして、堂々と開き直ったこの男、物凄く面倒なやつだった。

「ふうん、じゃあセト、あっちいこ」

私は、踵を返し、もと来た道を戻りはじめる。

「あ、オジサンも、そっちに行こうかと思っていたんだ」

奇遇だなと笑う。

そんなわけねえだろ。

私は、ギリギリと歯噛みしなくなった。

男は、嫌みなほど整った笑顔を、相も変わらず私に向けていた。ムカつくことに、私が生理的に受けつけないと言ったこの笑顔、こやつは、惜しみなく見せつけてくるのだ。

いい根性してるじゃないか。

私は、反射的に拳を握りしめる。

「ヒトちゃん、どうしたんだ？ 怒っているみたいだけど。そんな顔したら、せつかくの可愛い顔が、だいなしだぞ？」

無駄に色気を振りまきながら、男がわずかに首を傾げて私を見た。まったくもって気障ったらしいやつだ。

私たちはあえて名乗っていないのだが、会話から私たちの名前を拾って、こいつは気安く呼びかけてくる。

私は「ちゃん」付けされることに、物凄く抵抗を覚えていた。

「セト、こいつ気持ち悪い。どうにかして」

私は、セトを見上げながら、男を指さす。

男は、またしても私の発言に、笑顔のまま表情を固まらせた。

きつと、「気持ち悪い」と言われたのはじめてなのだろう。

セトが、再び気の毒そうに男を見た。

「ヒト、それはちょっとあんまりじゃないかな。悪い人にもみえなし、そんなふうには毛嫌いしなくてもいいんじゃない？」

「セト、私、こういう種類の生き物、大嫌いな。虫唾が走るの」

私は、心底嫌そうな表情を浮かべて、男を睨み付ける。

私は、こういう軽そうな男が大嫌いなのだ。セトが、悪い人に見えないというのが、不思議でならない。

こやつは、絶対女の敵だ。私の直感が、そう言っている。

男は、私の「虫唾が走る」発言に、引きつった笑いを浮かべながらも、なんとか持ちこたえた。

「そうそう、セトくんの言う通り、オジサン悪い人じゃないんだよ。ただね、君たち2人が、どんな人間かもわからないのに、この辺に野放しにしておけるような立場でもないんだ」

男は、再び両腕を組んで私を見下ろしてくる。

「で、単刀直入に聞くが、君たちは何者だ？ 神殿に、なんの用がある？」

男は、表情を改め、嘘をつけるものなら、ついってみるとばかりの挑戦的な顔つきで、私たち2人を見てきた。

「黙秘権を行使します」

「黙秘権？」

男が怪訝な表情を浮かべた。きつとトルバディアにはない考え方ののだろうか。

「基本的人権の一つです。私たち人間が、当然に有している権利の

一つです」

「…基本的…人権…？」

男が、再び不思議そうに呟き、瞬きを一つした。と、その時の事だった。

再び、馬蹄の音が聞こえてくる。

私たち3人は、茂みに身を隠し、馬をやり過ごそうとした。しかし、木陰から覗き見て、馬上の人間の姿を捉えると、私は反射的に立ち上がる。

「ヒト」

セトが窘めるように腕を引いたが、私は一步踏み出し、名前を呼んだ。

「ラウシュ！」

馬を走らせていたラウシュは、私の声に、手綱を引く。馬は、前足を持ち上げながら、走るのをやめた。

ラウシュは、私を見つけると、驚いた表情になる。

「お嬢ちゃん、無事だったのか」

「ラウシュこそ無事だったの？」

私が近寄ると、ラウシュは馬から降りた。

目を細め、今までと変わらぬ様子で私の頭を撫でる。その変わらない態度に、私は、内心でちょっと安心していた。

とっさに声をかけてしまったが、よくよく考えると、迂闊だったかもしれない。前回の別れは唐突で、ラウシュには、何の説明もできていなかったのだから。

ラウシュは、ナサレーから、私が間の子である事を聞いていないのだろうか？

何れにせよ、拒絶されなかったことに、思わず安堵のため息を漏らしてしまった。

ラウシュは、私の頭をグリグリと撫でてから、私の背後に居た二人に目を止める。

セトの事は、不思議そうな表情で見えていたが、変態男に目を止め

ると、軽く驚いたように目を開いた。

「どうやら、知っている相手のようだ。」

男が、意地悪そうな笑顔を浮かべて、ラウシュに歩み寄る。

「こいつ、かなりのS気質と見た。」

ラウシュが嫌そうにしているのを見て、楽しそうにしているのだから。

「君は、たしかナサレーの友人だったな。職務を放り投げて、こんなところで何をしている。また謹慎処分になりたいのか」

ラウシュは、面倒な相手に見つかってしまったというような表情で、視線をさまよわせた。

「相変わらず、素直でわかりやすいやつだ。」

私は、助け船を出してあげることにした。

「ラウシュ、こいつ自身も、仕事サボって、こんなところをうろついているんだから、偉そうなこと言わせちゃダメだよ。だいたい、この男、私の事つけまわしてくるんだよ。年甲斐もなく若い女の子を付け狙ったりして、変質者だよ、変質者」

ラウシュが、私の言葉に、ギョツとした表情をした。

男の笑顔が、少しだけ不穏な笑顔に変わった。

「心外だな、私はもうちょっと、おうとつのある、れっきとした女性が好きでね。ヒトちゃんみたいなお子様には、興味はないから安心しなさい」

「じゃあ、その気色悪い笑顔、私に向けないでくれる。視線だけで妊娠させられそうだし。世の女性たちが、皆その気色悪い笑顔を喜ぶと思ったら大間違いなんだからね。あっち行け、変態」

「おい、こら、お嬢ちゃん、よせ」

まったく相変わらずだと言いなから、ラウシュが、慌てて私の口を手で塞ぎ、男を見る。

「申し訳ありませんでした」

男に向かつて詫びた。

「この娘、君の知り合いか？」

ラウシユは、一度考えるように視線をさまよわせてから男を見る。「遠縁にあたる者です。ご無礼をいたしまして、申し訳ありません」

言いながら、私の頭を無理やり押して、下げさせる。

私は、抵抗したが、ラウシユの腕力にはかなわなかった。不本意ながら、頭を下げる格好になる。

男が、目を細めた。

「遠縁ね。ではどこの出身だ」

「それは…」

ラウシユは、再び視線をさまよわせる。とつさの嘘で、そこまで考えていなかったらしい。

よくよく嘘の苦手な男だ。

私は、ラウシユに頭を押さえつけられたまま、チラリと視線だけ上向かせると、変態男と視線が合った。

男は、片方だけ唇を持ち上げ、実に挑戦的な笑顔を見せつけてきたのだった。

この男、ラウシユのわかりやすい嘘などお見通しなのだろう。胡散臭い笑顔を張り付けながら、小ばかにするように、私を見下ろしていた。

いや、もしかしたら、小ばかにするつもりなどなかったかもれない。しかし、私の目にはそう映ったのだ。

そりゃもちろん、ムカつきましたとも。

私は、ラウシユの指を引っ張って、手を口から離してもらおうように訴えた。

しかし、ラウシユは、私を一瞥してから首を横に振る。

どうやら、手を外してくれる気は、ないらしい。

私は、実力行使に移行する。モガモガと喚いて、一生懸命ラウシユの手を外そうと引っ張ったが、ラウシユは絶対にはずしてくれなかった。

腕力ではかなわないことを悟り、仕方がないので、セトを見て、

視線で訴えてみる。

けれども、セトまで「賢明な判断だと思う」と言っつて、首を横に振った。

何故!?

私は、このにやけた男に、一矢報いてやりたいのだ。

この手を離せ!

「ややこしくなるから、おとなしくしておこうね」

セトが、小さく言っつて、私の頭をポンポンと撫でる。

ラウシユは、私とセトのそんなやり取りを、ホツとしたため息とともに、黙っつて見ていた。思わぬ味方の存在に、安堵したといったところだろうか。

男は、これみよがしに、ゆっくりと、私とセトとラウシユを、順番に見ていった。

「素直に話す気はなさそうだな。そうになると、一緒に来てもらうことになるのだが」

いいのか？　と言いながら、片方だけ唇をあげる。

ラウシユは、困った様子で言葉を探した。

「…後で…改めて、必ずお伺いしますので、今はどうかご容赦を」「見逃せと？」

男が、面白そうに片眉をあげる。

ラウシユは、ばつが悪そうな様子で、頭を掻いた。無理を通そうとしている自覚はあるのだろう。

男は、それを見て、意地の悪い笑顔を浮かべる。

「では、交換条件だ。私も一緒に同行させてもらおうか」

男の言葉に、ラウシユが、息を呑んだ。

同時に、私の口を塞ぐ手も緩む。

私は、その隙に、ラウシユの大きな手から逃れ、プハツと新鮮な空気を吸い込んだ。

そのまま見上げると、ラウシユは、明らかに困ったといった表情で固まっていた。

たぶんラウシユも、この男が、ものすごく苦手なのだろう。性格的にも、水と油そうだし、態度が、全てを物語っている。

私もこいつは嫌いだから、その気持ちはよくわかった。

しかし、ラウシユにとっては、ピンチかもしれないが、私にとっては、チャンス到来ではないだろうか？

私は、生ぬるい笑顔を向けながら、ラウシユの背中をポンポンと叩いてやった。

ラウシユが、困った表情のまま、私を見下ろしてくる。

私は、いい笑顔を向けてやった。

「じゃ、そういうわけで、頑張りたまえ」

手をあげて、ラウシユに向かってさよならをする。

ラウシユが「え!？」という顔で私を見てきた。

君という尊い犠牲、絶対に忘れないよ。

ありがとうラウシュ。

私は、極上の笑顔で手を振ったまま、一步後ずさる。こんな面倒なやつ、ラウシュに押し付けておくのが一番だ。男2人で、むさく馴れ合えばいいのだ。

私は、空いている手でセトの手を掴んで、逃げる準備をする。

身体の向きを変えて、猛ダツシュしようとした。

しかし、不意に首根っこを掴まれた。

振り返ると、掴んでいるのは、変態男だ。

「どこに行く気だ。一緒に同行すると言っただろうっ？」

「だから、ラウシュと一緒にすればいいじゃない」

「私は、ヒトちゃんと一緒に行動するつもりなのだが」

その発言に、目を見開いた私に向かって、男は、とびきりにいい作り物の笑顔を向けてきた。

結局、私たちは4人組の集団になってしまった。

私は、仏頂面のまま、そっぽを向いている。

「で、今後何をするつもりなのだ？」

男が、実に楽しそうな顔で、私を見てきた。

なんで、私に聞いてくるのだ。

私は、無性に腹が立った。

ラウシュの方に顔を向ける。

「これからどうしたらよいのでしょうか。ゴシュジンサマ」

棒読みで言った私のその台詞に、ラウシュが、我が耳を疑うというような様子で、私を2度見してきた。

「へえ、ラウシュは、ヒトちゃんのご主人様なのか」

ラウシュ、君はずいぶんと偉かったようだと言いながら、男が笑う。

「そうデスヨ？ ね？ ゴシュジンサマ？」

ラウシュに向かって、笑顔を作って首を傾げてみせる。ただし視

線では、お前が何とかしろとばかりの念を送っていた。

視線の先では、ラウシユが息を呑んでいる。

まったく。アドリブのきかない男だ。

男が、面白そうに、目を輝かせた。

「じゃあ、セトくんは何？」

へ？ セト？

息子って言ったなら怒られるよな。

「弟…かな…？」

セトの機嫌が、一気に悪くなったのがわかった。

やっぱり、弟も駄目だったか！

そうだよな、コクられたのに、弟は、まずいよな。私は冷や汗がでてくる。

でも、じゃあなんて言ったらいいのだ。

まさに、困ったという表情を張り付けて、私はセトを見上げた。

見上げれば、セトがちょうど面白くなさそうに目を細めたところだった。

「そこは疑問形なのか」

やっぱり面白いな、と感心しながら、楽しそうに私を見てくる。

私は、男にムカついた。

今の、一連の流れの、どこに面白さがあったというのだ。喧嘩なら買っし。

もとはといえば、お前が余計なことを聞いてくるから、セトの機嫌が悪くなっただんだからな。責任とれ。

私は、男を睨み付けた。

男は、くつくつと喉を鳴らす。

セトくんも前途多難そうだねと言いながら、男は、苦笑交じりの視線をセトに向けたのだった。

6 不思議な男

結局私は、この得体のしれない男を、どう扱ったらよいのか、わからずにいた。

敵には見えないのだが、仲間というわけでもない。

不思議なことに、何故かセトは気に入ったようだが、私は、全く仲良くしたいとは思えなかった。

男は、私の非友好的な眼差しを、楽しそうに見返しながら、口を開く。

「ヒトちゃん、君は、神殿に忍び込むとしていたのではないのか？」

「黙秘権を行使します」

凶星をさされたが、私は、怯むことなく男を見返す。

「それは、先ほども使っていたな。ずいぶんと面白い権利だな。誰が考えたのだ」

「誰だろうか？」

「そこまでは知らない。」

「知らないのか」

知らぬ間に、顔に出ていたらしい。男は、私が口に出さなくとも、答えを言い当てやがった。

この男に、表情を読まれたことは、なんだか屈辱だった。

私は、男に負けじと、嘘くさい笑顔を張り付けて、武装する。

男は、それを嬉しそうに見返してきた。

この反応には、若干引いた。

こいつ、どうやら、M気質も持ち合わせているようだ。正真正銘の、紛う事なき変態だ。

男は、嬉しそうに目を細めながら、何か勿体つけるように、意味深な視線を寄こしてくる。

「実はね、私は、神殿に忍び込む方法を知っているのだが」

へー、それはまた都合の良い話ですネ。

そんな話に、私が食いつくとも？

というか、さつき黙秘権を使うといっただろうが。

なんで、既に神殿に忍び込もうとしていることが前提で、話を進めているんだ。

「あれ？ 興味が無いのかい？」と、男が、さほど残念でもなさそうに言葉を続ける。

「でも、ラウシユ、君は興味あるよね」

男が、ラウシユを見た。

当のラウシユはと言えば、何だかソワソワしていた。

もしかしなくても、男の安い誘導に、乗りそうになっているのではないだろうか。

お前、こいつの知り合いなんだろう！？

こんな危なっかしい申し出、よくなる気になるな。危険な香りがプンプンしているではないか。

「ちょっと、ラウシユ、まさか、こんな話にのる気じゃないわよね？」

「あれ？ ヒトちゃん、ご主人様にそんな口をきいていいのかい？」

男が、ちゃちゃをいれてくる。

「うっさいわね、ラウシユがゴシユジンサマなわけじゃない。」

本当に面倒なヤツよね。話しかけないでくれる？」

男が、面白そうに肩を揺らした。

惜しいな、せめてあと五つくらい上だったら、私も考えたのだがと男が言う。

その言葉に反応したのは、セトだった。

セトが、男から私を離し、間に自分が立つ。

男が、クスリと笑った。

「心配しなくても大丈夫だ。さすがに、そんな子供に、手なんてださないさ。それに、野暮もしたくない」

どうだか。あんた雑食そうなもの。

取りあえず、性別が女なら、なんでもよさそうだ。

それにしても、野暮？ 何だそれ？

「おや？ 信用していないのかい？」

男が、口だけは不本意そうに言う。

それとも、手を出してほしいのなら、やぶさかではないが言いながら、私が嫌いな、あの気色悪い笑顔を向けてきた。

私は、寒気を覚え、思わずセトにしがみつく。

おかげで、男がセトに向かって、うまくやれよとばかりにウィンクしていたのは、見逃してしまっていた。

私は、不意にセトに頭を撫でられ、見上げる。

「ヒト、せっかくの話だし、聞くだけ聞いてみたら？」

なんですと!？

「セト！ 考え直しなさいよ！ 相手は、ちゃんと選ばないと」

「うん、だから大丈夫だと思うよ？」

セトが、言いながら首を傾げる。

「その自信は、いったいどこからくんのよ。相手はこの節操なし男なのよ。私は断固反対！」

「心外だな、私は節操くらい、ちゃんと持ちあわせているぞ。ヒトちゃんは誤解しているようだが、本当は礼節も守れる、誠実な男なんだ」

「うそつけ！ 絶対、あんた軽薄な女つたらしでしょ！」

セトが、私と男のやりとりを、苦笑しながら見る。

「まあ、ほぼ感なんだけど、強いて言うなら、この人、獣人に偏見を持っていないからかな？」

「え!？」

私とラウシユがハモった。

「どづいうこと？」

セトは、小さく笑って私を見る。

「移転魔法使ったとき、ヒトが荒っぽい移動のしかたしたから、外套が翻っちゃったんだよね。ばっちり尻尾が見えてたみたいだけど、

この人、だからと言って俺の事差別しなかつたろ？」

だからだよと言って、セトが肩を竦める。

「本当に獣人なのか？」

ラウシュが、驚いた顔でセトを見る。

セトは頷きながら、尻尾を見せた。

ラウシュが、再び驚いた表情になる。

「獣人にしては、随分と人間に近い姿をしているな」

ラウシュの視線には、侮蔑の色は含まれていない。純粹に好奇心で言っているようだ。

セトは、小さく笑った。

「俺は、獣人と人間の混血なんだ。だから、ほとんど人間と変わらない容姿なんだと思う」

「可愛いでしょ？」

私がフサフサの尻尾を見ながら、ラウシュに向かって言う。

すると、セトが笑いながら、私の額に口づけてきた。

「ヒトの方が可愛いよ」

ぎゃあ！

何するんだ！？

私は、驚愕に目を見開き、セトを見上げた。

驚いていたのは、何も私ばかりではなかった。ラウシュまでもが目を見開いている。

私は、いたたまれない気持ちになった。

この気まずい空気、いつたいどうしてくれる！？

「……命知らずな…趣味だな」

しばらく黙りこんでいたラウシュが、やがてポツリと呟いた。

ちよつと待て。

命知らずな趣味ってどういうことだ？ そんな表現、はじめて聞いたんだけど。

「ヒトの良さは、俺だけが解ってればいいんだ」

セトは、そう言いながら私を引き寄せ、瞼に口づけてくる。

ぎゃあー!!!

もうやめて!!!

私は、手を突っ張って、セトと距離をとる。

もしかして、もしかしなくても、これが「遠慮しない」「覚悟して」の「一環なのだろうか？

だとしたら、是非遠慮してください。

こんな羞恥プレイする覚悟なんて、できてませんから！

7 誤解

私は、なんだかどつと疲れが押し寄せていた。

目の前を歩く、得体のしれない男の相手をしていたことよりも、セトの行動によってもたらされた、ラウシュの誤解により、疲れさせられたことの方が大きい。

私は、今なら恥ずかしさで死ぬそうなくらいだ。

何故なら、単純男のラウシュのやつが、私とセトが恋人同士だと思っ込んでいるのだ。

違うと言っても、恥ずかしがることはない、妙に大人ぶった態度で諭してきやがる。

誤解を解こうと、必死になればなるほど、照れることはない、とか、物好きがいてよかったなとか、勝手にどンドン突っ走っていくのだ。

この天然男、人の話を聞かない、とんでもなく迷惑なやつだった。その誤解を、変態男が楽しそうにまぜっかえして、さらにややこしく発展させ、セトはといえば、笑顔のまま、絶対に誤解を解こうとはしなかった。

なんでこんなことになってしまったのだ！

私は、もうそのことで頭がいっぱいで、セトやラウシュが、変態男と一緒にあって、神殿に忍び込む算段をつけはじめたことに対して、異をとねえるだけの気力もなくなっていた。

おかげで、今、私たちは、狭苦しい地下水路を歩くことになっているのだ。

水路とは言っても、今では、その存在すら忘れ去られた廃水路のようだ。だから、ここを流れる水もない。

男が言うには、この水路は、神殿に通じているらしいのだ。

昔は、この水路を使って、湖から水を引いていたこともあったよ。うだが、今では、川から別なルートで水を確保しており、もはや使

われていない、かたちだけが残る水路であるそうだ。

岩盤を削られただけの、荒い岩肌の通路を、とぼとぼと私は歩く。変態男が呼び出した光魔法によって、足元は明るい。

この変態男、見かけによらず、腕の立つ魔道士のようだ。

きけば魔道師団をまとめる師団長で、ナサレーの上司でもあるそう。名前をツールと言うらしい。

「ヒトちゃん、どうした？ 元気がないようだな」

一番前を歩く変態男ことツールが、振り向いて私を見る。元気がないと、つまらないと言った。

お前がそれを言うのか。

さつき、ラウシュを焚き付けて、さんざん人の事をからかって、HPを削りまくった張本人のくせに。

お前のよけいな発言が、ラウシュの誤解を深めたんだからな。

「誰かさんのおかげで、私は疲労困憊なの」

「ヒトちゃんが、あまりにも初々しい反応をしてくれるから、オジサンつい悪乗りをしてしまったね」

ニヤリと笑う。

「本っ当にムカつく男ね、あんた」

「そんなに褒められると、照れるな」

全然、褒めてねーよ。

私のこめかみの血管が浮き出てきた。

「ヒト、そんなにカリカリしないで」

すぐ後ろを歩くセトが、私の頭をポンポンと撫でてくる。

「だって、こいつが」

私は振り向いてセトに訴えようとしたが、セトの後ろにいるラウシュの顔を見て、それ以上の言葉を思わず飲み込んでしまった。

だって…。

なんなんだ！ その生ぬるい視線と笑顔は！

違うのに！

またしても、ラウシュの誤解が、暴走しているのが、一目見ただ

けでも分かった。

私とセトを、初々しいカップルでも見るような、おっさんの目つきになっっているのだ。

私は、頭を掻きむしりたい衝動に駆られた。

どうして、そうなるんだ！

ちゃんと人の話を聞け！ 馬鹿ラウシュ！

「ラウシュ、あんた今幾つなの？」

「22だが？」

まだコドモじゃないか。

「そんなに若いくせに、おっさんみたいな顔つきになってるわよ」

「まあ、お嬢ちゃんからしたら、おっさんかもな」

そう言いながら、ラウシュが笑う。

そこ、肯定するところじゃないから。

怒らせようと思ったのに！

いったい、どうやってたら、そのぬるい目つきを、やめてくれるんだ！

「ヒトちゃんは、照れ屋なようだね。ラウシュ、ヒトちゃんは恥ずかしいようだぞ？ あまり二人の事を、ジロジロみてはだめだよ。

君が原因で、ギクシヤクしたら可哀想だろう？」

ラウシュは、トールの言葉に、素直に頷く。

私に、気が利かずに悪かったな、とばかりの視線を向けてくる。

ヤ、メ、ロ！

そんな目で見るな！ 首筋がこそばゆくなる。

おのれ、トール！

お前も、意味のない、ややこしいフォローを入れるんじゃない。ギロリと諸悪の根源を睨み付けてやった。

「ヒトちゃんは、素直で可愛いね」

「あんたに言われると、寒気がするんだけど」

「そうか、ヒトちゃんの好みは、セトくんみたいな人だものね」
ち、が、う！

いや、別にセトが嫌いとか、そういうわけじゃないけど…。
でも、私の好みは、マッチョで、髭の生えた、かわゆいおっさん
なんだ！

ハールマーやカルナス、未来のラウシュみたいなのが、ストライ
クゾーンなんだからな！

ちなみに、お前とは真逆のタイプだ！

私は、猫が毛を逆立てるように、ツールを威嚇していたのだが、
何やら背後から、セトの不穏な気配を感じて、思わず視線を向けて
しまった。

「ヒトの好みは、俺だよな？」

目が合うと、セトがそう言った。

私は、息を吞んでセトを見上げる。

その言葉、否定したら、何が起こるかわからないような表情をし
ていた。

もう、ヤだ！ 誰か助けて！

勘弁して！

私の心の叫びを聞いてくれる者は、どこにもいなかった。

8 地下水路

さっきの質問に、無理やり肯定させられるという、酷い羞恥プレイを受けて、私は、貝になることを心に決めた。

さらに生暖かくなったラウシュの視線と、心底愉快そうに笑っているトールの顔が、物凄く癪に障ったが、私はこれ以上口を開いて墓穴を掘ることだけは避けることにした。

なんだか、胃がキリキリと痛む。

既成事実だけ、着々と作られていくような気がしていた。

静かになった私とは裏腹に、男たちの会話は弾んでいる。

「ラウシュさんには、前にヒトがお世話になったって聞いていていたんだけど」

セトが、言いながらラウシュを見る。

そう言えば、セトにはそんな話をしたような気がする。

「世話？ そう言えば、いっぱいいたような気もするな。何せ、お嬢ちゃんが相手だからな」

おい、そこは普通謙遜するのが常套だろう。なんで肯定するんだ。しかも、私が相手だと、何か問題でもあるというのか、コノヤロ

い。

「へえ、例えばどんな面倒を見たんだ？」

トールが、片眉をあげてラウシュを見る。

「おもに、食事ですね」

「食事？」

怪訝な表情をするトールに比べ、セトはなるほどと頷いていた。

「お嬢ちゃん、こんなちっこいのに、とんでもない大食漢なんですラウシュは、トールには敬語で接している。」

そんな奴に、払う敬意があるなら、私の事は敬い奉れ、コンチクシヨウ。

「ラウシュがそう言うのなら、よっぽど食べるんだな」

「トールが、感心したように言った。」

「俺も、ヒトは、きつと体中が、全部胃袋でできているんだと思う」
ほう、私がそんな面妖な生き物であるか？」

私のことを貶めるのも、大概にしておきたまえ。」

「怒ったの？ ヒト、ごめんね」

セトが、グリグリと頭を撫でてくる。

そんなんで、私が、許すとても？

言いたい放題の男どもに、私は不貞腐れて、そっぽを向いた。

「それにしても、地下にこんな水路があつたとは、驚きですね」

ラウシュがトールに向かって言う。

「そうだな、すでに文献にも残ってはいない、過去の遺物だからな」

おいおい、そんなものを、何で見つけられたんだよお前。

私の、怪訝な眼差しを、トールが見返してきた。

「知りたいか？」

物凄く楽しそうな顔で、トールが私を見る。

知りたいような、知りたくないような。

だって、超Sっぽい顔で聞いてくるんだもの。そりゃ予防線はっ

たつて、当たり前でしょ。

「実は、先だって、王都に出現した魔物を追いかけていて、ここを

見つけたんだ」

へ？ 魔物？

それは、死魔だろうか、それとも魔族だろうか。

たぶん、死魔だよな。

「もう少し先に、とても面白い場所があるんだ」

トールが、人差し指を立てて唇に持っていく。心底楽しげな表情

をしていた。

なんか、あれだ。

イムルードが、しょーもないことを思いついた時の表情に、よく

似ている。

私は、なんだか良くない予感がしてきた。

私は、前世から、この手の種類の奴に、振り回されることが多いのだ。

ブルリと体を震わせる。これは、気を引き締めていかないと、絶対面倒なことになるぞ。

そんな予感を、私はひしひしと感じていた。

しばらく狭い水路を進むと、水路の側面上部が崩落して、ぼつかりと穴が出来上がっていた。

むろん水路は、真っ直ぐ前へと続いている。

しかしトールは、偶然できたその横道へ向かうべく、瓦礫と化した岩に、足をかけはじめた。

「ちよ、ちよっと！　なんでそっちに行くのよ。神殿はそっちなの？　違うわよね」

絶対に黙っていると言う決心を曲げて、私は口を開いた。崩落した岩を登りはじめていたトールが、私を振り返る。

「確かに神殿は向こうだが」

トールは、言いながら正面に続く水路をちらりと見遣る。

「しかし、こつちに、とても興味深いものがあるのだ。寄り道をするだけの価値はあるぞ」

嬉々とした表情で、トールが私を見下ろしてきた。

「なんだか、行ってはいけない予感がビシビシとする。」

「わ、私、ここで待ってる」

真っ青になつて首を振る私に、男3人は、一度顔を見合わせた。

「どうしたんだ、お嬢ちゃん。いつもなら、真っ先に、先頭きつて行きそうなのに」

「ラウシュ、それ誤解だから。私が、目新しいこと、何でも喜ぶと思つたら、大間違いだからね。3人で行ってきなさいよ。私、ここで待ってるから」

私は、水路の端っこに寄って、体育座りをした。

「ヒト、こんなところに、1人でいる方が危ないよ」
セトが、私を覗き込んでくる。

「セト、私行きたくない」

セトを見上げて、必死で言い募った。思わず涙目になる。

セトが、小さく息を呑んだ。

その瞬間、トールが口を開いた。

「この水路、実は出るらしいんだ」

ニヤリと笑いながら、私を見る。

「……………で…でる…？」

思わず聞き返してしまったが、何が？ とは続けたくない気がした。

息をつめて、言葉を失った私を、トールが楽しそうに見る。

「そう、出るんだ。死者の亡れい」

「ぎゃー！！！！」

嫌だ！ 聞きたくない！

私は、ムシクの叫びのように、両耳を塞いで、目の前にいたセトの腹部に、思いつきり頭突きをくらわした。

お化けは嫌いだ！！！！

「行く、一緒に行くから！ 是非とも、連れてってクダサイ！ 置いてかないで！」

トールが、小さく笑う気配がする。

耳を押さえて、ガタガタ震える私を、セトがあやすように背中を撫でた。

「トールさん、あんまりヒトの事、いじめないで。ヒトは、亡者系とかぜんぜんダメなんだから」

セトが怒っているような気配がする。

トールは、肩を竦めたようだった。

「でも、役得しただろ？」

セトが黙り込む。

ラウシユは、お嬢ちゃんにも、意外な弱点があるんだと言った。

悪い？

私は、お化けみたいな、居るんだか、居ないんだか、分かんないよ。ようなあやふやな存在、大嫌いな。

ゾンビだって、死んでるくせに、動いたりして、意味わかんない。ビジュアル的にも、最悪だ。ものすごく気色悪い。

とにかく、お化けなんて、大嫌いなんだ！！！！

9 行方

私は、テンションが急降下したまま、トールの後について、天然の岩穴の、緩やかな傾斜を登っていた。

現在進行形で、この先に、行きたくない病を発症しているところだ。

私は、目の前で、足取りも軽く、岩穴を進む軽薄男の首を、しめてやりたい衝動に駆られていた。

なんでこんなことになっているのだろう。

いったい、何処から選択を間違えてしまったのか。

考えてみると、トールに出会ってしまったことからしてが、そもそも間違いであったに違いない。時間を巻き戻せるのなら、是非巻き戻したいところだ。

そういえば、余計なところに目を奪われていたが、トールとラウシュは、なんであんなところにいたのだろう。

トールが、素直に理由を白状するとも思えないので、手っ取り早い方に、聞いてみることにした。

「ねえ、ラウシュ、なんであんなところにいたの？ 神殿に何か用事でもあったの？」

振り返ると、ラウシュが、一度瞬きをした。

「実は、ナサレーが…」

そう言いながら、トールの方をチラリと見た。

「謹慎中にもかかわらず、ナサレーが急に姿を消してしまったから、君は心配したと言うところなのだろう」

トールも、背後を一度だけ振り返り、片方だけ唇をつりあげる。

「やはりご存知でしたか」

ラウシュは、ばつが悪そうに首を掻いた。視線を私に戻す。

「俺は、比較的早く謹慎も解けたんだが、ナサレーは立场上そうもいかなかったようだな…。本来なら、外をうろついたりすることも

許されないはずなのに、あいつおとなしくしてなくて」

「謹慎で、何やらかしたのよ」

ラウシュが、苦笑を浮かべた。

「セルヴィ監獄に魔物が侵入したと聞いたときに、まさかお嬢ちゃんを、放っていくわけにもいかんから、俺は仕事を放り投げちまっただ。ナサレーは、俺に付き合っただけだ」

私は息をつめた。

つまり2人は、私のせいで謹慎させられたのか。そんな迷惑をかけていたとは、思いもよらなかった。

「ごめんね」

私は、足を止め、うなだれる。

「そんなにしおらしいと、気味が悪いぞ。俺が勝手にしたことだから、そんなに気にするな。それに、俺の場合は、すぐに沙汰も決まって、罰といっても大したことなかったしな」

ラウシュは、そう言って笑った。

「ただ、ナサレーは、ちょっとわけありだな」

ラウシュが、そう言って肩を竦める。

トールがその後を受け取って続けた。

「ナサレーは、今春に副師団長に昇格したばかりだった。にもかかわらず、いきなりの問題行動で、上層部でもうるさいことを言うやつが多かった。あいつは、もともと問題が多いやつだったからな。実力があっても、評価が低かったんだ。あの通りの性格だから、敵も多い。処分も意見が割れて、まだ決定していなかった。本来は、外をうるつくことも許されない軟禁状態にあるはずだった。けれどもナサレーは、監視をかくぐって姿を消した」

ラウシュが、トールの言葉に頷く。

困ったように吐息を漏らし、そのまま、再び私を見る。

「一昨日からナサレーの所在がしれないのだ。最後に会った時に、少しだけイサ様の話をしていたから、もしかしたら、イサ様が何か知っているかもしれないと思って、俺は神殿に行こうとしていたの

だ

「馬鹿正直にも、そうやって真正面から乗り込むつもりだった訳だ」
トールが、やや呆れ気味にラウシュを見た。

「その率直さは、君の美点なのだろうが」
困ったものだなと苦笑する。

「イサ殿は、サヴァン大神官と同様に、雲隠れ中だぞ。まあイサ殿の方は、所在は知れているが。きちんと神殿には、いるようだからな。ただ何をしているのやら…外部には全く漏れ聞こえぬ。正直、気味が悪い。もとより、あの方は、浮世離れというか、人間離れしているのだが、それにしても…」

不自然に黙り込んだトールの言葉に、ラウシュが、神妙な顔で頷いていた。

「俺も、あの方は少々苦手だ」

ラウシュが、キュツと眉根を寄せながら言う。

ラウシュの様な男が、そんなふうにするのだから、相当の変わり者？ なのだろう。

「ところで、イサって誰？」

「ナサレーの師だ。俺と同じ、ただの下級貴族にすぎなかったナサレーの素質を見出し、一流の魔道士に育て上げた方だ」

「じゃあ、魔道士なんだ」

「いや、立場上は神官だな。アウル神殿に仕える、高位の神官だ」
神官ねえ。周りにそんな人種はいなかったから、どんな人なのか、ちよつと想像がつかない。

トールのように、人間の裏側を読むことに長けていそうな者でも、得体がしれないというのだから、そうとう癖のある人物なのではないだろうか。

まあ、百聞は一見にしかずと言う。何れ、会う機会でもあれば、どんな人物かわかるだろう。

しかし、ナサレーが行方知れずとは、知らなかった。無事であればよいと、心から思っていた。

最悪な別れ方をしているので、正直なところを言えば、会うのは怖い。

ラウシュも、私が間の子であることを知れば、この態度は変わってしまうのではないだろうか？

そう思うと、なんだか寂しかった。

そして、ラウシュに隠し事をしていると言う事実にも、後ろめたさを感じていた。

もし、ナサレーの無事が確認できたら、ラウシュにはきちんと話そう。

私は、心にそう決めた。

少しだけ、意識を思考の淵にとぼしていたところ、不意にトールに呼び戻された。

「着いたぞ」

言いながら、トールが、目前になって急に角度の増した岩穴を登りきる。

続いて、私も穴の最上部から顔を出すと、そこには、天然の大空間が広がっていた。

豊かな水音が耳に飛び込み、ヒンヤリと冷たい湿った空気が頬を撫でる。

視線の先に広がる、その景色のあまりの美しさに、私は、しばしの間言葉を失ったのだった。

目の前には、巨大な洞窟ドームが広がっていた。

天井がとても高い。おそらく、5、60ガズド（1ガズド＝1？）くらいは余裕にあるのではないだろうか。

天上の裂け目からは、滝が流れ落ち、滝壺は巨大な地底湖になっている。

水しぶきが、きりのように舞い、幽玄な世界を演出していた。

「どうだ？ 気にいったか？」

口を開けて、呆然と見上げていた私に、トールが声をかけてくる。私は、素直に頷いた。

感想は、ただすごいの一言だ。

ぐるりと見回した天然のドームの広さは、直径100ガズド近くはあるのではなからうか。

豊かに流れ落ちる水音が、ワンワンとこだまし、湿気を帯びた、冷たく心地よい空気が、辺りを満たしている。

「すごいね」

セトも呆然と天井を見上げた。ラウシュも同じだ。

3人の反応を、トールが満足そうに見ていた。

「偶然見つけたのだが、私も最初は驚いた。でも、ここは、これだけではないんだ。もっと面白いものがあるのだ」

そう言つて、トールが、再び悪戯そうな表情を浮かべた。

トールが、滝のそばにより、滝の裏側の滝壺を指さす。

はじめは、水しぶきの影になって、よく見えなかったのだが、よくみる、とそこにはありえない現象がおきていた。

地底湖の湖面に、何故か丸い穴が開いているのだ。

湖面が、その部分だけえぐり取られ、底のしれない深い縦穴が存在している。

水面に穴ができているなんて、正直な感想を言えば、気味が悪か

った。

「何…これ…？」

「面白いだろう？」

トールが片方だけ唇をあげる。

その声に答えたのはセトだった。

「俺…この穴知ってる。前に、ナンと一緒に、ウィルナで見たのと一緒にだ。あの時は、穴の中から、色々とでてきてたけど…。これ、界の亀裂とかいうやつだよ」

セトが私を見て、呆然と呟いた。

その声に、私は息を呑む。

「界の亀裂？」

ラウシュが、怪訝そうに訊き返した。

しかし、私とセトは、答えをかえすことはできなかった。

私は、一気に、現実を引き戻されたような気がしていた。

こんな場所にまで、こんなものができているのだ。もはや猶予はないのではないだろうか。

「ヒトちゃん、そんな顔をしてどうした？」

トールが、私の顔を覗き込んでくれたが、私は顔を真っ青にして、ただ穴を見つめることしかできなかった。

その様子を見て、トールが、まいったなと呟きながら小さく息を吐く。

「大丈夫だ。この穴は、ちゃんと塞いであるからな」

トールが、困ったような表情で、私の頭に手を置いてきた。

私は、トールを見上げる。

「…塞いで…あるの？ あれで？」

トールが、大丈夫だと頷きながら苦笑した。

「そんなに怖がらせるつもりはなかったんだが…。本当は、もうちょっとからかってみようかと思っていたのだが、これしきでこんなに怖がるようでは、それもできないな」

そう言いながら、トールは、仕方がないとばかりに、諦めたよう

に自分の髪をかき上げる。

「何よ、あんた、これ以上まだ私の事おちよくるつもりだったの？」

トールが、楽しみに眼を細めた。

「ヒトちゃんの反応が、あまりにも可愛いから、つい苛めたくなくてしまったな」

このクソオヤジ、いい加減にしろヨ。

私は、額に青筋を浮かべながら、笑顔になってない笑顔を向ける。するとトールが、普通の女性ならば、うっとりするであろう曇惑的な笑顔を浮かべ返してきた。

「ヒトちゃん、ラウシユのところなんて辞めて、うちにこないか？ 破格の待遇で雇ってあげるぞ」

ヒトちゃんのご主人様やったら、とても面白そうだと囁きながら、色気たつぷりにトールが私の頬を撫でてきた。

瞬時に、私の背中を悪寒が這いのぼった。

その刹那。

「トールさん」

セトが、物凄く低い声でトールの名を呼んだ。

トールは、悪びれる様子もなく、視線をセトに向けると、ニヤリと笑う。

「冗談だよ、冗談」

そう言いながら、肩を竦める。

「トールさん、今のは、冗談に見えないよ」

セトが、私の腕を引いて、トールから引き離す。

「ヒト、もうトールさんに近づいちゃダメだからね」

覗き込むようにしてされたセトの注意喚起に、私は大きく頷いた。もとより、言われるまでもないことだ。

まったくもって、油断も隙もない男だ。

乙女の肌に、気安く触るんじゃない。このへ、ン、タ、イ、が！ 私は、三白眼になって、トールを威嚇しはじめると、その時の事だった。

「おい、あれは何だ？」

ラウシュが、訝しむような声を上げた。

私たち3人は、一斉にラウシュを振り返り、ラウシュが呆然と見つめる視線の先を辿っていく。

すると視線の先では、界の亀裂と呼ばれる穴が、ゆらゆらと歪み、そのかたちを変えはじめていた。

すると、突如穴の上に魔法円が浮かび上がる。

穴の上に重ねられていたその円も、歪むのに合わせてうねり、軋みを上げはじめた。

トールが、すぐさま同じ魔法円を呼び出し、穴を塞いでいた結界を補強しはじめる。

しかし、穴の内側から、何かが結界を突き上げ、破ろうとはじめた。

私も同じ魔法円を呼び出し、トールの援護を開始した。

11 紫色の死魔

「見ただけで、術式を再現できるのか」

トールが、驚いた表情で私を見る。

確かに、この魔法円は、見たこともない術式だ。

「今は、そんなこと、どうでもいいじゃない。集中しなさいよ」

私の言葉に、まったく、規格外のお嬢さんだと言いながら、トールが苦笑した。

私とトールとで、結界を補強しようとしているが、内側から放出される力が強すぎる。

少しでも気を抜くと、今にも何かがあふれ出し、結界が破れてしまいそうなほどだ。

しかも、結界が不安定に動くため、補強しようにも、魔法円がずれてうまくいかない。円がきちんと重ならないのだ。

穴の歪みに触発されて、地底湖の湖面も、大きくうねりはじめる。透明だった水が、濁りはじめていた。海のように波立ちはじめた水が、水底の砂利や泥を巻き上げているのだ。

不意に、湖面に開いていた穴が、大きくなったような気がした。

「トール！ 穴が広がってない？」

トールが、目を眇めながら、小さく頷く。

やっぱり、錯覚ではないのか。穴は広がっているのだ。

「どうすんのよこれ」

「ま、なんとかなるさ」

うわ、何それ、超適当じゃん。

でも、おかげで、ちょっとだけ肩の力も抜けた。なんとかかなりそうな気もしてくるから不思議だ。

トールが、悪戯そうな表情を浮かべて、片方だけ唇を持ち上げる。「ねえ、ヒトちゃん、これがうまくいったら、ご褒美をくれないか

？」

急に甘ったるい声で言ってきた。

「絶対にやだ」

私が即答すると、トールがまたしても嬉しそうに笑う。こいつは、そつとうのMだ。

「困ったな、それによつて、やる気の出かたがずいぶん違うのだが」

「そんなことで、やる気を左右されるんじゃない」

若干引き気味に、私は言いかえす。

「トールさん、ご褒美なら、俺があげようか？」

セトが、冷たい笑顔を浮かべながら、トールに圧力をかけた。

トールが、楽しそうにチラリとセトを見る。

「セトくんに口づけしてもらっても、嬉しくもなんともないさ。やっぱり、可憐な女の子にしてもらうから、やる気もでるのだよ」

その言葉に、セトの表情が、ビシリと固まった。

トールはと言えば、ただただ楽しそうだ。

私の背筋を、冷たい汗が流れ落ちた。

たまにしているんだよな、こんなふうには、人様を引つ掻き回して楽しめるやつ。

まったくもつて、こんな状況で、セトの事までおちよくるこいつの気がしれない。

「トール師団長。まじめにやってください」

ラウシュが、たまりかねた様子で声を上げた。

「そうよ、まじめにやんなさいよ。それから、あんたに口づけなんて、死んでもイヤだからね」

「そこまで嫌われると、逆に燃えてくるのだが。ヒトちゃんは、男心がわかっていないな」

ニヤリとトールが笑う。

「はあ！？ 何が男心よ。あんたが、ただ変態なだけでしょ！？ 嫌われると燃えるなんて、ほんとにやっかいなやつね」

私の声に、トールが心底楽しそうに笑ってから、手を重ねあわせ

た。

「まあ見ていなさい、きつと惚れなおして、その気になるから」

口では軽口を叩いていたが、トールが、急に真面目な表情になる。トールの手の先の魔法円が、一際輝きを増した。

不安定に波打ち揺れる結界に、トールが、魔法円をゆっくりと重ねていく。

慎重に、ゆっくりと重ねられた魔法円が、やがてピタリと合わさるかにみえた。

しかし、その時のことだった。

『おかしいと思ったら、また貴様か。人間ごときが何をしておる。いらぬ邪魔立てをするな』

その声に、ラウシュとセトがすぐさま抜刀する。

声の方に視線を向けると、紫色の髪をした男が、トールを睨み付けていた。

「なんだ、まだ生きていたのか。意外にしぶといな」

トールが、片方だけ唇をつりあげる。

「ちよつとトール、あれ、知り合い？」

「さきほど話しただろう。魔物を追いかけて、ここを見つけたと。あれがその魔物だ」

魔物ね。確かにあれは上級の死魔だ。

「ヒトちゃん、少しの間、ここを任せても大丈夫か？」

トールの目は、すでに紫色の死魔に向けられている。

新しいおもちゃを見つけたことを楽しむようなその眼差しが、全てを物語っていた。

「まったく、ダメって言ったって、どうせ言うことなんて聞かないでしょ。早くいきなさいよ。ここは、私がなんとかするから」

「すぐに片付けてくるから、少しだけ頼んだぞ。あとでご褒美をあげるからな」

「いらないわよー！」

紫色の男が、魔法円を呼び出しはじめる。

トールがそれに応戦するように魔法円を呼び出した。

その刹那、円から放たれた二つの炎がぶつかり合い、物凄い衝撃波が生まれる。

私は、その風圧に飛ばされないように、必死で足を踏ん張る。

そしてセトは、小石を巻き上げながら吹き渡る突風から、私を守るように立っていた。

12 召喚魔法

紫色の死魔が、魔法円を呼び出しはじめた。召喚魔法である。

円が大地に横たわり、中央から、無数の死魔が飛び出しはじめた。死魔たちは、真つ先に私に向かって飛びかかってくる。

私は、手を離すことはできないので、無防備な状態だったが、セトとラウシュが、飛びかかってくる死魔を切り伏せた。

紫色の死魔が呼び出した魔法円は、大地に固定され、そのまま死魔がどんとあふれ出してくる。

トールが、界の亀裂に被せてあったものと同じ魔法円を呼び出し、その魔法円を重ねた。おかげで、ようやく死魔の出現が止まる。

しかし、すでにあふれ出ていた死魔の数は、ものすごい数だ。セトとラウシュが、なんとかその数を減らしているが、個別に斃しているのは、きりがなほどの量だ。

紫色の死魔が、炎の魔法円を呼び出しはじめた。炎の魔法円だ。

『小賢しい人間だな、道化師風情が。あの結果も、貴様の仕業というわけか』

紫色の死魔が、トールを睨み付ける。

トールは、人を食ったような表情で、無効化の魔法円を呼び出しはじめた。

「何だ？ この魔法円を、褒めているのか？」

トールが、チラリと召喚魔法を重ねた魔法円を見る。

「これは、私が改良を重ねて作り出した術式だからな。そう簡単には破れぬように細工してある。お前たち魔物のような、力で押し切るばかりの、野蛮なやつらには真似できない、繊細な芸術作品だ。

ま、少々風変わりな、愛らしいお嬢さんは、例外だったが」

トールは、古代語を理解できているわけではなさそうだが、存外的外れでもないことを言いながら、呼び出した無効化の魔法円を前方に固定し、紫色の死魔の炎を防ぐ。

すぐに、別な円を呼び出しはじめた。今度は召喚魔法だ。

私は、それを見て、青ざめた。

「ちよつと、トール！ 何考えてんのよ！ あんたいい加減にしないよ！ 私、それ苦手だって、さつき教えたばかりじゃない！ やめてよ！」

「大丈夫だ。噛みついたりはない。それに、ちゃんとヒトちゃんのこと守らせるから。魔物の数がすごいから、減らしておかないと、ラウシュたちが大変だろう」

違う！ そういう問題じゃない！

私は、ソイツを見るのもいやなんだ！

「トール、あんた殴るわよ」

「ヒトちゃんになら、殴られてもかまわんぞ」

「……………あんたと会話すると、いちいちイラつくのよ。耳の穴かっぽじって、よおっく聞きなさいよ。私は、あんたが今呼び出そうとしている物体を、見たくないの！ 違う魔法に変えてよ！」

「そんなに嫌がられると、かえって呼び出してみたくするのが男心だ」

何が男心だ！ お前の根性がねじ曲がってるだけだろうが！

「トール、それ呼び出したら、ガタガタいわすからね」

「ヒトちゃんになら、ガタガタいわされてもかまわんぞ」

トールがニヤリと唇を吊り上げた。

こいつ、マジだ。

本気で呼び出す気だ。

私の顔面は、蒼白を通り越し、白くなってきた。

「俺は、今、緊張の糸が途切れそうになってきた」

ラウシュが、剣を振るいながら、疲れたように言う。

「トールさんて、ヒトの言う通り、本当の変態だね」

「お褒めに与かり、光栄だ」

セトの言葉に、トールが笑顔を浮かべる。

止めていた動作を開始し、トールが召喚魔法の術式を完成させた。

ひー！ ついにやってくれたよ！ この男！

私は声にならない悲鳴をあげた。

魔法円が大地に横たわり、周囲の地面が黒く変色していく。黒く変色した地面から、例の物体がよきによきと現われはじめた。

デたっ！

私が大っ嫌いな、言葉にするのもおぞましい、ゾからはじまる、三文字の物体だ。

ゾワゾワと鳥肌が立ってくる。

返す返すもムカつく男だ。

この馬鹿男、いったいどうしてくれよう。

もうこれは、私の中の呪ってやるリストの頂点に、こいつの名前を書き加えてやるしかない！

死にさらせ、馬鹿ツールが！

気色悪いモノが、周りいっぱいにあふれかえり、私は気が遠くなりはじめた。

「ヒト、大丈夫だから。しっかりして」

思わず現実逃避しそうになる私を、死魔を切り伏せながら、セトが叱咤する。

そうだ、ここで気絶してるわけにはいかないのだ。

この目の前の亀裂の中身は、ぜったい良くないものであることは、本能が悟っている。何が何でも、穴は塞がねばならない。

私は、自分を落ち着かせようと、深呼吸した。

極力視界が周りにいかないように心掛けながら、穴を塞ぐ魔法円に集中する。

あとで覚えている。馬鹿ツール。

恐怖を怒りに変えて、私は、同じ魔法円を呼び出す。

ツールを真似て、ゆっくりと魔法円を重ねはじめた。

あの軽薄男にできて、私にできないはずがない。プライドにかけて、私は、慎重に補強をはじめた。

それにしても、不安定に揺れる円を、ピタリと合わせるのは至難の業だ。こんな細かい作業を、あの変態男が良くできたものだと感心してしまうほどだ。

私は歯を食いしばって、針の穴に糸を通すような作業を続ける。穴の底から、湧き上がるような昏い気配を感じながら、必死で魔法円に意識を集中していた。

と、その時のことだった。

暗く深い穴の奥底に、何かが、かすかに見えたような気がした。刹那、穴の底から暗い影が這いのぼるような気配がする。

目には見えない何かが、体の周囲にまとわりついたような感じがした。

瞬時に、体中の産毛が逆立つような不快感を覚える。急に五感が鈍くなった。

耳の中に飛び込んできていた水音が聞こえなくなり、視界も奪われる。

ひんやりと心地よかった、洞窟内の冷たい気配も感じられなくなり、体の動きも自由にならなくなる。

まるで、自分の体ではなくなってしまったかのような錯覚に陥った。

ふと遠くで、誰か私を呼ぶのを聞いたような気がした。

しかし、私の意識は何か引きずられ、穴の奥底へと沈んでいくのを感じていた。

ここはどこだ。私は、いったいどこにいるというのだろう。

私は、呆然と立ち尽くす。

いや、私には、立ち尽くすことしかできなかったのだ。

何故なら、身体が、全くいうことをきいてくれないのだから。

歩こうにも、足が動かない。それどころか、指一本すら動かすことができないのだ。

自分の体が、思うままにならぬもどかしさを感じながら、私はただ立ち尽くす。

辺りは、漆黒の闇だ。

周囲には、なんの気配もない。

セトは、どこに行ったのだろう。

声を出して、名を呼びたくとも、声すらも出せない。

ラウシュは？ トールは？

みんな、どこに行ってしまったのだ？

心の中には、不安が、澱のように凝っている。

ふと、立ち尽くす足元から、冷たい気配が、じわじわと這いのぼってくるような感触がはじめた。

ゾワリと背中を冷たいものが這いのぼる。

私は、足元に纏わりつく得体のしれないその感触に、恐怖感を覚えていた。

足元から、身体を、ゆっくりと蝕んでいくのは、明確な悪意だ。

目にも見えそうな、濃密な負の気配が、体を這いのぼり、どんどんと浸食してゆく。

無理やり注がれていく悪意に、私は、吐き気を覚えはじめていた。

不意に、脳裏に一つの情景が浮かび上がってきた。

赤ん坊を抱いた、どこか幼さの残る若い女性の姿だ。

女性の前には、無表情な男の姿が見える。私はこの男を知ってい

た。今よりもずっと若い頃の、レツエンの姿だ。

ということは、あの赤ん坊は私で、女性はサリエに違いない。

不意に、サリエが体を反転させ、赤ん坊を守るように抱き込む。

その華奢な背中に、レツエンが剣を振り下ろした。赤い鮮血が周囲に飛び散る。

ドクンと耳の内側で、鼓動が大きく跳ねた。

景色が不意に変わる。

そこには、幼いセトと、私の姿が見えた。

目の前にいた大男が、何かをわめきながら、セトに向かって食べ物投げつけている。

これは、今でもよく覚えている。

プルシャーラで買い物をした時に、はじめて立ち寄った店の店主が、獣人に売るものなどないと言いながら、めぐんでやるからとつと消えると言って、食べ物投げつけてきた時の場面だ。

ドクンと、再び耳の内側で、鼓動が大きく跳ねた。

また、景色が変わる。

今度は、今と変わらない私と、セトの姿が見えた。

頭の禿げた宿屋の主人が、セトと私を、侮蔑を込めた目で見ながら、何かを言っている。

これも、よく覚えている。

はじめてプルシャーラの外に出た時に、宿屋に泊ろうとしたら、馬小屋なら空いているといわれたあの時の場面だ。

ドクンと、再び耳の内側で、鼓動が大きく跳ねた。

次々に、景色が浮かんでは、唐突に変わってゆく。

その景色の全てが、かつての私が、負の感情を抱いた場面ばかりだ。

鼓動が激しく脈打ち、後から後から嫌な感情があふれ出してくる。自分の中に、こんなにも醜い感情が巣食っていたのかと、恐れを抱くほどの怨嗟の念だ。

押しとどめようとしても、どんどんと身体の内側から、無理やり

負の感情が引きずり出されていく。

少しでも気を抜けば、その激情の奔流に、飲み込まれてしまいうだ。

私は、必死で理性を繋ぎ止める。

こんな汚い感情に、流されるわけにはいかなかった。

耳の奥では、警鐘が鳴りつづけている。

不意に、脳裏に、見たことのない情景が映った。

どこかの室内に、数人の男たちがいる場面だ。

中央にいる若い男には、見覚えがあった。たぶんあれは、若き日のカルナスではないだろうか。どことなく面影が残っている。

若き日のカルナスは、およそ彼に不似合いな、苦悩に満ちた表情をしていた。

カルナスは、何度も躊躇いながら、手の中にある小刀を握りなす。カルナスの背後では、知らぬ男が、何かをわめいているようだった。

目の前には、生まれたばかりの赤ん坊が、元気な鳴き声をあげている。

苦悩に満ちた表情で、カルナスがおもむろに小刀を持ち上げた。

まさか、と我が目を疑わずにおられなかった。

カルナスは、ギョツと目を瞑り、その刃を、今にも赤ん坊に向けて、振り下ろそうとしていた。

この後に起こるであろう出来事を想像して、体中に戦慄が走る。

そんなむごい場面など、見たくはなかった。

けれども、目を閉じたところで、強制的に脳裏に浮かんでくる情景から、目を背けることなどできはしない。

私は、凄惨な場面のすべてを見てしまっていた。

カルナスが、無抵抗の小さな命を奪う瞬間も。

血にまみれ、無残にも事切れた、小さな背中であつた、自分と同じ痣の存在すらも。

私は、呆然と、ただ立ち尽くした。

無防備になった心に、悪意が流れ込んでくるのを、止めることなどではしなかった。

私には、もう、抗う術など何もなかった。

カルナスが、本当に赤ん坊の命を奪ったのかどうか、今の私に、確かめる術はない。

だが、おそらくこれが、真実なのだろう。私の直感がそう告げていた。

現実が起こった数々の不条理を、改めて突き付けられ、私は、言いようのない怒りを覚える。

私も、本来なら、レツエンの手によって、殺されるはずだったのではないだろうか。

たまたま運に恵まれた故、自分は、のうのうと、こうして生き延びることができているが、一歩間違えば、私自身も、あの赤ん坊と同じ運命をたどっていたに違いないのだ。

今までは、自分だけの身の上で起きている出来事としか認識していなかったが、もし、今までずっと、この痣を持つ赤ん坊が、こうして殺されてきていたのだとしたら……。

そう思い至った時に、激しい怒りを感じた。

自分でも律することのできないほどの、激しい憎悪だ。

何故、あんな小さな命が、惨たらしく奪われなければならなかったのだろうか。

ただ痣があるということが、死につながるほどの罪になるというのだろうか。

この痣が、いったいなんだと言うのだ。どんな意味を持つと言うのだ。

私も、あの赤ん坊も、好きで痣を持って生まれてきたわけではない。偶然痣を持って生まれただけに過ぎないのだ。

それだけで、何故殺されねばならないのだ。

この痣を持つことは、そんなにも罪なのか。

セトだってそうだ。ただ獣人という、違う大陸固有の種族と言う

だけで、そこには何の罪もない。にもかかわらず、いわれのない差別を受け続けている。

私や、赤ん坊、そしてセトに、いったい何の罪があると言っただ。偶然生まれついた私たちを、いったい誰が、悪と決めつけたのだ。言い知れぬ怒りが、どんとどんと湧き上がり、負の感情が体中を支配してゆく。

耳の奥で、激しく鳴り響く鼓動に合わせ、体の奥底から何かが湧き出てくるような気配がしていた。

それは純粹な力だ。

ただ怒りに支配された、純粹な力の塊。

腹の奥底から、どんとどんと引きずり出されるその激情を、私は怒りにまかせて解放しようとしていた。

その刹那。

私は、羽の音を聞いた。

大きな鳥が、羽ばたくような音だ。

私の意識は、一瞬だけその羽音に向かう。

その気配に、そして羽音に、かつてどこかで聞いたことがあるような、会ったことがあるような、そんな懐かしさに似た何かを、私は感じていた。

未だ、体の奥底には、爆発寸前の、怒りの炎が燻っている。自分でも御しきれないほどの、怒りの奔流だ。

ひとたび流れ出せば、きつと押しとどめることなどできはしない。今にも決壊してしまいそうな、危うい均衡を保ちながら、私は、必死で理性を手繰り寄せる。

心の中は、千々に乱れ、息苦しさすら覚えていた。

私は、今にも火を噴きだしそうな火種を内に抱え、せめぎ合う心を持ってあます。

再び、羽音が目の前を横切った。

私の意識は、ほんの瞬きほどの時間だけ、その羽音に向かう。

横切るその瞬間、見えたのは、一對の青い目だ。

穏やかなその眼差しに、一瞬だけ私は目を奪われた。

ふと気が付くと、爆発寸前だった激情は、少しだけ落ち着きをとりもどしていた。

私は目を閉じて、浅い呼吸を繰り返す。

痛いほどに脈打っていた鼓動も、少しだけ間隔をあけはじめた。

徐々に思考回路が回復してくる。

いったい、何が起こっているというのだろうか。

ぼんやりとした頭は、うまく働かない。

分かっているのは、およそ自分らしくない激しい怒りに支配され、突然我を忘れそうになっていたということ。

通り過ぎた過去が、何故か急に、いくつも鮮やかに蘇り、忘れていたはずの怒りの炎を、誰かが無理やり灯すのだ。

そう、あれは、故意に怒りを増幅させられていた。

いったい誰が？ 何のために？

いまだ霞んで、うまく働かない頭で、必死に答えを探す。

すると再び、何かが足元で蠢きはじめた。

腹の奥底まで冷えるような、冷たい悪意が、再び体を這いのぼりはじめる。

私は、瞬時に、恐怖感を覚えていた。

このままでは、私は、また怒りに我を忘れてしまう。

私の中には、まだ、怒りの炎が、確かに燻っているのだから。

この火種を灯すのは容易いはずだ。

あの抗いがたい激情の渦に飲み込まれ、私は流されずにいられるだろうか。

答えは否。

きつと、この次は、無理に違いない。

怒りの火種を抱えている今、この瞬間すら、かろうじて危うい均衡を保っているに過ぎないのだ。

もうひとたび、怒りを呼び起こされ、思いを揺さぶられれば、私は容易く折れてしまうことだろう。

それは確信だ。

もしあの激情に身を任せたら、いったいどうなるというのかわからない。

私は、ただ怖くてしかたなかった。

今すぐにでも、私が、私でなくなってしまうようで。

足元を這いのぼる悪意に触発され、私の中の負の感情は、はやくもざわめきだす。

私は、思い通りにならない頭を振って、自らの過去を必死で思い返していた。

確かに私は、レツエンに殺されそうになった。

けれども、結局レツエンは、私を殺さなかったし、瀕死のサリエのことも、捨て置かず、連れ帰った。クイナの話からも、サリエがきちんと甲われていることを聞いている。

私は、あの時、何があったのか、まだ確かな真実を知らないのだ。憶測だけで、全てを判断してはいけなはずだ。

子供の頃の、プルシャーラでの買い物のことだってそうだ。確か

に酷いことをされたと思うし、あの時は、相当腹も立った。

でも私は、すぐさま投げつけられた食べ物、そっくりそのままあの店主に投げ返してやったし、しかもその後、ハールマーが報復してくれたらしいのだ。

店主は、その後、私たちの姿を見ただけでも逃げ出すほど、怯えきっていた。ハールマーが、どれだけ懲らしめてくれたのが、それだけで知れよう。

馬小屋発言をした宿屋の主人にしても、私は倍以上言いかえした上に、捨て台詞も吐いてやった。

それに、あの後すぐに、フォルムに会って、獣人を差別する人間ばかりじゃないことを、改めて知ることができて、心も温まった。

悪いことばかりではなかった。

むしろ悪いことの後には、かならずいいことが待っていた。

禍福は糾える縄のごとしとは、よく言ったものだ。

たとえ悪いことが起きたとしても、最後には、人生捨てたもんじやないと、いつだって必ず笑顔になれた。

今なら断言できる。私が、この世界で経験してきたことは、よいことの方が多かったのだと。

出会ってきた皆の顔を思い浮かべれば、それだけで、じわりと温かいものがこみ上げてくる。

そう、これは、愛しさだ。

ポツと温かい、穏やかな気持ちだ。

私は、この思いを手放したくはない。

私はこの優しい気持ちを抱いたまま、皆に会いたいのだ。

早く皆の無事な姿が見たい。

皆の笑顔が見たい。

そして私も、皆のそばで笑っていたい。

怒りのような醜い感情に、支配されたくはないのだ。

そんな感情を抱いたままでは、皆と真正面から会うことなどできはしない。

私は、歪められることなく、私のままでいたのだ。
バサリと、再び羽音が聞こえる。

遠のきはじめてた羽音に向かって、私は、無意識に手を伸ばしていた。

思うように動かない体が、ただもどかしい。

あの羽音さえ聞いていれば、自分を見失わずに済むかもしれない。
何の確証もないことだが、そのかすかな希望を、今、見失うわけにはいかなかった。

ままならない体を、なんとか動かし、手を伸ばす。

不意に、その手を握られる感触がした。

大きくて、温かい手だ。

この心地よい温かさを、私は確かに知っていた。

はるか遠くで、かすかな声がする。

何度も、何度も、名を呼ばれているような気がしていた。

力強く握る手が、昏い孤独から救ってくれる。

もう、羽音は聞こえない。

でも、手の温かさが、この暗闇の中でも、確かに私を繋ぎ止めてくれていた。

不意に、纏わりついていたら、負の気配が弱まった気がした。

私を、絡め取ろうと、躍起になっていた、暗い気配が遠のきはじめる。

意識が、浮上してゆくのを感じた。

ただ暗かった、漆黒の世界に、小さな光が差し込む。

私の意識は、その光の方へと向かいはじめていた。

15 つながる記憶

私は、昏い空間を逃げ出すように浮上し、明るいほうをめざして
いるはずだった。

しかし、突如として、再び脳裏に見知らぬ場面が浮かび上がって
くる。

それが夢なのか、はたまたうつつなのか、私には、判断がつか
なかった。

頭の中には、見たこともない景色が広がっている。

空は、見事なまでの青空が広がり、そこには、雲一つない。

地上には、白や黄色、赤や桃色の、色とりどりの花が咲き乱れ、
花の周りを、蝶が舞っている。

凪いだ湖が、静かに漣を立て、吹き渡る穏やかな風が、花を小さ
くそよがせていた。

湖の岸辺には、美しい男女の姿が見える。

男は、頭上に広がる青空に良く似た、澄んだ青い目を細めて、愛
しげに女性を見ていた。

女性の腹部は、緩やかに丸みを帯び、子を宿していることが、一
目で知れる。

2人の手は、女性の腹部をゆっくりと撫で、子供の誕生を待ちわ
びている様子だった。

2人が寄り添うその様子は、とても幸せそうで、見ている私さえ
もが、ポカポカと温かい気持ちになる。

不意に景色が変わる。

今度は、青い目の男が一人で湖畔に佇んでいた。

急に場面が変わるのは、先ほどと一緒の現象だ。

もしかしたら、これは、誰かの過去なのかもしれない。

心に沁みてくる感情は、先ほどまでとは真逆の、切なさすら覚え
るほど、穏やかなものであるが。

今度は、何故、こんな場面を見せられているのだろう。
私には、その意図が知れないのだった。

湖畔に佇む男のそばに、別な男が歩み寄ってきた。

刃物のように冷たい印象の、鋭い灰色の目をした男だ。

灰色の目をした男は、青い目の男の姿を見つけると、それまでの
近寄りがたいほどの鋭さが、まるで嘘であったかのような、穏やか
な眼差しに変わる。

青い男のそばに近寄り、膝を折って、男に首を垂れる。

青い目の男に、何か言葉をかけられると、嬉しそうに青い目の男
を見上げ返し、頷いていた。

場面が、再び変わる。

そこには、青い目の男と、産み月になったであろう女性の姿があ
った。

今度は、2人の顔に、笑顔はない。

女性の目には涙が浮かんでいた。

青い目の男が、自分の指に嵌めていた指輪を抜き、女性の手を取
って、そこに乗せる。

女性が、指輪を握りしめ、さめざめと泣いた。

青い目の男が、女性を抱き寄せ、大事そうに腕に閉じ込める。

男の表情は、何か重大な覚悟を決め終えたような、晴々とした顔
をしていた。

自らにすぎりつき、泣き続ける女性の顎に手をかけ、上向させる。
額に、瞼に、そして唇に、己の唇を、男は降らせる。

そして、涙にぬれた目で見上げる女性に、男は何かを告げた。

女性は、必死で涙をこらえ、男を見返す。

男のその声が、私に届くことはなかったが、私には何を告げたの
か理解できていた。

泣かないで。

男は、きつとそう言っていたに違いなかった。

そして、また場面は変わる。

青い目の男が、大空に、途方もなく巨大な魔法円を呼び出していった。

その途方もない大きさの魔法円が、ゆっくりと大地に下りてくる。しだいに、男の輪郭がぼやけはじめた。

やがて男の背中に、2枚の翼があらわれる。

まるで、天使のようだと、私は思った。

夢物語に語られる、神々しい天使そのものの姿だ。

突如、目を開けていられないほどの、眩い光の渦があらわれ、光は、やがて男の姿を全て隠してしまう。

私は、この光景を、どこかで見たような気がしていた。

ぼんやりと道筋の残る、記憶の糸を手繰り寄せる。

そうだ。

やがて私は、ある記憶に思い当たった。

これは、トルバディアの王宮の、天井画に描かれていた、あの光景に、酷似しているのだ。

翼を持った男が主人公の、あの宗教画。

今脳裏に浮かぶこの光景は、あの絵に描かれていた場面の一つに、酷似しているのだ。

突如、場面が、そこで途切れた。

再び私は、薄暗い虚無に戻される。

足元には、そこしれぬ暗闇が、頭上には、ほのかな薄明りが見えた。

私は、薄明りを目指して、必死で体を動かす。

思うように動いてくれない体を叱咤して、とにかく光を目指した。右手には、変わらず温もりを感じている。

しっかりと握りしめられるその手に、私は、何度も勇気づけられた。

帰らなければ。その思いだけが、体中を支配していった。

不意に、暗い影が再び纏わりつき、私を引きずり戻そうとする。

私は、昏い意識の塊を追い払うように、右手のぬくもりに縋りつ

いた。右手がギュツと握り返される。

バサリと、再び羽音が聞こえてきた。

纏わりつく影が遠のく。

羽音が、勇気づけてくれているような気がしていた。

徐々に浮かび上がる意識だけを追いもとめ、私は上を目指す。

やがて光が近づき、羽音が間近に聞こえた。

羽音とともに、再び交えた、物言わぬ青い一対の目は、私に何かを訴えかけるように向けられていた。

そこで、私の意識は、急に途切れたのだった。

16 深淵からの目覚め

気が付くと、私は、洞窟の中に戻っていた。

目の前では、セトが覗き込むようにして私を見ている。右手は、セトに握られていた。

「ヒト、聞こえてる？ 大丈夫？ 凄い汗だよ」

セトが、空いている手で、私の額に張り付いていた髪を退かす。

私は、呆然とセトの顔を見返した。

「いったいどうなっているのだろう。現状の把握ができない。」

セトの背後では、ラウシュがこちらに背を向けて、私たちを庇うように剣を構えて立っているのが見える。

その向こう側には、ツールと紫色の死魔が、魔術を駆使して闘っている姿が見えた。

「たくさんいたはずの死魔の姿はなく、ツールが召喚した亡者たちの姿も、すでになかった。」

「いったいどういうことだ？」

私は、白昼夢でも見ていたというのだろうか。

呆然と瞬きを一つする。

確か私は、界の亀裂を塞いでたはずだ。その途中で、確か、穴の奥に何かが見えたような気がしたのだ。そこからおかしくなっていた。

「そこで、ふとあることに思い至った。」

「そうだ！ 亀裂！ 結界はどうなったの！？」

私は慌てて、穴に眼を向ける。

すると、穴の上には、しっかりと結界が施されていた。

不安定に弱まっているような様子は、どこにもない。

「ヒト、どうしたの？ さっきちゃんと、自分で補強してたじゃないか。怖すぎて、記憶喪失にでもなった？」

私は、セトを見上げる。

「私が…やったの？」

狐につままれたような気分で、セトに訊ねる。

セトは、頷いた。

「途中から、様子がおかしかったけど。呼んでも全然返事をしないし、心ここに非ずって感じだったよ。亡者のせいで、立ったまま気絶したのかと思った。ヒト怖がりだから。でも、本当に変だったよ。急に物凄く怖い顔になったりしてさ。それに」

セトはそこで一度言葉を区切って、繋いだ手に視線を落とす。

「泣きそうな顔して、手をあげて、何か探しはじめたり、変な行動ばかりしてたから、心配した」

しかも、手を握ったらギュウギュウ握り返してくるし、物凄い力だったよといつて、セトが苦笑する。

私は、呆然とセトを見返し、瞬きを一つする。考えがついていなかった。

さっき私が経験したものは、いったいなんだったのだ。夢だったのだろうか。

夢にしては、あまりにもリアルなものだった。まだ、自分の内側には、生々しい怒りの感触が残っている。

あの激情を思い出し、改めて自分の中に巣くう負の感情を自覚して、私は純粋な恐怖感を覚えはじめていた。

知らず知らずのうちに、体に震えが走る。

セトが心配そうに私を覗き込んだ。

「ヒト、まだ怖いの？」

私は、セトを見返す。

自分でも良くわからないのだが、安堵のような気持ちが湧き上がり、思わず涙がにじみ出てきた。

セトが驚いたように目を見開いてから、すぐに私を引き寄せ、ギョツと抱きしめる。

「ヒトにこんな思いさせて…。後で俺が、ツールさん懲らしめておくからね」

セトが、低い声でそう言った。
違う。トールのせいなんかじゃない。

私は首を横に振ったが、セトには通じなかったようだ。

「ヒト、泣かないで」

セトが、私の後頭部に唇を落としてくる。

その時、ラウシユが、わざとらしい咳払いを一つした。

「あー、その、非常に言いにくいんだが…場所を移そう。トール師団長が、合図を送ってきてるからな。たぶん邪魔なんだろう」

私は、ラウシユに視線を移したが、ラウシユはというと、気まずそうに私たちから視線を外していた。

そこで、はたと自分の状況に思い至り、すぐさま両手を突っ張って、セトとの間に距離を作る。

これでは、またラウシユの誤解が深まってしまわないか。

焦る私を見て、セトは笑いながら、私の頭をくしゃりと撫でた。

ラウシユに促され、私たちは場所を移動しようとする。

と、その時の事だった。

紫色の死魔の側に、逆五芒星の紋をした移転の魔法円が現われる。

円の中央から現れたのは、赤髪の死魔グルシアだった。

『ラシッド、何をもちもたしているのだ』

グルシアが、苛立ったように告げる。

グルシアは、ラシッドと呼んだ、紫色の死魔と対峙するトールを

睨み付けた後に、私に目を止め、僅かに驚いたように目を見開いた。

『お前…』

グルシアはそこで言葉を絶句させると、すぐに私に向けて手を突き出し、魔法円を呼び出しはじめた。

私も、無効化の盾を呼び出す。

グルシアの風魔法をしのいだ後、すぐさま炎の魔法円を呼び出して応戦した。

17 グルシア

グルシアが、巨大な風魔法の円を呼び出しはじめる。

私も負けじと、両手を使って、巨大な魔法円を呼び出そうとした。しかし、トールがそれを止める。

トールは、すぐさま私たちに近寄り、無効化の魔法円を呼び出しはじめた。

私たちの前に呼び出されたトールの魔法円が、グルシアの風魔法を受け止める。

「ヒトちゃん、場所を考慮して、もうちょっと力加減を考えような」
ああそうか、ここは洞窟内だった。あまり派手にやって、洞窟が崩れてきたりしたら大変だ。

グルシアが再び風魔法を呼び出す。

するとトールが、またしても見たことのない変則的な魔法円を呼び出しはじめた。

トールの呼び出した魔法円が、上空に、横になって浮かんだかと思つと、柔らかく弧を描き、四方八方に細く伸びはじめ、グルシアの周りに、鳥かごのようになって覆いかぶさって捉える。

「また不思議な魔法円使ってるわね」

「惚れ直したる？」

私は、ヒクリとひきつった笑顔を浮かべる。

「いいえ、全く」

本当にこの男は…すぐこれだ。

まあ、今は助かるが。

私は、先ほどの出来事からまだ完全に立ち直れてはいないのだ。

このくらの冗談を聞いているほうが、気がそれで助かる。

ラシッドが、風魔法を呼び出し、グルシアを覆う魔法の格子を断ち切った。

死魔たちは、そのまま後ろに跳び、私たちと距離を置く。

『邪魔が入った』

ラシッドの言葉に、グルシアが頷いた。

『あの娘、殺しておいた方が我等のためだ。あれを先に始末しろ』
グルシアが、私を見ながら言う。

『女の方をか？ あの男の方が、とんだ食わせものだぞ。あの結界は、もとはといえば、あの男が張ったものだ』

ラシッドが、界の亀裂を一瞥して続ける。

『封印が弱まるのに合わせて、あの忌々しい結界を破り、界の扉を開く手筈が、あの男のせいで台無しだ』

『扉を開く機は、まだある。いいから、女を始末しろ。あれは、天^{アマ}の使いの血を色濃く引く間の子^{ミン}だ。生かしておく^{イル}と、後々面倒だ』
「ヒト、あいつのこと知ってるの？」

セトの言葉に、私は、思わずグルシアとの出会いを思い出してしまい、微妙な表情で頷いた。

「前に、王都で見たことがあるの」

「ああ、あの時の、物好きな魔物が」

ラウシュが、思い出したと言うように頷く。

「物好き？」

セトが、怪訝な表情で片眉をあげる。

「そうだ、お嬢ちゃんに手をだそ」

ラウシュはそこまで言っつて、不自然に言葉を止めた。

何気なく向けた視線がセトと合い、セトの表情が、恐ろしく冷たいものになっていることに気づいたからだ。

ラウシュが、口を引き結んで、小さく息を呑む。

「もしかして、前にヒトが言っつたグルシアってこいつ？」

氷のような微笑みを向けられて、私には答えることができなかつた。ただセトを見返すばかりだ。

「そういえば、赤髪だつて言っつたもんね」
よく覚えてイマスね。

私の背中を、冷や汗が流れ落ちる。

セトが剣呑な気配を纏いながら、剣を引き抜いた。

「セ、セト、少し落ち着こうよ。無茶したらダメだよ」

危ないよと続ける私の言葉を、セトはきれいさっぱり無視してくれる。

「おやおや、ヒトちゃんは、あの魔物に手を出されたわけだ。ほんと、その手の事には、手ぬかりが多そうだからな、ヒトちゃんは。もうちょっと、危機管理をしっかりとしないと、セトくんが可哀想だぞ」

トールが、言いながらニヤリと笑って見せる。

別に手を出されたってほどのことでもないし。ちょっと頬を舐められただけだし。

というか、どの口が言ってるんだよ。お前こそが、目下一番の要注意人物じゃないか。近寄んな、この女つたらしが。

私は、ギロリとトールを睨んで威嚇する。

「そういう顔が、そえられるのだが、わからないのか？ それとも誘ってくれているのか？」

トールが、またしても気色悪い気配を醸し出して言う。

私は、一瞬にしてサブいぼが立った。

睨まれてその気になるなんて、どうしてこう変態なんだ、こいつは。

「トールさん、俺、後であんたにも用事があるから」

セトは、振り返ることなく、低い声で言う。

トールが、ニヤリと人の悪い笑顔を浮かべて肩を竦めた。

セトがグルシアに向き直り、剣を構える。

グルシアが、風魔法を呼び出しはじめた。ラシッドも魔法円を呼び出しはじめる。

トールが、再び鳥かごのような例の魔法円を呼び出し、グルシアとラシッドを、魔法円ごと閉じ込めるように覆い尽くした。

死魔たちは、内側から、風魔法で格子を断ち切る。

格子が切られた瞬間、セトが身を低くして、一気にグルシアとの

距離を詰めた。

グルシアの風魔法が、格子と一緒にセトの肌を切り付けるが、セトはそのまま懐に飛び込むと、腹部に向けて剣を突き立てようとする。

「セト！」

セトの肌が傷を負うのを見て、私は思わず悲鳴をあげた。

グルシアは、体を捻って攻撃を躲したが、セトの剣が、グルシアの腹部を浅く抉る。

グルシアは、痛みに顔をしかめながらも、躲しざま手をセトに向かって突出し、魔法円を呼び出しはじめる。

セトは、グルシアに躲されたと同時に、剣を引く。切っ先をグルシアの手のひらに定めて、剣に体重をのせる。セトの剣が、グルシアの右掌を串刺しにした。

グルシアが、くぐもったうめき声をあげた。

ラシッドが、セトの背後から、魔法円を呼び出しはじめる。

私は、とっさに無効化の盾を呼び出し、セトを守った。

グルシアは、右手を剣に貫かれたままにして、左手で、足元に移転魔法を呼び出しはじめる。

「逃がすかよ」

セトが低く呟き、グルシアの右手を裂きながら剣先を上に乗せあげる。そのまま、上段に構えた剣を振り下ろした。

しかし、切っ先は、ラシッドが呼び出した風魔法によって、跳ね返される。

グルシアの呼び出した、移転の魔法円の中に、ラシッドも移動する。

再び狙いを定めたセトの剣が、グルシアを捉える前に、死魔たちは、魔法円によってその場から逃げ果せたのだった。

18 アウルの封印

「セト！ 大丈夫！？」

私は、セトに走り寄った。

セトは、腕や頬、足などに、浅い切り傷をいっぱい負っている。

鮮血の流れ出す傷を見て、恐怖感が湧き上がってきた。

「なんで、あんな無茶するのよ！ ただ闇雲に突っ込んで行ったりして！ この前、ハールマーに、注意されてたばかりじゃない！」

今回は、軽いけがだからいいものの、もしも、と考えると、体の奥底から震えが走る。

「闇雲につっこんだわけじゃないよ、ちゃんと状況なら見てる」

「じゃあ、なんでこんな怪我してるのよ！ 見てない証拠じゃない！」

「別に、これくらいの傷ならどうってことない」

言いながら、セトが自分の腕の傷をペロリと舐める。

「どうってことあるわよ！」

私は、泣きそうになりながら、必死で回復魔法を施しはじめた。

しかし、案の定、あまりうまくいかない。

何故か私は、この手の魔法と相性が良くないのだ。今ここに、イムルドが居ればよかった。そうすれば、こんな傷、すぐにでも治してもらえるのに。

私は、唇を噛む。

セトがふと笑った。

「本当に大丈夫だよ」

「どれ、かしてごらん。私がやろう」

ツールが私を退かして、回復魔法を使う。セトの傷口が、みるみるうちに塞がっていった。

「ツール、あんた器用よね」

ポツリと言った私の言葉に、ツールが、片方だけ唇を持ち上げる。

「私は、ヒトちゃんとは逆だね。私の場合、攻撃系の魔法があまり得意ではないのだ」

ちなみに、ナサレーは攻撃魔法の方が得意だと、トールは続ける。「それにしてもあの穴、結界で塞ぐのではなく、きちんと閉じておいた方がよさそうだな」

トールが、界の亀裂を見ながら、顎を撫でる。

「できるの？」

「さあ、やってみないことには、わからんな」

言いながら、トールが肩を竦める。

この男は、本当に掴みどころがない。

「それもそうなんだけど、天空の楔にも、早く行って見たほうがいいと思う」

セトの言葉に、私も頷いた。先ほどの死魔たちは、封印が弱まるのと同時に、扉とやらを開けようとしていた。

推測になるのだが、恐らくは、先ほどは封印が弱まっていた状態ということになるのだろう。

封印をいじっているやつを相手に、イムルドと私たちは、いたちごっこを繰り返しているわけだが、きつとそいつが一枚かんで、先ほどの死魔たちと何かを企んでいたに違いない。

天空の楔は、封印の重要な場所だ。そこを見ておいて、損はないはずだ。

「ヒトちゃんたちは、何故神殿にエ・ギザラに行こうとしているのだ」

急に、真面目な顔をして、トールが問いただしてくる。私とセトは、一度顔を見合わせた。

トールは、気色悪い変態だし、確かに得体のしれないところもあるのだが、悪いやつではないと思う。もちろん、ただの直感だが。

ただ、死魔たちを「魔物」と呼ぶからには、発言に気を付けなければならぬだろう。どこまで話してよいのか、私は逡巡した。

「警戒しているのか。私が、信用できないというわけか」

トールの言葉に、私は首を横に振る。

「信用できないってわけじゃないのよ…ただ…」
こちらにも事情があるのだ。

私は困った表情で、口を引き結び、トールを見返す。

トールが、それを見て、軽いため息をつきながら笑った。

「いや、それで正解だ。君たちは、見ていて危なっかしいほど、素直で正直すぎる。少しは疑うことを覚えないと、悪い大人に騙されるぞ。まあ、だからラウシュと気が合うのかもしれないがな」

トールが言って苦笑する。しかし、すぐに表情を改めた。

「そんな君たちだからこそ、下手な小細工なしに、率直に言わせてもらおう。君の魔法は、在野の個であるにしては、比倫を絶する。君は何者だ。何の目的があってエ・ギザラに行くつもりだ」

トールが、私を真っ直ぐに見つめてきた。

トールの、表情も態度も、全てが変わっている。先ほどまでの、人を食ったような態度は、今はなりを潜めていた。

私は、トールに試されているような気がしていた。

私は、真っ直ぐに注がれるトールの眼差しを見返す。

「私たちが、天空の楔に行く目的は、封印を守るためよ」
ラウシュは、怪訝な表情で、私を見る。どうやら、ラウシュは封印のことは知らないようだ。

しかし、トールは違っていた。

「君たちは…アウルの封印の存在を、知っているのか？」

トールが、驚いた表情で呟く。

「アウルの封印？ アウルって、神殿の奴らが崇めてる神様の名前よね？ 私は、そんなものは知らないわよ。私たちは、さっきの奴らの親玉が、地上に出てこないように封じられている封印を、ただ守ろうとしているだけ」

「それをアウルの封印と呼ぶのだ」

トールが、やや呆れ気味に言ってから、顎に手をあてて考え込む。
「では、君たちは、ウトナの予言を知る立場にあるということか」

トールが呟くのが聞こえたが、私には意味がまるでわからない。
「^{ウツナ}古代の予言？ 何それ？ なんて、私たちがその予言とやらを知っていることになるのよ」

トールは、驚いたように目を見開き、瞬きを一つする。
私も、意味が解らずトールを見返した。

トールは、何かを探るように私を見ていたが、やがて諦めたようだ。ため息とともに髪をかき上げ、困ったように笑う。

「どうやら、私たちは、一度話の擦り合わせをしたほうがよいようだが…」

そう言いながら、トールは、じっと私とセトを見る。視線には、戸惑いと迷いとが見え隠れしていた。

トールは、一度私たちから視線を外し、考え込みはじめた。

だが、迷っていた何かを決心したような表情に変わると、再び口を開く。

「私は、君たちを信頼しよう。だから君たちも、私を信頼してもらえないだろうか」

トールは、私たちにそう告げたのだった。

19 ウトナの予言

私たち4人は、洞窟ドームの一角に座り込み、話し合いをはじめていた。

「ウトナの予言を知らぬ君たちが、いったいどうやってエ・ギザラにある封印の存在を知ったというのだ」

トールの質問に答えたのは、セトだった。

「俺たちの、父親代わりとも言うべき人に聞いたんだ。イムルードって知ってる？ 一応賢者様って呼ばれてるみたいなんだけど」

セトの言葉に、2人は驚愕に目を見開き、しばしの間絶句した。驚愕から回復したのは、トールの方が早かった。

「白き賢者の御子なのか…？」

私は、2人の驚きよ様の凄さに、思わずイムルードに同情してしまった。

人の噂って怖い。こんなふうには、現実からとんでもなく外れたイメージだけが勝手に先行して、憶測で作り上げられた偽物の像が、まるで本物のように確立されてしまうのだから。

「血は繋がってないけど、一応そうなるわね。イムルードが、私たちの保護者ってことになってるわ。面倒見てもらった覚えなんて、まったくくないけど。だいたいね、そんなにご大層なもんじゃないのよ、イムルードって。噂ばかりが先行しているだけの、ただの非常識人間なんだから。」

私は、言って肩を竦める。

「なるほど、それで魔術に長けているのか」

トールが、ようやく納得できたとばかりに頷いた。

別にイムルードに魔法を教わってなんかいないけど。まあ、そんなことはどうでもいいか。

「しかし、我々の内で話す分には構わないが、トルバディアでは、そのことは伏せておいた方がよいな。白き賢者は、神殿と対立した

折に、先代国王の御不興を買い、以来、事実上トルバディアからの追放に合われておられるようなものだからな」

その言葉に、私はため息をついた。

「イムルード、ここでも出入り禁止なわけ、まったくしょーもないやつね」

不意に、ラウシユが笑う。

「お嬢ちゃんにかかるよ、白き賢者までが、ぞんざいな扱いをされるのだな」

「だから、イムルードは、本当は賢者様なんて柄じゃないの。あんまり過度の期待をしないでやってくれる？　じゃないと、自分の事も顧みずに、無理ばかりするんだから」

きつとイムルードは、今も一人で無理をしているのだろう。その水臭さに腹が立つ。

「では、君たちがエ・ギザラに行こうとしているのは、白き賢者の御意向であるということなのか」

トールの言葉に、私は思わずセトを見た。セトは苦笑している。

トールは、私たちのやり取りを見て、不思議そうな表情をした。

「違うのか？」

セトは、諦めたように笑いながら、ため息を一つつく。

「イムルードとしては、この件に関して、ヒトに首突っ込んでほしくないんだよ。見ての通りの、とんでもないじゃじゃ馬だからね。どんな無茶するか、わかったもんじゃないから」

トールが、一度きよとんとした表情をしてから、なるほどと頷く。

「確かに、これでは、心配で目が離せないだろうな」

トールが、クククと笑いはじめた。

「失礼ね、何納得してんのよ」

私は、唇を突き出す。

「いや、賢者殿の御心痛が察せられてね」

言いながら、トールが、我慢ならないといった様子で、肩を揺らして笑いはじめた。

「何が御心痛よ。そりゃ、こっちの台詞だつての。だいたいね、イムルードは、ただの大馬鹿者なんだから。そのアウルの封印とやらが、色々とちよっかいをかけられて、大変なことになっているのを知って、自分一人で何とかしようとしていたのよ。全く呆れちゃうわよ。全部一人で何とかできるなんて思ってたさ。水臭いのよ、あいつは。何のために私やセトが居ると思ってるのかしら」

「なるほど、ヒトちゃんは、それで神殿に忍び込もうとしているわけだ。実に分かり易いな」

トールは、笑い涙を拭いながら私を見る。

「その打算のない真っ直ぐさは、君の美点だよ。敬服に値するものだ。是非大事になさい」

ふと優しく笑って、目を細める。手を伸ばして、私の頭をくしゃりと撫でた。

私は、驚きで目を一度瞬く。

「あんたでも、たまにはまともなこと言うのね」

「私は、いつでも至極真面目だぞ」

トールが、悪戯そうな表情で、片目を瞑って見せる。

ちよつと褒めたらすぐこれだ。

私は無視を決め込むことにした。いちいち反応すると、この変態が喜ぶだけであることを学習したからだ。

「ところで、トールこそ、なんで神殿に行こうとしているのよ」
するとトールは、少しだけ表情を曇らせた。

僅かに目を伏せて、視線を下げる。

「ナサレーを探しに行こうと思っっているのだ」

その言葉に、ラウシュが目を見張った。

「トール師団長がですか？」

ラウシュは驚きながらも、やはりナサレーは神殿に居るのかと小さく続け、納得したような顔になってトールを見やる。

「しかし、トール師団長、今は、それどころではないでしょう。魔道師団も対レント・レヴトリア部隊に組み込まれることになったと

の噂が、俺の耳にまで漏れ聞こえていますよ。それだけは、なんとしても回避せねばならぬことです。こんなところで、油を売っている場合ではないでしょう」

ラウシュの視線は、トールの横顔に向けられている。

トールは、無言のままラウシュの言葉を聞いていた。

「前は、ランド公爵が、王都の警備に支障が出ると王を諫めて、なんとか魔道師団の派兵は免れたようですが、現在、公爵は王城での謹慎を命じられ、御家族さえもお会いできない状態と聞き及んでいます。王都で、魔物が跋扈している現状を鑑みれば、今は他国との戦などしている場合ではない。幸いにとでもいうべきか、レヴトリア国王は、戦況が自国有利にもかかわらず、和平交渉に応じる姿勢があるとも聞いております。レヴトリアがそう言ってくるからには、レントへの橋渡しの準備もできているということでしょう。

ここは、領土を切り売りしてでも和平を結ぶべきです。魔道師団抜きで、魔物から王城を守ることは無理に等しいのですから」

ラウシュの「レヴトリア国王」の言葉に、私は思わず反応してしまった。先ほど見たばかりの、カルナスの姿が思い出されたからだ。腹の奥底が、ヒヤリと冷たくなる。

あれはいつたいたんだっただろう。夢だったのだろうか。

「そもそも、レントとの開戦からしてが間違いなのだ。その誤りを正さずば、国はもつと荒れる。トール師団長には、是非ランド公爵と歩調を合わせて、なんとかしてでも派兵をお止めいただかねば」

ラウシュの、訴えかけるような視線を見返すことなく、トールは重い口を開いた。

「ランド公爵は、処刑された」

トールが、ぽつりとそう漏らした。

その言葉に、ラウシュが怪訝な表情をする。理解が至らないようだ。

「…は…？」

不思議そうに向けられるラウシュの眼差しを、トールが暗い表情

で見返した。

「ランド公爵は、すでに処刑されたのだ」

ラウシュが、ようやく意味を悟り、驚愕に目を見開きながら息を呑む。

「まさか…そんな馬鹿な…」

ラウシュは、そう呟いたきり絶句した。

「そうだ。馬鹿な話だ。法廷での詮議も為さず、公爵を私刑に処するなど、あつてはならぬ非道だ」

トールが、固く口を引き結ぶ。

やがて、長いため息をついた。

「実情は、もはやすでに、我々の派兵云々の話ではなくなっているのだ。レント・レヴトリア同盟軍は、破竹の勢いで進軍を続けている。このまま和平なくば、恐らくは数日中のうちに、王都にて決戦となることだろう。つい先日、軍隊を増派して、同盟軍にぶつけたようだが、足止めになったのかどうかそれすらもわからぬ。情報が操作されているようで、うまく実情が入ってこないのだ」

「そんな」

ラウシュは、それ以上の言葉を失った。

そうか、この戦争は、国民全員の総意というわけではないのか。偉い人が勝手に決めた戦争に、皆が振り回されているだけなのだ。

今回の戦争は、私にとっては、はっきりいって降ってわいた他人事だった。

私は、封印の事で頭が一杯だったので、どちらかを応援すると言う気持ちは皆無だった。いや全くなかったと言つのは言い過ぎか。

強いて言えば、ハールマーが、レヴトリア軍に所属しているから向こう側を応援する気持ちの方が強かったかもしれない。だが、国単位で考えるのなら、どちらかだけを応援する気持ちなどは、全くなかったのだ。

ナンのことを思えば、はやく戦争なんて終わってほしいと、思うのは、ただそれだけだった。

血を嫌う封印のある場所が、戦場になろうとしているその事実が、ただ恐ろしくて、無条件にカルナスたちを応援することも躊躇われていた。

戦争なんてやめてほしい。親しい人たちが無事であってほしいと、私が思うのは、ただそれだけだったのだ。

トールが腕を組み、難しい顔のまま、宙の一点を睨む。

「実は、何とか解決の糸口をと探っているうちに、私は、奇妙な一つの事実にたどり着いた。どうやら、ヴェルテ王が、2ヶ月ほど前に、城を忍んで抜け出し、神殿を訪れたことがあるらしいのだ。いまだ推測の域は出ないのだが、十中八九、王の乱心の発端が、そして、魔物が王都を徘徊するようになった現状のきっかけが、神殿にあるということ間違いなさそうなのだ。それで何とか内情を探ろうと思ひ、ナサレーにイサ殿のもとを訪れるように言ったのだが……。しかし、頼みのナサレーと連絡が取れなくなった。ナサレーは私の命で神殿に向かい、そのまま姿を消したのだ」

ラウシュは、驚愕に目を見開いたまま固まっていた。

「つまり、ナサレーは、神殿の内情を探りに行って、捕まっちゃったってわけ？」

私の言葉に、トールは首を横に振る。

「わからない。神殿の内情は、全く外には聞こえないのだ」

「つまり、捕まったのかどうなのかすらも分からない。ナサレーの消息は途絶えたままってことなのね。やっかいな話ね」

私たちは、全員で顔を見合わせ、沈黙した。

「まいったわね、ここじゃ遠見の魔法も使えないし。移転魔法使うにも、神殿の見取り図でもない限り、見つからずに潜入するのは難しそうだし、八方ふさがりだわ」

私は肩を竦める。

「移転魔法など使っては、イサ殿にすぐに見つかるぞ。神殿には、イサ殿の結界魔法が張られているからな。魔術を使えば、すぐに知れる」

「そうなの？ そっか、だからナサレーもトールも、魔法を使って
忍び込んだりはしなかったのね」

トールは頷いた。

「イサ殿は、白き賢者に比肩するとも言われる御方だ。神官と侮つてはならぬ。もし見つかつたら、何を置いても真つ先に逃げるんだ」

トールの言葉に、私は微妙な顔をした。反応に困つたのだ。

「…なんか、どんな人なのか想像がつかないんだけど…。見つかつたら逃げろって、どんだけ狂暴な奴なのよ、そのイサって人」

トールが首を横に振る。

「狂暴という言葉は、全く当てはまらないな。イサ殿を言葉で表すなら、無とか静などという言葉の方が、しつくりと当てはまる。イサ殿は、たとえば君たちを見つけたら、何の躊躇いもなく殺すだろう。それこそ表情一つ変えずにな。無断で神殿に侵入するというその事実だけで、我々は排除されるべき対象となりうる。そこはよく認識してもらいたい」

そう言つて、トールが私とセトを見て続ける。

「どうだ、それでも君たちはエ・ギザラに行くか？」

私とセトは、顔を見合わせてから頷いた。

トールは、困つたようにため息をついた。

「私の本音を言えば、このまま外で待つてもらいたいのだが。推測なのだが、イサ殿は、恐らくエ・ギザラにおられるはずだ。アウルの封印に近づいたりしたら、間違いなくイサ殿に見つかることになるだろう。私にも、やるべきことがあるので、君たちの安全を確保してやれる保証もない」

「あら、私はトールに守ってもらおうなんて思つてないわよ」
するとトールが、クスリと笑つた。

「そうなのか？ 私は、ヒトちゃんを守りたかつたのに残念だな。

男というのは、好意のある女性を、守りたいと思つ生き物なのだよ」
トールが、そう言いながら悪戯そうな表情を浮かべる。

すると、セトがムツとした表情でトールを睨みつけはじめた。

またかよ。この悪循環、この短期間で、いったい何度味合わされたことか。

私はため息を吐いた。

「トール、あんた、女は口説いてやらないと失礼だとでも思ってるんでしょ。はつきりいつて迷惑なの。いちいち話の腰を折らないでくれる？」

トールは、私の言葉に再び爆笑する。

「いや、さすがヒトちゃんだ。私が見込んだだけはある。そうだな、本格的に口説くのは、もう数年後にすることにするよ」

「トールさん、本気じゃないくせに、そういうこと言うのやめてくれる？ 俺、うっかり手がすべっちゃんいそうんだけど」

トールが、ニヤリと人の悪い笑顔を浮かべた。

「本気だったらいいのか？」

「あのね、私の意思を無視しないでくれる？ 私は、あんたみたいな女だったらし、絶対にごめんだから」

「ヒトちゃんは、わかっていないな。私は、本当は一途な男なのだよ？ 愛する女性にそんな評価をされては悲しい限りだ」

「…ほんとに良く回る舌ね。セト、うっかり手を滑らせちゃいなさいよ。そしたらこいつも少しは懲りるだろうから」

「俺もそう思ってたところ」

セトが、言いながら剣の柄に手をかける。

「ちょっと待ってくれ、お嬢ちゃんたちの怒りももつともなのだが、トール師団長のこれは、もう病気なのだ。聞き流してやってくれな
いか」

ラウシュが、慌てた様子で止めに入る。

「ビョーキ……」

私とセトは、思わず顔を見合わせた。しばらくしてから爆笑する。
トールは、なんともいえない表情でラウシュを見た。

「そうね、確かに病気だわ。まさしく、ラウシュの言う通りよ」

「そっか、病気なら仕方ないよね。俺も少しくらいなら、大目に見

てあげることにするよ」

「ラウシュ、君とは一度、じっくりと話をしなければならなそうだ」
トールが、腕を組みながら額に青筋を浮かべ、ラウシュに不敵な
笑顔を向けた。

天然男ラウシュは、不思議そうにトールを見返す。自分の失言に、
気づいてはいないようだ。

私は、笑いながらその様子を見つめていたのだが、ふとした疑問
が脳裏をよぎり、意図せずして、その疑問を口に乘せていた。

そう、この時私は、この先に、どんな事実が待ち受けているのか、
全く知る由もなかったのだ。

ほんの些細な疑問。私にとっては、それくらいの認識でしかなか
った。

まさか、自分の存在如何を問うほどの事実突き当たることにな
ろうとは、思ってもみなかったのだ。

「そう言えば、聞き忘れてたんだけど、古代の予言で何なの？」

私の言葉に、トールが振り返った。

ラウシュも思い出したとばかりに頷く。

「俺としても、是非お伺いしたいところですよ。俺自身も、アウルの
封印も、ウトナの予言とやらも、一度も聞いたことはないものです。
全てがはじめて耳にする言葉。いったい何なのですか、その予言と
いうのは」

トールは、至極真面目な表情に戻った。そして、静かに語りはじ
める。

「月満ちたる夜、刻印背負いしもの生まれ落つ。平和の治、風狂散
じ、契印綻びぬ。天下、俄かに乱れ、壊乱す。世上、惑いて、姿な
き悪魔顕れん　古より、トルバディア王家に伝わる、秘され
た予言だ。限られたごく一部の人間しか、その予言を知ることにはゆ
るされていない秘中の秘。予言では、刻印を背負う王家の忌子が生
まれた時、ウトナ神が封印した姿なき悪魔が、再び地上に現われる
のだとされている」

耳の奥で、ドクンと、再び鼓動が跳ねた。

予期せず突然聞かされた「刻印」の二文字に、私は呼吸することすら忘れそうになった。

セトが私の異変に気づいて、覗き込んでくる。

「ヒト、どうしたの？ 顔色悪いよ？」

私は、返す言葉が見つからず、呆然とセトを見返した。

トールが言っていた予言にある、「刻印を背負う」という表現は、まさしく私の背中にある痣の事をさすのではないだろうか？

では、私は、その忌子とやらなのだろうか？

言葉にして、問いただしてみたかった。

けれども、言葉が喉の奥に張り付いたまままでてこない。

もし、質問に肯定で返されたら、私は、いったいどうしたらよいのだというのだろうか。

自分の足元が崩れ落ちてゆくような錯覚に捕らわれた。

私は、いったい何者なのだ？ 忌子とは、いったい何なのだ？

今のこの現状と、そしてこれから起こるかもしれない凶事の原因の、すべてが自分にあるのだとしたら？

私はどうしたらよいのだろうか？

私は、途方もない孤独感に襲われ、知らず知らずのうちに自分で自分を抱きしめていたのだった。

19 ウトナの予言（後書き）

今回ちょっと長くなりました。

二話に分けようかとも思ったのですが、無理やり一話につめこみま
した。

読みづらい箇所があるかもしれませんが、
スミマセン。

20 忌まれし子（前書き）

生ぬるい表現が入ってます。
大丈夫な方のみお進みください。

20 忌まれし子

「ヒト、どうしたの？」

セトが、心配そうに私を覗き込んでくる。

けれども私には、返す言葉がなかった。

ツールやラウシュも、急にどうしたのだとでもいいいたげな表情で私を見ている。

私は、その視線を、ただ呆然と見返していた。

私は、ただ怖かった。

私という存在は、きっと本当は、先ほど見たばかりの赤ん坊と同じように、殺されておくべき存在だったのだ。

母であるサリエを犠牲にしてまで、こうしておめおめと生き残ってしまったが、私はこの世界に、生きてはいけな存在だったのだ。

私が生きているせいで、封印に綻びが生じ、延いては、ナンを犠牲にしようとしている。

この現状の、全ての禍のものは、たぶん私という存在であるに違いないのだ。

「私は」

その予言にある忌子だと続けようとした。

でもセトが、その先を阻んだ。

セトは、ラウシュとツールに、私に少し用事があるから向こうに行っていてくれないかと言った。

ラウシュとツールは、何も聞かずにそれを了承し、先に水路に戻っていると言って、洞窟ドームを後にした。

残された私たちは、しばらく無言だった。

セトが、気遣うように手を伸ばし、私の髪を梳きはじめた。

「ヒト、またなんかよくないこと考えてるだろ」

セトが、ポツリとそう洩らす。

よくないこと。確かにそうだ。

私は、力なく頷いた。

セトが、髪を梳く手を止めて、私の頭を引き寄せる。私は、おとなしくセトの腕の中に納まった。

「さつきトールさんが言ってた、古代の予言のせい？」

私は、返事の代わりに目を伏せた。

「セト、この前クロウと会ったときに、あいつが言ってたこと覚えてる？」

セトは、そこで何かを思い出したのか、一度小さく目を見開いてから、口を引き結んだ。

「覚えてるんだね」

私は、力なく小さく笑う。

「クロウは、私の背中には刻印があるって言ってた」

セトが、ギョツと私を抱きしめた。

「トールが教えてくれた予言で言われている、刻印背負いしものって、きつと私のことな」

「そんなの関係ない！」

セトが、声を荒げた。

「セト……」

「関係ないよ、そんなこと」

「でも、私は」

「だからなんだって言うんだよ！」

セトが私の両肩を掴んで、真正面から私を見た。

「だったら、なんだって言うんだ。ヒトはヒトだ。猪突猛進で、お節介で、どうしようもないお人好しで、俺が大好きな人だ」

「セト」

「やめてくれよ。そんな誰が言ったんだか、わかんないような予言に、惑わされたりしないでくれ」

セトが、苦しそうな表情で私を見る。

「頼むから、自分が犠牲になろうなんてことだけは、絶対に思わな

いでくれ」

セトが再び私を抱きしめて、肩を震わせた。

「どうせヒトの事だから、自分が死ねばいいとか、そういうくだらないこと思ってるんだろ？ 頼むから、そんなこと、少しでも思ったりしないでくれ」

セトが、ギョツと私を抱き込む。

「俺は、ヒトが居なかったら…どうやって生きていたらいいんだよ…。お願いだから、そんなこと、考えたりしないでくれ」

震えるセトの背中を、落ち着かせるように私は撫でた。

「私、さつき夢みたいなものを見てね、その時、カルナス王が、私と同じ痣を持つている赤ん坊を手にかけるところを見てしまったの」
セトが、小さく息を呑んだ。

「たぶん、あの予言のせいで、あの赤ちゃんは殺されてしまったんだと思う。なのに、私はこうして生き延びている」

セトが、顔をあげる気配がした。

「私、赤ん坊の頃に、殺されかけたことがあるって言ったよね。でも、お母さんに庇われて命が助かり、そして偶然、ナンに出会えたおかげで、こうして生き延びることができた。けれども、お母さんは私を庇ったせいで命をおとした。それだけじゃない、もしかしたら私は今、恩人であるナンの命さえも、脅かしているのかもしれない。だとしたら、私は」

「やめる！」

セトが、再び私の両肩を掴む。

私は、セトを見上げた。

「セト、ちゃんと聞いて。もし予言の通りだとするのなら、私が生きていくせいで、封印に綻びが生じていることになるんだと思う。このまま私が生きていたら、無貌アトクの悪魔がこの世に出てきてしまうかもしれないの。ナンや地エンキの王、イムルードたちが必死になって守っているものを、私が無駄にしてしまってもいけないのよ」

セトは、怖い顔で私を見つめていた。

やがてセトが、静かに口を開く。

「だったらなんだ。無貌の悪魔が地上に出てきたら、どうだって言うんだよ。そんなこと、俺には関係ない」

「セト！」

私は、非難するようにセトの名前を呼んだ。しかし、セトは揺るがなかった。

「ヒト、ハールマーさんが言った言葉、覚えてる？」

私はすぐには思い出せなかった。

「ハールマーさんは、もし死魔の王様が地上に出てきたら、その時は、斃せばいいだけの話だって言ったんだよ。俺も、その通りだと思っ」

セトは、痛いくらいに私の両肩を掴んだ。

「ヒトは、ナンが犠牲にならないために、今まで必死になってやってきたくせに、なんで自分のこととなると、そんなに簡単に降参しようとするんだよ。犠牲になるのが、ナンから、ヒトに変わったからって、イムルドが、地の王が、ナンが、皆が納得するとも思ってるのか！？俺たちは、誰も犠牲になんかならないために、頑張ってきたんじゃないのかよ！」

「セト……」

「ヒトが、それでも自分が犠牲になるって言い張るなら、俺も一緒に死ぬ。俺のこと殺してから、勝手にしろよ」

私は、息を呑んだ。

「残されるほうの気持ち、少しは考えてくれよ、頼むから」

言っつて、セトがクシャリと顔を歪めた。

「ヒトがない世界なんて、俺には何の意味もない。そんな世界に、未練なんてない」

言いながら、セトが私の頭を引き寄せ、口づけてきた。

唇を離すと、私を覗き込む。

「俺は、ヒトのためなら、何だってできる。ヒトが死魔の王様を斃してくれっつて言うなら、絶対に斃すから。頑張る前に、全部一人で、

完結したりしないでくれよ。死魔の王様なんて、全然怖くない。俺にとつては、ヒトがいなくなるこの方が、ずっと怖いんだ」

「でも」

その先を、セトが口づけで塞いだ。

深く口づけてから、ゆっくりと唇を離す。

「もしもの話だよ。もしこの先、封印が破れたとしても、それはヒトのせいなんかじゃない。俺のせいだから」

「セト……」

「ヒトが、一人で罪悪感を背負う必要なんてない。俺も一緒に背負うから、だから一緒に頑張ろう?」

セトが私を覗き込んでくる。

「俺だけじゃない。きつと、イムルードだって、ナンだって、ハーメルムさんだって、ヒトのためなら頑張ってくれるよ。こんなに頼りになる人たちが、そばに付いてるっていうのに、弱気になんかなるなよ」

セトの言葉に、鼻の奥が、ツンと痛くなってきた。

「だって、怖い。私のせいで、誰かに迷惑がかかるのかもしれないと思うと、怖い。みんなが、私のせいで危険な目にあうかもしれないと思うと、怖くてたまらないの」

セトがため息をついた。

「ヒトは、自分のこととなると、本当に臆病なんだから。ヒトのためなら、多少の危険なんて、どうってことないよ。きつと、みんなだってそう思ってる。ヒトだって、誰かのために頑張ってる時は、多少の無茶くらい平気でしてるだろ? そんなこと言ったら、ヒトが、イムルードの事、水臭いって思ってるみたいに、みんなだって、ヒトの事、水臭いって思うはずだよ」

私は、セトを見上げた。

「私、みんなに迷惑かけてもいいのかな?」

「迷惑だなんて思うわけないだろ。ヒトを助けることは、俺たちにとつては当たり前のことだ」

セトが、額に口づけてきた。

「頼ってくれよ、俺たちを。自分一人で、何とかしようなんて、絶対に思わないでくれ」

私は、その言葉に、くしゃくしゃに顔を歪める。セトの首にしがみついて、思い切り泣いた。

セトは、何度も私の頭を、背中を、宥めるように優しく撫でる。

いつも孤独から救い上げてくれる、セトの温かい手に、私は、酷く安堵していた。

その後、私は、泣きはらした顔で、トールたちに合流したのだが、トールもラウシュも何も言わなかった。

私は、セトの手を握りしめたまま、2人に話したいことがあると伝えたのだが、今、無理に言う必要はないと、トールにやんわりと断られた。

「そんな動揺した顔で、何か重要な話をするべきではないよ。話したいのなら、もっと自分自身で受け入れることができたら話さない。いつでも聞いてあげよう。罪悪感でいっぱいだと顔に書いているような話を、ここで無理にする必要もないだろう」

トールが、私をそう窺めると、ラウシュが手を伸ばして、私の頭を撫でた。

「お嬢ちゃん、その話とやらを、聞こうが聞くまいが、俺たちは変わらぬ。俺も、したくない辛い話を、聞きたくないからな。人間、誰だって秘密の一つや二つ抱えているものだ。何もかも、全部をぶちまける必要はないさ。誰にも打ち明けられないで、煮詰まってる話なら聞いてもいいが、もうその必要もないんだろう？」

ラウシュは、セトを一瞥してから私を見る。

皆の温かさに、私は、また涙が出そうになった。

事実が事実だけに、ラウシュの言葉を、素直に受け入れることは、躊躇われた。

でも、今のこんな不甲斐ない私を、こうして受け入れてくれる人たちが、確かにいるのだ。

逃げ出したくても、逃げ出せない事実。

だったら、私は、頑張つてその事実を受け入れるしかない。

自分の気持ちに、ちゃんと折り合いがいたら、絶対に話そうと、私は心に決めた。

今もギョツと繋いでくれている、この手があれば、きっと私は大丈夫だ。

私は、大きく深呼吸を一つする。

やるだけの事をやってみよう。私には、支えてくれる人たちがいる。だったら私は、どんな険しい道のりでも、前に向かって進むしかないのだ。

「行こう」

セトが、私を安心させるように見つめながら、そう促した。

20 忌まれし子（後書き）

なんだかちょっと暗めな感じに突入していますが、最後はちゃんとハッピーエンドにします。

読み手の方には、つらい感じに映ってるようなので、一言加えました。

それから、別件なのですが、ヤンデレが嫌というかたがおられたので、なんとかそうならないようにと苦心しているところなのですが、これがなかなか難しい…。そこを意識すると、なんだか子供っぽくなってしまうって（セトが）。

せめて、ヤンデレにだけはならないように頑張ります。

1 聖なる塔にて その1

水路の終点は、鳶の絡まる狭い格子に塞がれていた。

ラウシユが慎重に周囲を探り、誰もいないことを確認すると、格子を力づくではずした。私たちは、そこから外へと這い出す。

そばには、厩があるが、人気はない。

「どうやら、無事に忍び込めたな」

トールが、小さな声で言う。

「君たちは、すぐにでもエ・ギザラに行きたいのかもしれないが、まずはナサレーを探すから、一緒に来なさい」

トールが、そう言って、私たちを見る。

「でも」

「でもではない。君たちだけで、そんなところに行かせるのは心配だ。私もついて行くから、少し待ちなさい。まずは、こちらの用事を、先にすませてからだ」

私は、心苦しかった。

私という存在は、トールたちの邪魔をも、しているのかもしれないのだから。

私は、唇を噛む。

「ヒトちゃん、君が何を気に病んでいるのかは、知らないが、私はね、自分の人を見る目には、自信を持っているんだよ。私は、一度信頼しようと思つて決めた人間を、簡単に見捨てるような真似はしない。大丈夫だ。ヒトちゃんは、ちゃんと私の眼鏡に合った人物なのだから」

トールが、私の頭を撫でる。

優しくされればされるほど辛かった。私には、そんな資格はないのかもしれないのだから。

私は、信頼してもらつて、値する人間ではないのかもしれないのだ。

トールが、そんな私を見て、苦笑しながら小さく息を吐く。
「わかった。吐き出したいことがあるのなら、これが終わったら、ちゃんと聞いてあげよう。今は、黙って私を頼りなさい。私は、少なくともヒトちゃんたちよりも、こういう場数を踏んでいるからね。頼りになるぞ」

「ヒト、トールさんの言う通りにしよう?」

私は、一度セトを見てからトールを見た。

「わかった。迷惑かけるかもしれないけど……」

「迷惑? そんなことはない。君が気に病む必要などないさ。それにしても、そんなに縮こまっていられると、からかうこともできないではないか」

トールが、私を元気づけるように言う。

ラウシユもそれに同意した。

「お嬢ちゃんがそんな殊勝なことを言っていると、こっちの調子まで狂うな。いつもみたいに、減らず口たたいてる。その方が、お嬢ちゃんらしくて、こっちも助かる。元気がないお前を見ているのは、どうも塩梅がよくない」

ラウシユが、居心地悪そうに首の後ろを掻いた。

私は、泣きそうな顔で笑った。

2人の優しさが、ただ嬉しかった。

城壁に囲まれた神殿内部の中央には、エ・ギザラがそびえ立っている。

そこからわずかに西に位置する居住区には、四角い主塔を中心に、城と呼べるような建物が存在していた。

トールは、手始めに、その主塔の地下にある土牢から、探しに行くと言った。

「ナサレーは、まかりなりにも、イサ殿の弟子だ。土牢などに捕まっているとは思いたくはないが、可能性の一つのうちで、最悪なも

のから潰していこう」

「やっぱり、ナサレーは捕まっているのかな？」

私は、思わずそう呟いていた。

「トールが小さくため息をつく。

「捕まっている可能性が高いな。あるいは、自分の意思で残っているという可能性もないわけではないが…可能性としては薄いだらう。ナサレーは、誤解されやすいやつだが、決して人を裏切ったりするような男ではない。私はナサレーを信頼している」

トールの言葉に、ラウシュも頷いた。

「トールを先頭にして、私たちは歩きだす。

私は、ナサレーを思い出していた。

ナサレーと別れた時に、私は間の子であることを告げてある。ナサレーに会えば、拒絶されるかもしれない。そのことは覚悟しておこうと思った。

表情の曇った私の頭を、不意にラウシュが撫でる。

ラウシュが、私だけに聞こえるように、小さく囁いた。

「そういえばお嬢ちゃん、言い忘れていたが、俺はちゃんとナサレーから聞いているぞ。だから安心しろ」

何を、とは言わなかったが、真っ直ぐに向けられるラウシュの視線から、私は、彼の言わんとすることを察することができた。

たぶんラウシュは、私が間の子であるユインことを知っていると知っているのだ。

私は、呆然とラウシュを見返す。

「だから、気に病むな」

大丈夫だとラウシュが続ける。

私は、少しだけ心が軽くなった。

「ありがとう」

ラウシュは、力強く私の頭を撫でることで、返してきた。

建物に忍び込むと、すぐに神殿騎士数人と出くわしたが、ラウシュとセトが、声をあげさせる間もなく、気絶させる。騎士たちを縛

り上げ、猿ぐつわを噛ませると、物影に押し込んだ。

私たちは、主塔を下る階段に差し掛かっていた。

明かりのない薄暗い階段を、私たちは、息をひそめて下ってゆく。下るにつれ、湿気が強まり、悪臭が漂いはじめていた。

やがて、狭い階段の先に、薄明りが見えはじめ、何やら人の話し声が聞こえてくる。

慎重に扉に近寄り、中の様子をうかがうと、床板を上げ、ぼつかりと空いている穴の中を覗き込みながら、騎士たちが何かを囁し立っていた。

一人の騎士が、片手で鼻をつまみながら、もう一方の手で、穴の上に皿を掲げている。

「ほらよ、食事だ。這いつくばって食べるがいい」

皿を持っていた騎士が、そう言うと、皿をひっくり返し、中身を穴の中に向かって捨てた。

「どうした、食べないのか？　いつまで、その強がりかもつのか楽しみな」

穴の中にいる誰かを、皆で嘲弄しているようだ

騎士たちは、下卑た笑いを浮かべながら、床板を塞ぐ。

床板の上に机を寄せ、椅子を用意し、その上に腰かけはじめた。

穴の中に誰かがいると言うのに、わざわざその上で座っている風景に、気分が悪くなってきた。

いったいどういう神経をしているのだ、こいつらは。

ここは神殿ではないのか？　聖職者が、こんなこととしていいのか？

トールが、扉に手をかけ、ラウシュとセトに、目で合図する。二人は頷き、僅かに身を低く構えた。

トールが扉を引くのと同時に、二人は部屋の中に飛び込む。

騎士たちは、慌てた様子で椅子から立ち上がるうとしたが、腰の剣を抜く間もなく、昏倒させられたのだった。

2 聖なる塔にて その2

騎士たちを縛り上げ、部屋の片隅に押しやると、ラウシュが床板を上げた。とんでもない悪臭が、周囲に充満し、ラウシュが顔をしかめる。

トールが、壁際につけられていた松明を手にとって、穴の上で翳す。

トールは中を覗き込むと、一度軽く目を見開いたが、すぐにいつもの意地悪そうな笑顔を浮かべて、穴の中を見下ろした。

「どうだ、神殿騎士の奴らでなくて、安心しただろう？ 危険も顧みずに、助けに駆けつけてやった私に対して、感謝のあまり、礼の一つもしたくなってきたのではないか？」

Sっぽい感じで、トールが言いはじめる。

一緒に穴の中をのぞいていたラウシュが、何とも言えない表情でトールを一瞥してから、部屋の片隅に無造作に置かれていた縄梯子を用意しはじめた。

「三遍回って、ありがとございますと言ってみなさい。そうしたらそこから助けてやるわ」

「トール師団長、いい加減にしてください。ナサレー、怪我はしてないか？ 登れるか？」

ラウシュが言いながら、縄梯子を下ろす。

穴の中を覗き込むと、ナサレーが、射殺さんばかりの眼差しで、トールを睨みつけていた。

トールは、素直じゃない男だ。さっきまでは、あんなに心配していたくせに。

ナサレーは、手枷をされていたが、無言のまま、器用に縄梯子を登りはじめた。

手の届く位置まで到達すると、ラウシュがナサレーを引っ張り上げる。

ナサレーは、思いつきりトールを無視したまま、私を見た。

「何故お前がここにいる」

言いながら、セトに視線を移し、怪訝な表情をした。視線が、誰だと言っている。

「話は追々にしよう。手を出せ、外してやるから」

ラウシュがそう言ってナサレーを促す。

ナサレーが、ラウシュの言葉に従い、手首を床につけると、ラウシュは、部屋の中で見つけ出した、先の尖った金槌で枷を壊しはじめた。

「ナサレー大丈夫だった？ 何で魔法使って逃げようとしなかったの？」

私の言葉に、ナサレーが忌々しそうに舌打ちした。

「女の尻ばかりを追いまわしている、どこぞ馬鹿が作り出した魔封具のおかげで、魔術を封じられていたのだ」

「魔封具？」

よく見ると、手枷には、見たこともない術が施されていた。

「ふむ、私としては、罪人や魔物の拘束用に作った物なのだが、まさか部下に対して使われているとは、思ってもみなかったな」

トールは、悪びれることなく言う。

「え？ これ、トールが作ったの？」

「そう褒めないでくれないか」

全く褒めてないんだけど。

ナサレーが、ギロリとトールを睨んだ。

「何故こいつがここにいるのだ」

視線はトールに固定されているが、言葉はラウシュに向けて発しているようだった。

ラウシュが肩を竦める。

「トール師団長は、お前を探しに来たんだ」

「余計なことを」

ナサレーが、忌々しげに舌打ちする。

「本当は、助けに来てもらえて嬉しかったのだろう？ 素直ではないな」

そう言ったトールの言葉に、あんたもね、と言いたいところだった。

ナサレーが、額に青筋を浮かべながらトールを睨みつける。

「では用が済んだのなら、さっさと帰れ。仕事なら山ほどあるだろう。目障りだ」

ナサレーは、ラウシュに手枷を外してもらうと、手首の動きを確かめはじめた。

「簡単に捕まってしまうような、不甲斐ない部下を、放つては帰れぬな。心優しい寛大な上司としては」

ナサレーは、再び額に青筋を浮かべる。

「もう同じ失態は犯さん。さっさと消えろ」

トールにそう言っていると、今度は私を見てきた。

「お前も帰れ。お前のような小娘が、ここにいるべきではない。ラウシュ、外に送り届けてやれ」

いつもなら、そういう言い方をされると、反抗したくなっていたところだろうが、今の私の精神状態は、普通じゃなかった。ナサレーの言葉に、思考が、急降下を辿る。

確かに、ここにいるべきではないのかもしれない。もしかしたら、私は、封印に悪影響を及ぼすような存在かもしれないのだから。

知らず知らずのうち、私の顔色は青ざめていった。

セトが、心配そうに覗き込んでくる。

ナサレーも、私の反応が予想外だったようで、驚いた表情になった。

「どうした？ お前らしくもない。熱でもあるのか？」

ナサレーが、私の額に触れようと手を伸ばしてくる。

それを、セトが威嚇して止めた。

「触んなよ」

するとナサレーが、面白くなさそうな顔をしてセトを睨んだ。

「…お前、何者だ」

「自分から名乗ることのできない礼儀知らずな奴に、答えてやる義理なんてない」

にらみ合うセトとナサレーを見て、トールが顎を撫でた。

「どこかで聞いたような台詞だな」

トールがそう言つて、ニヤリと笑つた。

ラウシュは、天井を仰ぎながら、ため息をつき、額を押さえる。

ナサレーは、舌打ちをした。

「小娘、体調が悪いのなら、尚更さつさと帰れ。ラウシュが送り届ける。くれぐれも、あの男のそばには近寄るなよ」

そう言いながら、ナサレーはトールを見た。

「ヒトは、帰つたりしない。あんたこそ一人で勝手に帰れよ。捕まつたあげく、助けてもらつておいて、礼の一つもできないやつが、偉そうなこと言つな」

セトの言葉に、ナサレーが凶悪な顔つきになった。

「口のきき方も知らぬようだな、小僧」

ナサレーが、低い声で言う。

「そっくりそのまま、あんたに返してやるよ」

セトもまた、低い声になつて言つた。

「こんなところで、喧嘩なんてやめろ。ナサレー、お前も素直じゃないのが悪い。本当は、お嬢ちゃんにも、トール師団長にも、危ないから戻れと言いたいんだろ？ 全く、言葉遣いには、気をつけるよな。だから誤解されるんだよ。セト、代わりと言つてはなんだが、俺が謝る。許してやつてくれないか」

「別にラウシュさんが謝ることなんてない。それに、俺はこいつの謝罪なんて受け入れない。ヒト行こう」

セトが私の腕を引いた。

「待て」

ナサレーが、もう一方の腕を引いて、私を止める。

私は、左右の腕を2人に捕まれるという、なんとも不思議な状態

になった。

2人は、私の頭の上で、お互いに睨みあっている。なんでこんなことになっているのだろう？

私の思考は、うまく働かない。

「どこに連れて行く気だ」

ナサレーが、苛立ったようにたずねた。

「お前なんか、教えてやる必要なんてない。手を離せよ」

ナサレーが、小ばかにしたように鼻から息を抜く。

「行くのなら、貴様一人で、何処へなりとも行け。お前こそ、その手を離せ」

セトが口を真一文字に引き結んだ。

そのまま、無言でナサレーに蹴りを放つ。ナサレーは、とっさに私の手を離し、後ろに跳んでよけた。

セトが、私の腕を引き、両腕で私を抱き込み、ナサレーを睨み付ける。

ナサレーは、翻ったセトの外套の内側を見ながら、僅かに目を見開いた。

「お前、獣人か」

「だったらなんだ」

するとナサレーが、再び小ばかにしたように見る。

「まさか、小娘が飼い主というわけではあるまい」

その言葉にカツとなったのは、私だった。

「ナサレー、あんた謝りなさいよ」

ナサレーは、無言で私を見る。

不意にラウシュが、後ろからナサレーの頭を掴んで押した。

「今のは、お前が悪い。謝れ」

ナサレーは、ラウシュの力に押し切られ、一瞬だけ頭を下げる格好になった。すぐに腕を振り上げて、ラウシュの手を躲す。

「ラウシュ！」

怒りに染まった表情で、ナサレーがラウシュを睨み付けた。

「悪いのはお前だ」

ラウシュが腕を組んでナサレーを見返すと、ナサレーは口を引き結んでそっぽを向いた。

「やれやれ、ナサレーも大人げないな。セトくん、ナサレーは、こういう風にしか意思疎通ができない、困ったやつなんだ。悪意はないので、赦してもらえないだろうか。この不甲斐ない部下に代わって、上司である私が謝罪しよう。申し訳なかった」

トールが、右足を軽く後ろに引き、右手を胸に添え、左手を水平に伸ばす。膝を沈め、僅かに頭を下げて、貴族流の謝罪のかたちをとった。

「トールさん、自分の不始末は、自分で責任を取らせた方が、本人のためだよ。こういう手合いは、甘やかさない方がいい」
セトが痛いところをついた。

ナサレーが、大きく舌打ちする。苛立ったような様子で、セトに背中を向けた。僅かに顔だけを振り返らせる。

「悪かった」

ぶつきらぼうに言い置くと、そのまま部屋を出て行った。

ラウシュとトールが、驚いたように顔を見合わせる。

私自身も、まさかナサレーが謝るとは思わなかったので、驚いた表情になった。

そのままセトを見上げる。

「セト、許してあげて」

「……ヒトが…そう言うなら…」

セトは、心底嫌そうな顔をしたが、最終的には不承不承頷いたのだった。

3 聖なる塔にて その3

「小娘、お前は、神殿に何の用があるというのだ」

ナサレーは、顔を前に固定し、階段をのぼりながらそう言った。

私は、僅かに視線を伏せる。

「エ・ギザラ天空の楔に用事があって…」

封印のことを考えると、腹の奥底がヒヤリと冷たく感じた。

本当に私はここに居ていいのだろうか？

私の選択は、間違っていないのだろうか？

私は、またしても、思考の迷路に迷い込みそうになっていたのだが、考えはすぐに中断された。

ナサレーが、私の言葉に、過剰なまでに反応して、勢いよく振り返るなり、私を怒鳴りつけたからだ。

「馬鹿か！？ お前は！」

ナサレーが、射すくめるような眼差しで私を見る。

「お前、自分が何者なのか、ちゃんと覚えているのか？ 聖塔の警備は、嚴重を極めている。その上、周りには、例の聖騎士どもがうるついているのだぞ。捕まって、なぶり殺しにでもされたいのか！？」

私は、ナサレーのあまりの剣幕に、息を呑む。

ナサレーが言っている聖騎士とは、たぶん私がユイン間の子であることを知っている騎士たちのことを、言っているのである。

確かに、レツエンや、イエンなどと言った聖騎士たちに見つかれば、問答無用に襲いかかられるに違いない。捕まりでもしたら、どんなことになるか、わかったもんじゃなかった。

「その用事とやらを言ってみる、私が済ませておいてやる。だからお前は帰れ」

ぶつきらばうに言い放つナサレーに、セトが大仰なため息をついた。

「本当に面倒くさいやつだな。トールさんが言う通り、悪意はないのかもしれないけど……。でも、ヒトの事、そんなふうに怒鳴るなよ。第一、お前なんかに済ませられるような用事じゃない。ヒトの事は俺が守るから、放っておけよ」

「小僧、お前が守るだと？ 笑わせるな」

「なんだよ、簡単に捕まっただよなやつに、そんなこと言われる筋合いなんてない」

「なんだと？」

2人は、またしても険悪な雰囲気になる。

「やめないか2人とも、まるで子供の喧嘩のようではないか」

トールが、ややあきれ顔で仲裁する。

「それよりもナサレー、お前、イサ殿とは、どんな話をしたのだ？ お会いできたのだろうか？」

そこでナサレーは、小さく息を呑んだ。そのまま、顔を前に戻す。トールが、軽く目を見開いた。

「まさか、イサ殿にお会いできていないのか？ だったら、何で捕まったりした？ お前を捕えられるような者は、そうはいまい。私は、てつきりイサ殿の手で捕えられたのかと思っていたぞ」

ナサレーは、無言のまま階段をのぼりはじめる。

「何か弱みでも握られたのか？」

トールの声に、ナサレーが、小さく舌打ちした。

「握られたんだな。いったい何を」

「答える必要はない」

「必要なら、あるだろう。お前が大人しく捕まるような弱点だ。今後、その弱点をつかれて、面倒なことになっては困る」

「いらぬ懸念だ」

「ナサレー」

トールが、僅かに声を低くした。

ナサレーが、口を引き結んだまま振りかえった。

「もう問題はない。それよりもラウシユ、早く小娘を神殿の外に連

れ出せ」

急に話を振られて、ラウシュが戸惑ったような表情になる。そこで、不意にトールが、何かを覚ったというような表情に変わった。

「もしかしてお前、ヒトちゃんを人質にとられていたのか？」

ナサレーが、大きく舌打ちをして、再び前を向く。

「え？ 私？」

私は、急に引き合いに出されて、目を瞬かせた。

ナサレーは、無言のまま階段をのぼりはじめる。

「やれやれ、そうなんだな。大方、ヒトちゃんを捕まえてあるとか、彼女の命が惜しくば大人しくしているとかが、そんなことでも言われたのだろう」

ナサレーは、無言のまま振り返らない。

「そうなの？」

私の言葉に、トールが肩を竦めてみせる。

私は、手を伸ばして、ナサレーの服を掴んだ。ナサレーの足が止まる。

「ねえ、ナサレー、それ本当？」

ナサレーが、大きなため息をついた。

「どうでもいいだろう、そんなことは。とにかく、お前がいると邪魔だ。外で待っている」

つまり、トールの言う通りであるということなのだろう。

ナサレーが、面白くなさそうな顔でトールを睨みつけ、再び階段をのぼりはじめた。

トールが、声を殺して、肩で笑った。

セトも、呆れたような表情で、ナサレーの背中を見る。

「なんか、とことん捻くれた性格してるね。あんた、絶対損してるよ」

「全くその通りなのだ。素直ではないのだよ、ナサレーは」

「知らないうちに迷惑かけてたみたいで、ごめんね」

私は、追いすがってナサレーに言う。

「お前には関係ない。謝る必要などない」

振り返ることなく告げられた言葉は、ぶっきらぼうだったが、ナサレー流の思いやりが感じられた。

「あのねナサレー、心配してくれているのは、ありがたいんだけど、私、帰らないよ」

ナサレーが再び振り返った。

「駄目だ、帰れ」

私は首を横に振って、ナサレーを見上げる。

「私、絶対にかえらない。私は、逃げないって決めたの。だから、帰らない」

私は、むしろ、自分にこそ言い聞かせるように、そう言った。心の中では、今でも決心が揺らぎ、グラグラしている。

けれども、逃げ出すわけにはいかない。今逃げ出したら、きっと私は、一生逃げ回ることになる。

私は、逃げてはいけないのだ。たとえそれが、どんなに残酷な現実であったとしても。

「強情な女だ。帰れと言ったら帰れ」

「嫌、絶対に帰らない」

私は、白くなるほど拳をギュッと握りしめる。

その手をセトがそっと握った。

私は、セトを見返す。セトが、優しい表情で頷いた。

「ヒトには俺が付いてる。大丈夫だ。だからお前は、余計な口出しするなよ」

後半部分は、ナサレーに向けて、セトが言う。

ナサレーは、スツと目を細め、セトを睨み返していた。

4 聖なる塔にて その4

「でしゃばるな小僧」

「お前なんかには、小僧呼ばわりされたくない。どうせ年だって、そんなに変わんないだろ。年上面なんかすんなよ、この嫌味魔人」

2人は、しばし睨みあった。

「まったく、微笑ましいというか何というか…。2人ともやめないか。今は喧嘩をしている場合ではないだろう」

それよりも、と言って、トールが続ける。

「イサ殿にお会いできなかったのは、どういうわけなのだ？ きちんとした手段で、面会を請うたのであるろう」

ナサレーが、セトから視線を外し、チラリとトールを見た。すぐに再び前を向いて、階段をのぼりはじめる。

「イサ様は、どうも聖塔に籠りきりになっているようだ。はっきりと突き止めることはできなかったが、漏れ聞こえた騎士たちの話を総合すると、そういう結論になる。サヴァン大神官は、やはり臥せっておられるようだ。どこか神殿とは別な場所で、養生しているらしい。容体などは、誰も知らぬようだ。騎士たちも怪訝そうな様子だった」

私は、ナサレーの言葉に引つ掛かりを覚えていた。「サヴァン大神官」という言葉を、どこか別な場所で聞いた覚えがあったことを、唐突に思い出したのだ。

いったいどこで聞いていたのだったか…。思い出せない。

「イサ殿は、お前がここに居ることをご存じなのか？」

「さあな」

ナサレーが、皮肉気に鼻から息を抜く。

「あの方のことは、私などの手には余る。御心がどこにあるのか、見当もつかぬ」

ただ、と言って続ける。

「この一連の所業を、お許しくださいさらな事だけは確かだな。神殿への侵入が見つければ、ただでは済まぬだろう」

「それは、百も承知している」

トールも真面目な顔で頷いた。

ナサレーが、不意にトールを見た。

「師団長、私はお前に伝えておかねばならぬことがある」

トールが、なんだという表情で、ナサレーを見る。

「私は、混血だ。私の体には、魔物の血が流れている」

ラウシュが驚いた表情でナサレーを見た。何か言いたそうに口を開いたが、再び閉じて口を引き結ぶ。そして、トールを見やった。

トールは、軽く目を見開き、ナサレーを見つめている。

私とセトは、思わぬナサレーの告白に、驚いて、呆然と立ち尽くしていた。

やがてトールが、かすかに笑った。腹の奥に一物もない、純粹な笑顔だ。

「そうか」

短く答えて小さく頷く。

ナサレーはというと、トールの態度に、どこか拍子抜けしたようだった。

私も、トールの態度が不思議でならなかった。

トルバディアの人間は、「魔物」を嫌っている。間の子であることを告白して、それをこんなに簡単に受け入れられるとは、思ってもみなかったのだ。

ナサレーは、トールを見たまま続ける。

「私の体に流れる魔物の血の存在を知らしめたのは、イサ様だ。あなたの方は、目が不自由であられるが、しかし、この現世を、見ることでできぬその代わりに、類まれなる能力を備えておられる。あなたの方は、人の本質を視ることができるのだ」

「イサ殿なら、そういうことも在りうるだろうな。あなたの方は、本当につかみどころがない。しかし、ナサレー、いったいそれがどうし

たというのだ」

「どうもせぬ。ただ言っておきたかっただけだ」

言いながら、ナサレーは、再び前を向いて、階段の先を見上げた。「私は、いわば籠の鳥。無碍なるものが、自ら進んで、籠に捕らわれる必要はない」

搔き消えそうなほど小さく呟かれたその言葉に、私は、顔を上げた。

つまり、ナサレーは、私に言いたかったのだ。

イサという人に会えば、間の子であることが知られてしまう。そして、その人に捕まるかもしれないのだと言っているのだ。

セトが私の手を握りしめた。

心配そうに覗き込んでくるセトの目を見返し、私は大丈夫だと小さく頷く。

「ふむ、では私も少し話しておかねばならぬことがあるな。少々長くなるであろうから、ここではなく、外に出てから話そう」

トールがそう言っただけ私たちに促す。

私たちは、無言のまま階段を上り、主塔の外へと出た。

中庭の茂みに身を隠し、銘々に座り込む。

「さて、どこから話したものか、難しいな」

トールが、腕を組みながら、右手を顎に添える。

「そうだな、まずは、魔物について少し話そう。これは、私の父が、白き賢者より伺ったご高話だ」

「イムルードから？」

「そうだと行って、トールが頷く。

ナサレーがため息をついた。

「白き賢者の御名を呼び捨てにするなど、どこまでも無礼な女だな」
ナサレーの言葉にトールが笑った。

「ヒトちゃんと、セトくんは、白き賢者の養い子なのだ」

その言葉に、ナサレーがしばし絶句する。

「こいつらの…養い親だと？ 白き賢者がか？ それが事実である

とすると、白き賢者というのは、そうとうな変わり者のようだな。お前たちのようなものを育てたというのだから」

この時ばかりは、ナサレーの皮肉が嬉しかった。イムルードは、賢者様なんて柄じゃない。このくらいの評価がちょうどいい。

「そうよ、イムルードはただの変人なの。賢者様なんて柄じゃないのよ。実物見たらわかるわよ」

トールが、再び笑う。

「そうだな、私も是非一度お目にかかりたいものだが、中々その機会に恵まれぬ。しかし、私の父は、拝顔の栄に浴し、お言葉をも頂戴する機を得たのだ」

トールは、表情を改めた。

「白き賢者は、こう仰ったそうだが、魔物と括られているものたちには、大きく分けて二つの種族が存在する。その二つの種族は、根本を別ち、対極に存在するもの。その一つをアジールと呼び、冥府に就縛されし姿なき悪魔の眷属である。今一つをレトウと呼び、アウル神が属する、太古の昔、人間が神とあがめていた種族であるのだと」

5 聖なる塔にて その5

「魔族が神と崇められていた…？」

私は、とっさにクロウの言葉を思い出ししていた。クロウも、同じことを言っていた。

それが事実であるとなると、クロウは、いったい何者なのだろう？
クロウは、どういう意図があつて、私にそれを教えたというのだ？
「そうだ。白き賢者が仰るには、レトウの存在は、歪曲されている
そうだ」

「歪曲…。誰が、何のためにそんなことをしたの？」

「白き賢者は、その禍根が、神殿にあるのだと仰っていた」
「神殿に？」

私の言葉にツールが頷く。

「神殿が、事実を歪め、今日の過ちのもとを作っている。王家の因習もまたしかり。事実を審らかにし、正しき在りように戻すようにと、白き賢者は、神殿と王家とに苦言を呈されたそうだ。しかし、結果として、両者ともに受け入れられることはなかった。その後、白き賢者は、事実上、トルバディアからの追放となり、今に至っている」

「そんなことがあつたの…知らなかった。だってイムルードは、何も言わないんだもの…」

「イムルードの場合、聞かなきや言わないだろうね」

セトの言葉に、私はため息とともに頷いた。

「それに、ほとんど家にもいないしね。…何だか私、随分と遠回り
していたみたい。今度会ったら、とっちめてやらないと」

ツールが、苦笑する。

「ヒトちゃんの話の聞いていると、白き賢者の御人柄が、よくわからなくなるな。私は、父から聞いた話でしか、存じ上げぬゆえ。どうやら、今までの心象とは大分違っておられるようだ」

「そうよ。そんなに神聖化してたら、本物見たらがっかりするわよ
トールは笑う。

「なれど、白き賢者の御言葉には、確かな感銘をつける」

「お言葉ねえ、ちなみに、どんなこと言ってたの？」

トールが、何かを思い出すように、遠くを見て目を細めた。

「私の父が、現役の魔道師団長であった、今からおよそ30年前のことだ。さきほど話したように、白き賢者が、神殿と対立をされた。その折、神殿と賢者の間を取り持とうと、トルバディア前国王自らが、席を設けられたのだ。私の父は、そこに参ずることを許され、その席での、賢者の御言の全てを聞いていたのだ」

「賢者よ。正しき在りようなどと…何故そのようなことを申される」

「神殿が、事実を歪め、過ちをひろめているからだ」

「魔物を、神と崇めていたことがあるなどと、どうしてそのような戯言を弄されるのか」

「魔物ではない、魔族だ。戯言などでもない。事実だ」

「では、その事実とやら、何を持って証とされるおつもりか」

「お前たちが、危害を加えぬというのであれば、魔族である我が友を呼ぼう」

「友！？ 魔物を友と申されるのか!？」

「魔物ではないと言っている」

「賢者よ、惑わされてはなりません。高等な魔物は、詐術をもって人間を誑かすといわれております。目を覚まされよ」

「誑かされているのは、王よ、あなただ」

「賢者よ、何と申される。なぜそのような頑なになっておられるのか」

「私は、事実を言っているだけだ。神殿が、正しき姿を歪めている。王よ、あなたこそが騙されているのだ」

「我らが騙っておるとは、聞き捨てならぬお言葉だ。いかに賢者と

「言えど、そのお言葉、看過なりませぬな」

「サヴァン大神官、あなたは真実を知りながら、なぜ歪めるのだ」

「歪めてなどおらぬ。我等は、神の意に従い、神の意を広めるのみ」

「何が神の意か。神殿のやりようは、事実を歪め、都合の良い命の選別をしているだけではないか」

「命の…選別…？」

「王よ、神殿の言いなりになるのは止めなさい。近親婚を止め、咎無き命を摘むことも止めるのだ」

「なんと！？ 刻印を持つ子を生かせと仰るのか、賢者よ。しかも、咎無き命とは如何なることだ。あなたは正気か？ 世界を滅ぼすおつもりなのか？ 如何に賢者の御言葉と言えど、承服いたしかねる。私には、この国を守る義務がある」

「世界は、滅びたりなどしない。王よ、悪しき因習を止めなさい。」

「悪しき習わしを止めることこそが、あなたの義務だ」

「賢者よ！ お気は確かか！？」

「王よ、あなたは自らの意思を持たねばならぬ」

「意思ならば持っている！」

「いいや、あなたは、神殿の傀儡だ」

「違う！ 私は 余は、神の代弁者。余は、神の御心に従うまで」

「では聞こう。あなたに神とやらの声は、聞こえているのか」

「神の声を聞くのは、神殿の役目。余は、神の言葉を民に示すのみ」

「それは、神の声ではない。あなたが信じているものは、神殿の声だ」

「賢者よ、痴れ言を申されるな。我は、真実、神の声を聴いている」

「サヴァン大神官、あなたは何故」

「賢者よ いや、魔道士イムルドよ。貴様が、神のお言葉

に、否を唱え、御心に背くというのならば、もはや金輪際トルバディアの地を踏むことを許さぬ。今までの功績に免じ、命ばかりは赦してやるう。なれど、今後余の前に姿を現さば、その命ないと思え」

「王よ、何故わからぬ。あなたは利用されているだけだ。王とは、民に尽くすもの。愚かにも偽りを信じ、民に過ちを広めるだけの存在であるならば、王などいらぬ。王がなくとも国は成る。正しきものを視る力のない者が、人の上に立つてはならぬ」

「イムルードよ、忌々しい魔道士め。今日だけは赦してやろう。しかし、二度とその顔、余の前に見せるでない」

私は、トールの言葉を聞いて、しばし呆然としていた。

イムルードは、咎無き命を摘むことを止めるようにと言っていた。そして、その咎無き命とは、どうやら刻印を持つ子供の事であるらしい。

そう言えば、刻印を持つ者は、王家の忌子であるのだと、トールは言っていた。

それは、つまり、私がトルバディア王家に所縁があるということになるのだろうか。

いいや、それだけではない。咎なき命というからには、刻印を持つ者は、本来は殺される謂れはないということになるのだろうか。

私の中に、僅かな希望の光がさした。

私は、今すぐにもイムルードに会って確かめたくなった。

「賢者の御言葉を、前国王が受け入れることは、とうとうなかったが、私の父や、その場に居合わせた臣下の一部には、確かな一石を投じることとなった」

トールが、一度口を引き結ぶ。

真つ直ぐ真正面を向いて、続ける。

「ただ一方的に、神の言葉であると教えられていたものが、真実神の声であるのだという確証を得ることは、私たちには、到底無理なことだ。すなわち、神の声とよばれるものは、偽りやもしれぬのだという懸念を、常に念頭に置きながら判断しなければならぬのだ」ということを、白き賢者は、身をもってお教えくださったのだ」

トールが、僅かに目を細めた。

「人は弱き生き物だ。生きていれば、進むべき道を迷うことは何度でもある。だが、迷ったからと言って、盲目的に何かに縋りつき、信じ込み、判断をも誰かにゆだねることは過ちだ。私たちは、迷って、時に道を間違いつつも、それでも己の手で、正しき道を探し出すべきなのだ。自分で探し出す前に、他人から示された道など、何の価値もない。何故、歩むべき道筋を、他人に決められねばならぬのだ。私たちには、道を見つけ出し、選び取る能力があるというのに」

トールは、塔を睨むように見上げた。

「人間の弱さに付け込み、教え導くふりをしながら、自分たちが管理しやすい世を作る。私たちに聞こえることのない声を利用し、人の心までもを、思うままに作り変えてゆく。私には、神殿のやり方が許せないのだよ。信じるという、人間の尊き心を、都合よく利用しているところに反吐が出る。作り変えられた心に、私たちの声は、なかなか届かぬ。逆に悪心と呼ばれ、排除しようとさえされる。しかも、言えば言うほどより頑なになり、増々声が届かなくなるのだ。神殿は、まさしく、人の良心をうまく利用しているものだ」

「トール……」

「詮無いことを言った。だが、これが私の本心だ。神殿などというものは、私にとっては、不要な存在だ」

トールが、私を見た。

「私たちは、心の中に、良き心と、悪しき心を併せ持っている。善人と呼ばれるも、悪人と呼ばれるも、全ては己次第だ。それでいいとは思わないか？ 己の選び取るもの次第なのだから。善人になりたいからと言って、何故、他者に縋る必要がある。自分の中に巣くう悪心に気づいているからこそ、真白きものに 自分には、なり得ようはずもない、完全なる善にすぎるところとするのかも知れないが、それは間違いだ。完全なるものなど、この世には存在しないのだから。たとえば、この世に、完全なる神が存在すると仮定

する。神話に語られるように、その神がこの世界を作りたもうたとする。しかしこの世には、良きものも、そして教義が否定しているはずの悪しきものも存在する。つまりそれは、完全なはずの神なるものが、未熟であるという証ではないか。その未熟なものの言葉を、何故、妄信的に信じていることができよう。選択肢の一つとして加えるくらいならばよいが、考えることをやめ、ただ鵜呑みにするなど、愚か者のすることだ。私たちは、きちんと自分の頭で考えなければならぬ。他人が考え出したものに、ただ追従するような安易なまねをしてはならないのだ。少なくとも私は、賢者の御言葉よりそう学んだ」

そう言って、トールは、今度はナサレーを見た。

「だから、私は、魔物が悪で、忌避すべきものであるなどという言葉、鵜呑みにしたりはしない。たとえナサレーの御先祖に、アジールなり、レトウなりが居たとして、だからどうだというのだ。私はお前がどんな人物なのか知っている。多少ひねくれたところはあがるが、友人思いで、決して人を裏切ったりしない、信頼に足る人物だと知っているのだからな。むしろ、誇りに思うべきではないのか？ お前のような人物が、この世に生まれるためには、その御先祖が必要不可欠なのだから」

ナサレーは、僅かに目を見開き、トールを見返していた。やがて、何かを考えるように、視線をわずかに伏せる。

「ひねくれ者のお前に、こんなことを言う日がこようとは、思いもよらなかったが、どうもヒトちゃん、の素直さに中てられたようだ」

トールが、かすかに苦笑しながら、髪を掻き上げる。

「中てられついでに、もう一言いわせてもらえば、私は、お前を信頼している。今までも、そしてこれからもな」

ナサレーが、トールを見返した。何かを言いかけたようだったが、口を閉じ、視線を外してそっぽを向いた。

照れているのだということは、一目でわかった。

私たち4人は、ナサレーに気づかれないうちに視線を一瞬だけ合

わせて、声を潜めて笑ったのだった。

6 聖なる塔にて その6

「それにしても、神殿は、なんでそんなことをしたのかしらね。神様だったはずの魔族を、神様じゃなくして、いったい何がしたかったのかしら？」

私の言葉に、トールが難しい顔で考え込む。

「はっきりとした確証はないが、アウル神のみを神としたかったのではないだろうか」

「アウル神を…？」

私は、とつさにクロウの言葉を思い出していた。クロウは、何者かが神を一つに作り変えたかったのだと言っていた。

トールの推測は、クロウの言っていたことに合致する。

「そうだ」

トールが、私の言葉に頷く。

私は、先ほど、訳も分からぬまま見せられた、翼ある男の姿を、脳裏に思い描いていた。

「アウル神で、王宮の天井に描かれていた、あの翼のある男の人の事でしょう？」

「宮殿大広間の天井画の事を言っているのか。そうだ、あそこに描かれているのは、有翼神アウルだ」

「有翼神：つまり天アヌールの使いなのね、アウルは」

私の小さな呟きを、トールは聞き逃さなかった。

「そうだ、アウルは恐らくアヌールだ」

「アヌール？」

ナサレーが、怪訝な表情で聞き返す。

私は、トールの言葉に驚いた。

「知ってるの？」

私の言葉に、トールは頷く。

「賢者のお話では、レトウには、二種族あるらしいな。本質が、地

に四足をつく容をしたエンイールと、大空を飛ぶ翼を持つアヌイールとがあると聞いている」

「エンイールにアヌイール…」

ナサレーとラウシユは、困惑気味な表情をしていた。

「この二種族の違いは、身体的な特徴だけではないらしい。エンイールは、大地に宿る癒しや再生の力を魔力として扱うことに長けており、アヌイールは、大空の大気に宿る破壊の力を魔力として扱うことに長けているそうだな。全ては賢者の受け売りなのだがな。何しろ文献を探したところで、そのような記述が載っている本など、トルバディアのどこをさがしても存在しない。それに、私は、アヌイールもエンイールも見ることがない。確かめる術など持つてはいないのだ。だから、私の父が、書きとめておいてくれた、賢者の御言葉を頼りとする外はない。しかし、そうだな　　ナサレーの話
を聞いて、今ようやく気が付いたのだが、もしかしたら、私の中にもレトウの血が流れているのかもしれない」

「トールにも？」

トールが頷く。

「よくよく考えると、私は癒しの魔法が得意だ。攻撃魔法が、使えぬというわけではないが、癒しの魔法には遠く及ばぬ。これは、ナサレーにも言えること。ナサレーは、攻撃魔法に特化しているが、癒しの魔法は、それほどでもない。つまり、推測だが、私の中にはエンイールの血が、ナサレーの中には、アヌイールの血が流れているということになるのではなからうか。そういえば、ヒトちゃんは、癒しの魔法は、からきしだったな。それは、ヒトちゃんの体の中にも、レトウの血が流れていて、アヌイールの血が色濃く出ている証拠ではないだろうか」

私は、トールの言葉を受けて、一度目を瞬いた。

「そうか…そうなんだ…。私、魔法の事については初耳だったんだけど、言われてみればそうかもしれない。私は、天の使いの血の混じった間の子らしいから」

ナサレーが、もの言いたげに私を見た。

私はそれに気づいたので、大丈夫だと小さく頷いて見せる。

「ユイン？」

トールが、聞き返してきた。

「混血の事をそう呼ぶの」

「混血のことか。しかし、アヌイルの…やはりそうなのか。地下の洞窟で、ヒトちゃんが使おうとしていた魔法は、ナサレーの魔術をも凌ぐような威力を孕んでいた。あれほどの魔法を扱える人間は、中々おらぬ。もしかやと思っただが、やはりそうであったか。この推測も、どうやら的外れなわけではないようだな」

トールが、一人納得した様子だった。

「ねえ、トール」

「なんだ？」

トールが、僅かに首を傾げながら私を見る。

「予言の事なんだけど…」

私がそう切り出すと、セトがハッと顔を上げて私を見た。

私は苦笑しながら頷く。大丈夫だという表情でセトを見返す。

セトは手を伸ばして、私の手を握りしめてきた。

本当に大丈夫なのだ。先ほどまでは、動揺していたが、今は大分落ち着いている。

間接的に聞いたイムルードの言葉にも、私は勇気づけられたのだ。イムルードが、刻印を持つものに対して、咎無き子と言ってくれたことに、私は確かに安堵していた。

そして、セトの言葉にも、トールの言葉にも勇気づけられた。

何が真実かなんて、今の私にはわからない。でも、悲観的な想像ばかりを膨らませる必要もないのだ。

イムルードの言葉を加味すれば、私の背中を印は、もしかしたら誰かによって、故意に悪と決めつけられているだけなのかもしれない。そう思えるゆとりができたのだ。

「古代の予言について、トールはどう思う？ 本当に刻印を持つ子

供は、殺されるべき存在だと思う？ それとも、生きていてもよい存在だと思う？」

私が、刻印を持っていることを、先に話してもよかったが、客観的な意見を聞きたかったので、今は、あえて伏せた。

でも、この後、どちらの答えがかえってきてても、私は、トールに真実を話す覚悟でいた。

トールは、両腕を組んだまま私を見る。

「私は、殺される必要などないと思っている。そもそも私は、現実主義者でな、予言などという不確かなものは、いまいち信用がならぬ。何やら神殿の手練手管に、騙されているような気がしてな」

ただ、と言つて、僅かに視線を下げた。

「不幸にも、刻印を持って生まれた御子たちには可哀想なことをした。我々の力が及ばぬばかりに、犠牲になってきたのだからな。狂信者どものやり口には、虫唾が走る。宗教というものは、得てして狂気を生む。正常な思考を奪い取られた信者自身は、その狂気に気づくこともできずに、愚行を繰り返すのだ。王家の因縁は根深い。殿下がいらっしゃったならば、あるいは、王家も変わったのやもしれぬが……」

そう言つて、トールは口を閉じた。

殿下？

引つ掛かりを覚えたものの、私は、先に告げるべき事実を告げることにした。

繋いでいるセトの手をギュツと握りしめる。

「トール、それからナサレーにも、ラウシュにも聞いてもらいたいことがあるの」

私の言葉に、三人が振り返る。

私は三人の顔を真っ直ぐ見据えながら、口を開いた。

「私の背中には、2枚の翼を広げたような痣があるの。この痣は、予言が言うところの刻印で間違いないのだと思う。つまり私は、古代の予言でいうところの「刻印背負いしもの」で、トールが言つて

いた、忌子なんだと思うの」

三人の目が、徐々に見開かれていく。

私の告白ののち、しばしの間、沈黙が流れた。

私には、逃げ出したくなるほど、その沈黙が怖かった。

けれども、逃げずに向き合えたのは、セトのおかけかもしれない。

？がれた手に、いつだって励まされているような気がしていた。

7 聖なる塔にて その7

私の告白に、三人ともが呆然自失の様子だった。

とくにラウシユは、私の話を聞く前から混乱気味だったので、全く思考が追いついていない様子だった。

そんな中、最初に回復したのは、トールだった。

トールが、呆然とした表情のまま、髪を掻き上げる。何度か目を瞬かせ、事態を飲み込むようなくさくさをしながら、視線をさまよわせた。

「そうか…、ヒトちゃんの様子がおかしかったのは、そのせいだったのか」

呆然と呟いてから、トールが私を見る。

私は、反射的にギョツとセトの手を握りしめた。セトが、安心させるように、握り返してくる。

トールが、強張った私の表情を見て、クスリと笑い、手を伸ばしてきた。

ギクリと身をすくませた私の頭を、安心させるように優しくなでてから、そつと頭を引き寄せる。私は、トールの胸に頭を凭せ掛けるようになかたちになった。

「大丈夫だ。君は忌子などではない。そんな心配をする必要はない」
優しく言われたその言葉に、思わず私の体から力が抜けた。

「そうだったのか、知らなかったとはいえ、傷つけるようなことを言つて悪かった。私の言葉が足りなかったばかりに、可哀想な思いをさせた」

トールが、そつといたわるように私の背中を撫でる。

「酷いことを言つて、済まなかった」

私は、トールを見上げた。

トールが、優しい眼差しで見下ろしてくる。

「君のような、健やかな心根の持ち主が、厭われるような存在のは

ずがない。つまりぬ心配などするな。予言などという死者の残滓に、惑わされてはいけない。君は今、ここに生きているのだからな」

笑顔のまま、どこか叱るように言われたトールのその言葉に、私は、思わず涙が一筋こぼれ落ちた。

心の中に蟠っていた罪悪感が、少しだけ許されたような気がした。まだ不安が無いわけではない。

でも、予言を知ってなお、自分の存在を許してくれる人がいたことに、私は心の底から安堵していた。

「私……不安で……不安で……。……よかった……」

私は、そう言って、自らの手で自分の顔を覆う。

トールが私の体を引き寄せた。

「不安にさせて悪かった。どうか泣かないでくれ」

安心させるように頭を撫でられて、私の涙腺は決壊した。

思わずトールにしがみつく。トールは、私が泣き止むまで、ずっと頭を撫でていてくれていた。

私の涙が落ちついたところ、ナサレーがポツリと呟いた。

「お前は、数奇な星のもとに生まれついていたのだな」

ラウシュも、その言葉に頷く。

「アウルの封印に、ウトナの予言、そして最後は刻印背負いしものか。正直、駆け足をしているようで、頭が働かん。けど、はっきり言えるのは、お嬢ちゃんが、何か引け目を感じる必要などないということだ。予言なんてもの、気にするな。そんなことよりも、正直、泣かれると、どうしたらいいのかわからん。いつもみたい、言いたい放題言ってくれていないと、こっちの調子が狂ってしようがない。早く元気を出せ」

ラウシュが手を伸ばして、私の頭をグシャグシャと撫でる。

私は、ゴシゴシと目を擦った。

「うん、辛気臭いことしてごめん。このところ、少し情緒不安定なの。でも、もう大丈夫だから」

言って私は微笑む。

トールが、ふと視線を上げて遠くを見た。

「刻印を持った子供が、このように健やかに育つことができたと知れば、殿下はさぞかし喜ばれたことだろうに、お伝えできぬことが悔しいな」

「殿下？ それ、さつきも言ってたわよね」

トールが私を見下ろす。

「殿下は、前王太子であった御方だな、王家の御血筋であられながらも、我が父の言葉に、真摯に耳を傾けてくださった。殿下は、白き賢者の教えを肯定し、父君であるヴェルテ王に、近親婚を止め、刻印を持つ御子を間引くことも、止めるようにと申し上げてくださったのだ。実際、王家の血は濃くなりすぎて、弊害が生じていたからな」

トールが視線を上げる。何かを思い出すように、その視線を細めた。

「年々、王家には、刻印を持つ御子が、生まれやすくなっていった。それに加えて、死産の増加、更には生まれた御子も育ちにくく、夭逝することが多くなった。それだけではない、先天的な奇形を持つ御子や、障害をもつ御子が生まれることも多くなっていった。王家は、アウルの血を引く尊き血筋と言われている。その血筋を絶やさんが為、いびつな婚姻を続けた結果なのだと、賢者は仰っていたそうだ」

トールが、再び私を見た。

「殿下は、閉塞的だった王家を開放し、新しき国造りを目指しておられた。だが」

トールが、そこで言葉を切り、苦笑した。

「人生とは、ままならぬものだな。運命とは残酷だ。あのよう**に**強き御方の御心をも、簡単に挫いてしまうのだから。殿下は、妻にと望まれた御方を亡くし、未来をも失くされた。失意のままこの国を去られ、消息は知れぬままだ。今頃どうされているのだろうか…。ご壮健であられればよいのだが…」

トールの眉根が、かすかに寄せられていた。

私は、トールの手をとった。

「大丈夫よ、トールが認めた人なんでしょう？ だったらきつと、ちゃんと立ちあがっているわ。人間で、確かに弱いけど、でも強いところもあるの。挫折しても、自分の心次第で、ちゃんと立ちあがることができる。だから、絶対に大丈夫。きつと、トールと、新しい国造りをするために、もっと強くなつて帰ってくるのよ、その殿下って人は」

トールが、私の言葉に、軽く目を見開いてから、笑顔になった。

「そうだな。私は、殿下をお待ち申し上げよう」

トールが、私の頭を撫でた。

「いつかお戻りになられる、ギエン殿下をお迎えするためにも、私は、私の為すべきことを成そう」

ギエン？

不意に聞かされたその名前に、私は眼を瞬いた。

どこかで聞き覚えがあった。

「ギエンさんて…もしかして…」

私は、確認するように、セトを振り返る。

すると、セトも驚いた顔で頷いていた。

「ギエン殿下を、知っているのか？」

トールの言葉に、私は曖昧に頷く。

「もしかしたら、ただ名前が同じだけなのかもしれないけど…。実は、傭兵家業をしている、知り合いの上司が、同じ名前なの。そうだな…年のころは30代半ば過ぎくらいで、金髪に青い目の、整った顔立ちの人だった。剣の腕が立つらしいわ」

トールが、驚愕に目を見開いた。

「…間違いない、殿下だ…」

トールが、呆然とした表情のまま呟く。

「そうか…ご無事でおられたのか…」

そのままトールは、何かをこらえるように、唇を引き結んだ。

そうかと、再び小さく声を漏らし、トールは、万感を秘めたまま

黙り込む。

嬉しそうに細められたその目を見て、私も同じ気持ちになった。が、ふと今のギエンの立場を思い出して、心が漣立った。

「トール、あのね、言いづらんだけど……ギエンさん、今レヴトリア軍にいるの。カルナス王の下で働いているのよ」

トールが、私の顔を見た。

私の頭を軽く撫で、了承とも取れる仕草をする。

「生きておられればこそ。私は、それ以上は望まぬ」

トールは、穏やかな表情で、力強くそう言い切った。

と、その時のことだった。

突如大地が、地鳴りを轟かせ、グラリと揺れだした。

塔が、軋みをあげて、グラグラと揺れはじめる。

私たちは、素早く視線を交わして、走り出した。

向かう先、聖塔^{エ・ギザラ}天空の楔からは、不気味な轟音が聞こえていたのだった。

7 聖なる塔にて その7（後書き）

補足

人間の近親交配については諸説あります。作中では、一応この説を採用させさせていただきましたが、この件について突っ込まれると、難しいことはお答えできませんので、一言ここに書かせていただきました。

8 ある男の傍白 その6

私は、薄暗い階段を下りきり、陰惨とした気配の漂う扉の前に立ち尽くしていた。

扉を開ける手を止め、じっと扉を睨めつける。

今日のこの日を迎え、胸には様々な思いが去来していた。

私は、事実から逃げ続けてきた己と決別するために、今日、この場所にやってきたのだ。

息を吸い込み、扉を押し開いた。

内側からは、腐敗臭が染み出してくる。

明かりの灯されぬ室内に、ひっそりと存在する寝台に目を止めたまま、私は、後ろ手で扉を閉めた。

壁に備え付けられていた蝋燭に火をとます。ほの暗い燭が、室内を照らし出した。

寝台の天幕は、そよとも揺れることはない。主が、目覚めているのかどうか　いや、生きているのかどうか、それすらも分からなかった。

私は、天幕をじつと見据える。

もはや戦の足音は、王都の間近まで忍び寄っていた。

今日まで主を、そして己を欺き続けてきたが、もはや猶予はなかった。

すでにギエンの所在も知れていた。同盟軍に身を置き、此度の戦に参戦していたのだ。

恐らくは、恨みからであるのだろうと思う。

私は、己自身に向けられているに違いない、男の怒りを、ひしひしと感じ取っていた。

いや、己への復讐のために参戦したなどという考えは、もしかしたら自惚れかもしれない。

時は、もはや15年も過ぎ去っており、あの時の出来事を、遺恨

と捉えているのは、己の罪悪感だけなのかもしれないのだから。

私は、苦笑った。

思えば、妹に手を付けたギエンを、恨みに思っていたが、妹が死なねばならなかった最大の原因は、己の愚かさなのだろうと、今では自覚できていた。

今までの生き方の、全てが否定されることになるであろう真実。

私は、その真実を突き付けられることに、ただ臆していた。

今までの、自分の行為が、無意味なものであったなどと、簡単に諾うことなどできなかったのだ。

己がしでかした過ちは、もはや取り消すことなどできはしない。

今はただ、己の愚かさがだけが悔やまれていた。

私は、目の前にある寝台を睨み据えた。知らぬ間に握りしめられていた己の拳を解き、天幕に手を伸ばす。

と、その時。

「レッエンか」

天幕の内側から、誰何する声が聞こえた。

私は、反射的に、伸ばしていた手を止める。

思いのほか、力強い声であった。

私は、応えるべき声を、出すことができなかった。

「外界は、どうなっておる」

いつもと変わらぬ、抑揚のない声で告げられる問いに、私は、答えぬ決心をした。

「サヴァン様、尊顔を拝したく存じます」

しばしの沈黙ののち、天幕の内側で、低く笑う声が出た。

私は、驚いた。主が笑う姿など、今まで一度たりとも目にしたことがなかったからだ。

「顔を見てどうする」

面白そうな声で、そう告げられる。

「私は、真実を知りたいのです」

「真実とな。忠実なる僕よ、汝の本分を何と心得ておる」

「本分……」

その言葉に、私は思わず苦いものがこみ上げてきた。様々な思いが、胸に迫ってきては、すぐに消えていく。それは、言葉に表すことの難しい、御しがたい感情の波だった。

だが、何もかもが消え去ったのちに、心の奥底に残ったのは、紛れもない怒りと呼べる感情。

「私の本分とは、いかなるものなのでしょう。私こそが、それを聞きたい」

「お前の本分とは、従うことだ。お前に課せられし、果たすべき義務とは、アウル神の御心にそって行動すること。雑念を捨て去り、神の御心に、従順であることだ」

私は、思わず拳を握りしめていた。

激しい怒りが、こみ上げてくる。

今ならばわかる。己は、何と浅はかだったことだろう。

私は、いつしか考えることを止め、下される使命を、こなすことだけに重きを置いていた。神の御言葉を信じきり、疑うことすらも忘れていた。

私は、知らぬ間に、人間として当たり前に備えている、様々なものを、もぎ取られ、都合の良い操り人形と成り果てていたのだ。

「私は、従順でした。いつそ滑稽なほどに」

ギリと歯を噛みしめながら、天幕を睨み付ける。

天幕の内側で、再び笑う気配がした。

「レッエンよ、お前は、迷っているようだな」

薄暗い室内に、力強い凜とした声が響き渡る。声は続いた。

「迷うな。迷えば、人は道を違える」

私は、再び拳を強く握りしめる。

「迷ってなど、おりませぬ。むしろ、己の進むべき道筋が、よつやく見えはじめました」

天幕の内側で、かすかな衣擦れの音がした。

「何が道か」

短く告げられた言葉は、恐ろしいほど冷たい気配を孕んでいた。

「人とは、愚かな生き物よ。導くものがなくば、ただ真つ直ぐに歩むことすらもできぬ。そのようなお前たちに、いかなる道が見つけれよう」

いつもの平坦な声とは明らかに違い、そこには、確かな感情の発露があつた。

「誤つた道を、勝手に進み、ただ災厄のみをまき散らす。傲慢で救い難い存在」

声色に宿るのは、明らかな怒り。

「愚かなお前たちには、標が必要なのだ。欲深く、罪深き愚かなお前たちには、至高なるただ一つの標こそが必要。我が使命は、アウルの御言を遵奉するのみ。お前たちは、その手足だ。神の御言に従え。お前の本分は、そこにこそある」

聖なる絶対の導。

かつての自分ならば、そこに疑問を抱く隙間など、微塵たりともありはしなかつた。

だが、今の己には、全てがいかかわしく感じられていた。

寝台の足元に落ちる、数枚の羽根を睨み付ける。

「何が、神の言葉か。 。 何が、本分か。 。 私には、神の声も聞こえなければ、姿すらも見えぬ。あるのは、虚飾に彩られた神の抜け殻のみ」

「抜け殻であるか?」

ヒヤリと、冷たい声が、投げかけられた。

「否、アウルは、確かに生きておられる。我には、彼のお方の声が、確かに聞こえている。我は、アウルがその身をなげうって守り抜いた世界を、守らねばならぬのだ」

天幕の内側から、白い腕がのぞいた。若々しい、張りのある腕だ。主の容貌は、齢100歳にとどこうかという、老体であつた。このように、若々しい腕など、持っていようはずがない。

反射的に、背中を這いのぼるものがあつた。

私は、腰をかがめて半歩引き、剣の柄に手をかける。

「我は、アウルに誓い申し上げたのだ。この身を捧げて守り抜くと」
天幕に両手がかかり、左右に開かれる。
中から、若い男の姿が現われた。

冷たい灰色の双眸を向けられ、思わず、冷や汗が流れはじめ。
人ならざるものであることは、一目でわかった。

「レツエンよ、お前は、ただ従えばよいのだ。迷えば道を違える。
恭順せよ。しからば道を違えることもない」

静かに告げられる絶対的な言葉に、流れ出す汗が止まらなかった。
屈服させるように向けられる眼差しを、私は黙って、ただ見返す
ばかりだ。

どれだけの時が流れたであろう。

突如として、地面が揺らぎはじめた。寝台が、グラグラと揺らぎ、
閉まっていた扉が開く。

男の視線が、私から離れ、壁の一点に止まった。

すると男の眼差しの中に、確かな驚愕の色が灯った。見えざる何
かが、見えたともいっているのであろうか。

俄かに、男の体が淡く輝きだし、容をかえはじめる。

私の目の前で、男の姿が、鷹へと変じた。鷹は、羽ばたき、低く
滑るように飛び去る。

私は、鷹の飛び去った扉を、呆然と眺めていた。

9 聖なる塔にて その8

グラグラと揺れ出した大地を駆け抜け、私たちは塔を目指す。

塔の周りには、警備に思われる騎士たちが、立ちつくしていた。おさまらぬ揺れに、戸惑いも露わな様子だ。

セトとラウシュが、走りより、あっという間に騎士たちを気絶させる。混乱し、ゆるんだ警備に乗じて、私たちは扉を押し開き、塔への侵入を果たしたのだった。

塔の中は、ひんやりと冷たい空気が満ちていた。

足元は、いまだ不安定に揺れ、懸念が募る。

この揺れの原因は、いったい何であるというのだろうか。たどり着いた思考の先に、私は身震いを覚えた。

脳裏に、ナンの姿が思い浮かび、純粹な焦燥感を覚える。

最悪の結末を思い描き、急いで頭を振った。

今は、想像だけで落ち込んでいるような場合ではないのだ。目の前の事に、集中しなければ。

私は、トールの後に従い、階段を下りはじめた。

「ねえ、トール、何で地下に向かっているの？」

「封印は、この先にあるのだ。地下にある至聖所二ハ・ル・キルシヤこそが、アウルの封印だ」

トールは、振り向くことなく答える。

「二ハ・ル・キルシヤ
…冥府の桎梏…？」

「至聖所」と呼ぶには、あまりにも不吉な名前に、思わず眉をひそめる。

無貌アトウの悪魔を押さえつける封印としては、適った呼び名かもしれないが、それを至聖所とするとは、随分と皮肉が込められているものだ。

誰かが、神様を作り変えていたのだという。

ならばその作り変えた者が、きつとこの皮肉をも作り上げたのだ

ろう。

不意に轟音が聞こえた。トールが足を止める。すぐ後ろを歩いてきたセトが、急に私を抱き込んで屈んだ。

俄かに、突き上げるような、突風が襲ってきた。石組みの塔の壁の一部が、パラパラと砕けて落ちる。

風をやり過ぎすと、セトが見下ろしてきた。

「大丈夫？ 怪我はない？」

私は、頷いて返す。

「やはり、この先で何かが起こっているようだな。皆、心して臨むように」

トールが、そう言って私たちを振り返った。

「ナサレーも、ヒトちゃんも、もう魔術を使つて構わんぞ。ただし、引き際だけは、きちんと見極める。無茶をしてはならん。いいな」
向けられたトールの眼差しを見返して、私は再び頷いた。

階段の先にあった扉は、破壊されていた。恐らくは、先ほどの爆風によるものだろう。

ぼつかりと空いた入り口をくぐり、中に入ると、数人の死魔と対峙する、一人の男の姿が見えた。

男を見た瞬間に、何故か背筋を這いのぼるものがあった。

男の眼差しは、固く閉じられている。見えざる目を死魔に定めたまま、無表情に手のひらを死魔たちに向けていた。

『同胞よ、何故我らに刃を向けるのか。お前の居場所はそこにはない。さあ、我らが手を取れ』

死魔の一人が、狡猾そうな笑顔を浮かべて、男にそう投げかける。同胞？

私は、疑問に思ったが、男は表情一つ変えなかった。

答えることすらもなく、手のひらの前に、炎の魔法円を呼び出す。魔法円から炎が放たれ、死魔たちに襲いかかった。

半数の死魔は、炎に焼かれ、残り半数は散り散りになって逃げる。死魔たちが、魔法円を呼び出して男を狙った。

男は、その魔法円を打ち消し、同時に炎の魔法を呼んで、死魔たちを焼き尽くす。

死魔を駆逐すると、男がゆっくりと首をめぐらした。

整った顔立ちの、まだ若い男だ。

おそらく、イムルードと同じで、男の年齢は、外見とは異なっているだろうことが察せられる。得体のしれない、異質な空気を纏った、奇妙な男だった。

「イサ様……」

ナサレーが息を呑んで、小さく呟いた。

「ナサレーか、何故そなたがここに居る。誰の許しを得て、ここに立ち入った」

感情のこもらぬ声で、イサと呼ばれた男が問いただす。

ナサレーが口を引き結んで、イサを見返した。

男の見えるはずのない目が、不意に彷徨い出し、私に止まる。

「そなたは」

イサは、そう言ったきり、見えざる目で私を見つめた。

やがて無表情だった口元に、かすかな笑みのようなものが浮かぶ。

イサは、私に手を差し伸べてきた。

「来い」

従うことが、当たり前だとも言うように紡がれる短い言葉。

私は、その言葉に、抗い難い磁力にも似た何かと、相容れることのできない受け入れ難い何かを、同時に感じ取っていた。

セトが私の前に立ち、イサから庇う。

セトは剣の柄に手を伸ばした。

「セトくん、ここで血を流してはいけない」

トールが、セトを諫めながら、間に割って入る。

「イサ殿、これはどういうことだ。先ほどの輩は魔物であろう。魔物が、何故このような場所にまで現われているのか。それに」

「トールが、一度そこで言葉を切り、部屋の足元を見やる。」

「封印がずいぶんと不安定になっているようだが、いったい何が起きているのだ」

「王宮の犬よ、お前に立ち入る許可を与えた覚えはない。去れ」

イサは、そう言って、手のひらを無造作に突き出してきた。

私と、トール、ナサレーは、反射的に無効化の魔法円を呼び出す。突如、まさに烈火と呼ぶのが相応しい、荒々しい炎が襲いかかってきた。

トールは、建物を考慮に入れて、上から覆いかぶせるように、魔法を遮断する。イサは、塔が壊れようとも、まるで関係がないというふうな、魔法の使い方をしていた。

静かな物腰とは裏腹の、狂暴な攻撃性。

どうやらイサという男は、二面性を持ちあわせているようだ。

そして私は、この男の不確かな正体に、薄気味悪さを覚えていた。この男は、人間ではないと直感が語っているのだが、死魔^{アジール}なのか、それとも魔族^{レット}なのか、判別がつかなかった。こんなことは、はじめでだった。

私の中に流れているという魔族の血は、同族の魔族とは呼び合い、死魔とは背離する。

直感的なものなので、言葉で説明することは難しいが、第六感と呼べる器官が、私自身にそう教えてくれるのだ。

だが、私には、この男の本質を、見極めることができなかった。酷く不明瞭で、どちらにも属しているような、そうでないような…奇妙な曖昧さが感じられるのだ。

炎の魔法がおさまると、イサが再び手を差し伸べてきた。

「間^{ユイン}の子よ。不完全なる未熟な存在。お前は、私の側にこそ相応しい」

気のせいだろうか、イサの言葉の中に、どこか乞うような気配が感じられた。

それに、よく見れば、無機的だったイサの表情に、僅かな感情のようなものも、うかがえる。

ただ、私には、その感情を読み取ることはできなかった。

私には、この男の求めるものが、まるで解らなかったのだ。

私は、じつとイサを見つめる。

と、その時。

「ヒトは、僕のそばにいる方が相応しいよ。ねえ、ヒト」

突如として聞こえた第三者の声を、私は驚きとともに振りかえつた。

声の主を見つけて、私は呆然と呟く。

「クロウ……」

漆黒の死魔は、嫣然と笑いながら、私たちを見ていたのだった。

「クロウ…なんであんだがここに居るのよ…」

私が呆然と呟くのと同時に、セトが動き出した。殺気を纏い、抜身の剣で、クロウに斬りかかる。

しかし、ツールが一喝してそれを止めた。

「やめなさい！ ここで剣を振り回すことは赦さぬ」

セトは、ツールの声に反応して、剣を振りかぶったままピタリと動きを止める。

だが、視線だけは、依然殺気を孕んだまま、クロウに定めていた。剣を握る手が小刻みに震えている。怒りが抑えきれないようだ。「おや？ 止めてしまうのかい？ つまらないな」

クロウが、クスリと笑いながらセトを挑発する。

「セト、挑発に乗ったりしたらだめだよ。剣をしまつて」

私は、セトの服を引く。セトは、唇の隙間から、長く息を吐き出して、体の強張りを解き、剣を鞘に納めた。

クロウが、ニヤリと笑ってセトを見た。

だが、セトは睨み返すだけで終わらせる。私を引き寄せて、一度だけギュッと抱き込む。

「ヒト、あいつの言葉には、絶対に惑わされるな。あいつの言うことは、もっともらしい、見せかけだけの言葉だ。素直に信用したりしたらダメだ」

そう言つと、私を離して自分の背後に庇った。

大地は、依然、断続的に揺れている。時間が経つにつれ、揺れが激しくなっているような気さえする。

これが、封印の綻びによるものだというのなら、早く何とかしなければと、気だけが急いた。

「坊やも、騎士気取りが、ようやく板についてきたようだな。それとも恋人気取りとでも言つたほうがいいか？」

セトの周囲の空気が、一気に殺気を孕む。私は、後ろからセトの手を握った。

セトは、クロウを見たまま私の手を握り返してきた。

「大丈夫だ。さっきは頭に血が上ったけど、俺はもう、ちゃんと場所をわきまえてるよ。あいつをやるのは、ここを出た後だ」

「実に頼もしい言葉だね」

クロウは、クククと笑ってセトを見る。

？いっているセトの手が、痛いくらいに握りしめられた。

「冥界の黒き智者よ、此度の件、やはりお前が関わっていたのか」

イサが、クロウに向けて、言葉を投げかける。

クロウは、口元に笑みを浮かべながら、馬鹿にしたような視線で、イサを見た。

「どつちつかずの出来損ないごときが、随分と邪魔をしてくれたものだ。しかし、それももう終わりだ」

クロウは言いながら、視線を私に移し、白い手を差し伸べてくる。差し出された、その手の中指に、指輪がはまっているのが目についた。以前は気にもとめなかったが、改めてこうして見てみると、どこかで見えたことのある指輪だ。

「ヒト、おいで」

恍惚とした笑みを浮かべながら、クロウが私を呼ぶ。眼差しには、確かな狂気が宿っていた。

反射的に、背筋を這いのぼるものがあつた。

軽口を叩きながらも、クロウの眼差しには、いつも見過ごすことのできぬ、深い闇が巣食っている。私は、いつだってその闇に、ただ純粋な恐怖を感じていた。

セトが、無言で私の前に立ち、クロウの視線を遮る。

「本当に、無粋な小僧だ。お前に用などないのだが」

「そっくりそのまま、お前に返してやるよ。死魔^{アシール}がヒトの周りをつるつくな」

セトが、威嚇するように叫ぶ。

「やれやれ、その生意気な口を封じてからでないよ、ゆっくりと話もできぬようだな」

クロウが、口の端を上げ、無造作に手のひらを向けてくる。手のひらの前に、巨大な魔法円が呼び出された。

私は、とっさに無効化の魔法円を呼び出す。トールとナサレーも、私の横に並び立ち、無効化の円を呼び出しはじめた。ラウシュもそばに立つ。

「お嬢ちゃん、この魔物を知っているようだが、ずいぶんと物騒な知り合いのようだな」

「知り合いなんかじゃないわよ。勝手に付け回されてるの」

トールが、私の言葉に苦笑した。

「ヒトちゃんは、随分と大変な奴に見初められてしまったようだな。ナサレー、気をつける。こいつは、今までの比じゃないぞ」

トールの言葉に、ナサレーが頷いて返す。

確かに、クロウのとてつもない魔力を、肌で感じる事ができた。クロウの呼び出した、巨大な逆五芒星の魔法円から、黒い炎が放たれる。炎は、轟音をあげながら襲いかかってきた。

イサが、炎の魔法円を呼び出し、クロウの炎にぶつける。

刹那、塔の石壁が、ミシミシと音をたてはじめた。

やがて石壁の一部が、吹き飛ばされる。そこを皮切りに、どんどんと塔の壁が崩れていった。とうとう天井までもが崩れ落ちはじめる。

「くそっ」

トールが舌打ちした。

トールは、足元に魔法円を呼び出すと、5人を守るように、ドーム型の障壁を作り出す。

障壁の外側では、クロウの炎とイサの炎が、再度ぶつかり合い、爆ぜた。

刹那、耳を覆いたくなるような爆音とともに、周囲のすべてが吹き飛ばされ、えぐり取られる。

天井も勢いよく吹き飛び、一拍を置いたのち、地鳴りとともに地面が揺れた。

ずっと断続的に続いている、あの揺れとは別な揺れだ。聖塔が折れ、大地に倒れこんだのだ。

2つの炎は、何もかもを破壊し尽くすかのように荒れ狂う。

やがて炎がおさまると、大地にぽっかりと空いた穴の中で、クロウが、澄ました顔で口の端を持ち上げた。

「ずいぶんと弱っているようだね。出来損ないのくせに、柄にもなく、封印の補強何て真似をするから、魔力が削がれるんだよ」

イサが、肩で荒い息を繰り返す。

「さあ、どうやって殺されたい？ 出来損ないごときが、僕の邪魔をした罰だよ」

クロウが、楽しげに目を細めた。

「そうだ、切り刻んで、ここを血の海にするっていうのも面白いかもね」

クロウが、うっとりときき、やがて、ゆっくりと手持ち上げはじめた。

「させないわよ」

私は、とっさにイサの前に跳びだす。

「ヒト！」

セトが、私を引き戻そうと、腕を掴んだ。けれども私はセトの手を振り払ってイサの前に立つ。

セトも一緒になって、クロウの前に立った。

クロウが、心底面白そうに笑う。

「ねえ、ヒト。そいつが何者だかわかってるの？」

「名前はイサ。ナサレーの師匠で、二重人格っぽい人」

短く端的に答えると、やっぱりヒトだねえと言いながら、クロウがクツクツと笑った。

「そいつはただの出来損ないだよ。そういえば、禁忌の証とも呼ばれていたねえ」

ヒヤリと冷たい笑いを浮かべながら言う。

「禁忌の…証…？」

私が聞き返すのと同時に、クロウが、何かに気が付いた様子で、不意に空を見上げた。

「おやおや、出来損ないの次は、死にぞこないが来たみたいだ」

つられて見上げると、空には、大きな鳥の姿が見えた。鳥は徐々に近づき、旋回しながら下りてくる。

やがて目の前に、フワリと着地し、大地に足をつけるその瞬間、鳥だったはずの姿を人へと変じた。

どうやら魔族のようだ。天の使いを間近でみたのは、はじめてのことだった。私は、新鮮な驚きを覚えていた。

私は、厳しい顔つきの、男の横顔をじっと見つめる。

何故かこの男に見覚えがあった。天の使いは、はじめて見るというのに、おかしなものだ。いったいどこで見たのだったか、すぐには思い出せない。

必死で記憶の糸を手繰り寄せていたところ、

「サヴァン様」

後ろで、イサが小さく呟いたのが聞こえた。

サヴァン？

アウル神殿の、大神官だというサヴァンのことだろうか。

「黒き悪魔よ。ここはお前ごとき輩の立ち入るべき場所ではない、去れ」

怒りをにじませた声で、魔族の男が告げる。

そう言えば、私は、サヴァンという名を、以前どこかで聞いていた。そのこともまだ思い出せてはいなかった。

待てよ、この男はもしかして

一つの切っ掛けとともに、不鮮明であった記憶が、突如として、次々と蘇りはじめた。

そうだ、この男を見たのは、誰かの記憶と思われる、白昼夢の中でのことだ。

アウルと思われる、天の使いの前に跪いていたあの男。それが、目の前のこの男だった。

あの時は、大層嬉しそうな表情をしていたので、すぐには目の前の男と結びつかなかったが、確かにこの男だった。

それに、私が、以前この男の名前を聞いたのも、夢の中での出来事だった。

私は、数か月前に見た、あの奇妙な夢を思い出す。

「では、認めるのだな、サヴァン大神官」

「王よ、真実を詳らかにすることが、果たして民のためになりましたよ。か。事實は隠されていたからこそ、千年の長きに渡り、今の安寧があるのですよ」

「詭弁だな。民のためなどと申して、その実、神殿のための安寧ではないのか」

「あなた方王家のための安寧でもあるのですよ」

「その安寧とやらのために、私は我が子を一人殺された」

「トルバディアの為です」

「なるほど、お前たち神殿は、そうやって真実を隠し続けてきたのだな」

「国のためです」

「ギエンは正しかった。間違っていたのは私の方だった」

「いいえ、あなたの判断は、間違っただけおられなかった」

「あれも、子を殺された。妻にと望んだ女もだ」

「国のためです」

「いいかげんにしろ！ 詭弁を弄するな！ 国のためなどではなからう！ お前たちの保身のためだ！」

「王よ、あなたは少し感情的になっておられる。もっと冷静におなりなさい。今さら真実を知らしめて、何になるのです。あなた方王家の人間が、忌むべき魔物の血を受け継いでいるなどと、民が知れ

ば、国は成り立ちますまい」

「アウル神が魔物であると、そう知らしめることこそを恐れているのではないのか？」

「アウル神は、魔物などではありませんね」

「そうか、それがお前たちの答えか」

「答えなどではありませんね。真実です」

「ならば、これが私の答えだ」

「……王よ、愚かなことはお止めなさい。私を殺したところで、何になるというのです」

「お前を斬って、過ちを正すのだ」

「過ち？ 私を殺すことこそが過ちです。目を覚ましなさい」

「目を覚ますのは、お前のほうだ」

「王よ、ここは閑寂なる封印の地。ここで血を流さば、この世界は終わりますしよ」

「欺瞞を是とする世界ならば、終わったところで、惜しくもあるまい」

「あなたは何もわかってはおられぬ。ここに眠るのは」

私は、脳裏に蘇ってきた夢の記憶を、呆然と思い起こしていた。

そうだ、数か月前に見た、奇妙なあの夢。

いや、おそらくあれは夢ではないのだ。

数か月前に見た夢も、洞窟で見た白昼夢も、たぶん、どちらも全てが現実には起きた出来事。

だとすると、思い出したばかりの、数か月前に見たこの夢は、目の前のサヴァンという男と、トルバディア国王の、実際のやり取りかもしれないのだ。

この2人が、いったい何を言い合っていたのか、私は思い出してみよう。

サヴァンは、王に対して、事実を隠していたから、千年の安寧があるのだと言っていた。

その事実というのは、どうやらアウルが魔族マツであるということのようだ。

王は、「魔物」と呼んでいたから、たぶん魔族と死魔アジールの違いは分かっているのだ。つまり、神殿によって歪められた教えのもと、王は、たぶんアウルの正体だけを知ってしまったのだろう。だから、怒っていたのではないだろうか。

そして王は、子供を殺され、ギエンは妻子を殺されていると言っていた。

きっと王の子供も、ギエンの子供も、私と同じ刻印を持っていたのだ。だから殺されてしまったのだ。

ギエンの妻の話は、トールの話とも合っている。

ギエンは、イムルードの言葉を支持していた。だから王とぶつかったのだろう。

きっと王は、その時、神殿の言葉を信じていたから、ギエンと決別することになった。でも、後になって、それを後悔しているのだ。

そして、サヴァンの言った通り、トルバディア王家が、アウルの子孫であることは、恐らく間違いはない。

白昼夢で見た、懐妊していた女性。あの人は、アウルの子を身ごもっていた。その子供が、おそらくトルバディア王家にかかわりがあるのだ。

本当のところ、アウルは魔族だ。

だが、王にとっては、魔族は魔物。

そしてトルバディア王家は、その魔物の血を引いている。

かいつまんで、知ってしまった事実、王は怒り、サヴァンにためよつたのではないだろうか。

最後に王は、サヴァンに斬りかかろうとしていた。

サヴァンは、この場所で血を流しては、世界が終ると言って、王を諫めていた。

それはつまり、あの時2人がいた場所は冥府の桎梏ニハ・ル・キルシヤなのだ。

そして、もしそこで血を流してしまっていたのだとしたら？

私の疑問が、氷解してきた。

前に、イムルードは、肝心な場所が、血の穢れを受けてしまったと言っていた。

つまり、そういうことなのだ。

あの夢の後、この場所は血の穢れを受けた。

だから封印に綻びが生じてしまった。

たぶんその原因は、目の前にいるこの男と、会ったこともないトルバディアの国王であるのに違いなかった。

私は、そう思い至り現実へと戻ってきた。

クロウが、侮蔑を込めた眼差しを、サヴァンに向けている。

「賢しい真似をして、人間を誑かしていたようだが、結果がこれとは残念だったね」

サヴァンは、凍えるような眼差しをクロウに返す。

「誑かしてなどおらぬ。我は愚かな人間を、教導いてやっていたまで」

「へえ、導くとはまたご大層なことだねえ…。まあ、お前がやったことで面白かったのは、魔族と死魔を同じに扱ったことさ。あれはいまだに理解に苦しむよ。自分たちの首を、自分で絞めるというのは、いったいどういう見だったのだい？ 殺してしまう前に、是非聞いておきたいね。ヒトも、それが知りたいのだろう？」

クロウが、言いながら私に視線をよこす。

サヴァンの視線が、それを辿り、私を捕えた。

「間の子か」

「美味しそうだろう？ あれは私の物だから、手を出すなよ？」

クロウの口元が、弧を描く。

サヴァンが、それを厭うような眼差しで見た。

「黒き悪魔よ、お前に、この場所を穢させはせぬ」

サヴァンが、手のひらをクロウに向け、魔法円を呼び出しはじめた。

呼び出しはじめた魔法円を見て、私は驚く。あの魔法円は。

「フッフ、いいのかい？ これを御覧よ」

クロウが、指輪をはめた拳を突き出してくる。

クロウの白い手には、古びた指輪がはまっていた。

サヴァンの表情が、驚愕に変わる。

「天魔の揺籃」

貴様」

サヴァンは、ギリリと歯ぎしりをする。呼び出していた魔法円をかき消す。

クロウが、満足そうにそれを見た。

「アウルみたいに、人間に懸想した馬鹿な王を、たった一つの神様にするなんて、まったく呆れるねえ。随分愚かな神が居たものだ。笑ってしまうよ」

クロウが、ニヤニヤと笑いながら、指輪を撫でさする。

「アウルを愚弄することは赦さぬ」

サヴァンの言葉に、クロウが、鼻の頭にしわを寄せた。

「全く、反吐が出るよ、その自己陶醉と同等の忠義面には」

クロウが、表情を一変させて、目を細めて私を見る。

「ねえヒト、人間も、魔族も、愚かだとは思わないかい？」

気持ち悪いほど優しい声音でそう告げる。

「魔族であるこの男は、人間のふりをして、こうやって事実を平気で捻じ曲げたんだよ。しかも、馬鹿だと見下す人間に目隠しして、導いてやるなんていう傲慢な視点から、自分の好きな方向に勝手に引っ張っていったんだ。ずるくて酷いやつだとは思わない？」

クロウが、同意を促すように私を見た。

「そして、人間も馬鹿だ。人間は、自分の利のためなら、平気で嘘をつき、裏切り、打算を働かせる。相容れぬものは排除し、都合の良いものは迎合して、自分の保身のみを図る。結局可愛いのは自分だけ」

クロウが、私をじつと見る。

「なのに、世界のためとか、国のためなんてきれいごとを並べ立てて、それを理由にして、平気で罪を重ねていくんだ。実に、狡賢い生き物だよ、人間は。君と同じ境遇にあった者たちは、みんなそうやって犠牲になって排除されていったんだ」

酷い話だよねえと言いながら、クロウが私に同情するような眼差しを向けてくる。

「世界のため？ 国のため？ そんなのは建前だよ。結局自分の身がかわいいからそうしたんだ。本心では、自分が助かりたいだけのくせに、御大層なきれいごとを並べ立てて、表面的には自分を正当化して、そうやって自分の犯す罪には蓋をしようんだ。まったく自分勝手なことだ」

クロウが、口元に笑みを浮かべながら私を見る。

「そんな奴らを、守ってやるなんて、バカバカしいとは思わないか？ そんなやつらの勝手のおかげで、君と同じ刻印を持っていたものたちは、今まで殺され続けてきたんだよ。君たちは、無辜なるただの犠牲者だ」

クロウの言葉に、サヴァンが私を見据える。

「刻印だと？ まさかお前は」

「ほらね。また君は、こうやって虐げられるんだ。ただ刻印を背負って生まれてしまったというだけでね。こいつは愚か者だ。アウルが死に際にほざいた星読みを、後生大事に覚えていて、勝手な解釈で、いまだに罪を犯し続けているんだから」

「黒き悪魔よ、好きにぬかすがよい。しかし、お前は看過

ならぬ。まことに刻印を持っているのか」

サヴァンが、恐ろしい顔つきで、私に向かって一歩進んできた。

セトが、威嚇するように立ちはだかる。

「ヒトちゃん、まさかこの男、サヴァン大神官なのか？」

呆然としていたトールが、我に返ってたずねてくる。どうやら、イサの呟きは聞こえていなかったようだ。私は、頷いて返す。

その返事に、ナサレーもラウシユも、驚愕の表情で固まった。

「サヴァン大神官が…魔物…？ いや、アヌイールと呼ぶのか？」

ナサレーが呆然と呟く。

「刻印を背負いしものが、生きていてはならぬ」

サヴァンが手のひらを向けてきた。巨大な魔法円を呼び出す。先ほど、クロウに向けて呼び出そうとしたものとは、別の種の円だ。

私は、無効化の魔法円を呼び出す。

サヴァンの呼び出した魔法円から、炎の渦が放たれた。

12 聖なる塔にて その11

サヴァンの放った炎が、激しい勢いで襲いかかってくる。

私は、その炎を、無効化の円で防ぎきった。

トールが一步進み、サヴァンを見る。

「サヴァン大神官　で間違いないのですよね……。この子には何の咎もない。これ以上無意味な殺生はやめられよ」

「咎がないだと？　勝手なことを。貴様は、親子ともども、白き魔道士に毒されているようだな。人間ごときが、我に指図をするな」

サヴァンは、トールを恫喝した。

サヴァンは、魔法を使ったと同時に、息があがり、どこか体調が悪いようにもみえる。冥府ニハルキルンヤの桎梏で血を流したのは、このサヴァンなのかもしれない。

「お前は、刻印を持っているのか　。なれば、屠るより仕方がない。惜しいな」

そう言って、イサが背後から攻撃を仕掛けてくる。

ナサレーが、魔法円を呼び出して、それを止めた。ナサレーは、イサを正面から見つめる。

「イサ様、あなたは私を、理からはずれた、歪んだ存在であると教えた。私自身も、その言葉を信じていた。自分の体の中に流れる魔物の血が、厭わしく、そして恐ろしくもあつた。私は、今までその事実から目を背け、ただ逃れ続けてきたのだ。だが　」

ナサレーは、一度そこで言葉を区切り、私を見る。そして、口の端をわずかに持ち上げ、何かを吹っ切ったような表情になると、再びイサを見た。

「だが、私はもう事実から逃れることをやめた。事実、事実として、受け入れよう。どんなに言葉をつくしたところで　　どんなに逃げ続けたところで、事実が変わることなど、ありはしない。そして事実を受け入れたところで、私が、私であることに、何の変

わりもないのだ。正しいと教えられてきたものこそ、歪められているのだと知った今、魔物の血がいったいどれほどのものか。私にはもはや何の意味もない」

ナサレーの言葉に、イサの表情が変わった。

一見すれば、相変わらず能面のような、冷たさのばかりが際立つ無表情だ。

しかし、その無表情の中にも、ほんの微かに分かる程度の、微妙な変化が、確かに見て取れた。

私には、イサのその表情に、羨望とも取れる気配を見つけていた。「私は、私であることを受け入れる。そして、この娘を守ることもまた、今の私であるために必要不可欠な要素だ。だから、あなたに弓引こう。守るべきものができた今、私には、もはや恐れるものなどない。目に見えぬ亡霊に恐れ、逃げまどうばかりであった過去の私は、もういないのだ」

ナサレーは、そう言って、炎の魔法円を呼び出す。イサに向けて炎を放った。

イサが無効化の魔法円で、その炎を打ち消す。そしてすぐに手を突出し、魔法円を呼び出しはじめた。

「ゆるさぬ、お前は、二つの血を持つ、近しき者。未熟で、歪んだ、不完全なる存在。お前の居場所は、そこになどない」

イサのその言葉に、私はわかつてしまった。

クロウは、イサの事を「どっちつかず」「禁忌の証」と言っていた。おそらくイサも混血であるのだろう。

しかも、きつと死魔^{アシール}と魔族^{レトウ}の混血であるだろうことが想像できた。そう考えると、私の第六感の反応も、すんなりと頷けるのだ。

この男も、私と同じで、今までずっと排除される存在として、あまんじていたのではないだろうか。だから、自分と同じような境遇の仲間がほしかった。そして、間の子であるナサレーをみつけたのだ。

なのに、ナサレーは　　。

きつと、イサは寂しいのだ。1人でいることが。

そして居場所を見つけてしまったナサレーが、羨ましいのだ。

魔法をぶつけ合う2人の姿が、私には悲しく見えた。

「ねえ、ヒト、僕が復讐してあげるよ？ 何の罪もない君を、厭うこの世の中に。だから、僕のところにおいで？」

クロウが、真っ直ぐ私を見て、手を差し伸べてくる。

私は、クロウを睨み付けた。

「復讐？ 私は、そんなこと望んでない」

庇うセトの背中から一步抜け出し、私はクロウの前に立つ。

「クロウ、あんたの言ったことは、一面正しい。人間の中には、馬鹿な人も、傲慢な人も、自分勝手な人も、確かにいる。サヴァン大神官のしたことだって間違ってる。でもね」

私は、一度そこで言葉を切って、クロウを真っ直ぐ見た。

「でも、あんた自身の行動も、間違っている。間違いを知っていたのなら、何故道を正さないの？ あんたには、道を正すことができたんじゃないの？ 過ちを知りながら、それを見逃してきたのなら、あんたも同罪。私は、そんなヤツの言葉に、耳なんて傾けない」

クロウの表情から笑みが消えた。

「ヒト、僕を拒絶するの？」

「ねえ、クロウ、道を一度間違ってしまったら、それで全てが終わりだと思う？ 私は、そうは思わないわ」

私は、サヴァンを見た。

「私、たぶんアウルさんに会ってるわ」

夢とも、うつつともつかぬ、あの場所であった、青い目の持ち主。きつとあれは、アウルなのだ。

サヴァンが、私を訝しむように見た。

「あの時、アウルさんが私に言いたかったこと、今ならなんとなくわかる。たぶん、彼は、あなたのことを心配しているのよ」

私は、訴えかけるようにサヴァンを見た。

「あなたがやっていることが、アウルさんの望んでいるものと違っ

ているから、だから心配しているの」

「何を言うかと思えば、命乞いでもしておるつもりか」
サヴァンが、射ぬくように私を見据える。

「違う、命乞いなんかじゃない。アウルさんは本当に」
「我らが天の王の星読みが、誤りであるうはずがない。アウルの言葉は真なり」

サヴァンは、そう言うなり、再び魔法円を呼び出しはじめる。

「我が主の、なさしめし契印。脅かす輩は、排除するのみ」
「なんで、わかってくれないのよ。この分からず屋！」

私も炎の魔法円を呼び出す。サヴァンの呼び出した炎にぶつけた。
「ヒト、その男に、ヒトの言葉は届かないよ。相容れることは、きつと、この先もない」

クロウが、そつと言葉を吐き出した。

「何故だろうね。ヒトは、どんなことがあっても、ヒトのまままだ。人間の汚さを、魔族の傲慢さを教えてあげても、決して僕のもとに墮ちてはこない。前に、王都に放り込んだときだってそうだ。結局、墮ちるところか、心許せる者すら見つけてしまった」

もしかして、以前突然王都に強制移動させられた、あの犯人は、クロウだったということだろうか？

「でもヒト、僕は君がほしいんだ。君を傷つける全てのものから、僕が守ってあげる。だから、僕のところまで墮ちておいで？」

「ヒトは、お前のところなんかに行かない！ 黙って聞いてれば、勝手なことばかり。お前、ヒトの事全然わかってないよ。ヒトは、どうしようもないお人好しなんだ。自分のこと嫌ってる人間の事も許せちゃうくらいなの、馬鹿がつくお人好しなんだよ。お前の勝手な言い分だけ押し付けるなよ。復讐なんかして、ヒトが喜ぶはずないだろ！」

セトが、クロウを睨み付ける。

「ヒトは、たとえこのサヴァンて男に、声が届かなくても、絶対届くまで言い続けるよ。それがヒトだ」

セトの言葉に、私は思わず涙が出そうになった。その通りだった。たとえ声が届かなくても、私は言い続ける。

だって、やめてしまったら、そこで何もかもが終わりだ。私とサヴァンの道は、決して交差することはなくなる。

たとえ、果てしなくゼロに近い可能性であったとしても、ゼロでないのなら、私は、そのわずかな可能性にかける。

馬鹿だと言われたっていい。私は、私のしたいようにする。誰のものでもない、これは私の人生なのだ。私が望む未来を求めて、何が悪いのだ。

私は、セトの言葉に、背中を押されたような気がしていた。

「クロウ、私はこの世界を恨んだりしていない。そりゃあね、頭に来ることも、不愉快に思うことも、いっぱいあった。でも、それだけじゃないのよ。嬉しいことだって、同じくらいに、いっぱいあった。今だって、私を殺そうとする人が居たとしても、同時に守ろうとしてくれる人も、確かに存在している。どっちか一方に傾いていることなんてない。これが、紛れもない事実なのよ。人間の、悪い部分ばかり見ているのはダメ。ちゃんといいところをみつけなきゃ。嫌いだと思っている相手が、自分のことを好きになってくれるわけではないじゃない。相手の事を好きにならなきゃ、相手は気持ちを返してくれないわ」

私は、サヴァンを見る。

「私は、あなたの事、恨んだりしていない。でも、あなたのしていることは間違っていると思う。だから言わせてもらおうわ。アウルさんが、あなたに何と言っていたのか思い出してみて。私は、その内容を知らないけど、あの人が、こんなこと望んでいるとは到底思えない」

「黙れ、刻印を背負いし忌子よ。お前というものは、この世界に存在してはならぬのだ」

サヴァンの、放つ炎の勢いが増す。

「ぶざけんな！ ヒトが存在しちゃいけない世界なんて、クソくら

えだ！ お前も、いい加減に目を覚ませよ！ こんなに底抜けのお人好しのヒトが、世界に害をなす存在なわけないだろう！？ なんとそれくらいわかんないんだよ！ これ以上、ヒトの事傷つけないでくれ！」

セトが、悲痛な声で叫ぶ。

「セトの、言う通りだ。矛を収めてもらおうか、サヴァン大神官」

その時、突如、静かに第三の声が現われた。

私は、その声に眼を向ける。

「イムルード！ ナン！」

クロウが、皮肉な笑いをイムルードに向けた。

「なんだよ、お前、もう来たのか。もう少し、足止めできるかと思つたのに」

「そなたの思い通りにしてやる義理はない」

イムルードが、魔法円を呼び出し、サヴァンの魔法を消し去る。

イムルードは、ゆっくりと歩いて、私の側に移動してきたのだつた。

13 聖なる塔にて その12

イムルードが、無言で私の前に立つ。

私は、イムルードを見上げた。

なんだか、色々と言いたいことが山ほどあるのだけれど、言葉がつかえて出てこない。イムルードの顔を見たら、安心してしまい、思わず涙がでそうになった。

イムルードが、そつと手を伸ばし、私の目じりにたまった涙を拭く。

「ヒト、私は怒っているのだよ。何故ここにいるのだ。私は、ここへは近づくなと言ったはずだ」

いつもの、とぼけた雰囲気はまったくくない。不機嫌に口角がさがり、いつぞやの怒りを髭髯とさせる気配がする。

「危ない真似ばかりをして　　。私が、どれだけ心配していると思っっているのだ」

そう言っつて、イムルードが口を引き結んだ。

『一、才前八、本^ト当二無茶バカリヲスル。少シハ、イムルードノ身ニモナツテヤレ』

私は、ナンに視線を移した。

言葉で返そうとしたが、うまくいかない。口を開いた瞬間に、声ではなく、代わりに涙が出てきてしまった。

ナンが、無事でよかった。

ナンの姿を見るまでは、不吉な予感が、何度も脳裏をよぎっていたのだ。

今もまだ、地面が不安定に揺れている。

安心できるような状況でないことは、重々承知していたが、こうして無事である姿を見ることができて、ただ嬉しかった。

「ごめんね…。心配ばかりかけて…。ごめん」

イムルードを見上げて、なんとかそう告げる。

イムルードが、眉毛を下げて、仕方ないというような表情になった。私の顎をつまみ、上向かせると、顔を寄せて、涙に口づける。「泣かないでくれ。私はお前に泣かれると弱い」

言いながら、頭を引き寄せ、私を抱き込んだ。

「私が見たいのは、ヒトの笑顔だ。どうか笑っていてくれ」
そのまま、後頭部に唇を落としてくる。

トールは、戸惑ったような表情で、髪を掻き上げた。

「この御方が、白き賢者殿でいらっしやるのか？ 賢者殿は、想像していたよりも、随分とお若いのだな」

トールの声に、セトが頷いた。

セトは、少しだけ面白くなさそうな表情で、こちらを見ている。

「イムルードは、年をとらないからね」

「そうなのか？ とトール、ラウシュ、ナサレーの3人が、驚きの表情に変わった。

「やっぱりお前邪魔だな。殺しておかないと目障りだ」

クロウの言葉に、イムルードが向き直る。

「黒き悪魔よ、お前の勝手にはさせぬ」

私の頭を、抱えている手とは、反対の手のひらをクロウに向けて、イムルードが魔法円を呼び出しはじめた。

クロウも、魔法円を呼び出しはじめる。

魔法円から放たれた、二つの巨大な炎がぶつかり合い、爆発を起こした。

物凄い爆風だ。

目を開けていることすら困難なほどだ。イムルードが、それを見て障壁を作り出す。

イムルードは、腕を解くと、私の背中をそつと押した。

「セトとナンの側に行っていないさい」

イムルードとクロウは、睨みあいながら、魔法を駆使しはじめた。とても高度な戦いだ。私が手を出したら、かえってじゃまになりそうなのだ。

私は、おとなしくイムルードの言葉に従い、ナンの側に歩み寄り、
跪いて手を伸ばし、久々に触れる銀色の感触を楽しんだ。温かいそ
の温度に、私は安堵する。

トールたちが近づき、そばに立った。

「ヒトちゃん、もしかしてその狼は」

私は、頷いて答える。

「私の友人の、地の使い^{エンイール}。名前はナンよ」

「ねえナン、なんでここにナンが居るの？」

ナンは、答えずに、私の頬を舐める。

「久シイナ。無事デ何ヨリダ」

言つて、目を細めた。

私は、一度口を引き結んだ。明らかに誤魔化していることがわか
る。

「ねえ、ナン、答えて。まさか、封印の礎になるために来たとか、
言わないわよね？ それだけは、絶対にやめて？ 私、頑張るから」

ナンが、笑った気配がした。

「一、案ズルナ。時ガ、満チタダケノコトダ」

私は、その言葉に息が止まるかと思った。つまりそれは

「い…や…だ…。絶対に嫌!!!」

私は、ナンの体に縋りつく。

そこで、セトが訝しげに私を見てきた。

「ヒト、ナンは何て言ってるの？ まさか」

セトは、ナンの声が聞こえないので、私に聞いてきた。

私は、涙をいっぱい溜めた目で、セトを見上げる。

「ナンが」

「それが定めというものだ」

不意にサヴァンが、そう言った。眼を向ければ、イサともども、
顔色は蒼白で、肩で荒い息をしている。

サヴァンは、腹部を抑え、膝を折っていた。イサは、その体を支

えるように寄り添っている。

『何が定めよ。私は、そんなこと信じない』
サヴァンが、昏く笑った。

『お前が、信じようが信じまいが、定めは定め。時が満ちれば、定めめの元に、世は動きだす。地の使いの言こそ正しい』

『そんな…』

『一、我ハ幸セダツタ。才前達ニ出会エテ、本当ニ幸セダツタノダ。才前達ニハ、コノ上ナイ喜ビヲ、幾ツモ教エテ貰ツタ。コレ以上ノ幸セナドナイ』

『ナン！』

そんなお別れみたいな言葉、聞きたくなかった。

刹那、目の前で、ナンの体が輝きはじめる。容を変え、人の姿へと変わりはじめた。

私は、呆然とその様子を眺めていた。

容を変え終えると、ナンは、美少女とも見紛うような、幼さの残る少年へと姿を変える。

『人の容を取るのははじめてだ。随分と目線が高くなるものなのだ』
な

ナンは、不思議そうに自分の手を見て、握ったり、開いたりを繰り返していた。

私は、驚きの表情のまま、瞬きを何度もする。

『ナンは…本当は、人型の魔族だったの？』

私の呟きに、ナンが笑った。

『一は、ずっと誤解をしておるようだったからな。最初に会った魔族が我で、出会った死魔も、下級のものが多かったから、仕方ないのだろうが。魔族は、魔術を使えるこの姿こそが、通常の姿なのだ。魔族の本質は、確かに鳥獣であるが、しかし、それはあくまでも本質。本質とは、魔力を失っている時に現われる、無防備な容とでも言えばわかるか？ 魔力を使つてはならないという制約がある我は、本質のままであらねばならなかった。だから今まで、あの姿だった』

のだ。しかし、我も、ようやくこの姿になることができた』

ナンが、目を細めて、私に笑いかけてくる。

人型になるということは、つまり魔法を使うため。ということは、ナンは今から礎になろうとしているのだ。

到底、受け入れられようはずがない。私は、首を振って、ナンに縋りついた。

ナンが、困ったように笑いながら、私の頭を撫でる。まるで、大丈夫だとも言うかのように、何度も、何度も撫でる。

『イムルードは、本質の姿であった我を、ありのまま受け入れ、友と呼んでくれた。魔族以外でできた、はじめての友だ。一、イムルードを頼む。あれは、不器用で寂しがり屋な男だ。周りに理解されにくく、結果一人ではかりおるが、本当は、誰よりも寂しがり屋なのだ。我が居なくなれば、イムルードを訪れるものもいなくなる。人も魔族も、生きているもの全ては、孤独ではいられぬ。どうか、イムルードを、永き孤独より救ってやってくれ』

『ナン、そんなの約束できないよ。ナンの命と引き換えの約束なんて、私には守れない！ ナンが、この先もずっと生きていてくれるのなら、私は一生涯かけて誓う。だから、礎なんてものになるのはやめて。お願いよ！』

私は、泣きながら、ナンに縋りつく。ナンが穏やかに笑いながら、私の涙を拭い、抱きしめた。

『一は、こんなに小さかったのだな。我は、はじめて知った』

ナンが、私の顎をつまみ、額に口づけてきた。

『イムルードの言う通りだ。我も、お前の笑った顔が見たい』

『ナンが、私の言うこと聞いてくれるなら、いくらでも笑ってあげる。でも、それ以外では、絶対に笑ってなんてあげない！』

涙が、後から後からこぼれ落ちてくる。

『随分と、面白そうなことになっているな』

クロウが、イムルードに向けて魔法を放ちながら、声をかけてきた。

イムルードは、クロウとは対照的な表情で、視線だけをよこす。
『ナン、少しだけ待っていなさい。そういう約束で、連れてきたはずだ。じきに終わらせるからじっとしている。勝手は許さない』

イムルードが、ナンに向けてそう言った。

『じきに終わらせるだと？ 随分な言草だな。自惚れるのもいい加減にしるよ、人間ごときが』

『イムルード…』

ナンは、小さく咳く。

クロウが、イムルードに黒い炎を放ちながら、不意に、私に向けて、指輪を見せてきた。

『ヒト、これが何だか知っている？ これは、アル・ドゥ・クナ天魔の揺籃。別名、

王家の指輪とも呼ばれている。アウルが、自分の子孫たちの側に寄り添うために、自分の一部を封じてある指輪なんだ。今、封印を守っているのは、そのアウルでね。こいつが意外にしぶといんだ。まあ、アウルのせいだけじゃないかもしれないけど。このくそ魔道士や、出来損ないが、随分と邪魔をしてくれたからね。でも

そう言いながら、クロウが愉快でたまらないという表情に変わる。
『封印の大本を担っているのはアウルだ。さて、これを、どうしてやるうかな』

クロウが、移転魔法を使って、少し離れた位置に移動すると、指輪をはずして手のひらにのせる。そのまま、炎の魔法円を呼び出しはじめた。

『やめよ！』

サヴァンが、自由の利かない体で、クロウの前に飛び出す。

『おやおや、飛んで火に入るなんとやらだ』

クロウが、瞬間的に風魔法を呼び出し、サヴァンを切りつける。
イムルードが、無効化の魔法円を呼び出したが、わずかに間に合わなかった。

傷自体は、さほど深くはないが、あたりには鮮血が流れ落ちる。
『アズール天の使いの血で、二度も汚された封印。さて、どうなるかな？』

刹那、ズンという地鳴りとともに、大地が激しく揺れはじめた。大地に横たわる、封印の魔法円が、突如として、薄れはじめたのだった。

13 聖なる塔にて その12（後書き）

あまり、大声で言いたくないのですが、ムーンも更新しました。
注意書き読んで、大丈夫な方のみどうぞ。

本編のイメージを壊したくない方は、読まない方向でお願いします。

14 聖なる塔にて その13

封印の魔法円が、薄れはじめていた。

イムルードが、舌打ちをしながら大地に手をつき、すぐさま封印の補強をしはじめる。

『ナン、サヴァン大神官の止血をしろ！』

『イムルード、もうよい。これ以上は無理だ』

『黙れナン！ 言う通りにしろ！』

イムルードが叫ぶ。

私も我に返って、両手を大地につけ、封印の補強をはじめた。

「トール、サヴァン大神官の事お願い。傷の治療をして。これ以上血を流させないで」

私の声に、トールがはじかれたように動き出す。

『セトは、ナンをお願い。絶対に勝手なことさせないで！』

セトは頷いて返した。

『ヒト、イムルード、もうよい。これ以上、もはや猶予はない』

『ダメだよナン。ヒトも、イムルードも、まだあきらめてない。ナ
ンだけ諦めるなんて、俺も許さない』

『セト…』

セトが、ナンの両腕を掴む。ナンは、困ったようにセトを見返していた。

その通りだ。まだ諦めるわけにはいかない。

私は、必死で補強をする。だが、まるで手ごたえが無かった。砂漠に水を注いでいるような感覚だ。

地面が突き上げるように揺れ、封印の術式が、明滅しはじめる。クロウが、勿体つけるように、ゆっくりと手をあげ、イムルードに手のひらを向けた。

『イムルード、封印をお願い』

イムルードが頷くのを見てから、私はイムルードを庇うようにしてクロウの前に立つ。

『ヒト、どうしてわからないのだい？ 無駄なことはやめなよ』

『クロウ、あんたこそやめなさいよ。なんでこんなことするのよ。私の為だっというのなら、私は、こんなこと望んでいない！』

私は、クロウに向かって叫んだ。

クロウが艶やかに笑う。

『ヒトは、僕に感謝することになるよ。わかるんだ。だから』

クロウは、手のひらの前に、巨大な魔法円を呼び出しはじめる。

私は、無効化の盾を呼び出しはじめた。

『僕は、この世に、僕の王を喚ぶ』

クロウが、漆黒の炎を放ってきた。私は、必死でその炎を耐える。私の後ろでは、イムルードが頑張っているのだ。絶対に負けるわけにはいかない。

乱れそうになる無効化の術式をなおして固定する。私は、渾身の力を込めて、炎の魔法円を重ねて呼び出し、クロウに向けて放った。クロウが、無効化の円を呼び出すが、術式が乱れはじめた。

クロウが舌打ちをした。

『さすがというべきか、一筋縄ではいかせてくれないね。でも、それでこそヒトだ』

クロウが、唇を舐める。移転魔法を使って、違う場所に移動すると、再び炎を呼んだ。

私も前に踏み出し、クロウに向けて炎の魔法円を呼び出しはじめる。

しかし、その時、予想もしていなかったことが、起ころうとしていた。

トールに治療をしてもらい、体を動かせるようになっていたサヴァンが、知らぬ間に、私の側に移動していたのだ。

この時、私はそんなことに、気づきもしなかった。

イムルードは、もちろん封印にかかりきりだったし、ツールやナサレーも、見よう見まねでイムルードの手伝いをはじめていた。ラウシユは、呆然と成り行きを見守るばかりであったし、セトもナンにかかりきりだった。

あるいは、イサだけは気づいていたのかもしれない。

だが、サヴァンの行動は、誰に止められることもなく、ひっそりとおこなわれていたのだ。

サヴァンは、無防備な位置から、私に向けて魔法円を呼び出していた。

『全ては、お前が生きているから悪いのだ。世のためだ。刻印を持つ忌子よ、死ぬがよい』

サヴァンの魔法円から、炎が放たれる。

気が付いた時には、その場に居合わせた誰もが、間に合わなかったかに思えた。

私の体に、炎がぶつかるかと思われた瞬間、一人の男が、炎の前に飛び出してきた。

男は、剣を使って、魔法円を呼び出し、炎の威力を削る。殺しきれなかった炎を、よけることなく、自らの体を盾にして止めた。

男の脇腹を、炎が挟む。

男は、苦痛に顔を歪めながらも、私をサヴァンから庇うように立ち尽くしていた。

「レッエンよ、貴様、何をしたのかわかっているのか」

サヴァンが、射るように睨み付ける。

「むろん」

レッエンが、短く答える。

抉れ焼き切れたレッエンの腹部からは、鮮血がにじみ出しはじめていた。

「そやつは刻印を持つもの。世界に仇名す忌子だ」

「いいえ、この者は、我が妹の忘れ形見」

その言葉に、サヴァンとツールが目を見開いた。

「では、ギエン殿下の…」

トールが、呆然と呟く。

サヴァンが低く笑った。

「そうか、そやつがギエンの娘か。レッエン、ようも我を謀ってくれたな。お前の嘘が、世界を破滅へと導くのだぞ。よいのか、レッエンよ」

え？ ギエンの…娘…？

もしかして…私のこと？

レッエンが、剣を構えなおす。

「私は、信じていたものが、偽りであることを知った。もはや何を信じればよいのか分からぬ今、私は、自分の感情に従うと決めたのだ。私は、偽りを信じ、愚かにも、妹に手をかけた。もう同じ轍を踏むのはたくさんだ。私は、己のしたいようにする」

レッエンの脇腹からにじむ血が、足を伝い落ちはじめていた。

イムルードが、それに気づいた。

「ナン！ その男の血を止める！」

ナンが我に返り、レッエンに向けて一歩踏み出す。

しかし、クロウが、間に立ってそれを阻んだ。

『遅いよ』

クロウが、一方の手をナンに向け、もう一方の手を私に向け、同時に二つの魔法円を呼び出しはじめる。

私も、ナンも、とっさに魔法円を呼び出して攻撃を防いだ。

その時、レッエンの血が、大地に滴り落ちた。

鮮血が大地に滲み込んだ刹那、大地が激しく揺れ、波打ちはじめ

る。大地に横たわっていた封印の術式が、急速に乱れはじめた。

イムルードが、術式を結びなおそうと試みるが、失われる方が早く、追いつかない。

ナンが、移転魔法でクロウの攻撃を躲し、手のひらを突出すと、

魔法円を呼び出しはじめた。

『ナン！ やめろ！ まだだ！』

イムルードが、悲痛な声で叫ぶ。

『ナン！ お願ひ！ やめて！』

私も、クロウの魔法をかわしながら、必死で叫んだ。

ナンが、おだやかな表情で微笑む。

『ありがとう』

短く、そう呟くと、目を開けていられぬほどの、眩い光が生まれ、視界を奪いはじめたのだった。

15 聖なる塔にて その14

圧倒的な光に視界を奪われ、私は、目を開けることができなかつた。

脳裏に思い出すのは、二枚の翼を持った、アウル最後の光景。ナンが、彼と同じ道をたどろうとしている事実を突き付けられ、私は、心が張り裂けそうだった。

『ナアアアアン!!!』

全ての気持ちを言葉にのせて、私は絶叫する。

どうか、ナンに、この声が届いてほしい。

こんな別れかたをするのは嫌だ。

涙が、止めどなく溢れてきた。

眩しさで、目を開けることができぬまま、ナンが居るはずの場所に向けて、私は手を伸ばす。

手を伸ばしたその方向から、セトの声が聞こえてきた。

『ナン、ごめん』

その声と同時に、誰かのうめき声が聞こえてくる。

光が、急速に失われていくのを感じた。

私は、回復しない視力のまま、なんとか目をこじ開ける。

探すように伸ばしていた私の手を、誰かが掴んだ。

この温かさを私は知っていた。

『ヒト、大丈夫だから泣くなよ』

声と同時に、掴まれた手を引かれて抱き込まれた。

『セト……?』

私は、抱き込まれたまま顔をあげる。回復してきた視界に映ったのは、セトの顔。

見れば、セトは左肩に、誰かを担ぎ上げていた。

『……ナン……?』

私の視線をたどって、セトが頷く。

『素直に説得されそうもなかったから、力づくにうつたえた』
セトの肩の上で、ナンがうめき声をあげた。セトが屈んで、ナンを地面に横たえる。

ナンが、地面に横たわったまま、苦しそうに腹部を押さえ、片目を開けた。

『セ…ト…、何て…ことを…!』

苦しそうに呟くナンを、セトが覗き込む。

『ナン、悪いのは、全部俺だ。他の誰でもない、全部俺のせいなんだ。それだけは覚えておいて』

大地の揺れが、激しさを増す。

『半獣の坊やも、たまにはいいことをするものだ。お前の選択は間違ってるよ。おかげで、下手な小細工を弄する必要もなくなった』
クロウが、ニヤリと笑う。

『お前のためにやったわけじゃない』

セトが立ち上がって、クロウを睨み付ける。

『俺のためにやったんだ』

クロウが、馬鹿にするように笑った。

『誰のためだろうと、そんなことは関係ないさ。お前の行動が、僕にとっては好都合だった。それだけのこと。お前のおかげで、我が王^{エン}が、この世界に君臨することになるのだからな。もはや、見届けなくてもいいな』

そう言って、クロウが移転魔法を呼び出して消え去る。

封印にかかりきりになっているイムルードの額には、脂汗が浮かんでいた。

必死で、封印をなおそうと試みているが、じきに訪れるであろう結末は、誰の目にも明らかだった。もはや封印の術式は、薄っすらと、かるうじて残るばかりだ。

私も急いで封印の補強を手伝うが、先ほどよりも、もっと状態が悪かった。手ごたえなど皆無だった。

イムルードならもしかして、などと思うのは酷な話だろう。

一人で頑張ろうとするイムルードが、私にはただ痛ましく見えていた。

『我は、何を為すべきであったのだろうな。最悪の結末を回避しようとした結果がこれか』

サヴァンが、誰に向かつて言うわけでもなく、苦笑い、立ち尽くしていた。先ほどまでの、他を圧するような気配はなりを潜め、虚脱感のようなもの悲しさを纏っている。

諦めとも呼べる気配が、辺りを包もうとしていた。

セトが、補強のために大地につける私の手を取った。

『セト！？』

セトは、静かな笑顔を私に見せてから、イムルードの側に移動する。

今度は、イムルードの手さえも掴んで、封印から引き剥がした。

『セト！』

イムルードも、非難の声をあげる。

イムルードが手を離れたその瞬間、あっという間に、封印が失われていった。

私も、イムルードも、ただ呆然とその光景を見ていた。

封印の術式が消え失せると、大地に激震が走り、とても立ってられないような状態になる。

大地の所々に亀裂が走りはじめ、ある場所は突然盛り上がり、急峻な勾配ができあがる。またある場所は、崩れ落ち、深い断崖が生まれていた。

『イムルード、封印なんか破れたっていいんだよ。こんなものがないとなれば、ナンが犠牲になることもなくなるし、ヒトの命が脅かされることもなくなるんだ』

イムルードが、真意をはかるようにセトを見る。

『俺たちが為すべきことは、この封印が破れて出てきた死魔の王様を、どうやって斃すかってことだよ』

イムルードが、僅かに目を見開いて、セトを見る。

激震が襲う中、イムルードとセトは、しばしの間睨みあっていた。やがて、イムルードが、小さく息を吐いた。目を瞑り、空を仰ぐ。しばらくの間、そうしていた。

だが、天を仰いだまま、再び目を開けると、イムルードの目には、何か決意のようなものが宿っていた。グツと両手を握りしめている。『そうだな、セトの言う通りだ』

イムルードが、視線を戻し、私たちを見る。

『無貌アトウの悪魔を倒す方法がないわけではない。こうなってしまった今、私たちは、違う手段を模索するべきだろう』

イムルードの、思いつめたような表情に、セトが答えた。

『イムルード、悪いのは、全部俺だから。イムルードのせいでも、ナンのせいでも、ヒトのせいでもない。俺が全部悪いんだよ』

イムルードが、困ったように笑った。

『セト、馬鹿だな。お前のせいなんかじゃない。お前が一人で背負うことなどない。子供が、いらぬ心配をするな。私がかんとかする』
『イムルード、そんなこと言ったら、またヒトが怒るよ。自分だけで、何とかしようなんて思うなよ。わかるだろ？ これは俺のせいなんだ。俺がはじめをつけなきゃいけないんだよ』

イムルードが手を伸ばし、自分よりも高い位置にある、セトの頭をクシャリと撫でる。

『それこそ、一人で思いつめるな。何のために、私がいるのだ』
大地が形を変えるほどにうねる。

巨大な大地の裂け目からは、どす黒い何か、もうもうと立ちのぼっていた。

千年の昔より、歴史の裏側で守りつづけられてきたアウルの封印は、この日、トルバディアの象徴ともいえる聖塔工・ギザラとともに、永久に失われた。

歴史に残るような大事件に、私たちは、当事者として立ち会って

いたのだった。

1 赦し

『ここは危ない。一度退こう』

イムルードの言葉に、セトが頷いた。

セトが、グラグラと揺れ続け、亀裂の走る大地を、ナンを抱えて移動してくる。

トールとラウシユ、ナサレーも近づいてきた。

「レッエン総長……」

トールが、そう漏らしたきり黙り込む。レッエンもまた応えることはなかった。

私は、レッエンのもとに、一步踏み出す。

「助けてくれて、ありがとう」

「……私は、お前に剣を向けたことがある。礼を言われるような資格はない」

私は、首を横に振った。

「さっきは助けてくれたから。ありがとう」

「……」

レッエンは、口を引き結び、黙り込んだまま、私をじつと見る。

「話は、後にしよう。ここは危ない」

イムルードが、皆を促し、一か所に集める。

「私は」

と言ったきり、首を横に振り、固辞しようとしたレッエンの腕を、私が掴んだ。レッエンは、振り払うことなく、静かに私を見ていた。

「サヴァン大教官」

イムルードが、呼んだ。

だが、サヴァンは答えることはなかった。

イサが移転魔法を呼び出し、そのまま2人でどこかに消え去る。

イムルードは、それを見届けると、移転魔法を呼び出した。

私たちは、イムルードの手によって、天空の楔エ・キサラを後にしたのだっ

た。

イムルードが移動した場所は、プルシャーラにある我が家であった。

久しぶりの自宅に、思わず安堵のため息が出る。

イムルードは、調べ物があるからといって、着いた早々書斎に引きこもった。

私が、お茶を用意している間に、セトがナンを寝台に休ませ、トールが、レッエンの傷の治療をしていた。

私は、居間にお茶を運び、椅子に腰かける。

皆にも、座るように促すと、セト、トール、ナサレー、ラウシユは座ったが、レッエンだけは壁に寄りかかっていた。

色々なことが一気に襲っていたので、頭の中の整理がっていない。だが、どうしても確認したいことが一つあった。

私は、レッエンを見る。

「私の父親は、ギエンさんなの？」

レッエンが顔をあげ、私をまっすぐ見た。

「サリエに、よく似ていると思っていた」

レッエンが、ポツリとそう漏らす。

「以前会った、あの折に、お前がサリエの子供であるのだろうということは、わかっていた。私は、赤子であったお前を、一度見ている。髪の色も、目の色も同じ。とても他人のそら似とは思えなかった」

レッエンが、一度目を閉じた。だが、すぐに目を開け、再び私を見る。

「お前の背中にある印は、王家の印。お前の父親は、ギエン殿下だ」
トールが、息を漏らした。

「殿下のお相手が、シャントクレール家の御息女であることは聞いていたが、私は、お会いしたことがなかった。なるほど、ヒトちゃ

んの見事な銀髪は、伯父上に良く似ているな」

そう言ってレツエンを一瞥し、すぐに視線を、私に戻した。

「だが、その青き目は、お父上に良く似ておられる」

トールが、嬉しそうに目を細めた。

「天上の青　　アウル神と同じ、大空のような青色の目をそう呼ぶ。アウルの血を引くと言われる王家には、時折、その青き目を持った御子が生まれるのだ」

セトが私を見る。

「ヒト、お父さん見つかってよかったね」

笑顔を向けていたが、どこか少し、寂しげにも見えた。

セトも、お母さんを早くに亡くして、父親が誰なのかわからない私だけ、血のつながった肉親が見つかったことを、セトはこうして喜んでくれているが、私は、負い目のようなものを感じていた。

セトが、目ざとくそれに気づいた。

「ヒト、余計なこと考えないで、喜んでいいんだよ？」

そんなこと言われても、素直に頷くことはできなかった。セトの笑顔が、寂しそうなことに気づいてしまったのだから。

レツエンが、私に歩み寄り、自らの剣を掴むと、腰から外し、鞘ごと私に向けて差し出してきた。

「お前には、私を殺す権利がある。お前が望むのなら、そうしてくれてかまわない」

レツエンが、水平に剣を突出し、真っ直ぐ私を見おろして、そう言った。

「殺すだなんて、私は、そんなこと

「お前は、知らぬやもしれぬが、私が、お前に刃を向けたのは、一度ではない。お前が、何もわからぬ、まだ幼い赤子の頃、私は、お前を手にかけようとしたことがあるのだ。　　私は、お前の母

親を、赤子であったお前の目の前で殺した。そして、お前のことも一緒に葬り去るつもりであった。結果的には、魔物がうるつく森に捨て置くことになったが、どちらにせよ一緒だ。私は、あの時、確

かにお前を殺そうとしたのだ」

私は、この世界で言う廻る者だ。テルガト レッエンには理解できないだろうが、私は、知っている。

あの時に向けられた、刃の恐ろしさも、ちゃんと覚えていた。

私はギュツと拳を握りしめる。

私の心の奥底には、あの記憶と一緒に、どろどろとした昏い感情が巢食っていることも自覚していた。

我を忘れて巻き込まれそうになった怒りの記憶を思い出し、心がさざ波立っていた。

あの感情を思い出すと、恐ろしさで体が竦んだ。

この感情には、絶対に巻き込まれてはいけないのだ。

私は、許さなければならぬ。

いや、心は、すでに許したいと思っているのだ。

だって、レッエンを殺したいなんて、私は微塵も思っていない。確かにレッエンは、母であるサリエを殺した。もっと長く生きられるはずだった、前途ある命を、この人が、無残にも摘み取ったのだ。どんな理由があつたにせよ、人の命を奪うという行為は許されるべきではない。

だが、私がレッエンを殺したところで、どうなるというのだ。

サリエが生き返るわけではないし、復讐を試みたところで、何も変わることはない。

自分の気を晴らすために、違う命を奪うなんて、私にとっては無意味な行為だ。

心の奥底に残っている恐怖と、怒り。その気持ちを昇華する方法が、報復であつてはならないのだ。

私は、レッエンを見つめ返した。

「私は、あなたを恨んでなんていない。殺したいとも、思っていない」

母親であるサリエが、復讐を望んでいるとは思えなかった。

時折思い出す、おぼろげなサリエの顔。口元には、いつも笑顔が

浮かんでいる。あの優しげな女性が、兄であるこの男を、殺すことを望んでいるとはとても思えなかった。

私は、剣を握るレツエンの手にそっと触れ、剣を戻すように押した。

レツエンが、じっと私を見下ろす。

「…よいのか？」

レツエンの言葉に、私は、頷いて返した。

レツエンが、長い沈黙の末に、絞り出すように声を出す。

「すまなかった」

私は、笑顔で、今度は首を横に振った。

「もうこれで終わりにしましょう。私は、あなたの謝罪を受け入れるわ」

言ったとたん、体を引き寄せられ、レツエンに抱き込まれた。

ギュッと押さえつけられていたので、顔をあげることはできなかったが、レツエンの体が小刻みに震えているのを感じた。

私は、レツエンの背中に腕を回し、ギュッと抱き返す。

「すまなかった」

もう一度、耳元で呻くように告げられ、私はうなずいて返した。うなずくと、一層強く抱きしめられたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9029s/>

天魔の刻印

2011年10月10日01時03分発行